
(11/14 エヴァ更新)エヴァ、ハルヒ、空の軌跡短編集

朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(11/14 エヴァ更新) エヴァ、ハルヒ、空の軌跡短編集

【Nコード】

N1133L

【作者名】

朝陽

【あらすじ】

2011年 アスカ誕生日記念LAS短編「最高のプレゼント！」を公開しました。

アスカの誕生日は12/04ですが、諸事情により先行公開させて頂きました。

七五三記念LAS短編を公開しました。

<お知らせ>

8/5の運営から歌詞に関する告知を受けてしばらく非公開にしておりましたが、適正に直して再公開しました。それに伴い作品の整理

を行いました。

こちらの作品は2009～2010年に他の投稿サイトに投稿していた物も含まれますが、諸事情により投稿サイトの管理人様に事情を話してこちらで掲載させて頂く事になりました。

新世紀エヴァンゲリオン小説の他に空の軌跡、涼宮ハルヒの憂鬱、犬と猫「晴れたり曇ったりシリーズ」の小説もあります。

作品に関するお知らせ・お勧め小説

< 曲の歌詞をイメージした作品について >

2011年08月05日にじファン（小説家になろう！）のユーザ向けに、

【重要】歌詞掲載ガイドライン というお知らせが届きました。

<http://blog.syosetu.com/index.php?itemid=538>

この短編集の作品にはいくつか歌詞をイメージした作品がありますが、

自分の文章で書いたものは二次創作と認められ削除の対象とはならないと書かれていました。

その知らせを受けて、今回は歌詞をイメージした作品は削除せずに残す事にいたしました。

私が曲の歌詞をイメージした場合には、本文冒頭や後書きにイメージした曲名を書いて公開しています。

ですから、もし私の知らない歌や歌詞や作品の文章と偶然の一致が起こってしまったらごめんなさい、故意ではありません。

短編集でも誤解されそうな危険性の高いポエム形式の作品は公開を停止しました。

また、他の連載作品でもハッピーバースデーの歌やハレ晴レユカイ（白石稔Ver.）のメロディーを削除するなどガイドラインを守るために努力しております。

また、商業作品を参考にした場合にも、「チルドレンのためのエヴァンゲリオン」前書きのように空の軌跡を参考にしましたと書いて

います。

<お勧め小説・クレームの多かった作品の削除>

二次創作を始めて2年経ちました。

これを機会に読者の方の声を反映させたコーナーを作りました。

私は主観的、短期的に物事の善し悪しを判断するのは好きではありません。

長い間たくさん読者の方に良かったと言われた作品タイトルのみを紹介したいと思います。

(2010年度に書かれた作品のみとします)

2010年 シンジ誕生日記念LAS短編 破られたシンジ宛てのラブレター

2010年 七夕記念LAS短編 一番星に憧れて

残暑記念ハルキョン小説短編 気分は最高っ！

2010年 クリスマス記念ハルキョン短編 涼宮ハルヒの消失・後日談 ーサンタの贈り物ー

残念ながら、ヨシユエスのお勧めはありません。

2011年度は頑張ります。

作者・朝陽の主観的「隠れた名作」

LAS小説短編 レイとアスカ ー楽しい恋、辛い恋ー

また、惣流アスカの更迭の外伝旧第2話や、夏休み記念ギャグ作品など、キャラ崩壊がひどすぎるなどの苦言が殺到した作品も公開停止にしました(汗)

長編の外伝短編作品は、重複連載にならないように長編の本編へ組

み込みました。

L A S 短編 早く身長が伸びたい！

僕は碇シンジ。

第三新東京市にすむ中学二年生だ。

昔から気になっている女の子が側に居るんだ……。

その子の名前は惣流アスカ。僕の家の隣に住んでいる幼馴染。

僕の両親とアスカの両親は、僕たちが生まれる前から親しい付き合いをしてきた。

だから赤ん坊の頃から僕とアスカは一緒に居ることが当たり前だったんだ。

アスカはドイツ人の父親と日本人の母親の間に生まれたハーフだったから、

小さい頃は目の色や髪の色が違っていていじめられていた。

でも、僕はアスカの蒼い目やキラキラとした金色の髪もかわいいと思ったから、

いつも学校から泣いて帰ってきたアスカにそういつてあげたんだ。そうしたら、アスカはいつもニコニコして僕の側を離れないようになったんだ。

僕の両親もアスカの両親も仕事で忙しくなることが多かったから、晩御飯はどちらかの家で食べたり、テレビやゲームも同じ部屋で、お、お風呂も小学校に上がるまで一緒だった。

学校でもベツタリだったから、よく友達にはアスカはシンジの奥さんだってからかわれる。

幼馴染のアスカを女性として意識し始めたのは中学校に上がったころだったかな。

アスカも僕の事をいろいろ気にかけてくれて、いい感じ……なんだけど、僕には悩みがある。

もともとアスカは活発な子だから、男の子がやるような遊び、サッカーとかに参加するようになって、さらに牛乳も大好きで、小学校高学年のころにはグングンと背が伸びて行ったんだ。

中学二年生になった今でも、アスカの方が僕より身長が高い。

「ねえ、シンちゃん。お菓子が無くなったから新しいの出してよ」

アスカは僕の家のリビングで、ソファーに寝転がり、ポテチをかじりながらテレビを見て居た。

タンクトップにショートパンツと言う露出の多い服装は、目のやり場に困ってしまうよ。

「もう、夜も遅いし家に帰って宿題をした方がいいんじゃないの？」

「えー、今日泊めてよ。ウチも今夜両親いないし」

僕はアスカのこの言葉にあせって、体中から汗をたらしながら大声で言い返した。

「と、泊まるって、父さんも母さんも居ないんだから、絶対ダメだよ！」

「僕たち、もう中学生なんだよ！付き合ってもいない男女と一緒に泊まったりしないのは当たり前じゃないか！」

僕がそう言つと、アスカは身を乗り出してその可愛い顔を僕に近づけてきた。

「じゃあ、付き合えばいいじゃない。この前も返事を先延ばしにしてなかったつけ？」

「そ、それは僕の身長がアスカに届いてから……」

僕はアスカに聞こえないような小さな声でボソボソと言いつ返しかなかった。

下を向いてうつむいていると、アスカは台所にある戸棚の側に立っていた。

お菓子の入っている引き出しは、踏み台がないと取れない位置にある。

アスカは椅子では無くて、古い木の踏み台を使おうとしているみたいだけど……。

いけない、確かあの台は相当古くなってもう捨てようと思って出していたものだ。

怪我でもしちゃ大変だ。僕は急いでアスカの下に駆け寄った。

「アスカ、その台は……」

「なあに、シンちゃん？」

台に乗ったアスカが僕の方を見ようと後ろに振り返る。

そしてバランスを崩してアスカは正面から僕に倒れこんできた。体が折り重なる。

アスカの体は意外と軽い。そして柔らかい。甘いにおいがする。

僕がアスカの倒れる衝撃に慄いた（注1）時に閉じた目を開くと、至近距離にアスカの柔らかそうな唇があった。

アスカは僕と目が合うと、突然僕の顔を両手でつかんで、唇同士を遭遇させた……つまりキスをしてしまったんだ。

何秒くらいキスをしていたんだろう。僕らは夢のような体験から目を覚ますと、お互いの体を解き放した。

「えへへ。シンちゃんとキスしちゃった。」

アス力は真っ赤な顔で上目遣いで僕の事を見ている。とてもかわいい。

こうなったら僕も覚悟を決めて言うしかない。

「アス力、順番は前後しちゃったけど、ぼ、僕と付き合ってくれないかな？」

アス力はそのかわいい唇に指を当てて考え込むような仕草をして、こう答えた。

「あれ？アタシの身長を追い越すって話は？」

「え？わかったの？」

「普段からシンちゃんの事見てたらわかつちゃうし」

はは、すっかりお見通しか。アス力にはかなわないよ。

アス力は僕の後ろにまわって、腕を僕の首に巻き付けて背中からギョツと抱きついてきた。

「シンちゃんはこれから背が伸びて行くんだから、こんなことができるのも今のうちね。」

今日、僕とアス力は幼馴染に別れを告げて、彼氏彼女と言う関係になった。

注1 慄く おののく。とってもビックリすると言つ意味。

<後書き>

甘いLASを書こうとしたら甘すぎるものとなつてしまいました。
ネタは漫画版エヴァでユニゾンの説明を受けているアスカとシンジ
の身長差を見て思いつきました。

多重クロスLAS短編 犬系男子と猫系女子。

この作品は新世紀エヴァンゲリオンと英雄伝説空の軌跡と犬と猫さんの作品「晴れたり曇ったりシリーズ」との多重クロスです。

「はーっ、ダルいわねえ」

「おいおい。そんなだらしない姿勢でお客さんが来たらどうするんだよ」

「うっさいわね、こんなひどい雨じゃ誰も来ないわよ」

イヴはアイトの小言にふくれた顔をしながら寝ていた体を起こし、カウンターに座りなおした。

この赤い髪をツインテールに束ねたルビー色の瞳を持つ気が強そうな少女はこのレストラン、海猫亭の店長兼コック兼看板娘。

海猫亭は元々宿屋の食堂だったのだが改装して、レストランとして再スタート。まだ始まったばかりで客足もそう多くない。

よって豪雨の中わざわざ食べに来る客も居ないと言うイヴの推理は正しかった。幼馴染のアイトも外仕事ができず暇を持て余してきているのだが……。

「なーんでアイトと二人つきりなのよ。フィル君は来てくれないの？」

「あいつはドブ掃除のバイトがたくさん入って稼ぎ時みたいだな」

イヴは数年前に移民船に乗ってこの街イシュワルドにやってきた少年、フィルに一目ぼれしていた。

面喰いなイヴなのだが、女の子のようなかわいい顔の少年に引かれたのだ。本人は男っぽく見られたいと思っているみたいだが。

「あーもう最低、ビショビショ」

「アスカ、早く着替えないと風邪引くよ」

「そうそう、早く脱がないと!」

「いきなりここで脱ぎ出しちゃダメだよ、エステル」

宿屋の方から騒がしい声が聞こえる。この豪雨で濡れ鼠になった旅人の四人組のようだった。

イヴの母親であり宿屋の女将であるイザベラが部屋まで案内しているのだろ。騒がしい声は遠ざかって行った。

「どうやら彼らの夕食をつくることになりそうだな」
「そのようね。面倒くさいわ」

イヴの答えにアイトはため息をつく。料理と言ってもレーベックの間屋で仕入れた料理を温め直して出すだけだろう。

自分でも料理を作れと言いたかったが、言っても無駄だろうと思った。こう言うのは本人が自覚しなければならぬ。

「アイト、ぼーっとつ立っていないで掃除でもしてよ。テーブルにほこりがたまってるじゃない」

「はあ？俺は客だぞ。何で掃除なんか」

イヴに雑巾とモップを押し付けられた。アイトは自分の家に居た方がマシだったなと思った。うるさい姉から逃れるためにここにやって来たのに。

「食事が終わってもダラダラここに居るのは客とは言わないの。時間が無いから急いでね」

「仕方ないな」

宿屋に泊る四人組がそろそろ部屋で荷物の整理などを終えて出て来るころだ。時間が無いのは本当の事だ。

アイトはテキパキと掃除をこなした。騎士団に所属するアイトにとつては掃除は朝飯前だ。掃除を終えると同時にくだんの四人組が店に入ってきた。

イヴは入ってきた客の中でシンジに目を付けた。

「お、かわいい男発見……でもコブつきか。あんな生意気そうな女のどこが良いんだろう」

イヴはシンジの側に寄り添っているアスカを見ていらだたしくため息をついた。こっちは一人身だって言うのに、畜生。

そんなことをイヴが思っていると、エステルが店の中に立っているアイトに声を掛けた。

「あーお腹空いた。ウェイターさん、席に案内してよ」

「えっ、俺？」

エステルに店員と勘違いされたアイトを見てイヴは吹き出しそうになる。アイトは弁明するのを諦めて四人をテーブル席に案内する。

「ふーん。さえない店ね」

「アスカ、だめだよ本当の事言っちゃ！」

アスカの嫌味とシンジのダメ押しによってイヴの短い堪忍袋の緒は速攻切れた。

「イヴの店をバカにしたわね！」

「だーっ。イヴ落ち着けって」

アイトがいきり立ったイヴの肩を抑え込んでなんとかカウンターの
中に座らせようとする。シンジは自分の自爆に気づいてオロオロす
るだけ。ヨシユアはため息をついてへたり込んでいた。

「お腹空いたー。早く何か食べさせてよ！」

空気を全く読めない『おつにゃん』娘のエステルが大声でその場の
緊張感をぶち壊しにした。アイトがメニューを片手にテーブル席に
近づく。

イヴはある程度怒気を抜かれてカウンターに座り込んだ。

「わー。何から食べようかな」

「えーっと何を選ぼうかな」

「シンジは全く優柔不断ね。どうせたいしたことないんだろうし、
アタシと同じのを頼めばいいじゃない」

アスカの嫌味にイヴはこめかみをひくつかせていたがなんとか自制
していた。

「じゃあとりあえず、アルナダそばとイシュワルド御飯、ヤイナそ
ばを3人前ずつね」

「ええっ!？」

「何よそれ、シオちゃんより食べるんじゃない」

アイトとイヴはエステルの注文に驚いてしまった。友だちである女
冒険者のシオもたくさん食べるが、その3倍ぐらいの量を注文した
のだ。

温めるだけの料理ならまだいいが、本格的に料理するなら一人では
とてもさばききれない。

「どうぞ。お待たせしました」

アイトはたくさん料理が乗ったトレーを持ってテーブル席に次々と運搬していく。エステルの側には空の食器が山のように積まれている。

空の食器を回収するのも一苦勞だった。とてもイヴ一人ではこなせない仕事だろう。

「アイトが居てくれて助かったわ」

「さすがにあれだけの量をイヴに持たせるわけにはいかないからな」

二人の和やかな雰囲気をぶち壊しにしたのはテーブル席から聞こえるアスカの嫌味だった。

「どの料理もおいしくない。よくこんなのをたくさん食べられるわね」

イヴは我慢しきれなくなつて、テーブル席にツカツカと歩いて行った。

「イヴの料理に文句があるっていうの！」

「ありまくりよ！そばだつて御飯だつてどうせ出す時に温めただけなんでしょう？何よ庭の井戸水つて！小麦粉をそのまま客に食べさせるなんてバカじゃないの？」

「イヴはバカじゃないもん！大学だつて出てるんだから！」

「アタシだつて大学を出ているわよ」

下らない言い争いが始まった。確かに最初にアスカが指摘した事は正しい意見なのだが逆切れしたイヴはそれ以外の点でアスカと争い

始めた。

疲れた表情を見せて見守る他のメンバーにヨシユアが助け船を出した。

「何かゲームをやって決着をつけられよう？」

「それはいいわね。じゃあ王様ゲーム方式で、ポーカーをやりましょう」

「ちよつと、勝手に決めるんじゃないわよ。イヴは大富豪がやりたいわ」

「ふふーん、逃げるんだ」

「受けて立つわよ！」

イヴはアスカの挑発に乗り、シンジたちを巻き込んでポーカー大会が始まった。

「ちよつと！アンタ、イカサマしたわね！なんでブタばかり続けるよ！」

「ふふーん。そんなこと知らないわ。これでスコアのトップはイヴのものね」

アスカはポーカーは大得意だったのだが、予想以上の札の悪さに悪戦苦闘したまま、健闘したが2位で終わってしまった。

アスカはとても蒼い顔をしていた。シンジが予想通りビリになつてしまったら、紙に書かれたあの『王様の命令』が実行されてしまう。シンジがポーカーにとっても弱い事はよく知っている。お願い！シンジをビリにさせないで、とアスカは祈っていた。

「ついてないな。俺がビリか」

アスカの祈りが通じたのか、シンジはブービーでアイトがビリにな

った。アスカはほつと胸をなでおろす。

イヴが紙を開くと、『一位の人と最下位の人とは早朝浜辺でラブラブデート』と書かれていた。

アスカが紙を開くと、『ブービーの人は二位の人に何かプレゼントする』と書かれていた。

「げげっ！なんてこと書いてるのよ！」

「やったあシンジにプレゼントしてもらえる」

イヴがアスカに抗議をするが、幸せいっぱいになったアスカは全然聞いちゃいない。イヴは罰ゲームのつもりで書いたのだが、喜ぶアスカを見てがっかりとした。

ちなみにヨシユアが開いた紙には『三位の人は四位の人にキスをする』と書かれていた。

翌朝。イヴとアイトは浜辺を二人で歩いていた。それを尾行する四つの影もゆつくりとついて行く。

「なんでアイトと歩かなきゃならないのよ」

「俺もこんなこと言われるなら、お前と付き合わなきゃよかったよ」
「デートをすっぱかすのが悪いんじゃない」

イヴは不機嫌そうに足元にある石を蹴りあげる。

「いきなり平手打ちで別れ話だぜ？あの時は事情があったって何度も言ってるだろうが」

「アイトがみんなに優しいんだもん」

「え？」

「イヴはアイトの優しさを一人占めしたかったの。だから用事なんてすっぱかして来てほしかった」

「ごめんよ、俺、お前がそう言う気持ちだと知らなかったから……」

アイトがイヴの肩を抱いて顔を近づけて行く……

「アイト、ストップ！」

「え？」

「遠くからのぞいている四人、出て来なさい。ご飯作ってあげないからね」

すると浜辺にエステルが姿を現した。諦めてアスカたち三人が続いて出て来る。

「えへへ、見つかったやつた」

「まったく、油断も隙も無いんだから」

「ごめん。今夜も御飯つくつてよ、ね？」

「……まあ今日のところは許してあげるわ」

イヴはアイトの方をチラッとみて少しだけ顔を赤くして言った。

「アンタ、これからはもう少しマシな料理を作りなさいよね。温めるだけの料理なんて、レストランの人気が出ないわよ」

「わかってるわよ。イヴにかかれば料理なんてちよろいんだから！」

「今日もウェイターの仕事が必要になりそうだな」

六人は仲良く海猫亭への道を歩いて行った……。

L A S 小説短編 デートじゃなくて暇潰しのよ！

「アスカ、ミサトさんが水族館の入場券を二枚くれたんだ。」

「ふーん、それで？」

「あ、だから……その……」

「ま、来週の日曜は暇だから付き合ってあげてもいいわよ」

アタシがそういうとシンジのやつは玩具を買ってもらった子供の
ように喜んでいる。

バカね、あれじゃあ、はしゃいでいるのが丸わかりじゃない。

アタシはシンジの鼻先に人差し指を付きつけて言っちゃった。

「勘違いしないでよ？これはデートじゃないの。暇つぶしよ、ひ・
ま・つ・ぶ・し！」

「うん、分かってるよ」

アタシがそう言ってもシンジの顔は緩み切っている。全く、分か
っているのかしら？

アタシは部屋に戻って今度の『暇つぶし』に備えて洋服の衣装合
わせ。

鏡に映る自分の顔はまるでときめいている少女のような顔だった。

アタシが何度もほおを叩いても元に戻ってしまっ。

もう！シンジのやつにこんな顔を見せたらなめられちゃうじゃないのよ！

「まあ、シンジにしては上出来よね。綺麗な魚も見えるし、デースポットの定番じゃない。」

シンジの顔がみるみるうちに赤くなっていくのに、アタシは自分の失言に気付いた。

「暇つぶしにもまあ、悪くは無いわ！」

アタシは慌ててそう言いなおした。シンジは相変わらずニヤニヤしている。全くもう！

休日の水族館はカップルの他に家族連れでも賑わって人混みで溢れ返っていた。

「シンジが迷子になったら困るから、仕方が無いから手を繋いであげるわ！」

「アスカ、真っ赤な顔をして怒っているの？」

「違うわよ！早く手を出しなさいよ！」

アタシはそう言いながら自分の顔が火照っているのを感じた。

シンジは腫れ物でも触るかのようにそつと手を握って来るんだけど……。

これじゃあ簡単に引き離されちゃうじゃない！

アタシはシンジの肩に自分の肩を寄せて強引に自分の腕を組み入れた。

「熱帯魚ってきれいなー。」

「うん、いろいろな模様があって見ていて飽きないね。」

「うわあ、大きい魚ね。」

「こんな魚が居るなんて驚いちゃうよね。」

「うわあ気持ち悪い。何、この魚。」

「深海魚だね。光の届かない所で暮らしているからこんな姿になるんだ。」

シンジは水族館の中を歩いている間、四半世紀前のロボットのようにぎこちない動きをしていた。

これじゃあアタシがシンジを脅かしているように見えちゃうじゃない！恥ずかしいったらありやしないわ。

お昼を食べてから最後にイルカショーを見た。やっぱりこの水族館もイルカショーは目玉みたいね。

事前にチケットを買っていないとイルカに触れないみたいだからアタシは諦めていたんだけど、シンジのやつがチケットを買ってしてくれたみたい。

あれ？この水族館のチケットってミサトがくれたって言ってなかったっけ？

その時は違和感の原因に気が付かなくて、イルカに触れたって単純に喜んでいただけ、帰る時にその事に気が付いて顔の表面温度がまた上昇してしまった。

「アタシ、来週の日曜日にも偶然暇なんだよね」

「アス力は委員長と遊びに行ったり忙しいと思ったんだけど、日曜日は暇なの？」

「割とね」

「何か、ミサトさんがまた映画のペアチケットが2枚余ったって言うってたと思うよ」

ふーん、白々しい言い訳をしちゃって。アタシの方もそりゃおか

しいとは思ってるけどさ。

「ミサトって加持さんとよりを戻したって聞いたけど、ドタキャンが多いのね」

「た、たぶん加持さんもミサトさんも仕事が忙しくて都合が合わないだけだと思うよ」

次の日曜日にシンジと見た映画は『豪華客船沈没』と言う映画だった。

たくさんの乗客が乗った豪華客船が沈没してしまう映画で、主人公の新聞記者の男性が離れた足場に飛び移ったり、天井にぶら下がったりとアクション性が高い。

特に結婚したばかりの奥さんを抱きかかえながら跳ぶシーンには見惚れてしまった。

「アスカ、映画館の中では迷子にならないけど、なんで僕の手を握るの？」

「冷房が利きすぎて寒いからよっ！」

その週の水曜日、アタシは学校でヒカリに週末の予定を聞かれた。

「ねえアスカ、今度の日曜日に一回でいいからデートしてくれない？」

「え？何でアタシが知らない男とデートしなくちゃいけないのよ」

「コダマお姉ちゃんが勝手に約束してきちゃったらしいのよ。アスカを紹介して欲しいって言われて」

ヒカリは必死に手を合わせて頼みこんでくるけど、アタシは首を縦には振らなかった。

「アタシは日曜はその……いろいろ予定があって忙しいのよ」

「アスカは先週も先々週もそんなこと言ってたね？もしかして、碇君と？」

「なんで、バカシンジが関係するのよ！ネルフの仕事よ、仕事！」

「ふーん、じゃあ碇君に聞いてみようかしら」

したり顔でそう言うヒカリにアタシは黙り込むしかなかった。

来週の日曜はどんな『暇つぶし』をしようか、アタシはドキドキしていた。

水族館、映画館と来たら次は遊園地かな？

お化け屋敷でシンジのやつに抱きついてやったり、一つのジュースを二人で飲もうとか言ったらシンジはどんな顔をするかしら、楽しみね。

でも、アタシがいくら待っていてもシンジは誘って来なかった。

シンジ、今日はもう土曜日の夜だよ？誘ってくれないと間に合わなくなっちゃうよ？

アタシは不安そうな表情でシンジの顔を眺めていたと思うけど、シンジはアタシの方を見ようともしせずに一人で考え込んでいるみたいだった。

シンジがたいして喋らずに暗い表情で部屋に入って行く後ろ姿を見送ると、アタシはミサトに聞いてみる事にした。

「シンジってば、陰気な顔しちゃってどうしたの？」

「明日シンちゃんはお母さんの命日で司令と二人でお墓参りに行くのよ」

「アホくさ、会うのが嫌なら断ればいいじゃん」

「嫌でも無いみたいだからやっかいなのよ」

そう言って立ちあがったミサトはシンジの部屋のドアを少しだけ

開けて何やらシンジと話している。お互い小さい声でリビングからじゃ聞こえない。

アタシは何と無しに自分の携帯電話をいじってヒカリに電話をかけた。

「ヒカリ、明日のデートの件だけど今から大丈夫？」

「ええっ、明日は碇君とデートじゃないの？」

「あいつ、用事があるんだってさ。だから暇になったのよ」

「そういうことなら、向こうは喜んでOKすると思うんだけど…」

…」

次の日アタシがデートから戻って家に帰ると、シンジが椅子に腰かけてチェロを弾いていた。

聴き終わったアタシがリビングに姿を見せて拍手すると、シンジは驚いてアタシの方に振り向いた。

「結構うまいじゃない」

「小さい頃からやっていてこの程度だからね」

「シンジの事見直したわ」

本当はかなりシンジの事を見直したんだけどねと心の中で呟いた。

アタシは話ながら奥の部屋に入って寝っ転がった。

「夕飯を食べて来るんだと思ったよ、意外と早かったね」

「つまらないから逃げて来ちゃった」

「相手の方が驚いたんじゃない？」

嘘よ。本当は相手がキスしようとか下心丸出しで迫ってきたから怖くなって逃げて来たの。

あと……シンジの作る夕食を食べ逃したくないと思ったし。

アタシがお風呂からあがると、シンジはリビングで電話を受けていた。

アタシは下着にＴシャツ一枚と言うスタイルで話しかけた。

「ミサト？」

「うん、遅くなるから先に寝ててって」

「じゃあ今夜は二人っきりってわけね」

アタシがそう言ってVサインを作ってウィンクしてやるとシンジは慌てた表情になった。

そして、アタシはそのままシンジににじり寄る。

「ねえシンジ、キスしようか？」

「ええっ、なんで！？」

まだシンジに本当の気持ちを打ち明けるのが怖い。シンジはアタシに好意を持っていてくれる事は分かるけど、今の関係を壊したくない。

だからまたアタシはあの言葉の魔力に頼ってしまう。

「暇つぶしよ、暇つぶし」

L A S 短 編 K i n g O f U n i v e r s i t y

「King Of University?」

「そうだ、碇。この大学で行われている男子の人気投票だ。知らないのか?」

そう言ってケンスケは僕を呆れた顔で見た。

僕は碇シンジ。第三新東京大学に通う一年生だ。

第三新東京大学は学部の数も多くて門戸も広い。

中学校の頃からの友達のケンスケとトウジも学部が違っけど同じ大学に入学できている。

「碇も出てみないか?結構いい線行くと思うぜ?」

「そんな、僕なんか目立たないよ」

「意外とかっこいいだけじゃなくて、母性本能をくすぐるような感じも人気があるんだぜ」

「センセもおかんに似て女子みたいに可愛い顔してるやないか」

ケンスケもトウジも、僕の顔が女性っぽいってしょっちゅうからかうんだ。

僕はもつと男らしくなりたいのに。そう、僕にはもつと男しくなりたい理由があるんだ。

「惣流もきつと投票に参加すると思うぜ」

「せやせや、大学中の女子のほとんどが参加するって話や」

惣流アスカ。僕の小さいころからの幼馴染で憧れの女性でもある。僕は小さいころに隣に引越してきたアスカに一目惚れしてしまっ

たんだ。

でも、僕より背が高く、金髪蒼眼の彼女は僕を幼馴染としてしか見てくれない。

「惣流は碇が出場すれば、きっと碇の名前を書くと思うけど、碇が出ないんじゃないのやつの名前を書くしかないんだろうな」

そういつてケンスケは意地悪そうに笑うけど、僕は挑発に乗るまいとこらえていた。

「そいや、惣流は最近渚のやつと仲が良かったんちゃうか？」

「渚も出場するって言ってたな。あいつのルックスならいい所まで行くんじゃないか？」

渚カヲル君は高校生になってから僕たちと知り合った友達だ。楽器の演奏も僕よりうまいし、かつこよくて女の子にも、もてている。

アスカとカヲル君は周囲からお似合いのカップルだと言われることもある。

そのたびに僕の胸は痛むんだ。

「きっと、惣流は渚の名前を書くんじゃないか？」

そのケンスケの言葉を聞いたとき、僕の我慢も限界を迎えた。

「……じゃあ、僕も出るよ」

「よっしゃ、じゃあセンセの名前で登録しておくで！」

トウジが嬉しそうにそう言って駆けだして、その場に残ったケンスケは僕の前で含み笑いをしている。

「くつくつく……これで碇の写真の売り上げも倍増だ」

やっぱりそのつもりだったか。

僕はケンスケにハメられたことがわかったけど、出場するからにはカヲル君に負けたくなかった。

アスカに何か男らしい所をアピールして見てもらわないと。

そう考えた僕は投票までの間に努力をすることにした。

「ねえ鈴原、なんで碇君は突然音楽サークルを辞めてラグビー部に入ったの？」

「なんや、男らしくなりたいたいなんて急に言いだしたんや」

洞木さんも僕の様子を見て、トウジに何やら聞いているみたいだった。

彼女も僕たちの友達で、特にアスカの親友でもある。

洞木さんからアスカに僕の様子も伝わっていると思う。

そりゃあ僕なんかが試合に出れるわけ無いけど、自分も強いって見せるには練習している姿を見せるのが一番だと思ったんだ。

でも、アスカ本人はなかなか見に来てくれない。残念だけどね。

ラグビー部に所属して、そんなに日は経ってないけど僕は一生懸命頑張ったから少しは体つきも逞しくなったみたい。

体力や筋力もそうだけど、特訓や練習試合を重ねるうちに闘争心が周りのみんなに触発されたのか僕にも芽生えるようになった。

『King Of University』の投票日になった。エントリーした人がアピールするためのコンテストが開催されるみたいだ。

この大会は報道部のサークルが仕切っていて、毎年大学の外からのお客さんやマスコミが取材に来るほどの大きな大会だったみたいだ。

僕は初めて知って驚いて緊張したけど、ここまできたら負けたくないと思ってステージの上に堂々と上がる事が出来た。

アスカは……客席から僕の方を見ている。隣には洞木さんも居る。僕にはアスカの表情があまり明るくないように見えた。僕がコンテストに出たことに失望しているのかな。

でも、コンテストでアピールできればきっとアスカが僕を見る目も変わってくれるはずだ。

ステージの上で一人ずつ紹介されて行く。僕も堂々と振る舞えて悪くないと思う。

……黄色い歓声を投げかけてくれる女の子たちも居たし。

「それでは、今年のサプライズイベントは出場者同士による相撲大会です！」

司会者が告げると会場は騒然となった。このイベントを企画するサークルの目玉であるイベントは毎年内容が変わる事が楽しみの一つとなっている。

今回は事前準備が要らないと言われてホッとしていたけどいくらなんでも相撲とは驚いた。

ステージの上に即席の土俵が用意される。もちろん正式なものではないので実際のものよりとても小さいミニ土俵だ。

僕は運命のいたずらなのか、カヲル君と対戦することになってしまった。

今までの僕はこんな争い事にはしり込みしていたけど、負けたくないと言う気持ちが湧きあがっていた。

ラグビーで鍛えたのが影響したのか、なんと僕はカオル君を突進で押し出し、勝ってしまった。

会場からも歓声や僕を褒めたたえる声が聞こえて来る。

さすがに僕は優勝できなかったけど、なぜかカヲル君よりは順位は上だった。

僕は満足感に包まれながらも会場を後にして、アスカと洞木さんの所に向かったんだ。

でも、そこには気まずそうな顔をした洞木さんしか立っていなかったんだ。

「あれ？アスカは先に帰っちゃったの？てっきり僕に投票してくれると思ったのに」

「碇君、シヨックを受けないで聞いてくれる？」

そう言つて洞木さんがアスカの投票用紙を見せる。そこには『渚カヲル』と名前が書かれていたんだ。

心臓の血が逆流するような感じにとらわれた。

僕は洞木さん突き飛ばしてその場を走り去った。

洞木さんが悲鳴をあげて地面に叩きつけられても、僕は振り返りもしなかった。

その時の僕はただただイライラしていたんだ。

家に帰ってもイライラは収まらなかった。

自分の部屋に閉じこもった僕を母さんが心配して声をかけてくれたけど、僕は答えなかった。

それどころか、僕はせっかく母さんが作ってくれた夕食をテーブルから全て叩き落としたんだ。

お皿が碎け散る音が響いて、母さんはとても驚いた顔をしていた。

でも、僕はやっぱりシヨックを受ける母さんを放って、自分の部屋に籠ってしまった。

父さんが帰ってきて、怒られた。

何を言われても黙っていた僕は家から叩きだされた。

僕はそれでも怒りがおさまらなくて、家の庭に出されていたプラスチック製のゴミ箱を形が変形するほど蹴りつけていた。

隣の惣流家の二階の部屋の電気が消えて人が階段を降りて来る気配がする。

多分、アスカだ。僕は逃げなくてはいけないと思いつつも、足は鉛のように重く動かないように感じた。

そうこうしている間にアスカが僕の前に姿を現した。

「シンジ……アンタ、コンテストの会場でヒカリを投げ飛ばしたんだってね……そしてシンジのママからアタシのママに電話があったけど……泣いていたみたいね」

アスカの言葉が自分の胸に突き刺さる。

僕は二の句も告げる事が出来なかった。

「今のシンジは強いと思う。でも人を傷つける強さなんて、本当の強さなんかじゃない！間違った強さよ！」

「アスカ……僕は……」

「アタシは今までのシンジが好き。無理に男らしくならなくても、相手のことを思いやる優しいシンジが昔から大好きだったの」

「でも、アスカはカヲル君のことが好きなんじゃ……」

「あれはシンジが優勝したら、アタシがシンジの側に居る事が難しくなっちゃうじゃない、だから渚の名前を書いたのよ」

そう言って照れたアスカはとってもかわいかった。

「素直にシンジのことを好きって伝えられなかったアタシが悪かったのね。そんなアタシに罰を頂戴」

アス力は唇を僕に向かって突き出した。キスが罰だって？アス力の言い分に僕は苦笑しながら……唇を重ねた。
しよっぱい……まさかアス力は泣いていたの？……荒れる僕を見て僕は、僕なんかのために涙を流してくれた幼馴染の恋人を一生守って、いこうと固く心に誓った。

そして、母さんと洞木さんには謝罪とアス力との交際報告を同時にすることになったんだ。
母さんも洞木さんも僕のしたことを許してくれて、アス力のことでも祝福してくれた。

「あーあ、僕も一回ぐらいKing Of Universityで優勝してみたかったな」

あれからしばらくして僕が冗談混じりにそういうと、アス力は笑顔でこう答えた。

「アンタはアタシにとってのKnight Of Universityになってるわよ」

2010年 バレンタイン記念LAS短編 バレバレユカイ

ある晴れた日の事。

アスカとシンジは第三新東京市の商店街へ手作りチョコレートの材料を買いに来ていた。

「それにしても、アスカがチョコレートを作りたいだなんて驚きだよ」

「ま、まあちょつとした心境の変化よ」

アスカとシンジは店で買った手作りチョコレートに必要な材料と金型などの器具を半分ずつ分けて手に持って専門店を出ようとすると、入ろうとしたヒカリとすれ違った。

「マズイところを見られた、とアスカは急いで立ち去ろうとしたが、ヒカリに気付かれてしまう。」

「あらあ！アスカじゃないの！やっぱり今年は本命の手作りチョコをプレゼントするって話は本当だったのね！」

赤い顔をして何も答えられずに固まってしまったアスカ。

「へーえ、そうだったのか」

まるで他人事のように呟くシンジに、ヒカリは盛大な溜息をついてそれ以上何も言わずに店の中へと入っていった。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

2010年 バレンタイン記念LAS SS

バレバレユカイ

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

初めての手作りチョコレートに挑戦するというアス力は、絶対に失敗はしたくないからということで素直にシンジに頭を下げて頼みこんだ。

シンジは今までになく腰が低いアスカに驚きを禁じ得なかった。

それが自分以外の男性に渡されるチョコレートだとしても、真摯なアスカの態度に心を打たれたシンジは、チョコレート作りに喜んで協力する。

コンフォート17の葛城家のキッチンに戻って、さっそくチョコ作りのために材料を広げたアス力は、その一つをつまみ上げて不満そうな顔でばやく。

「『ラクラクテンパリングの素』って、何か手抜きをしているようにイヤなのよねー」

「でも、チョココレートを固める温度調節は僕たちのような初心者には難しいって店員さんにも言われたじゃないか。失敗したくないんだろっ?」

「う、うん……やっぱり初めての手作りチョコが失敗作なんてイヤだし……」

顔を赤らめて恥じらうアスカを見て、シンジはアスカの手作りチョコレートをもらえる幸せな男を羨ましく思った。

少し暗い表情になったシンジに違和感を感じながらも、アスカはシンジの助力を得てチョココレート作りを進めていく。

アスカにとってはタイミングの悪いことに、そこへ仕事が珍しく終わったミサトが上機嫌で帰って来た。

「たっだいまあゝ!……ってウソお!? アスカが台所に立っている! 驚天動地、晴天の霹靂だわ。明日の天気はきつと伊勢湾台風並みの大荒れね」

「何よっ! 失礼ね」

「いやあ、昨日の夕食でアスカが手作りチョコを作りたいって言い出した時は冗談かと思っただし……」

ミサトのからかうような口調にアスカは腰に手を当てて言い返す。

「アタシはもとしつかりとした性格なのよ！ズボラでガサツでいい加減なミサトは自分が一生できないもんだから、そう思っのよ」

「そ、そんなことないわよ。あたしだってチヨコの二つや二つぐらい……」

「はん！ミサトのクッキーは最悪だったわよね、シンジ？」

アスカに話をふられたシンジは気まずそうにミサトに向かって頷いた。

「ヒドーい、シンちゃんまでそんなこというの？」

ミサトはあごに手を当ててムンクの叫びのようにしてシンジに向かってばやいたが、シンジはそれでも肯定の意見を覆そうとはしなかった。

「オーブンから取り出す時、乱暴にするからクッキーが全部くっついちゃってたし、焦げたり生焼けだったり……極めつけは味よ！なんで塩とかワサビとかハバネロとか入ってるのよ！」

「だから、ロシアン風にしてみたんだって」

そう言ってごまかし笑いを浮かべて手を招き猫のようにクイクイツと動かすミサトを見つめるアスカとシンジの表情は冷やかだった。

形勢が圧倒的に不利と見たミサトは話題の方向性を変えることにする。

「今年は加持のヤツにチヨコレートあげるのやめたんだって？」

ミサトの発言にシンジは耳を疑った。

去年のバレンタインの本命チョコは加持さんだったとアスカは公言していたはず。

てっきりこのチョコレートも加持のためだと思っていたシンジはその相手を考え出す。

やっぱり学校に居る誰かか？

ケンスケとトウジの顔が真っ先に浮かんだが、シンジはそれはありえないだろうと否定した。

するとサッカー部のキャプテンで中学生探偵として有名な後輩のあの男の子かな？

バスケット部の主将で顔はゴリラみたいにゴツイけど、常に成績上位10位以内に入っている同級生の彼？

去年、コンテストで優勝した僕たちがいつも外食に行っている定食屋の息子さんのあの人もかもしれない。

シンジがアレコレ考えていると、さらに悪いニュースが彼の耳に飛び込んできた。

「義理チョコも止めて本命一本に絞るなんて、アスカもついに本気になったのね」

「よ、余計なお世話よっ！さあシンジ、次はどうすればいいのよっ

ジと同じシャンプーの香りをさせていた。

過去にアスカにこっぴどく叱られてから、けっしてアスカの専用シャンプーを切らすことは無かったのに。

朝食に出した納豆や小骨の多い魚も文句を言わずに食べ、いつも残しているハウレンソウのお浸しも完食している。

ミサトはそんなアスカの様子を見て、ニヤリと笑みを浮かべてアスカの耳元で囁く。

「バ・レ・バ・レ」

「……意地を張らないって決めたのよ」

小声でばそばそと囁き合うミサトとアスカを見て、シンジは時計を気にしていた。

そろそろ家を出なければいけない時間だからだ。

「……アスカあー、僕は先に行ってるよー」

「待つて待つてシンジ、もうちょっとで用意できるから」

いつもは1人で勝手に先に行っていると言ってるアスカが今日に限っては執拗にシンジを引き止めた。

「お待たせっ」

息を切らして玄関に姿を現したアスカに、シンジは習慣のように言

葉を投げかける。

「忘れ物はない？」

「あ、いけない、チョコレート、チョコレート！」

アスカは慌てて自分の部屋に戻ってチョコレートの入った、キレイにラッピングした箱を持ってカバンに入れる。

「アスカ、すっかり舞い上がってるな……」

アスカとシンジが2人で外に出ると、アスカは顔を下に向けたまま、動かなくなった。

「どうしたの、アスカ？」

シンジが心配そうな様子でアスカに声をかけると、アスカは震える声でしゃべりだす。

「アタシ……今日学校に行くのが怖いのに」

「怖い？」

「今日、チョコレートを渡そうとしている相手はね、アタシが好きだって言ったことのない相手なの。だから受け取ってくれるかどうか……」

シンジはいつも勝気なアスカがここまで怯えている事に驚愕した。しかし、唾を飲み込んでシンジは勇気を出してアスカに笑いかける。

「じゃあ、僕がその人に受け取る様に頼んであげるよ。……多少無

理をしても。アスカがその事で悲しい思いをしないようにさ」

「ありがと、シンジ。まだ、ちょっとだけ怖いから、学校に着くまでアタシの手を引いてくれる……？」

シンジは震えるアスカの手を包み込むように優しく握る。

「もっと、力を入れて、離れないようにギュッと……」

「仕方ないなあ、みんなに見られて誤解されると困るから、人目の無いところまでだよ？」

シンジはアスカの手を引いていつものペースで通学路を歩いていく。

「~~~~~」

アスカはすっかり明るい笑顔で、何かの曲をハミングしながら軽い足取りでスキップしていた。

シンジはアスカの豹変ぶりに苦笑いを浮かべたが、アスカが元気になってくれたなら気にしないことにした。

「なんやシンジ。ついに惣流とそんな関係になったんか」

「朝から夫婦ごっこか」

ケンスケとトウジに手を繋いでいるところを目撃されたシンジは、パッとアスカの手を放した。

「ふ、二人とも、この事はみんなに黙っていてくれないかな？この

事が知られたら、アスカは好きな人にチョコレートを渡せなくなるんだ」

シンジの隣で真っ赤な顔をしてシンジの顔を見つめているアスカを見たケンスケとトウジは、やってられないといったリアクションを浮かべシンジに返事をする。

「ヘイヘイ」

「わかったわかった」

昇降口についたシンジは、自分より先にアスカが下駄箱を開けるのを見て目を丸くした。

「よし、何も入っていないようね」

「アスカ、何で僕の下駄箱を調べるの？」

「そ、その、アンタはエヴァンゲリオンのパイロットだし、命を狙って爆発物とか入れられてたら、アンタはボケボケだから引っかけか
ると思ってアタシがチェックしたの！」

とつさのことながらひどい言い訳だ、とアスカは目を閉じる。

「あはは、そんなことあるわけじゃないじゃないか」

シンジのノホホンと能天気な反応に、アスカはホッと胸をなでおろした。

教室についてからのアスカは、ピリピリとしたさつきを放っていた。

特に最近転校してきた霧島マナに対しては、一挙動を見逃さないようにずっとにらみつけている。

マナの方もアスカの差するような視線を感じて生きた心地がなかったという。

「霧島さん、何かアスカを怒らせるようなことしたのかな……」

シンジが見当はずれな理由でマナの背中を眺めていると、不機嫌な顔のアスカがシンジに話しかけてくる。

「アンタ、昼休み屋上で待っていないさい！」

「う、うん……」

アスカの鋭い目つきにシンジは委縮してしまい、心臓をつかまれるような思いだった。

アスカが立ち去った後、シンジは安堵と不安が入り混じった溜息を吐いた。

シンジの側から離れたアスカは青い顔をしてヒカリに相談している。

「やっぱりシンジの方もマナのことが気になっているんだわ……」

「ア、アスカ、きっと大丈夫よ……」

ヒカリがそう言って励ましている時、さらに悲劇が起こった。

チャイムが鳴り響き、昼休みの到来を告げる。

昼休みはトウジたちと中庭で昼食を食べる約束をしていたシンジだったが、アスカが暗い表情でゆっくりと重い足を引きずって屋上に行く後ろ姿を見えた。

それを見たシンジはタイミングを見計らって屋上に行くことにする。顔を腫らしたトウジとケンスケは快くシンジを送り出してくれた。

シンジが屋上に行くと、端っこに暗い顔をして黙り込んでいるアスカが潰れたチョコレート箱を手にして立っていた。

シンジがアスカの前に駆けつけると、アスカは赤い顔をしながら無言でシンジにチョコレートを差し出す。

「こ、これ……つぶれちゃったけど、アンタに……」

「アスカ……もしかして、チョコレートを渡す僕の前で作ってたの？」

「えへへ……、とんだ間抜けよね、アタシも。……バレバレだった？」

アスカがペロツと舌を出してシンジに問いかけると、シンジは首を横に振って否定する。

「全然気がつかなかったよ。僕は鈍感だから。……ごめんね」

右手で箱を受け取ったシンジは満面の笑顔を浮かべて、箱ごとアス

力を正面から抱きしめた……。

その二人の様子を物陰からそっと眺めていたトウジとケンスケとヒカリとマナの4人は顔を見合わせてほくそ笑んだ。

「まったく、アスカと来たら、私たちにはバレバレだったわよね？」

「あーあ、碇君にバレンタインのチョコをあげるなんて言わなきゃよかった。私ったらすっかり踏み台じゃないの」

「まあまあ、ええやんか霧島。これでワイたちもあの2人を見てもどかしく思うことも無くなったんや」

マナをいさめるトウジから視線を外し、ケンスケは雲一つない空を見上げてポツリと呟く。

「今日も晴れ晴れとした天気だな……」

Fin.

2010年 お友達誕生日記念LAS短編 明日の方を向いて

前と変わらないように見えるコンフォート17の11階にある葛城邸。

ミサトさんと僕とアスカが家族として暮らしていた、コンフォート17で唯一埋まっていた部屋。

綾波の乗った零号機が自爆して第三新東京市の中心部が壊滅した時も、エヴァ量産機が攻めてきてネルフのジオフロントが崩壊した時も、この建物は運良く戦火を免れていた。

本当に全く変わっていないのは建物だけだった。

ベランダから見下ろせていた第三新東京市の美しい街並みも、今は巨大な湖の広がる廃墟になってしまっている。

僕らの通っていた第壱中学校も、ミサトさんと街を見下ろした展望台も、アスカが初めて僕に心を開いてくれたジオフロントの庭園も、全てガレキになってしまっている。

僕もアスカも、ここに戻ってきてから外の景色を眺めるのが嫌になって、もっぱらテレビやゲームをして過ごしていた。

学校もエヴァも使徒も無くなってしまったし、他には荒れ果てて人がすっかり居なくなつた街を歩くことぐらいしかできない。

体のいい軟禁状態だ。

もちろん、僕たちが狙われることがあるかもしれないから警備上の理由があるのかもしれない。

ミサトさんは僕らと違ってネルフの戦後処理とかいろいろやることがあるみたいだけど、夜には家に戻ってきてくれる。

残り少ない僕達と一緒に居られる時間を惜しんでいるかのようなうた。

そう、僕達はこれから別れて人生を送ることになったんだ。

一番大きな理由はネルフが今月の末で解体することが決定した事。

僕達だけじゃなくて、ネルフのみんなもバラバラに散って行くことになったんだ。

ミサトさんは使徒戦の功績が評価されて戦略自衛隊の女性指揮官になるんだって。

加持さんは日本政府も弱みを持っていたみたいで、スパイの罪には問われないことになって、戦場カメラマンを目指すことに。

冬月さんは京都の娘さんの家に帰って穏やかに老後を過ごすって話していた。

父さんは……人類補完計画に加担した者として、しばらく収容所に入れられるみたい、でもしばらくしたら出てこれるようだけど……。

リツコさんはNPO団体の技師として世界各地の支援をして行くって、リツコさんなりの償いだって話してた。

マヤさんは大手パソコン会社に就職して、来月から日向さんと一緒に働くって話。

青葉さんは居酒屋でアルバイトをしながらミュージシャンデビューを目指すって息巻いてた。

綾波は消毒液や包帯の匂いに慣れてしまったから、看護師を目指して、今は家に籠って看護資格の勉強をしているみたいだ。

そして、僕とアスカは……。

今日も夕方の決められた時間にインターホンが鳴る。

「今日もお届けにあがりました」

「ありがとうございます」

僕は配達してくれたネルフの元諜報員の人にお礼を言って食材を台所に運び込む。

アスカも運んでくれるのを手伝ってくれているのが、僕にとっては嬉しい。

前だったら僕のことを無視して、ソファに寝っ転がってファッション雑誌でも眺めていたんだろうけど。

「今日は何を作るの？」

「そうだね、今日は冷やし中華と豚肉サラダにしようか」

「うん、じゃあアタシは……茹でる方ね」

僕は毎日アスカとミサトさんの食事を自分で作りたいと思ったから、ネルフの人をお願いをした。

この近くのスーパーや商店街はとくに人が居なくなっているから、わざわざ配達してもらっているんだ。

「じゃあ僕は、キャベツの千切りを……っと」

僕は手慣れた手つきでまな板の上でキャベツを素早く切り出した。

ミサトさんやアスカに料理を押し付けられて始めたけど、今となつてはこんなの朝飯前だ。

アスカは少し感心した目つきで均等にキャベツを切りそろえた僕を見つめていた。

こんなこと、毎日やっていれば誰でも身に着くと思うんだけど……照れちゃうな。

やがてミサトさんが帰ってきて、僕達家族の夕食が始まる。

僕達が家族としての絆を取り戻したのは、つい最近のことだ。

式号機に乗ったまま量産機にやられたアスカのダメージは相当のも

のだったし、ミサトさんも戦略自衛隊の隊員に受けた傷が元で何度も死線をさまよった。

僕はカヲル君を殺したショックから完全に立ち直れなくて塞ぎこんでいたんだけど、あの赤い世界にアスカと二人で取り残された時、綾波から母さんの伝言を聞いたんだ。

「人間、生きていれば幸せになるチャンスはいくらでもあるわ」

その言葉を聞いた僕は、心の中で何かが変わった気がして、そして赤い世界は崩れ去って、みんな元に戻ったんだ。

エヴァや量産機が消えてしまったこと以外は。

僕はみんなに生きていてもらいたくて、必死にそれだけを願っていた。

そうしたら、みんな生きていたんだ、加持さんも父さんも。

でも、アスカやミサトさんは瀕死の重傷を負って入院生活が続いた。

僕は二人に元気になって欲しくて、毎日お見舞いに行っていた。

やっと二人同時に退院して、ここに戻ってこれたのがつい最近のこと。

もう一度家族をやり直したいって言う僕の気持ちを二人とも分かってくれた。

夕食の片づけが終わって、僕とアスカがリビングでゲームをしよう

としていると、ついに見かねたミサトさんが僕を呼び止めた。

「二人とも、いい加減に荷物の整理を済ませちゃいなさい。大した量じゃないんでしょ？」

僕とアスカはミサトさんの言葉に顔を辛そうに歪めた。

もう少しで引越すのはわかっている。

ネルフが解体されたらアスカはドイツに帰国してしまうんだ。

荷作り何かしたら、その事をまざまざと実感させられてしまう。

自分の部屋ではいつもの日常を保つことでその事から目を反らしたかった。

意気地無しだと言われても。

ミサトさんに急かされた僕とアスカは部屋に戻って荷造りを行うことになった。

元々僕の持っていた荷物は少ないので、早く終わってしまった。

でも、アスカの荷物はもつと少なかったんだ。

意外だって？……それには理由があるんだ。

アスカは僕にシンクロ率を抜かされたところから、僕を憎んでしまっ

たことがあるんだって。

それまでは、僕のことを、その……少しは好意を持っていてくれたみたいで……。

初めて会った時に着ていたワンピースとか、ユニゾンの時に来ていた服とか僕の分までこっそり取って置いたらしいんだけど……。

僕はミサトさんに褒められて有頂天になっているのを見て、その想いが逆方向に変化してしまったんだって……。

部屋の中をめちゃくちゃ荒らしたのはもちろんのこと、ワンピースや服とか、僕の写真とか全部切り裂いて捨ててしまったんだって。

「ごめんねアタシ、シンジとの思い出を全部捨てちゃった……」

「ううんアスカの事に気がつかなかった僕が悪いんだよ」

お互い暗い顔をして謝りだす始末。

でも僕は今だからアスカに渡せるものがあるのを知っていた。

そして、ついに決断の時が来た。

「アスカ、これ……ヘッドセットが無くなって、頭が寂しいんじゃないかと思って……」

僕が差し出したのはピンクのリボン。

エヴァに執着していた頃のアスカにはとても渡せるものではないと

思っていた。

だって、アスカはヘッドセットを肌身離さず着けていたんだから。学校でも、家でも。

「ありがとう……」

アスカは嬉しそうにリボンを頭に付けて僕に向かってウィンク。

「どう、変じゃないかな？」

「と、とっても可愛くなったよ」

数日後、いよいよネルフ解体が間近に迫った休日、ミサトさんは飛行機で北海道に行こうと言いだした。

僕とアスカは家でゆっくりしていたかったのに。

千歳空港に降り立つと、今度は電車に乗る。

一体ミサトさんは僕らをどこへ連れて行くんだらう？

しばらくすると、車窓から見事なひまわり畑が見えてきた。

看板には『日本一のひまわり畑』『ひまわりまつり開催中』などと書かれている。

「さあ、ここで降りるわよ」

僕はミサトさんに続いて駅を降り、入園料を払ってゆつくりとひまわりの咲き誇る畑のあぜ道を歩いて行く。

「……あなたたち、これからどうするか決まった？」

ミサトさんが振り返らずに前を向いたまま聞いた。

「アタシは、ドイツに戻ったら、何か乗り物を動かす仕事に就きたいと思ってる」

「じゃあ、パイロットとかドライバーとかね。シンちゃんは？」

「僕は……あんまり学校の成績もよくなかったし、働きながら料理専門学校に通おうと思っています」

僕達エヴァンゲリオンのパイロットの三人は、ネルフから給料と、多額の退職金がもらえるはずだった。

でも、ネルフが解体されることになって……僕達はやっと生活できるほどのお金しかもらえなかったし、普通の社会人として暮らして行くしかできなくなっただ。

アスカが日本国内に引き続き住むと言う便宜を図る権限も、ネルフには残されていなかった。

「ねえ、シンちゃんにアスカ。あたしは上手く言えないんだけどさ、一緒に同じ方向を見つめ続けていれば、いつか叶うことがあるとは思わない？」

ミサトさんに言われて僕とアスカは意味をいまいち理解できずに首をかしげた。

「ひまわりってさ、ずっと太陽の方を向こうと頑張っているんじゃない、これってあたしたちに似ているんじゃないかな」

ミサトさんの言葉を聞いて僕はやっとミサトさんが僕らをここに連れて来た理由が分かった気がした。

「ミサトさん、僕はずっと前を見つめ続けて頑張ります」

「アタシも明日の方を向いて進んでいくわ」

僕達がそう答えると、ミサトさんはやっと僕達の方を振り返って、笑顔を見せた。

「……ねえ、そのリボン、しばらくは付けていてもらいたいけど、いつか外してもいいからね」

帰り道、僕がアスカにそう言うと、アスカは少し考え込んだ後、

「そうね、そうさせてもらうわ」

アスカは嬉しさと悲しさの入り混じった表情でそう答えたんだ。

それから一週間もたたないうちに、アスカはドイツへと帰国して行った……。

僕がアスカと別れてから十五年後。

ドイツの公園で僕は物陰に隠れながら、金髪に青い目をした小さな少女の姿を眺めていた。

そして、その子の頭には古びてくたびれたリボンが付けられている。

間違いなくアスカの娘だ。

彼女は誰かを探しているらしく、公園の中をキョロキョロと見回していた。

ああ、今すぐ物陰から出て、あの子を抱きしめたい。

でも、それは許されない事だった。

そうしたらきっとアスカは僕を憎むに違いない。

なぜなら……。

それは……。

「あゝ！パパみっけ！」

「何やってるのよ、シンジ！もうちょっとうまく隠れなさいよ！」
「だって、やっぱりかわいいそうになったし」

おもちゃを掛けて親子かくれんぼ勝負の真っ最中だったからね

2010年 お友達誕生日記念LAS短編 明日の方を向いて（後書き）

本当は悲劇的な結末で終わる予定だったのですが、LASにしたいために強引なオチで終わってしまいました。ごめんなさい。

「アタシと渚のデートを邪魔されても困るから、明日からアタシとアンタは幼馴染でもなんでもないただの顔見知り。いいわねっ！」

本気でアスカが別れる気だと理解したシンジは、慌ててアスカの腕にしがみつく。

「僕、アスカに何か嫌われるようなことをした？昨日のデートのときだって、そのティアラを買ってあげたら喜んでいたじゃないか！」

そう言われたアスカは、頭に付けたティアラを触りながら不満そうにシンジに鋭い視線を向ける。

「アタシが本当に欲しかったのはこれじゃないのよ……」

アスカが冷たい声でそう言い放つと、シンジは涙を浮かべて俯いてしまう。

「冷たいね。アスカは僕のすることなんでも喜んでくれたのに……変わってしまったんだね」

シンジはそう吐き捨てると、腕で零れる涙を拭きながらアスカに背を向けた。

そしてアスカの方を振り返ること無く、手で顔を覆いながら走り去って行った。

その後ろ姿はだんだんと小さくなって行く……。

シンジの姿がすっかり見えなくなった後、ぼつりとアスカは呟いた。

「変わってしまったのはアンタの方よ、シンジ……」

アスカも教室に戻ってカバンを取りに行つて家に帰ろうと校舎の方向を振り返ると、アスカの行く手に怒った顔をした綾波レイが立ちふさがっていた。

「ねえアスカ、シンちゃんと別れるってどういうこと!？」

レイはシンジの従兄妹で、シンジの事をシンちゃんと呼んでいた。

シンジの後を追って入学したのか同じ高校の、しかも同じクラスに居る。

「……レイ、盗み聞きは良くないわ」

アスカがそう言つてレイをなじつても、レイの眉はピクリとも動かない。

「アスカが相手だから、私はシンちゃんの事を諦めたのに!そんなのってないよ!」

レイに噛みつかれそうなぐらいにらまれたアスカは暗い瞳でレイを見つめると、ポツリと言葉をもらす。

「じゃあ、シンジはレイにあげるわ」

「バカっ！」

そう叫んでレイはアスカに平手打ちをした。

アスカのほおが真っ赤に腫れあがる。

しかし、アスカの手は赤くなったほおよりも胸を抑えている。

「アタシはもうシンジとは別の道を歩きだしてしまったのよ……後悔をしていないと言ったら嘘になるけど、進まずにいる方がよっぽど後悔すると思う」

顔を苦痛にゆがめたアスカがやつとのことで言葉を紡ぎ出すと、レイはその言葉の意味が理解できたのか口を固く結んでアスカの元から立ち去った。

アスカが教室に戻ると、すっかり人気が無くなった教室で渚カヲルが待っていた。

今日告白したばかりなのだが、待っていてくれたのだろう。

カヲルは今までたくさんの女性を虜にしてきたアルカイックスマイルを浮かべてアスカに話しかける。

「シンジ君との話は終わったのかい？」

アスカはカヲルのスマイルに対して反応を示さずに冷静に答える。

「ええ、多分アンタに迷惑をかける事は無いと思うわ」

カヲルは少々残念そうな表情になって溜息を吐く。

「……僕はシンジ君の代わりになることはできないよ」

その言葉にアスカは辛そうな顔で首を横に振る。

「いいの。シンジと同じような人と付き合って、また後悔したくないから」

それを聞いたカヲルはアスカと腕を組もうと手を伸ばす。

しかし、アスカは反射的に避けようとしてバランスを崩し、カヲルがアスカを押し倒す形で倒れこんでしまった。

カヲルは上半身だけなんとかアスカから引き離すと、そのままの体勢でアスカに話しかける。

「一時的接触を避けるんだね君は。恋人同士では普通の事じゃないのかい？」

アスカはカヲルの顔を直視できずに伏せたまま謝ろうとする。

「そ、そうね。慣れていないからごめんなさい」

その言葉を耳にしたカヲルは少し苛立った表情になる。

「……シンジ君とはもう何年も手を繋いでいたのに？」

「アイツの事はもう言わないで」

そこへ教室に近づいて来る足音が聞こえてきた。

その足音の主は勢い良く、閉まっていた教室のドアを開ける。

「忘れ物、忘れ物っ」と

そして、カヲルがアスカを押し倒していると言う体勢を見て驚きの声をあげる。

「うわっ！？ 渚と惣流！？」

鼻歌交じりで入ってきた男子生徒はそう叫んで全速力で立ち去った。

カヲルは少し困った顔をして完全にアスカから離れて立ち上がる。

「これで明日からきつと僕と君は恋人同士だつて噂が流れるね」

「なら、手ぐらい繋がないとまずいわね」

アスカは恐る恐るカヲルの手を握った。

だが体の震えは隠すことができない。

それはアスカからカヲルにまで伝わってきた。

首を振ってカヲルはアスカの手を振り払い、アスカに微笑みかける。

「……いやなら無理しないでいいんだよ」

「……ごめん」

カヲルに沈んだ様子で謝った後、アスカは取り繕うかのような愛想笑いを浮かべてカヲルに話しかける。

「じゃ、じゃあ今日はアタシの家でアンタに料理をごちそうするわ」

アスカの言葉にカヲルは笑顔になって承諾する。

「……それはいいね。好意に値するよ」

*****一方その頃*****

アスカから別れの言葉を告げられたシンジは、一目散に自分の部屋に戻り、制服のまますすり泣いていた。

泣きはらしたシンジの姿に驚いたユイは、部屋で泣いているシンジのことを思い、大きなため息をつく。

「まさか、あんなに仲の良かったシンジとアスカちゃんがこんなこ

とになるなんて……」

そういえば、今朝いつものようにシンジを起こしに来たアスカの表情が何かを思いつめたかのように固かったことをユイは思い出した。さらに、アスカの頭に付けられていたものが高価そうなティアラだったことに気がついて、ユイは息を飲んだ。

そして、ポツリと呟く。

「まさか……」

青い顔をして落ち込んでいるユイの耳にチャイムの音が届く。

玄関には険しい表情を浮かべたレイが立っていた。

「あら、レイちゃん……。家にまで来るなんて珍しいわね」

「シンちゃん、帰ってきてます!？」

鬼気迫るレイの雰囲気にもユイもただ事ではないと感じた。

レイとユイの二人は盛大な足音を立ててシンジの部屋に入る。

やっと涙が枯れ果てたのか、シンジは疲れた様子でベッドに倒れ込んでいた。

「シンちゃん……。いったいアスカと何があったの？」

レイがそう話しかけるとシンジはうつ伏せになった体勢のまま顔を

向けようとせずに投げやりな様子で答える。

「別に何も無いよ……。アスカが僕のことを嫌いになったんだろ……」

「そんなはずない！アスカが何の理由もなくシンちゃんを嫌いになるなんてありえない！」

レイは鋭い声でシンジの言葉を即座に否定した。

ユイはシンジの机の引き出しの中から白い紙の端がはみ出ているのに気がついた。

かなり慌ててしまおうとした様子が気になる。

「あら？　これは何かしら」

ユイが引き出しを開けると、黄色い消費者金融のチラシと同時に借用書が出てきた。

チラシには『いつもニコニコ・悪徳金融・金利一カ月間0円』と書かれている。

しかし借用書には、元金15万、入会金手数料10万と印刷されていた。

それを目撃したユイは貧血でも起こしたかのようにへたり込んだ。

レイがチラシと借用書を見ると、ワナワナと震えだす。

「どういつことが説明してもらおうか、シンちゃん！」

胸倉をつかまれたシンジはガタガタ震えながら昨日のアスカとのデートでの顛末を話し始めた。

昨日のデートでアスカが宝石店をのショーウィンドウを見て、いつかこんなティアラを付けてみたいとポツリと呟いた。

それを聞いたシンジは電柱に貼ってあった消費者金融のチラシを見て、デートの後にすぐに15万を借りて買いに行ったらしい。

「だってさ、借り入れは10万からだって言われたし、来月のお小遣いを合わせれば、ちょうど15万ぐらい行くなかって思ってた……」

「あのねえ……」

レイはこめかみを押さえながら怒りを抑えている様子だった。

「シンちゃんは確か、自分のチェロを買うためにお金を貯めていたんでしょー!? なんていきなりそんな高額のパレゼントをしちゃうのよ!」

「だってさ……。アスカの頼みは何でも聞きたいと思うし……」

シンジの呟きを聞いて、レイは自分の予感が当たっていたことを確信する。

「シンちゃんさ、高校に入ってからずっとアスカの顔色ばかりうかがってビクビクしてたよね?」

図星を突かれたのか、シンジはギクリと肩を震わせた。

「アスカ、もてるもんね。中学時代の知り合いは、シンちゃんが彼氏ってこと知ってるけど、高校から一緒になった人たちはそんなこと知らずに、アスカにアタック掛けてくるよね。特に渚君とか」

「僕は渚君みたいにカッコ良くないし、運動もできないし、頭も良くないし……。自信が無かったんだ……」

シンジの独白を聞いてレイとユイは溜息をつく。

「シンジ。だからと言ってアスカちゃんの言うことを何でもかんでも聞くのはやり過ぎよ。そんな無償の愛を与え続ける存在なんて、……きつと母親ぐらいよ」

「そうだよ、シンちゃん。大丈夫、シンちゃんはきつと渚君に勝てるわ」

心強いレイの言葉にシンジは思わず疑問をもらす。

「……どうして？」

「だって、シンちゃんはアスカの事、たくさん知ってるし……。渚君、凄い音痴なもの」

「はあ!？」

レイの言葉にシンジは思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

*****一方その頃*****

アスカの家の食卓では、カヲルが席に座ってアスカの料理の出来上がりを待っていた。

キョウコは料理を作るアスカとアルカイックスマイルを浮かべて待っているカヲルを見て溜息をつく。

シンジを自分の息子のように可愛がっていたキョウコはカヲルのことをどうも好きにはなれなかった。

カヲルがアスカの部屋に入ろうとすると、『今日はATフィールドが張ってあるから入れない』などと言う訳のわからないことを言っ
てまでカヲルをリビングに押し止めた。

「ごめんね、それでも飲んで待ってて」

アスカはそう言ってカヲルの前にコーヒーを置く。

側には角砂糖が3個添えてあるのを見てカヲルはほんのわずかなだけ顔を歪めた。

「アスカ、ハチミツを入れ忘れてるわ」

「あ、ありがとう、ママ」

アスカはキョウコに指摘されると、習慣のようにハチミツを鍋の中

に入れる。

どうやら料理はカレーのようだ。

アスカは3人分のカレーを作ると、カヲルの前、自分の席、キョウコの席へと並べていった。

カヲルはカレーを一口食べると、また少しだけ顔をしかめた。

「どう？　ちよつと甘すぎた？」

アスカがそう聞いて、カヲルが否定しようとする直前に、キョウコは爆弾を放り込む。

「ごめんなさいね、アスカちゃんの料理は、コーヒーもカレーも完全にシンジ君専用になっているから」

惣流家のリビングの空気が凍りつき、音を立てて崩れて行くような感覚をアスカは感じた。

カヲルはついに耐えきれなくなったかのようにスマイルを壊して憤慨したような顔になる。

「そうですね。惣流さんのシンジ君への愛は僕にとって重すぎたようです」

そう言ってカヲルは勢い良く席を立ちあがって、玄関から惣流を立ち去って行った。

「ママっ！　なんてこと言うのよ！　待ってよ、渚！」

アスカの言葉を背に、ムシヤクシヤしたカヲルは前を見ずに駆けようとしたところ、同じように辛そうに顔を伏せて駆けだしてきたレイと思いつきりぶつかった。

「痛っ！！」

「ごめん……大丈夫だったかい？ あ、白……」

転んだレイは顔を赤くして慌ててスカートを手で押さえた。

*****しばらくした後*****

カヲルとレイが肩を組んで惣流家の前から立ち去った後、レイとユイの説得を受けたシンジがアスカに謝りに惣流家を訪れていた。

「ごめんアスカ。僕はアスカのことを信じてあげられなかったのが悪いんだ。アスカはずっと僕のことだけを見ていてくれたのに」

「分かってくればいいのよ。アタシも、シンジが自分のことを信じてくれていないかと不安だった……。あの時アタシが口に出したティアラをすぐに買ってきたシンジを見て怖くなったのよ……」

玄関でお互いに見つめ合うシンジとアスカの後ろで、安心したようにキョウコがパンパンと手を叩く。

「さあさあ、シンジ君も夕食がまだでしょう？ アスカが作ったカレーがあるわよ。ハチミツがたっぷり入った甘口のカレーよ」

「わあい」

シンジは少年のような笑顔になって、惣流家のリビングへと飛び込んだ。

アスカがカレーに入れるハチミツの量は、8年間のアスカとシンジの喧嘩の賜物なのだ。

シンジは笑顔でアスカと一緒にカレーを食べていたが、アスカの頭に変化が起きている事に気がついた。

「あ、またそのリボン、付けてくれたんだ」

「やっぱりアタシはシンジが幼稚園の頃にくれたこのリボンが落ち着くのよ」

アスカが自信満々にそう言い切ると、シンジはホッとした表情を見せた。

「シンジ君。あのティアラは二人の結婚式に使うことになったから、安心していいわよ」

サラッとしたキョウコの言葉に、アスカとシンジは食事をのどに詰まらせそうになった。

二人とも顔を赤くしてチラチラと隣に座るお互いの顔を見る。

食事をしているアスカの左腕はシンジの右肩に伸ばされていた。

*****おまけ*****

ゲンドウはシンジが借りてしまったお金の決着を付けるため、消費者金融『悪徳ローン』へ足を運んでいた。

「15万だ。これで借金は完済のはずだろう？」

ゲンドウにそう言われた金融会社の社長は高そうな皮の椅子に腰かけながらゲンドウをにらみつける。

「入会金10万と、脱会金50万がかかると、ここに1ミクロンの文字で書いてありますでしょう？」

するとゲンドウはポケットから色つきサングラスを取り出して掛ける。

「何か、問題があるのか？」

そして、ドスの効いた低い声でもう一度社長に聞き返した。

「も、問題ありません……」

「兄貴い！」

「しっかりしてくだせえ！」

取り巻きの暴力団風の社員達も社長と一緒に怯えだした。

「では、帰らせてもらっぞ」

ゲンドウは悠然と入口から消費者金融のあるビルを立ち去って行った。

ビルから出たゲンドウはサングラスを外すと、ホッとして息を吐きだす。

「とっても緊張しちゃった……。ユイもひどいよなあ、こんな役目を僕に押し付けて……」

碇ゲンドウ48歳。

その素顔はネルフ幼稚園の雇われ園長先生だった。

金融会社の社員にまぎれて一部始終を観察していた加持刑事は、同僚の葛城刑事に後にこう漏らしたと言う。

「今はヤクザ顔でも園長ができる時代なんだな……」

平成22年2月22日記念LAS短編 恋はバランス（後書き）

この作品は2009年11月26日に作成した中編予定の作品の第一話を短編用に作り変えた話です。本当は、アスカとシンジの理想的な愛の形を指し示すシリアスなストーリーで終わる予定だったのですが、ゲンドウに可愛いセリフを言わせたいために消費者金融の話を追加してしまいました。

2010年 4月1日記念LAS短編 4月バカシンジ

きっかけは、友達との悪ふざけだった。

アタシはクラスメートのヨウコとアオイと一緒に、今年の4月1日はどんなウソをつこうか企んでいた。

小さいウソじゃ物足りない、もっとみんなで笑えるような事をした
い。

テレビでバラエティ番組を見たというヨウコは、アタシにその番組と同じような事をしてはどうかと提案してきた。

それは、うぶな男性に突然女性の方から好きだと告白する事。

アタシもその番組を見て笑っていたから、罪悪感も薄れていたのか
もしれない。

真面目なヒカリは、そんな誰かを傷つけるようなウソはいけないと
怒っていた。

でも、アタシはヒカリの忠告を振り切って実行してしまった。

今でも反省はしている、でも後悔はしていない。

だって……。

しか見た事が無い。

必要なこと以外はクラスの誰とも喋らず、もちろん友達も居ない、どっちかと言うとたまにいじめられている存在。

この碇をからかったら、どんなに面白いかというのがアタシ達3人の間で意見が一致した。

「いつてらっしゃい、アスカ」

「GO！ GO！ アスカ」

アタシは悪友2人の声援を背に受けて、碇の席へと向かった。

アタシが近づいても、碇のやつは顔を机に伏せたまま、ピクリとも動かない。

「起きなさいよ、碇」

アタシは碇にそう声をかけたけど、碇のやつはじっと動こうとしない。

「ちょっと、何無視しているのよ！」

声を荒げてアタシがそう言うと、碇はやっと起き上がってアタシの顔をぼう然と見つめる。

「え？ 僕を呼んだの？」

「そうよ、アンタに声をかけたのよ」

アタシが腰に手を当てて、そう言つと、碇のやつは驚いて目を丸くする。

「ええっ！？ 惣流さんが僕に！？」

叫ぶ碇の表情は、これまで見た事が無かつた。

コイツ、人並みに感情表現が出来るじゃないの。

でも、碇はすぐにいつもの陰気な表情に戻ってポツリと呟く。

「……何か用？ 用が無ければ、僕に声をかけるはずないよね」

うわ、本当に暗いやつね。

ただ、ここで話を止めたら何も面白くないと思つたアタシはもう少し積極的に話す事にした。

「そんなこと無いわよ。アタシ……前からアンタと話したいと思つていたんだけど、なかなか声をかける事ができなかったのよ」

伏し目がちに恥ずかしそうにそう言つアタシの姿を、碇はじつと見つめている。

ふふ、アタシにすっかり騙されている。

成功を確信したアタシは後ろ手で、ヨウコとアオイに向かってピースサインを送つた。

もちろん、2人も声を押さえて笑っている。

しかし、次に碇の口から出た言葉にアタシは耳を疑った。

「僕も、ずっと惣流さんと話したかったんだ……」

「ええっ!？」

アタシが驚きの声を上げて、碇の方を向くと、碇はボソボソと話し始める。

「小さい頃から、僕の隣の家に、とってもかわいい女の子が住んでいるって知ってたけど……僕は自分の部屋の窓から、惣流さんの姿をそつと眺めることしかできなかったんだ……」

アタシは碇に言われて、やっとお互いの家が隣同士だって事に気がついた。

「惣流さんは明るくて、いつもたくさんの友達に囲まれていて、僕の憧れだったんだ」

いきなりべた褒めされて、アタシも気恥かしさで顔が火照って行くのを感じた。

「僕も惣流さんみたいになりたいって、幼稚園でも、小学校でも、ずっと姿を目で追ってた。どんな時も、惣流さんは輝いて見えただ」

硬直して黙っているアタシに向かって、碇はアタシがさらに恥ずかしくなる事を言い続けた。

「ア、アタシはそんなに……」

真っ直ぐに向けられた称賛の言葉に、アタシはそれ以上何も言えず、自分の席に戻った。

その後の授業中もアタシは落ち着かない気分だった。

胸を押さえてチラチラと碇を盗み見るアタシの姿に、ヨウコとアオイは驚いている様子だった。

そりゃそうだ、もしかして一番戸惑っているのはアタシ自身かもしれない。

なんで、あんな陰気な碇なんかにときめかなきゃならないのよ。

放課後、帰る時になってアタシはまた碇に声をかける。

「一緒に帰らない？」

アタシのこの言葉に、碇だけでなく、周りのクラスメイト達も驚いた様子になる。

これは、当初の計画通り。

エイプリルフールのウソの仕上げなのよ。

でも、アタシは碇を騙しているのか、自分を騙しているのか分からなくなった。

いままで、アタシの事を美人だとか成績優秀だとかそう言う事で誉められたことはあるけど、アタシ自身の性格で褒められた事はあまりなかった。

碇は困惑気味にアタシを見上げて答える。

「……僕なんかと帰っても面白くないよ。たいしたこと喋れないし」

どこまでも暗くて内罰的な碇に、アタシは腹が立ってきた。

「いつまで下向いているのよ、顔を上げなさいよ！ 前を見て歩きなさい！」

アタシに怒鳴られた碇は怖がりながらも顔を上げた。

「うん……」

「ね、いつもと違うでしょ？」

アタシがそう話しかけると、碇の表情は少しだけ明るくなった。

相変わらず固い顔だったけど、アタシの嫌な陰気な顔じゃ無くなっ
たみたい。

帰り道、アタシは碇と並んで歩きながら話している。

「アンタさ、何か得意なこととかないの？ 誰でも一つくらい取り柄があるっていうじゃない」

「……そんな、僕は勉強もあまりできないし、人を喜ばせるような

面白い話もできないし」

そう言つて碇はまた自信をなくしたように俯いてしまった。

アタシはなんとか碇にその顔を止めさせようと話しかける。

「別に、好きな事で続けている事でもいいのよ」

「続けている事と言えば、チェロかな」

碇が呟いた言葉に、アタシは手を打って反応した。

「それよ！ 今日これからアンタの家に行つて、チェロを聞かせてもらつわ！」

「ええっ！？」

アタシは自分の家に戻ると、すぐに着替えて隣の碇の家へ向かった。

呼び鈴を鳴らすと、碇が慌てて玄関のドアを開ける。

碇の家に入ったアタシは、質素なりビングやダイニングキッチンの様子を見て違和感を感じた。

この家には女つけが無いように感じたからだ。

「アンタ、もしかしてパパと2人で……？」

「うん、母さんは小さい頃、病気で死んじゃったんだ」

碇の話を聞いたとき、アタシは碇がなぜ今まで陰気だったのか少しわかった気がした。

「アタシも、小さい頃、パパが家を出て行っちゃったんだ」

なぜ碇にこんな話をしてしまったのか分からない。

多分、アタシと碇は似た存在で、たまたま逆の生き方を選んだだけなんだろうと思ったからなのか。

アタシはママを悲しませないように時には空元気で明るく過ごしていた。

「じゃあ、惣流さんも知っているような曲を弾こうかな」

碇が弾いた曲は無伴奏チェロ組曲と言うアタシもどこかで聞いたような曲だった。

アタシが笑顔で拍手をすると、碇は気を良くしたのか、早弾きなど目を見張るようなテクニクまでアタシの前で披露した。

「やるじゃない、立派なもんよ」

「母さんに言われて始めたんだけどね、誰も止めろって言わなかったから」

「継続は力なりよ！ アンタのチェロは凄い、アタシ感動しちゃった！」

アタシがそう褒めると、碇は今までアタシが見た事の無いような明

るい笑顔を浮かべた。

「今まで、誰も褒めてくれる人が居なかったから、嬉しいよ」

その後、アタシは碇に夕食までご馳走になってしまった。

「このハンバーグ、ママが作ったのよりおいしい！」

「そんなあ、大げさだよ」

アタシに褒められた碇は照れ臭そうな顔をしてたけど、とっても嬉しそだった。

すっかり碇の家に長居してしまったアタシは碇のパパに会ったんだけど、とっても厳しそうな人だった。

でも、ぎこちない表情で、「よかったな、シンジ」って声をかけていたところを見ると、悪い人じゃ無くて、ただ不器用なだけなんだと思った。

やっぱりこのパパじゃあ、褒められるって感じがしないのかな、と苦笑したけど。

「惣流さんのおかげで、僕も笑えるって気がついたよ……ありがとう」

そう言つて穏やかに明るい笑顔を見せるようになった碇に、アタシもお願いをする。

「アタシも、今までママにさえ自分の弱さを見せられなくて、寂し

かったの。……アンタにだけは、アタシの涙を見せていい？」

「……うん、僕で役に立てるのなら」

アタシは嬉しさのあまり碇の胸に飛び込んでしまい、この日から突然アタシ達は恋人同士になった。

そして次の日。

手を繋いで登校してきたアタシとシンジを見て、ヨウコやアオイ、ヒカリを始め、クラスメイト達は騒然となった。

「アスカ、4月1日はもう終わったのよ？」

そう言うって困惑するヨウコ達にアタシは堂々とのろけ話を切り出した。

「アタシはね、シンジの魅力に気がついてあげられたのよ。シンジってば、チェロを弾く時の姿はかっこいいんだから！ハンバーグを作るのも上手いのよ」

そして、アタシはシンジとお揃いのお弁当箱を取り出して見せつけるように突き出す。

「今日も早起きして、一緒にお弁当を作って来たんだから！」

「「ええーっ!?!」」

ヨウコとアオイが大声を上げた。

シンジは照れ臭そうに「アスカ、恥ずかしいよ」と頭をかいて苦笑している。

「碇君って、そんな人だったの？」

ヨウコが物欲しそうにシンジの方を見ている。

アタシはシンジの肩に幸せそうに抱きついて宣言する。

「もう、シンジはアタシのものなんだからね！ アンタ達には渡さないわよ！」

アタシはたまにシンジをバカシンジと呼ぶ事がある。

アタシのウソに騙されて自分から告白してしまうなんて、シンジは本当に大バカだ。

でも、アタシもバカなウソをついたのは認めるけどね！

ふふ、シンジが本当の事を知ったらがっかりするだろうから、このウソはお墓まで持って行くつもりよ。

LAS小説短編 大きな栗の木の下で

エヴァンゲリオン量産機との戦いで激しく傷ついたアスカ。

彼女は、その戦闘前からベッドに寝たきりのままの状態でもあったため、体はすでにボロボロであつた。

そしてさらに彼女の左半身には痛々しい包帯が巻かれてる。

戦いの後彼女はしばらく医療施設の整っているネルフ本部の病院に入院していたが、退院の時期になっても彼女は日本に残ることを強く希望した。

周囲の人間はアスカがシンジにそれほど好意を抱いているのかと誤解していたが、アスカの瞳は憎しみに満ちていた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

大きな栗の木の下で

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

碇シンジと二人きりで暮らしたい。

アスカがゲンドウ亡き後のネルフのトップになった冬月に申し出た希望はただ一つ、それだけだった。

冬月はアスカの要望を笑顔で聞き入れ、第二新東京市に新しい住居まで用意した。

しかし、アスカはまだ自分一人では体の自由が利かない身。

介護の人間を付けようかと冬月は申し出たが、アスカは頑なに断つた。

冬月はアスカの態度に折れてシンジに全てを託す事にして、自分の仕事に集中することにした。

人里離れた山の奥の方にある一軒家。

アスカが静かに暮らしたいと言う事で、警備上の観点からも広い庭

のある家を選ばれた。

外から家の様子はほとんど見て取れない。

この好条件にアスカは思い切りほくそ笑んだ。

二人の同居が始まった初日から、アスカによるシンジへの『復讐』の日が始まった。

「アタシは納豆が嫌いだって、何度言えば分かるのよ！」

夕食の席でもアスカは何かにつけてシンジを怒鳴りつけていた。

「アスカ、そんなに暴れるとせつかくくつ付いた肩の傷口が開いちゃうよ」

「うるさい！ これもあの時アンタがすぐに助けに来なかったからじゃないの！」

シンジはその一言をアスカに言われると逆らえない。

アスカが一人で戦っている時、シンジはベークライトで固められた初号機の前で呆然としていた事があるからだ。

「アタシの怪我が完全に治るまで、アンタはアタシの側で奴隷のように世話をするのよ！ アンタのせいで怪我をしたんだから当然でしょ！」

アスカは怒った様子でシンジにそう宣言すると、シンジは全てを受け入れたかのように悲しそうな笑みをこぼすだけ。

次の日もその次の日も、アスカの怒鳴り声が部屋に響き渡る。

「このバカっ！　いつまでアタシの風呂のお湯の温度を覚えられないのよ！」

「そんなこと言っただって……仕方無いだろ！」

シンジが口答えするのでアスカの方もムキになって暴れてしまう。

そして、相変わらずシンジは朝食にアスカの嫌いな納豆などの食べ物を出してくる。

アスカはさらにシンジに対して厳しい態度を取るようになっていた。

そんな生活がしばらく続いたある日、シンジはマヤに呼び出されてネルフ本部へ来ていた。

新しく新設された自分の研究室にシンジを招き入れたマヤは穏やかな笑顔でシンジに話しかける。

「ごめんね、シンジ君。仕事が忙しくてなかなか構ってあげられなくて」

マヤはリツコ失踪の後、冬月にMAGIの管理を全て任されるなど、ハードスケジュールをこなしていた。

「どう、シンジ君。アスカちゃんと二人で楽しくやっている？」

「え、ええ……」

シンジはそう答えたが、その笑顔はともぎこちなかった。

そして、シンジの瞳はとても悲しげだった。

その微妙に暗い雰囲気を、マヤはシンジから感じ取った。

「……もしかして、シンジ君、アスカちゃんと上手く行っていないの？」

マヤが真剣な眼差しでそう問い詰めると、シンジは慌てた様子で首を横に振る。

「そんな事ありません！」

「ねえ、正直に話して。私の方でアスカちゃんの世話をしてくれる人を探すから」

「いえ、いいんです」

「じゃあ、私がアスカちゃんにシンジ君に我がママを言わないように頼んでみる」

「止めてください！」

必死に止めようとするシンジに、マヤは溜息をついた。

ミサト亡き後の二人の保護者はマヤになっている。

「……とにかく、何か辛いことがあったら私に何でも相談してね」

「……はい」

そう言って部屋を出て行くシンジの姿はとても悲しげだった。

シンジの様子がやはり気になったマヤは、翌日に空調関係の点検と称して業者を二人の暮らす家の中に潜入させて盗撮カメラを付けた。

そして……カメラに映し出される映像はマヤが危惧していた通りのものだった。

アスカは何かにつけてシンジを怒鳴りつけている。

シンジは奴隷のようにペコペコ頭を下げて平謝り。

決してシンジに笑顔を見せる事の無いアスカ。

張りついた愛想笑いだけが顔に張り付いているシンジ。

極めつけはアスカの口からたびたび漏れてくる言葉だった。

「いい？ アタシはアンタに復讐するためにここに居るの！ 怪我が完全に治るまで責任を取ってもらわよ！」

この二人を側に居させてはいけない。

マヤはこれは早く手を打たないといけないと考えた。

思い悩む彼女の居る部屋にやってきた突然の訪問者はレイだった。

「伊吹三佐、お元気ですか？」

「レイちゃん？ 久しぶりね」

そういえば今日はレイの体の定期検診の日だった事をマヤは思い出した。

レイの体をチェックするのはリツコの役目だったが、それもマヤが引き受けている。

「美術学校の方はどう？」

「問題ありません、毎日が楽しいです。……伊吹三佐、何か困っているのですか？」

そう質問されて、マヤはさらに困った顔になった。

普段から腹を割って話す相手もないので、マヤはレイの体の検査中、ずっと悩んでいたアスカとシンジの事について話していた。

「……そうですか、惣流さんと碇君が……」

「私は早く二人を引き離すべきだと思うのよ……」

マヤがそう言っただけで溜息を吐くと、レイは赤い瞳でマヤを見つめながら強い口調で宣言する。

「……私が惣流さんと碇君の気持ちを確かめてきます。それまで待

つていてください」

大きなスケッチブックを抱えたレイがシンジとアスカの暮らす家に姿を現したのはその翌日の事だった。

「伊吹三佐に碇君の家の庭に立派な大きな栗の木があるって聞いて来たの。ついでに二人の様子を見てくるようにって」

突然の訪問に驚くシンジとアスカに向かって、レイは理由をそう話した。

「そ、そうなんだ、じゃあゆつくりと見て行くといいよ」

シンジはとまどった笑いを浮かべながら、レイを栗の木が良く見える部屋へと案内する。

そこは空き部屋としてベッド以外ほとんど物が無い状態だった。

レイが部屋に入って行くと、アスカは怒った顔でシンジの首を絞めた。

「アンタ、この前ネルフ本部に行った時、マヤに変な事を喋ったんじゃないでしょうね!」

「ぐ、そんなことしてないよ!」

レイが部屋のドアを開けて顔を出すと、アスカはパッとシンジから手を放した。

「……トイレはどこ？」

「あ、右行った奥だよ」

シンジが指し示した方向にレイは歩いて行った。

「……仕方無いわね。変な報告をされても困るし」

その後アスカが暴れる様子は無く、カメラを通して監視していたマヤはとりあえずホッと胸をなでおろした。

しかし、これは一時的なものにしか過ぎないとマヤは分かっていた。

マヤがハラハラしながら様子を見守っていると、シンジがレイに夕食のメニューを提案している。

「今夜は綾波が来てくれたから、ニンニクラーメンにしようか？」

そうシンジが尋ねると、レイは首を横に振る。

「私はハンバーグが食べたい」

その言葉を聞いてシンジは思わず顔をしかめた。

「それ以外で何か食べたいものはない？」

シンジは遠回しに拒否したが、レイは意見を変えない。

「私はハンバーグが食べたい」

さっきよりも大きな声が辺りに響く。

そのレイの声はアスカの耳まで届いたのか、アスカは嫌悪感をあらわにする。

「……………わかったよ」

シンジは諦めた様子でハンバーグの材料を買いに外出した。

「……………一体どういっつもりよ……………」

レイと二人きりになったアスカは思わずレイをにらみつけながらそう呟いた。

「あなたの方こそ、どういっつもり？」

言い返されたアスカは言葉に詰まり、黙って部屋に入るレイを見送った。

家に戻ってきたシンジは急いでハンバーグを作る準備に入る。

「久しぶりだから、上手く作れるかわからないよ」

「それでもいいの」

そう言ってハンバーグを作るシンジの手は緊張から小刻みに震えていた。

これは、レイにハンバーグを食べてもらうためからくるものではないな

かった。

怯えるシンジの視線の先にはアスカが固い表情をして座っていた。

焼き上がるハンバーグの音、そして鼻孔をくすぐる匂い。

シンジがアスカと暮らし始めた直後にも一度ハンバーグを作った事がある。

しかし、アスカはハンバーグを特に表情も変えず能面のような顔で食べていた。

その姿にショックを受けたシンジはそれから二度とハンバーグを作っていないかった。

夕食が始まり、シンジはドキドキしながらアスカの方に視線を送る。

「碇君、おいしいわ」

「あ、ありがとう……」

レイの言葉に少しシンジは救われたような感じでシンジは再びアスカの顔色をうかがった。

だけどアスカは表情一つ変えずにハンバーグを口に運んでいた。

シンジはガツクリとした様子で夕食の後片付けをしている。

レイはじっとアスカの顔を見つめている。

アスカがそれに気がついてレイをにらみ返す。

「何よ？」

「別に何でもないわ……」

レイはそう言うと部屋へと戻って行く。

その後アスカは落ち込んでいるシンジに声をかけず、夜は更けて行った。

夜中になっても眠れなかったシンジは、レイの泊っている部屋の明りがまだついている事に気がついた。

シンジはレイに気がつかれないようにそっとドアを薄く開けて中を覗き込む。

「綾波……、こんな夜中に絵を描いてるの？」

シンジは真剣な様子でスケッチブックに向かっていているレイを見て、邪魔してはいけないと思いそのまま部屋を離れた。

そして翌日。

朝食の席にレイはスケッチブックを抱えて現れた。

シンジとアスカは怪訝そうな顔でレイの事を見つめている。

「綾波、大きな栗の木の絵は描けたの？」

シンジの言葉にレイは首を横に振る。

「違うわ。よく見て惣流さん、碇君」

レイがそう言っただけスケッチブックを開く。

そこには美味しそうにハンバーガーを満面の笑みで頬張るアスカの姿と、それを穏やかに微笑んで見守るシンジの姿が描かれていた。

「こ、これがアタシだっていうの……」

そう呟いたアスカの蒼い瞳から涙がこぼれ落ちた。

シンジも絵の中のアスカの笑顔を食い入るように見つめていた。

レイは涙を流しているアスカに向かって話しかける。

「惣流さん、あなたはもう碇君を許してあげているんでしょう？
責める事に疲れているんでしょう？　なんで素直に碇君に言っただけがないの」

「だ、だって……許してあげるって言ったら、シンジがどうかへ行っちゃったから……」

アスカはそう言っただけ、ついにその蒼い目からせきを切ったように涙をあふれさせる。

「……え？」

シンジは驚いた様子で声を上げた。

「だって、アタシはシンジにひどいことしてきたし、こんなガリガリに痩せたアタシなんて放って、他の子の所に行くに決まってる……例えば、アンタとか……」

アスカの独白を聞いたシンジも必死に頭を下げ、謝りはじめる。

「ごめん！……僕もアスカの怪我が治らないように、わざとアスカを怒らせて暴れさせるようなことをしたんだ！ 元気になったらこんな情けない僕を放ってドイツに帰っちゃうと思ったから……」

シンジの独白を聞いてアスカも涙が途切れるほど驚いた様子になる。

アスカとシンジは黙って見つめ合う。

お互いの瞳には憎しみも、悲しみもすでに存在していなかった。

「惣流さん、碇君、私はもう一枚絵を描いてみたくなったの。……お願いできる？」

レイが描きたい絵は、幸せそうな恋人達の風景だと言う。

シンジは大きな栗の木の下で、アスカを膝の上に乗せて抱き寄せた。アスカも出来るだけ身をかがめて、シンジに顔を近づけようとしている。

その体勢のまま、レイが下書きを終えるまでじっと二人は待っている。

た。

「アスカ、窮屈な思いをさせちゃってごめんね」

「ううん、きっとシンジの身長は伸びて、アタシを追い抜いちゃうだろうし、こんなの今のうちだよ」

レイが描き上げた二枚目の絵は、その後『大きな栗の木の下で』と題名を付けて、美術コンクールに出品された。

美術の勉強を始めたばかりのレイの腕では受賞は無理だったが、その絵は大切な宝物として碇家のリビングに飾られることになる。

L A S 小説短編 大きな栗の木の下で（後書き）

この作品は2009年に製作した短編「裸の大将 第三新東京市訪問編」をリメイクした短編「あなたが彼という理由」を読者の方から頂いたご感想を参考にして、さらにリメイクした短編です。書き始めから5ヶ月。自分なりに満足できたと思います。

しかし、今日は赤木リツコ以外の訪問者が303号室を訪れた。
入ってきたのは学校の制服姿のシンジ。

生命維持装置しかない殺風景な病室の様子を気にすることなく、シンジは人形のようにベッドに横たわるアスカの姿を暗い瞳で見下ろしていた。

それからどのぐらいの時が経ったのだろう。

機械類の電子音しか聞こえない室内の静寂を破ったのはシンジだった。

「アスカ……、起きてよアスカ……」

シンジはアスカが横たわるベッドにゆっくり近づくながら呟いた。

「なにいつまでもそんなトコで寝ているんだよ。みんな死んじゃったんだよ、綾波も渚も、加持さんも……」

そこまで言うとシンジはアスカの腕をつかむ。

「アスカっ、起きろってば！」

するとシンジはアスカの腕に温もりがまったく感じられない事に気がついた。

慌ててアスカの脈を取る。

しかし全く反応が無い。

いつの間にか生命維持装置の機械音も止まっていた。

シンジの顔はいよいよ真っ青になった。

「僕には！ アスカしか居ないんだよ！ 前みたいに笑ったり怒ったりしてよ」

全く呼吸をしていないアスカの胸にシンジは顔をうずめてさらに叫ぶ。

「僕をバカにしたり、毒突いたり、余計なおせっかい焼いたりしろよ！」

ついに耐えきれなくなったシンジの瞳から涙があふれ出す。

「僕は守りたかった！ アスカがこんな抜け殻になってしまっ前に！」

「……それは本当の気持ちなのね？」

病室のドアが開いて、ミサトが姿を現した。

シンジは振りかえること無くベッドに横たわるアスカを抱き上げながら答える。

「はい……。僕はアスカが好きなんだってはっきりと気がつきました……。もう遅いけど……」

「まだ遅くはないわよ?」

「えっ?」

シンジが驚いて振り返ると、そこには微笑むミサトと……。

見覚えのある赤いインターフェイス・ヘッドセット。

赤みを帯びた金髪。

淡い黄色のワンピースを身に纏った少女。

惣流・アスカ・ラングレーが顔を真っ赤にして恥ずかしそうにうつむいていた。

「ど、どういことですかミサトさん!」

「シンジ君、あなたが抱きしめているモノを良く見てみなさい」

シンジが抱いているものを確認すると、抱きあげられたせいで顔の部分を覆っていた金髪がすっかり分けられていた。

あらわになった顔をみると、それは精巧に作られたマネキンだと理解した。

「アスカ……」

「シンジ……」

シンジはマネキンを投げ出すと、素早い動きでアスカに飛びついた!

「ちょ、ちょっとシンジ……」

「アスカ……、生きている……！ 本当に良かった……！」

シンジは堪らずアスカの心臓に耳を押し付けていた。

今までのアスカの性格ならシンジを撥ね退けていただろう。

しかし、逆にシンジを抱き寄せるアスカを見てミサトはアスカに質問をする必要はないと感じた。

アスカもシンジを受け入れたのは一目瞭然だからだ。

冷静さを取り戻したシンジはアスカの肩をしっかりと抱き寄せながらも、少し憤慨した様子でミサトをにらみつけた。

険悪な雰囲気察したミサトは慌ててシンジに向かって弁解を始める。

「実はね、この前シンジ君が倒した使徒が最後の使徒だったの……。それで、アスカは役目を終えてドイツに帰る事になったのよ」

「ええっ！？ アスカは帰ってしまうんですか！」

ミサトの言葉にアスカの肩を抱くシンジの手に力が入った。

「シンジ、痛い」

「あ、ご、ごめん」

シンジはアスカに謝り少しだけ力を緩めるが、アスカの事を放そうとはしなかった。

ミサトはそんなシンジを見て少しあきれたように溜息をついた。

「大丈夫よシンジ君。アスカが日本に残ると言えば、残れるようになったから」

そのミサトの言葉を聞いたシンジはホッとして一気に体の緊張を解いた。

「でも、シンジ君とアスカがこのまま仲違った状態のままだと、アスカも意地を張ってドイツに帰るって言い出すかも知れない。そこで加持のやつが策を練ったわけ」

そこまで話すとミサトは少し不機嫌そうな顔になる。

「ミサトさん、何を怒っているんですか？」

「あのバカ、敵を欺くにはまず味方からとか言っ、あたしに対しても死んだふりをしてたのよ！ しかも碇司令やその部下の剣崎君まで使っ」

ミサトはそう言っうなだれて、少し気恥ずかしそうに呟く。

「おかげであたしはさ、帰って来た加持に涙を流して抱きつく羽目になっちゃったわけよ」

思わず嘖き出してしまったシンジをミサトがジト目でにらみ返す。

「シンジ君でしょ」

そしてミサトはアスカの方を見て嬉しそうに微笑みかける。

「それにしても良かったわ。アスカの振りをしたマネキンに向かってシンジ君が自分の気持ちを吐きだしてくれて」

今度はシンジの方に向かってウィンク。

「隣の部屋のモニターで、シンジ君の様子をアスカと二人でみてたけど、アスカも感激して涙を流しててね。すぐにでもシンジ君の所に行きたいと言つのを引き止めるのが大変だったのよ」

少し強がって冷静に見えるように振る舞っていたアスカの顔が茹でダコのように真っ赤になってしまった。

シンジはそんなアスカの表情を見て胸をときめかせ、優しくアスカの髪を撫で始めた。

「さて、作戦も無事に成功したし、加持やあなた達のお母さんにも報告しないかね。心配しているだろうから」

「お母さん？」

シンジとアスカがユニゾンして尋ねると、ミサトはしまったと口を押さえたが、すぐに愛想笑いを浮かべる。

「加持の考えた作戦の肝はね、シンジ君とアスカがお互いに頼る相手が一人しか居ないと思いこませる事だったのよ。だからあたしに

自分が死んだってウソをついて、あたしの心を不安定にしてあたしが落ち込んでいるアスカを慰められないようにしたり、シンジ君に厳しい事を言わせるように仕向けた。そしてレイにも碇司令に頼んでシンジ君の事を知らない振りをさせて絶望させようとした」

ミサトの言葉にシンジは少し気まずい顔になる。

「確かに、僕はアスカが少し怖かった。だからミサトさん、綾波が目の前に居たらずがっていたかもしれない……ごめん、アスカ」

「ううん、アタシも加持さんが生きてたら加持さんにすがってばかり居たと思う……でも、多分それは恋じゃ無くて憧れのような気持ちだったのよ。大人になりたくて無理に背伸びしてた」

アスカはそこまで言うともた照れ臭そうにシンジの瞳を上目遣いに見つめる。

「アタシはもつと自分の年相応の相手を見つけるべきだったのよ。例えば……シンジとか」

黙って見つめあう二人の沈黙を破る様に病室のドアが開き、複数の人数の足音が響く。

シンジとアスカが入口の方に顔を向けると、そこには碇ユイ、惣流キョウコを先頭に、ゲンドウ、コウゾウ、リツコ、オペレーター三人、加持とレイが大挙して押し寄せていた。

みんな拍手をして口々に祝いの言葉を述べる。

「シンジ、そして惣流君。今までエヴァンゲリオンパイロットとし

ての任務、ご苦労だった。ただいまを持ってチルドレンを解任する。そして……おめでとう」

ゲンドウの言葉にシンジとアスカは満面の笑みを持って答える。

「「ありがとう」」

どうやらゲンドウは最後の使徒を殲滅させた後、ゼーレが動き出す前にエヴァンゲリオン初号機と式号機から急いで碇ユイと惣流キョウコをサルベージしたようだ。

コアの無くなったエヴァンゲリオンはただの巨大な人形同然であり、ゼーレの人類補完計画は頓挫してしまった。

肝心なところで失敗してしまったキール議長にゼーレの議員達は失望し、その後は全く足並みが揃わず、ネルフのゲンドウにされるがままになってしまった。

ゼーレはすっかり弱体化し、もはや人類補完計画を実行するだけの力は無くなってしまった。

ネルフもその任務を終えて解散し、ゲンドウはその体格を生かして見習い職人として復興が急ピッチで行われる第三新東京市の工務店に再就職した。

惣流キョウコもミサトも第三新東京市の職場に就職し、新たな住居はコンフォート１７において碇家を真ん中に葛城家と惣流家が隣り合う形になった。

ネルフが解体され、コンフォート17も民間に払い下げられることになったのだ。

ユイは専業主婦となり、シンジとレイ、働いている惣流キョウコに代わってアスカの三人の面倒を見るようになっていく。

再び中学校が始まり、楽しそうに登校するシンジとアスカとレイの三人。

そしてそれを幸せそうに見送るユイ。

そんな光景を眺めている銀髪で赤い瞳をした少年の姿があった。

彼は渚カヲル。

祖父の家がある第三新東京市に引っ越してきたのだった。

第三新東京市にある高校を受験するため、故郷を離れて上京してきた。

「……結局人類補完計画は発動されてしまったんだね。でも、これがシンジ君の望んだ世界だなんて意外だったね。僕は辛かった使徒との戦いの事も、彼は帳消しにするかと思ったのに」

「だって、今まで辛い思いをしてきたから、僕はみんなの事が好きになれんだと思うからだよ」

そう呟くシンジの声が聞こえたような気がしてカヲルは後ろを振り返った。

しかし、そこにはつむじ風が一陣、舞い上がったただけだった。

アタシは、出会った時からシンジの事を好きだったわけじゃなかった。

それどころか、さえない暗いやつだと思っていた。

でも、ユニゾンの特訓をした後から少しずつシンジに対するアタシの気持ちは変わって行った。

あの時のアタシは自分の事しか考えて居なくて、シンジに合わせるつもりなんて無かった。

だから、シンジとファーストにユニゾンの組み合わせを変更するとミサトに言われた時はショックだった。

またアタシは仲間外れ。

どうせ今までずっと一人でやって来たし、最初から上手くないものだったと、アタシも諦めていた。

でも、シンジはファーストよりアタシと組みたいと言ってきた。

ファーストよりアタシが良いって。

そしてシンジはアタシに無理をしないで欲しいとも。

アタシがエヴァンゲリオンのパイロットに選ばれた時から周りの大人達は常に結果を出せと言い続けて来た。

努力しても結果を出せなければ、役立たずとまで言われた。

シンジにそう言われた時、アタシは無駄な努力をするなと言われたような気がして、怒鳴り返してしまった。

でも、よく考えてみるとそれは誤解だと分かった。

シンジはアタシが苦しんでいる事を感じ取ってくれていたんだと。

だけどアタシはシンジに対して素直に謝る事もお礼を言う事も一言も言う事が出来ないでいた。

アタシはいつかシンジに素直な気持ちを伝えられるようにシンジとの同居をミサトに申し出た。

でも、シンジと一緒に暮らすようになってから、アタシはシンジに

当たり散らすようになってしまった。

シンジってば内罰的で暗い顔をして謝まっただけだから。

そんなシンジの顔を見ているとイライラしてくるのよね。

だけど、シンジがアタシのために色々してくれている事は知っている。

ハンバーグもかなり上手くなったよね。

でも、アタシはいまだにシンジに一言も自分の気持ちを伝えていなかった。

このままじゃ、シンジはアタシに愛想を尽かしてしまうんじゃないか。

アタシは手紙でシンジに感謝の気持ちを伝える事にした。

シンジへ

毎日アタシを起こしてくれたり、ご飯を作ってくれたりしてくれてありがとう。

アタシは優しくしてくれるシンジが大好きだよ。

……

「大好き」って……ラブレターじゃない！

ちょっと大胆すぎるかな……でも、素直な気持ちを書くって決めたんだし……。

「アスカー、ご飯できたよー」

シンジの呼ぶ声が聞こえる。

アタシは手紙を机の引出しにしまってリビングへと急いだ。

破れたラブレター

（2010年 碇シンジ誕生日記念LAS小説短編）

学校から帰ってきた僕は、さっそく部屋の掃除に取り掛かる。

ミサトさんもアスカも部屋の掃除を全くしてくれないから、自然と僕が掃除をしなければならなかった。

同居人にアスカが増えた事で、僕は掃除をしなければいけない部屋が一つ増えた。

でも、僕は嫌だとは思っていない。

ミサトさんやアスカが僕と一緒に同居をして掃除をさせてくれるのは、少なからず僕に好意を持っていてくれるってことなんだと思うから。

アスカの部屋を掃除していた僕は、引き出しから紙切れがはみ出しているのに気がついた。

僕はその紙切れの事がとても気になって仕方がなかった。

アスカの秘密を勝手にのぞくのはいけない事だと解っているけれど……僕は興味を抑えきれなかった。

これは……僕宛てのラブレター……！？

アスカが僕の事、優しくって大好きだって……。

手紙を読んだ僕はとても幸せな気持ちでいっぱいになった。僕もアスカに告白した方がいいのかな……。

でも、この手紙を見た事がアスカに知られるとまずいよね。

僕も手紙でアスカに自分の思いを伝える事にした。

「アンタ、今日はやけに機嫌が良さそうじゃない？」

僕は夕食に思いっきり大きなハンバーグを作った。
アスカもおいしそうに食べてくれたし、好感触だ。

僕はアスカがラブレターを渡してくれる日を楽しみに待っていた。
でも次の日、僕とアスカの仲が険悪になる出来事が起きてしまった。
んだ。

いつも定期的に行われているシンクロテスト。

僕はアスカにいい所を見せようと頑張った。

もうアスカの足手まといにはならないと。

「シンジ君、ユーアーナンバーワン！」

僕はミサトさんの言葉に笑顔で答えんだけど……。

「シンジに負けるなんて！」

ネルフの廊下でそう言って荒れるアスカの姿を僕は見てしまったんだ。

「何見てるのよ、バカシンジ！」

アスカに怒鳴られた僕は逃げるようにその場を立ち去った。

アタシはシンクロ率をシンジに抜かされたと聞いて目の前が真っ暗になった。

エヴァンゲリオン式号機のパイロットとして選ばれた時からアタシは常にトップで居る事を要求された。

アタシの代わりのパイロットはいくらでも居ると周りの大人達に脅

されることも何回もあった。

バカにされないように大学を卒業しても、みんなはアタシを惣流博士の娘としてしか見てくれない。

何の努力もしないシンジがアタシのシンクロ率を抜いたと聞いてアタシは腹が立った。

どうしてシンジが！

小さい頃からエヴァのパイロットとしての厳しい訓練を受けていたアタシより、何でシンジの方がシンクロ率が高いのよ！

ミサトのマンションに戻っても、アタシのシンジに対する怒りは収まらなかった。

「こんな手紙なんか、シンジなんて大嫌い！」

アタシはシンジに宛てて書いた手紙を細かく引きちぎってゴミ箱に捨てた。

シンジがご飯を作ったと呼びに来て、お風呂を沸かしたと言いに来ても、謝りに来ても、アタシは背中を向けて答えようとしなかった。

アタシが無言の抵抗をしていると、シンジは諦めてアタシの部屋から出て行った。

しばらく時間が経って、すっかり夜中になった。

「お腹空いたな……」

アタシは眠れないまま、ベッドに座り込んでいた。

「アスカ、入るわよ」

そう言って部屋に入って来たのはミサトとリツコだった。

「何でリツコまでここに？」

「あたしが説明してもアス力は信じないと思ってさ」

ポカンとしているアタシに向かってミサトは心配した。

「アス力、確かにシンクロ率はエヴァンゲリオンの攻撃力や防御力を高める効果があるけど、実戦で問われるのはパイロットの判断や操作能力よ」

「そうそう、シンクロ率が全てじゃないのよ」

リツコとミサトにそう言われてアタシは何で二人がアタシの部屋までわざわざ来てくれたのか分かった。

その後もリツコは細かいデータをあげて、エヴァとシンクロ率の関係を丁寧に説明してくれた。

リツコの説明を聞いたアタシはエヴァのパイロットとしての自信を取り戻してすっかり落ち着いた。

「じゃあシンジ君に謝って仲直りするのよ」

「ごめんね、あたしが余計なこと言っちゃったせいで」

リツコとミサトの二人はとくにアタシの事をお見通しか。

明日の朝、シンジが起こしに来たら謝ろう……。

僕はいつものように朝食を作ってアス力を起こしに行くんだけど、気が進まなかった。

アス力はきつと僕の事を怒っているから。

アス力の部屋に入った僕は、破られた紙くずが入っていたゴミ箱を見てしまった。

あれは確かアスカが僕宛てに書いたラブレター？

アスカは僕をそこまで嫌いになってしまったんだ……！

胸が痛んだ僕は、そのままアスカの部屋を飛び出して食卓へと戻った。

そうしたら、怒った様子でアスカが部屋から飛び出してきた。

「シンジ、何でアタシを起こさずに部屋を出て行っちゃうのよ！」

「アスカは僕の事、嫌いになったんだろう？　僕を見ているとイライラするって！」

「それは、シンジが内罰的でウジウジした顔をしているからよ……」

「僕宛てのラブレターを破り捨てたんだろ！？」

「……シンジ、アタシの机の引き出しを開けて……！」

「ご、ごめん」

「そりゃあ、昨日はかつとなって手紙を破り捨てたけどさ……でも、アタシ、シンジの事は嫌いじゃない……いえ、好きよ」

「でも、僕は……」

そう答えると、僕は突然アスカに顔をつかまれて唇にアスカの唇を押し付けられた。

これってキス……！？

女の子の唇ってこんなに柔らかいんだ……。

僕が初めてのキスの感触に酔いしれていると、アスカはゆっくりと僕から体を離れた。

「……アスカ、本当に僕なんかでいいの？」

「何よ、アタシが好きでもない相手にキスすると思ってたの？」

「でも、僕はそんなに頭も良くないし運動もできるわけじゃないし、そんなにカッコ良くないし……」

「それは、シンジがウジウジ下を向いているからよ。シンジってカッコ良いと思うわよ」

「僕が？」

「もつと明るく笑ってればいいのよ。アタシ、シンジの笑顔が好きよ」

「そ、そうなの？」

「アタシのワガママにも付き合ってくれるしさ、アタシのためにご飯も作ってくれるし……」

「何か、あんまりかつこ良くないな……」

「そんなことない、マグマの中に飛び込んでくれたシンジは十分力ッコ良かったわよ！」

「そ、そう？」

「お二人さん、ノロケはそのくらいにして朝ごはんを食べて準備しないと学校に遅刻するわよ！」

「ミサト？」

「うわっ、ミサトさん！」

いつの間にかニヤニヤと笑いを浮かべたミサトさんが僕達の後ろに立っていた。

「行つてきます！」

僕はアスカに手を引かれて通学路を走っている。

「アスカ、こんな所を見られて平気なの？」

「別に構わないわよ。後、これから内罰的になるのは禁止ね」

「どうして？」

「だって、アタシがつまらない男の彼女になった事になっちゃうじゃない」

「でも、自信がないなあ」

「そうね、今日は放課後、シンジの誕生日プレゼントの服を買いに行きましょう！ あんなダサイTシャツ変えなさいよ！」

今日は僕の誕生日。

アスカからはTシャツ以上に大切な物を受け取った。
自信を持って胸を張って歩くって事を。

2010年 七夕記念ヨシエス短篇 七月七日の殺意

<ツアイス地方 エルモ村>

七月のとある日、エステル達はエルモ村を遊撃士協会の仕事で訪れた。

「夏は暑いから、温泉より海の方に観光客が集まると思ったのに、賑やかな」

「エルモ村でお祭りをやっているみたいだよ」

ヨシユアの指摘の通り、エステルが辺りを見回すと、村の至る所に笹の葉が飾り付けられていた。

「これがキリカさんの言っていた七夕祭りか……」

「笹の葉に願い事を書いた紙を吊るすと、空のお星様が叶えてくれるって言うけど、僕達は知らなかったよね」

「あたし達にはエイドス様がいるように、カルバードの人達にも信じる神様がいるんだね」

エステルはそう言っ、街の中を見回して探し物をしているようだった。

「何を探しているの？」

「……好きな相手の名前を紙に書いて吊るすと、恋が実るって言う笹の葉はどこにあるのかな？」

「えっ？」

突然エステルにそんな事を尋ねられたヨシユアは、衝撃を受けたよ

うに固まってしまった。

「ヨシユア？」

「あ、そうだね……紅葉亭のマオさんに聞けばわかるんじゃないかな？」

ヨシユアの答えを聞いたエステルは元気に紅葉亭へ向かって駆けだして行く。

なんとか自分を取り戻したヨシユアだったが、ショックを受けているのかとてもゆっくりとした足取りで歩いて行く。

「おや、ヨシユアじゃないか。エステルなら奥の庭にある笹の葉に短冊をかけに行ったよ」

「そ、そうですか……」

マオはヨシユアの焦ったような様子を見て、穏やかに笑いだした。

「ははあ、エステルが誰の名前を書いたのか気になるんだね？」

「そ、そんなことは……」

「ハッハッハ、もつとどっしりと構えて居なさい！ あの子がヨシユア以外のこの名前を書くわけがないだろう？」

「ぼ、僕もエステルのところに行つてきます！」

ヨシユアがエステルの居る紅葉亭の奥の庭にたどり着くと、エステルは藍色の短冊を笹の葉に吊るし終わるところだった。

ヨシユアの姿に気が付くと、エステルは笑顔でヨシユアのところに来て来た。

「ふう、七夕の日に間に会ってよかった。エルモ村に来る途中で何も無くて幸いだったわ」

「あの短冊には僕の名前が書いてあるの？」

「ううん、違うよ」

あっさりとヨシユアの言葉を否定したエステルに、またヨシユアはショックを受けて胸を押さえた。

「キリカさんに言われたただけだし、あたし達このところ仕事で忙しかったじゃない？ だから、今日は紅葉亭に泊まってゆっくりしようよ」

「そうだね……」

力の無い様子で答えたヨシユアの顔をエステルは不思議そうにのぞきこんだ。

「どうしたのヨシユア、元気無いよ？」

「落ち込む事があってね……」

「ふーん、そんな沈んだ気分もさ、お祭りを回っていたら吹き飛ばよ、ねえ行こう！」

ヨシユアはエステルに手を強引に引かれて祭りでにぎわうエルモ村の中を回ってみる事になった。

エステルに手を引かれながらも、ヨシユアの中ではある考えが頭の中でグルグルと回っていた。

「エステルは誰の名前を書いたんだろう……」

「ヨシユア、何をブツブツ言ってるの？」

「……ねえエステル、アガットさんの事はどう思う？」

「アガット？ そうね、厳しいけどたまには優しくしてくれる、頼りになる先輩かな？ ……どうしてそんな事を聞くの？」

「いや、別に……ちょっと気になったからさ。じゃあオリビエさん

は？」

ヨシユアはその後エステルに思いつく限りの男性の名前を挙げて印象を聞いてみたが、要領を得なかった。

祭りを楽しんだエステル達は、温泉で疲れを取る事にして、男湯と女湯に別れた。

ヨシユアはエステルが女湯に入ったのを見届けると、急いで紅葉亭の奥にある笹の葉へと向かった。

「確か、あそこにある紫の短冊がエステルがつけてたやつだよね……」

いけない事だとは知りつつも、ヨシユアはエステルの書いた名前を確認せずにはいられなかったのだ。

おそろおそろヨシユアが短冊を見ると、そこには『ジン・ヴァセック』と書かれていた。

「ジンさん……！」

憎しみを込めてそうつぶやいたヨシユアは、興奮を抑えるため何回も深呼吸をする。

人のあまり来ない建物の陰で落ち着いたヨシユアは、天を仰いで自分で自分をバカにして笑う。

「やっぱりエステルは包容力のある男の人が好きなんだね。僕なんかジンさんに比べたらまだまだ子供だ……」

部屋に戻ったヨシユアはカシウス家に来た当初のように思い詰めた表情で座り込んでいた。

そこに湯上りのエステルが戻って来た。

「はー、気持ち良かった。ヨシユアも露天風呂に来ればよかったのに。……あの時とは違って人も居たし、悲鳴なんかあげないからさ」

エステルは返事をしないヨシユアを不思議に思っ、近づいて行った。

そして、ヨシユアの異変に気がついた。

「あれヨシユア、お風呂に入っていないの？ ……どうしたの？」

「……エステルは僕にただ同情していただけなんだよね。勝手に好きになった僕は迷惑だよな」

「ヨシユア、何を言ってるの？」

「エステルは、ジンさんが好きだって分かったから……だから短冊に名前を書いて吊るしたんだろう？」

ヨシユアの涙声交じりの言葉を聞いてエステルは困った表情でおでこを押さえた。

「ヨシユア、それは激しく勘違いよ。あれはキリカさんが書いた短冊を笹の葉につけてくれて依頼されたわけ。ヨシユアだってあたしに注意したじゃないの。依頼人の秘密をもらすなって」

「キリカさんの依頼だって……？」

そう自分に言い聞かせるようにつぶやいたヨシユアは体の力が抜けてへたり込んだ。

そして、ヨシユアの瞳から涙がこぼれ出す。

「は、はは……ホッとしたら何で涙が出てくるんだろう」

エステルは顔を赤らめながらヨシユアに話す。

「ヨ、ヨシユア……あたし達も二人で短冊を笹の葉に吊るしに行こうか？」

「でも、僕達はエイドス様を信仰しているわけだし……」

「空の神様同士、きっと友達だからって許して下さるわよ！」

エステルに手を引かれてマオに短冊をもらったために階段を降りて行くヨシユア。

その表情は祭りの時とは真逆のとても満ち足りた輝く様な笑顔だった。

2010年 七夕記念LAS短編 一番星に憧れて

<第三新東京市 公園>

「何よシンジ、こんな所まで連れて来て」

「アスカに話したい事があってさ」

学校から二人がコンフォート17にある葛城家に帰宅してしばらく経った後。

シンジはアスカを散歩と言う名目で誘って外に出た。

アスカは終始面白くなさそうな顔でシンジの後ろを付いて行き、二人は公園にたどりついた。

ここはシンジとアスカにとって特別な場所だった。

二人は出会った直後は距離を置いていたのだが、使徒を倒すために協力しなければならなくなった時に、シンジがアスカに歩み寄ったのがこの公園。

それから度々シンジがアスカに大事な話をする時にはこの公園が定番となっていた。

シンジはしばらくの間黙り込んだままだった。

アスカの方もじっとシンジが話すまで待っている事にした。

時刻はちょうど夕暮れ時。

「アスカって、一番星が好きなんだよね？ 前にそう話してくれたじゃないか」

「そうね、夜空で一番最初に光る星 たいていは金星の事だけど」

アスカが返事をしてくれた事に安心したシンジはゆっくりと本題を切り出した。

「昨日のシンクロテストでさ、僕が一番になったりしてゴメン」
「何を謝っているのよ」

シンジの言葉を聞いたアスカの顔が険しいものになって行く。

「今度のシンクロテストは、アスカが一番になるようにするから」
「アタシをバカにしてるの！？ アタシはアンタのおこぼれで一番になったって、全然嬉しくないから！」

アスカは怒って思いつきりシンジのほおを叩いた。

シンジのほおに赤い手形が刻まれる。

ほおの痛さに崩れ落ちそうになるシンジに背を向けてアスカは公園を出て行くこうとする。

そのアスカの腕をシンジはつかんで必死に引き止めた。

「離さないよ！」

「離さない、だってこのままアスカに嫌われたらいやだから！」

アスカはシンジの肩を足蹴りにして腕をほどこうとするが、シンジの意志は固く、一筋縄ではいかなかった。

「痛い！」

「お願い、話を聞いてよ！」

いつもより強情なシンジの行動に、アスカの方が折れた。

「わかったわ、話を聞くから手を離さないよ……本当に痛いんだから」

「あ……ごめん」

アスカから手を離れたシンジは意を決して目をつぶりながら大声で叫ぶ。

「僕がシンクロテストを頑張るようになったのは……アスカを守りたいと思ったからなんだ！」

「バカシンジが、エースパイロットのアタシを守る？」

「僕はアスカの事……好きになってしまったから……」

「ふん、アンタもどうせアタシを外見で判断してるんでしょ、言い寄る男はみんなそう。やっぱりアタシは加持さんみたいない……」

そこまで言ったアスカは、優しくシンジに手を撫でられて言葉を止めた。

「アスカが加持さんを好きでもいい。でも、僕は気がついたんだ。

アスカがずいぶんと無理をしている事に」

「アタシは別に……」

「自分の弱い所を隠して見せないような……強がっている気がするんだよ」

アスカはシンジの言葉を聞いて下を向いて黙り込んでしまった。

「アスカは本当はもっとかわいい子じゃないのかなと思ったら、なんかこう……守りたい、好きだって気持ちが強くなってる」

「……それじゃあいつものアタシがかわいくないみたいじゃないの」

アスカはそう言ってシンジの手の甲を思いっきりつねった。

「アタシの事、かわいって言うてくれたのはシンジが初めてだから正直戸惑っているわ」

「突然、変な事を言ってゴメン」

「謝る事はないわ」

顔をあげてアスカは星空を眺めている。

シンジもアスカにならって同じように星空を眺めた。
すでに一番星以外の星もたくさん空に輝いている。

「やっぱり、たくさんの星が輝いているから星空って言うのよね」

「そうだね、一番星一個だけじゃ寂しいよね」

「アタシさ、ドイツではいつも他人に負けないようにしてた。だって、周りのみんなはアタシを見下すような態度を取っていたから」

「アスカは負けず嫌いだからね」

「好きで負けず嫌いになっただんじゃない！ アタシが一番になる事で対抗していたのよ。でもアタシが上に行けば行くほど、みんなの心は離れて行った」

そこまで話すと、アスカは自分をあざ笑うように天を仰いだ。

「当然よね、今度はアタシが見下す方になっていたんだもの。エヴァのパイロットとしても、シンジやファーストよりも自分が上だっと思っていた。最低よね」

「アスカ、どっちがエースパイロットだなんて関係無いと思うよ。あの分裂する使徒だって、二人で力を合わせて倒したんだからさ」

シンジの言葉を聞いて、アスカはゆっくりと頷いた。

「うん、アタシは別にもうエースパイロットじゃ無くてもいいのよ。シンジとファーストと一緒に使徒を倒せれば」

アスカがシンジに向かって微笑むと、シンジも安心して嬉しさに充ちあふれた笑顔になる。

「アタシもね、式号機がマグマの底に沈みそうになった時、シンジが助けてくれた事とか思いだしたの。あの時のお礼をあらためて言わせてもらっわ、ありがとう」

「ど、どういたしまして……」

アスカに見つめられたシンジは顔が真っ赤になった。

そんなシンジの顔を見て、アスカはからかうような表情になる。

「ま、一番の座を奪われた時は初号機をプログナイフで刺してやろうと思ったりしたけどね」

「それは怖いよ」

「でも、アタシはまだ加持さんを一番の男性だと思っているけどね」

「それでも構わないよ、僕がアスカを好きだって事に変わりはないし」

アスカはシンジの手をつかんでコンフォート17への帰り道を歩いて行く。

「あーあ、お腹がすいちゃったわ。早く家に帰って夕ご飯作ってよ……」
「……って何泣いているのよシンジ？」

「アスカに嫌われないで本当によかった……」

「情けないわね、そんな事でメソメソして……」

口ではそう言ってもアスカは嬉しそうな表情を浮かべて持っていたハンカチでシンジの涙をそっと拭いた。

その後コンフォート17に戻ったアスカとシンジは、一部始終をのぞいていたミサトとペンペンにからかわれ続けた。

僕は泳ぐのが苦手だった。

小さい頃から見えていた不思議な夢も原因なんだ。

目の前で誰かがおぼれて沈んで行くという夢を何回も見た。

「人間は浮くようにはできていないんだ」

体育の水泳の授業の時間はとても嫌で逃げてばかりいた。

先生も諦めてサジを投げるくらいだった。

無気力な毎日を送っていた僕の元に、ある日父さんから手紙が来た。父さんの元へ行った僕は、エヴァンゲリオンという巨大なロボットのパイロットにさせられてしまった。

僕が戦わないと人類が滅亡するって言われても良く分からなかった。ただ、流されるように僕はエヴァンゲリオンに乗り込んで使徒という怪物みたいなものと戦った。

いや、あれは戦いじゃなかった。

僕はただ痛い思いをしただけで、使徒は勝手に倒されていた。

こんな辛い思いをするなら逃げ出したいと思ったけど、おじさんのところへ戻ってもみじめな思いをするだけ。

でも、そんな沈んだ僕の心をつかみ上げてくれる、そんな人と会えた。

「シンちゃん、ちょっと散らかっているけど、我慢してね」

「これがちよつとですか……」

僕の上司の人で10歳以上年の離れたお姉さんみたいに接してくれる人。

ミサトさんは僕の本当のお姉さんになってくれたんだって思った……

…そう錯覚してしまった。

机の上に置かれた『サードチルドレン監督日誌』。

そこには僕のエヴァの操縦に係るデータが細かく書かれていた。ミサトさんは、僕をエヴァのパイロットとしか見ていない……。

こうなったらネルフの、いや、父さんの『駒』らしく散ってやろうと使徒と思いつきり戦った。

でも、僕は初めての使徒との戦いに勝ってしまった。

いくら周りのみんなに褒められても僕の心は浮き上がって来なかった。

……そして、僕は重たい心と体を本物の水の中に沈めてしまおうと、ミサトさんの家を飛び出した。

僕が向かったのは第三新東京市で一番景色の綺麗な湖と観光パンフレットに書かれていた芦ノ湖だった。

時刻はちょうど夕暮れだった。

水面が茜色に染まる幻想的な景色を見れるなんて来てよかったと思っ

った。
非常警戒が解除されてまだ数時間しか経っていないからなのか、遊覧船を含めて人の気配はしなかった。

僕もリニアレールの運転が再開した部分から、運休中のバスに乗らずにここまで長々と歩いて来た。

「さあ、あと少しだね……」

僕は自分に言い聞かせるようにそう呟くと、転落防止の柵を乗り越

えて、湖の中に向かって思いっきり飛び込んだ。

体は肩まで沈み込んだけど、僕はもがいて水面に顔を出している。

……どうして？

僕はおぼれて湖の底に沈むはずじゃなかったの？

それでもだんだん手足の力が抜けて行く。

そんな僕の耳に届いたのはヘリコプターの音と、誰かが飛び込む水の音だった。

「ミサトさん……！」

ミサトさんは真っ直ぐ僕のところに向かって泳いでくる。

僕はミサトさんに抱きかかえられて浮いているんだ……。

僕はネルフ本部に連れ戻されたけど、不思議と小言の一つも無くミサトさんの家へ戻る事になった。

自分に割り当てられた部屋の隅で僕はずっと座り込んでいた。

すると、そんなに時間も経たないうちにミサトさんが家に戻って来た。

ミサトさんは紅茶色の髪をした、外国人みたいな青い目をした女の子を連れて来ていた。

「シンジ君、紹介するわ。惣流・アスカ・ラングレー、あなたと同じエヴァンゲリオンのパイロットよ。レイが怪我をしているからドイツ支部から来てもらったの」

「よろしく」

「う、うん」

突然、同僚のパイロットを紹介されて僕は何だか分からなくなった。

「これから、シンジ君がバカな事をしないようにアスカに側にいてもらうから」

「ええっ、僕が、この子と一緒に？」

「そ、アスカの部屋はあつちだから」

「ダンケ、ミサト。アタシもホテル暮らしは嫌だったからさ」

僕の目の前で、ミサトさんとアスカの話はまとまって行く。

「あの惣流……さん？」

「何よ？」

「僕と同じ家でいいの？」

「アメリカではルームシェアリングぐらい当たり前よ」

アスカの態度に僕は拍子抜けしてしまった。

「じゃ、私はネルフに戻るから二人とも仲良くね」

ミサトさんはそう言い残して家を出て行ってしまった。

「アンタ、ミサトに甘えて迷惑を掛けるんじゃないわよ」

「僕がミサトさんに甘えてるって？」

「机の上に置きっぱなしにした芦ノ湖のパンフレット、それがアンタからミサトへのSOSじゃないの？」

アスカに指摘されて僕は気がついた。

僕は死にたいと言いなからミサトさんに助けを求めていたんだって。そしてミサトさんは差し伸べた僕の手を……引き上げてくれたんだ。

……沈んでいた僕の心が、浮き上がってくるのを僕は感じた。

またミサトさんの、さらにアス力を加えた3人の家族としての生活が再開した。

アス力は僕に料理や掃除、家事全般をやることを強制した。体を動かしていれば暗い事も考えなくなるって。

学校から帰ったら家事をしなくちゃいけなくなつた僕は、確かに落ち込む暇が無くなった。

「アス力って、僕にキツく当たるけど、ひょっとして僕の事嫌いなのかな？」

「別にそんなこと無いけどさ、アンタがバカシンジだからよ」

「そっか、別に嫌われているわけじゃないんだ……」

それでもアス力はいつも僕に対して厳しいとは思つた。

ハンバーグはもうちょっと火を通す焼き方をした方がいいとか、お風呂はぬるめにしろとか、下着はネットに入れて洗濯しろとか……。さらに僕が下を向いて歩きすぎだとか、同じ上着を何日も着るなどか、もつと大きな声で話せとか、たくさんご飯を食べるとかお節介なぐらいだった。

数日後、零号機とアス力のシンクロテストの最中にネルフの発令所に警報が鳴り響いた。

新しい使徒が出現してこちらに向かってくるんだって。

アス力は零号機とまだシンクロできないから、僕が初号機に乗って

出撃する事になった。

父さんは何も言わずに僕を戦場に送りだす。

でも、父さんの事が信じられなくても僕がここに居るためにはエヴァに乗るしかない。

あれ、何で僕はここ居たいって思うんだろう？

答えはわかっている。

ミサトさんとアスカと一緒に居たい気持ちが芽生えて来たから。

「エヴァンゲリオン初号機、発進！」

ミサトさんの号令で初号機が地上に向かって射出されて行くのがかかる。

地上に出た瞬間、ミサトさんから通信が入った。

「避けて！」

「えっ？」

僕はミサトさんの言葉の意味を考える間もないまま、視界一面が真っ白な光に包まれた。

熱い……ＬＣＬがまるで沸騰しているんじゃないかと思うぐらい体中がヒリヒリした。

そして、胸の辺りが苦しい……息が苦しい……まるでおぼれてしまったみたいだ……！

……僕の前で、また誰かがおぼれていると言っ夢を見た。

いや、おぼれているんじゃない、人がＬＣＬに溶けて行っているんだ。

エヴァに乗るようになった僕には解った。

じゃあ、僕の目の前で溶けているのは誰なんだろう？
夢が覚めて行く……。

「目が覚めた？」

「アスカ……」

目を開けると、そこにはアスカが立っていた。

部屋の中を見回すと、ここは病室。

ゆつたりとした服を着て、ベッドに寝かされていたのが分かった。

「アンタ、泣いているみたいだけど、どうしたの？」

「えっ？」

僕はアスカに言われて、目じりに涙がたまっている事に気がついた。

「何でだろう……」

「まあいいわ、ほら、おむすびを持ってきたから食べなさい！」

アスカが僕の前に差し出したおむすびは形がガタガタになっていて、器用なアスカが作ったものとは思えないほどだった。

「これって、もしかしてミサトさんが作ったの？」

ミサトさんが作った料理を食べたら命にかかわるから、確認のために聞いてみると、アスカは顔を赤らめてボソボソと話す。

「う、うるさいわね、アタシは日本に来て初めておむすびを知ったんだから仕方が無いじゃない！」

「ありがとう、でも僕はあんまり食欲が無いから……」

「そんなこと言うと、今夜の作戦中にお腹が空いて倒れちゃうわよ

！」

「えっ……エヴァは無事だったの？」

「数時間後に修理が終わるみたい。ミサトやリツコは大忙しよ」

「また、エヴァに乗らなくちゃいけないのか……」

僕は自分の体が震えてくるのを感じた。

本能的に死を悟ったあんな体験は二度としたくない。

「僕はもうエヴァには乗りたくない……」

「そんなこと言って、逃げちゃダメよ」

「アスカはあんな痛い目に合った事が無いからそんな事が言えるんだ！」

「バカシンジ、そんな甘い事言っな！ ミサトやリツコもアンタを信じて頑張ってるのよ！」

「もういい、放って置いてよ！」

僕はアスカを追い出すように、手を振りまわした。

でも、アスカはそんな僕の手をグツとつかんで僕に向かって呼びかけた。

「逃げちゃダメよ逃げちゃダメよ逃げちゃダメよ逃げちゃダメよ逃げちゃダメよ！」

「どうして、アスカは僕を見捨てないんだよ！ 父さんみたいに！」

僕がヤケクソ気味にそう叫ぶと、アスカは落ち着いた暗い声でポツリと呟いた。

「……それは、アンタがアタシにそっくりだから」

「えっ？」

「おむすび、食べなさいよ」

アスカはそう言って僕の病室を出て行った。

僕はアスカの作ってくれたおむすびを食べないわけにはいかなかった。

お茶が無くて食べにくいと思ったけど、そんなことは無かった。

僕の目と鼻から水が止めどなくあふれて来たから。

「はは、味が良く分らないや……」

僕はそう言いながらアスカの作ってくれたおむすびを食べ続けた。

作戦のため招集された時間になる前に、僕はプラグスーツを着てミサトさんとアスカが待つブリーフィングルームに顔を出した。

「シンジ君、やってくれるのね」

「アンタ、吹っ切れたの？」

ミサトさんとアスカに向かって僕は無言で強くうなずいた。

「アスカ、おむすびありがとう」

「ど、どういたしまして」

僕はこんなふうにお礼を言ったのは生まれて初めてかもしれない。アスカは照れ臭そうに顔を少し赤くしてそっぽを向いていた。

「それではこれから『ヤシマ作戦』の内容を説明するわ」

ミサトさんがきりつとした顔になって、作戦の内容を僕達に説明

する。

長距離・大出量のライフルを使って強力なレーザーを撃って使徒を倒す事。

シンクロ率の高い僕が射手を担当して、アスカは使徒が攻撃してきた時のために盾を持って防ぐ事。

「もし僕が外したらどうなるんですか？」

「その時は急いで2発目を撃つしかないわね。でも、ライフルの再充填には20秒近くかかるのよ」

「さつき、盾は17秒しか使徒の攻撃に耐えられないって……！それじゃあ、アスカが！」

僕がそう言ってアスカの方を見つめると、アスカは落ち着いた様子だった。

「大丈夫、アタシはシンジを信頼しているから」

そして僕達は作戦開始時刻になるまで、二人きりでパイロット控室で待つことになった。

お互いに座り込んで黙ったままだった。

アスカも緊張しているんだって僕にも分かった。部屋の空気が張り詰めている。

でも、僕はアスカに声を掛けずにはいらなかった。

「アスカは何でエヴァに乗るの？」

「負けたくないからよ」

「何に？」

「アタシがエヴァから降りたら、きっと何もすることが無くなっちゃう。そしていつもウジウジと悩んでいるんだわ」

「僕もここに来る前はそうだった、いや、最近までそうだったと思

う」

アスカは強い子じゃなかったんだ。
必死に暗い思考の海に沈んでしまわないように、浮きあがろうと必死にもがいているだけなんだ。
僕はそう思った。

「時間ね、アタシ先に行くわ」

アスカは僕より早く出口のところに立って、そして振り向いた。

「アンタはアタシが守るから」

バイバイ、と軽く呟いてアスカの後ろ姿は消えて行った。
まるで最期の別れみたいで僕はとても嫌だった。

「シンジ君、私達のエネルギー、あなたに預けるわ」

ミサトさんは戦略自衛隊や日本中の企業・研究所、そして国連の軍隊が持っていた電気や電池を集めてライフルのエネルギー源にしたんだって。

でも、1発目を外したら、2発目は……日本中を停電させてでも電気を集めないといけない……いや、それもあるけど僕はアスカが心配だった。

「電圧上昇中！」

「冷却システム作動します！」

エヴァに乗っている僕の耳に発令所に居るネルフの大人達の慌たらしい声が聞こえる。

「最終安全装置解除！」

「撃つて、シンジ君！」

ミサトさんの合図を聞いて、僕はライフルの引き金を絞った！
ライフルから撃たれたレーザーは使徒に向かって命中した！
だけど、信じられない事に使徒は倒せなかったんだ。

「ATフィールドを貫通して使徒にダメージを与える事はできませんが、倒すには至らなかったようです！」

「シンジ君、第2射急いで！」

通信の向こう側の発令所が動揺しているのが分かる。
僕達に気がついた使徒がこちらに近づいて来るのが見えた！
そして使徒からレーザー攻撃が打ち出され、僕は思わず目を瞑ってしまった！

「うわああああ！」

でも、僕が覚悟していた熱線はやって来なかった。

僕を守るようにアスカの乗る零号機が盾を持って攻撃を防いでいる！

「アスカ、アスカー！」

僕の目の前でアスカの持つ盾が溶けて行く。

「早く、早く！」

「後5秒！」

発令所から聞こえる声に僕はショックを受けた。

このままじゃ、アスカが持たない！

「きゃあああああ！」

ついに盾が溶けてしまい、アスカの悲鳴が僕にも伝わってくる！

「アスカあ！」

「今よ！」

僕が撃ったレーザーは使徒を撃ち抜き、使徒は今度こそ倒れたみたいだった。

そして崩れ落ちる零号機。

初号機で僕は零号機のエントリープラグを引き抜き、アスカを助けるように自分も初号機を降りて向かう。

でも、自分一人の力では零号機のエントリープラグのハッチは簡単には開けなかった。

「こんのおおお！」

それでも僕は普段では考えられない力を出して、何とかハッチを開く事が出来た。

「アスカ！」

「う……シンジ？」

僕が呼びかけると、エントリープラグの中に居たアスカはゆっくりと目を開いた。

「よかった、無事で。……また会えてよかった」

僕は一人で立ち上がる事が出来ないアスカに肩を貸して抱え上げながら歩き出した。

「出発前にバイバイなんて悲しい事言わないでよ」

僕はそう言ってアスカの肩をつかむ手に力を入れる。

「今の僕達にはエヴァに乗る以外何も無いかもしれないけど……いつか自分のしたい何かが見つかると思うんだ」

アスカは黙ってうつむいたままだ。

「それに……アスカがエヴァのパイロットを辞めても、僕もミサトさんと一緒にアスカの側に居るよ。その僕達……家族だろう?」

「……ありがとうシンジ、でもアタシがパイロットを辞めても、アタシがパイロットを辞めても、2人ともパイロットを辞めても一緒には居られない」

僕がアスカの言葉に戸惑っていると、アスカの方から僕に囁きかけて来た。

「だから、2人でパイロットを続けるのが良いと思うのよ」

アスカの言葉に答えるように、僕はアスカの肩を握る手に力を入れた。

それから僕とアスカは2人でいろいろな場所に出かけるようになった。

僕にとって嫌な場所だった芦ノ湖で遊覧船に乗ったり、ネルフのプールを貸し切りにしてもらったり……。

今まで僕はプールが嫌いでした。仕方無かったけど、アスカに泳ぎを教えてもらう事になった。

始めは基本のバタ足から、アスカに手を引いてもらって僕は泳ぐ事が出来た。

「シンジったら、アタシのおっぱいばかり見ていやらしい」

「だって……その、目の前にあるから……」

「シンジが泳げるようになったら、アタシのおっぱいを生で見せてもいいわよ」

そんな事を言われて、僕は気が動転してしまった。

慌てふためく僕を見て、アスカは大笑い。

僕はそれから泳げるように一生懸命努力した。

……決して、アスカの胸を見たいわけじゃない。

なんで、僕は自分に言い訳しているんだろう。

「シンジ、見て見て！ スーパージャイアントストロングエントリ
ー！」

火山の火口付近に使徒の幼生が見つかった。

アスカの乗る式号機が溶岩の中に潜って使徒を捕獲する事になった。

「あーあ、早く終わらせてシャワー浴びたい」

アスカは軽い調子だけど、僕は胸がざわめくを感じていた。そして、僕の嫌な予感は的中した。

「な、何よこれー!」

「使徒が羽化を始めたんだわ!」

「使徒捕獲作戦を中止、使徒殲滅作戦に切り替えるわよアスカ!」
「了解!」

アスカは溶岩の中で使徒と戦う事になってしまった。
使徒の外皮は相当堅いのか、プログナイフでは歯が立たないで居た。
そんな時、ミサトさんからの通信が聞こえた。

「アスカ、熱膨張よ!」

「冷却水を全て1番のパイプに回して!」

「はい、先輩!」

アスカはミサトさんの指示通り使徒の口に冷却パイプを突っ込んで使徒をプログナイフで引き裂いた!

「パターン青、消滅しました!」

「ナイス、アスカ!」

ミサトさん達の歓声が僕の耳にも届いて来た。
でも、僕の目の前でもんでもない事が起こった。
式号機を引き上げていたパイプが音を立てて一気に引きちぎれたんだ。

「アスカ！」

僕はそう叫んで、沈んで行く式号機を助けようと、溶岩の中に顔をつけて飛び込んで行った。

そして奇跡的に式号機の腕をつかんで引きあげる事が出来た。

アスカを助けられてホッとした僕は、急に目まいがしてそのまま気を失った。

「目が覚めた？」

気が付くと、僕は浴衣を着たアスカにひざ枕をしてもらっていた。

ここはどこかの旅館の部屋のようにだった。

僕は畳の上で寝ていた。

「アンタが溶岩の中に飛び込んだ時、凄い力のＡＴフィールドが発生して熱を防いだらしいわ。それでアンタは精神力を使い果たして気を失ったみたい」

「そうだったんだ……」

僕がそう呟くと、アスカは突然僕の頭を両手でグリグリとし始めた。

「このバカシンジ！ 2人とも溶岩の底に沈んじやうところだったのよ！」

「ごめん、体が勝手に動いちゃって……」

「ううん、謝る事無いわ。……アタシ、自分の体が沈んで行くのを感じて、死んじやうのかと思った。でも、急に体が浮き上がるのを感じて……シンジが腕をつかみ上げてくれたのが分かって……嬉しかった」

アスカの声が涙混じりになるのを聞いて、僕は起き上がってアスカの顔を見つめた。

目を潤ませて僕を見上げるアスカの顔はとても可愛かったんだ。

「お礼にアタシのおっぱいを見せてあげるね。温泉で温まったから大きくなったと思うんだ……」

そう言っアスカは浴衣を脱ごうとする。

僕は唾を飲んでのどを鳴らしてアスカを見つめていた。

「なんてね、嘘よ」

アスカはしっかりとノースリーブの洋服を着ていた。

僕はホツとしたような、がっかりしたような気持ちになってため息をついた。

「アハハ、本気にした？ 残念賞を上げるから元気出なさいよ」

そう言っアスカは僕に顔を近づけて、軽くほっぺたにキスをした。

……アスカが、僕にキス？

こんなかわいい子にキスをしてもらえるなんて！

この時僕の心は空へと舞い上がるような、そんな気持ちになった。

「シンジったら、浮かれすぎよ」

僕はよっぱどだらしのない顔をしていたんだろう、アスカにそう言われてしまった。

次の日から僕は学校でも前を向いて、クラスのみんなにも元氣にあいさつをするようになった。

今まで僕は下ばかり向いて自分の人生をつまらないものだと思い込んでいたんだ。

それから僕はアスカと協力して次々と使徒を倒して行っただ。

そして、白黒の縞模様の球体が空に浮かんでいるような姿の使徒がやって来た。

この時の僕は自信に充ちあふれていた。

間違いの元はそれだったのかもしれない。

「僕が突撃して反応を見ます！」

すっかりナイト気取りになった僕は、アスカに危険な目に遭わせたくないと言う気持ちが強くなっていた。

「ちょっとシンジ君？ アスカの弐号機が追いつくのを待ちなさい！」

僕はミサトさんの命令を無視して使徒に向かって突き進んだ。

すると、足元が沈み込んで行く感じがした。

空に浮かんでいる球体の影だと思ったのは、真っ暗な底なし沼のようなものだったんだ。

「シンジ！」

アスカの乗る弐号機が全力で僕の所に近づいて来る！

でも、黒い影はすでに僕の足元の周りの広い範囲に広がっていた。とても引きあげられる距離じゃない。

「来ないで、アスカまで巻き込まれる！」
「でも……」

そう言っている間に初号機の機体はどんどん沈んで行く。

「シンジ、行かないで！ ママのようにアタシを置いて行かないで！ アタシを一人にしないで！」

最後にアスカの叫び声を聞いた気がした。
そして、僕の視界は黒く染まって行った……。

「……ねえ君、起きなよ」

気が付くと、僕は電車のような場所に居た。
座席に座っている僕の前に僕そっくりの人影が立って僕を見下ろしていた。

「君は誰？」

「君は僕さ、もう一人の碇シンジ」

僕は夢でも見ているような気分になった。

「人は何人も的人格を持っているんだよ、そのうちの一人が僕さ」

多重人格と言う話は聞いた事がある。

でも他の人格と話したなんて聞いた事が無い。

「僕は君の本当の気持ちを知っているんだよ」

僕の目の前に居るもう一人の僕はとても暗くて冷たい目をしていた。

「世の中に僕の居場所なんて無い、生きていても辛いだけ。交通事故なんかに巻き込まれて死んでしまっても構わないと思っている」

「違う、僕はもうそんな事を思っていない！」

「それは君が辛いことから目を反らして、幸せな事を数珠のように紡いで生きているからだよ」

「生きていれば嫌なこともあるよ。……でも生きててよかったって思う時もきつとあるって信じているんだ」

僕がキツパリとそう言い返すと、目の前に居たもう一人の僕の目が赤く光り出した。

「僕を受け入れたら楽に死ねたのにね。残念だよ」

騙されるところだった。

こいつはもう一人の僕なんかじゃない！
得体のしれない怪物だ！

赤い目をした僕そっくりの人影は僕を床に押し倒すとのしかかって僕の首を絞めて来た！

「死にたくない……！」

僕はかすれた声でそう呟くと、突然僕の首を絞める腕の力が緩んだ。起き上がった僕は思いっきり咳き込んだ。

「きもちわるい……」

気が付くと、僕はエントリープラグの中に居た。

まるで霧が晴れたかのように幻の風景が消えていた。

そして、エヴァが何かを握りつぶしているのが分かった。

……多分、使徒のコアだ。

僕は今までの使徒戦の経験からそう確信した。

でも、使徒を倒したのにこの真っ黒な世界は消えていなかった。
ＬＣＬが濁って来ていて息苦しい。

生命維持装置が危険域を指して、アラームを発していた。

「このまま、おぼれるみたいに死んじゃうのかな……」

僕はそう呟いて、絶対に嫌だと思った。

生きて帰って、またアスカに会いたい。

アスカも、一人は嫌だって泣いていた。

僕は浮きあがろうと必死に泳いだ。

アスカに習い始めたばかりだけど、一生懸命思い出した。

でも、僕はそのうち力が尽きて行くのが分かった。

「アスカ、もう疲れたよ……」

そう言っ僕が諦めかけた時、僕は誰かに抱きしめられているのを感じた。

エヴァの中から出て来た誰か。

僕の目にはシルエットのようなものしか見えなかったけど、僕には母さんだと分かった。

……そして思い出した。

小さい頃の僕の目の前でＬＣＬに溶けて消えてしまったのは母さんだって。

母さんが動かしているエヴァはどんどん水面に向かって浮上していくのが分かる。

よかった、母さんまでカナヅチじゃなくて。

「ありがとう、母さん」

地上に戻ってまた気を失ってしまっていた僕は、アスカに抱きつかれているのが分かった。

「アスカ……？」

「シンジ……！」

アスカは泣き笑いのような顔で、さらに僕にきつく抱きついて、ほおを押し付けて来た。

ほっぺたと胸のあたりに柔らかくてくすぐったい感触。

抱きしめられるってこんなに気持ち良い事だったんだ……。

僕はしばらくアスカに抱きしめられるままで居た。

「アスカ、嬉しいのはわかるけど中学生に許されるのはキスまでだからね」

ミサトさんにそう言われたアスカは真っ赤な顔をして僕から体を離れた。

抱きしめられて気持ちよかったのに、残念。

「シンちゃんも、アスカに手を出しちゃダメよ」

「はい、でももう一度アスカを抱きしめちゃダメですか？」

「いいけど、胸に顔をうずめたりしちゃうのはまだ早いわよ」

「そんなことしません！」

僕はニヤケ顔のミサトさんにそう言って、アスカを手招きして正面から抱き寄せた。

今度は抱きしめられるんじゃないくて、僕の方から抱きしめる側だった。

おそろおそろアスカの腰に手を回すと、アスカは嫌がらずに受けていてくれてホッとした。

「ねえシンジ、キスしたいの……」

ミサトさんの家に戻って二人きりになった僕にアスカはそう言って来た。

「アスカ、どうしたの突然？」

「シンジはアタシとするのは嫌なの？」

「そうじゃないけど……慌てている感じがしてさ」

「そうね、ムードってものも必要よね」

僕はアスカが何かに追われているかのようにキスをしようと言いだしたのが気になっていた。

まるで、別れの時が迫っているみたいだった。

そんなのは僕は嫌だった。

これからもずっとアスカと居るんだから。

「じゃあ、使徒を全て倒し終わったらキスしようか？」

僕の提案にアスカは頷いてくれた。

「アタシ、最後の使徒を倒したその日にシンジとキスするんだ……」

アスカは顔を赤らめて自分に言い聞かせるようにそう呟いていた。僕はなぜキスを先延ばしにしまったのかと、ちよつと後悔していた。

でも、やっぱりムードって言うものも大切だし……。幸せいっぱいだと思っっている自分の心の隅に、黒いもやがかかっているような気がした。

「ミサトさん、もしかして初号機の中には母さんが居るんですか？」

僕がミサトさんにそう尋ねると、ミサトさんは驚いた顔をした。

「何でシンジ君がその事を……！」

ミサトさんの顔色は真つ青になった。

「僕は思い出したんです、小さい頃の記憶を。……僕は見ていたんです、実験で母さんがLCLに溶けてしまう瞬間を」

「……ごめんね、シンジ君」

「何でミサトさんが謝るんですか？」

「シンジ君とアスカのお母さんが居なくなる原因を作ったのは、私の父だから……」

ミサトさんは僕にミサトさんのお父さんが提唱した”E計画”と言うものを話し出した。

専門的な話を話されても僕にはよく分からなかった。僕が印象に残ったのはアスカのお母さんが魂だけ式号機に捕らわれてしまって、アスカのお母さんは気がふれたようになってしまったと言う話だった。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

僕の目の前で泣きじゃくるミサトさんは、突然発生したクレバスに落ちてしまったかのようにだった。

前に僕はミサトさんに助けられた、今度は僕がミサトさんを助ける番だ。

「ミサトさんは悪くないですよ」

僕はミサトさんに元気を取り戻してもらえるように笑顔で話しかけた……。

ミサトさんの話によると、アスカは弐号機に自分のお母さんの魂が宿っていると言う事に気が付いていないようだった。

僕はアスカは一人じゃない、お母さんが見守っていると言う事を教えてあげたかった。

でもそれはアスカに昔の辛い思い出を思い出させる事になってしまった。

僕とミサトさんはアスカにいつか伝えるべきだとは思ってたけど、どのように打ち明けたらいいか悩んでいた。

そんな日々を送りながら何体か使徒を倒した後、鳥のような使徒が襲来した。

今度は『ヤシマ作戦』とは逆に、アスカが射手で僕が防御を担当する事になった。

前に倒した使徒のようにレーザーで攻撃してくるものばかり僕達は思っていた。

でも、そうじゃなかったんだ。

使徒の放ったレーザー光線は大きく曲がりくねって僕の初号機を飛び越えて、後ろにいるアスカの弐号機に突き刺さった。

「きゃああああ！」

「貳号機パイロットの精神グラフが大きく乱れています！」

アスカの悲鳴と発令所のみんなが慌てている様子が聞こえてくる。僕は使徒の光線を受け止めようと使徒と貳号機の間割って入るけど、光線は蛇のように曲がりくねって僕を交わして通り過ぎる。

「ママ、行かないで！ アタシを置いて行かないで！」

混乱している様子のアスカの悲鳴を聞いて、僕はショックを受けた。この前僕が戦った使徒みたいに、人の心に攻撃するタイプなのか！

「アスカ、落ち着いて！」

いくら呼びかけてもアスカに僕の声は届いていない。

「フッフ、アハハハハ……」

アスカの様子がだんだんおかしくなってきた。

僕は早く使徒を倒さないといけないと思って焦っていた。

「シンジ君、まだポジトロニライフルのエネルギーは貯まっていな
いわ、あと10秒待ちなさい！」

僕はそんなミサトさんの言葉を全然聞いていなかった。

持っていた盾を投げ出して、貳号機の代わりにライフルの引き金を絞る。

エネルギー不十分で発射されたこちらの攻撃は、使徒のATフィールドに阻まれてしまった。

「だめです、効いていません!」

「うわあああ!」

僕はヤケになって何回も引き金を引いてしまった。

「シンジ君が落ち着かなくてどうするの!」

ミサトさんの制止を振り切ってさらに何回も引き金を引いたけど、こちらのライフルからは何も出なかった。

「はあ、はあ……」

辺りが静かになって、僕はやっと自分が何をしたのか気がついた。

「ミサトさん、アス力は?」

「……笑いが止まってから何の反応も無いの」
「そんな!」

式号機の映像確認すると、アス力はぐったりとした様子でうなだれていた。

「ライフル、エネルギー再充填開始!」

「発射準備完了まで後30秒!」

それからの30秒は僕にとってとても長くきついものに感じられた。

「撃って、シンジ君!」

ミサトさんの号令と共に僕はライフルの引き金を絞ると、フルパワ

ーのレーザーが使徒に向かって飛んでいく。

それは前と同じようにA Tフィールドごと使徒のコアを貫いて、使徒は殲滅された。

使徒から式号機に向かって発せされていた光線も止む。

使徒との戦いが終わった後、アスカは303号室に運び込まれた。

アスカの体には全く怪我は無かった。

それでもアスカは眠ったままだった。

アスカの目は開いている、でもその青い目は何も見ていない。

アスカの心は、暗い海の底に沈んだまま、浮き上がって来ないんだ。完全な精神崩壊を起こしていると、ネルフのお医者さん達はサジを投げた。

最後の使徒を倒したから、問題は無いと言っていたけど……。

僕はアスカを助ける事を諦めることなんてできなかった。

今度は僕がアスカの手を引いてあげるよ。

だって、僕は一人で泳げるようになったんだから。

僕はアスカの手を思いつき握りしめた。

それでも、アスカからの反応は無かった。

「どうしたら、アスカの目を覚ます事が出来るんだろう」

僕は必死にその方法を考えた。

アスカは、きつとおぼれてしまっている状態なんだ……。

そんな相手に対してする事と言えば……！

僕は寝ているアスカの口に向かって思いつきキスをした。

……そして、アスカの青い瞳が動いて、僕の事を見つめた。

「約束、叶える事が出来たのね」
「うん」

僕はアスカの言葉に短くそう返事をして、アスカを抱き上げた。

2010年 夏祭り記念LAS短編 風鈴、火山

本作品は、TV版本編第九話「瞬間、心、重ねて」と第十話「マグマダイバー」の隙間のエピソードに当たる話です。

使徒迎撃専用要塞都市である第三新東京市の中心部は、ネルフ本部の施設やエヴァンゲリオンの射出口、兵装ビルなどが建てられて無機質な印象を与えている。

しかし、中心部を取り囲む旧市街地は温泉街である箱根の情緒を色濃く残して居た。

第3使徒サキエルの出現により、街を出て疎開していく市民達で街の建物の半分は空き家となってしまったが、逆にネルフの仕事の關係で移り住んで来るものも多かった。

江戸時代から異なる地域から集まった人々を結束させるために行われる行事、それはお祭り。

ネルフも市民との交流を重視して、夏祭りには多額の援助金を出して、シンジ達エヴァンゲリオンパイロットの3人も祭りに出席する事は義務とされた。

「アタシ達って、ネルフの広告塔にされているみたいじゃないの」

浴衣を着せられ、下駄を履かされたアス力は落ち着かない様子でそうぼやいた。

髪は束ねられて、ポニーテールになっている。

「まあまあ、使徒と戦うだけが仕事じゃないってことよ」

ミサトは見事に紫色の浴衣を着こなして、清楚な魅力を醸し出している。

長い黒髪に和風の浴衣が似合っていた。

「家でのだらしないミサトからが想像できませんね」

「ビールの飲み過ぎで出っ張ったお腹を隠すのにとても好都合な服装」

「2人とも皮肉を言う程に心を開いてくれて、お姉さん嬉しいわ……」

一緒に歩くシンジとレイの言葉に、ミサトは笑顔を多少引きつらせていた。

「うつさいわね、私も出る所は出ているのよ、帯で胸が抑えつけられて苦しいんだから」

「そんなの、アタシだって同じよ」

「セカンドは違う。……パットを胸に入れて碇君を挑発しているだけ」

「えっ、そうだったの!？」

レイに指摘されたアスカは怒りの矛先をシンジへと向ける。

「アンタ、何をガツカリしているのよ! スケベシンジ!」

「いつも挑発しているのはアスカじゃないか」

「はいはい、ケンカしないの。市民サービス何だから、スマイルスマイル」

にぎやかな人々の声。

神社の境内に並ぶ夜店の数々。

楽しそうに遊ぶ子供達や手を繋いで歩く恋人達の合い間を縫うよう

にミサトと3人のチルドレンは歩いて行く。

「あーあ、みんな楽しそうにしているのにつまんない」

「交流の盆踊り大会の後、自由時間にしてあげるから文句を言わないの」

アスカは祭り会場に入ってから不機嫌そうな表情をしていた。

その原因を作っていたのは、シンジだった。

「バカシンジのやつ、アタシの浴衣姿を見て一言も言わないんだから」

シンジが「浴衣が似合っている」とか「かわいい」とか言えばいくらかアスカの表情は和らいだものになったのかもしれないが、シンジは鈍感だったし、アスカも素直では無かった。

「あ、そうだ綾波、その……青い浴衣が似合っていると思うよ」

「そう」

思い出したように言ったシンジの言葉に、レイはそっけなく答えた。

「な、なんでファーストのやつをいきなりほめるのよ!」

アスカはそう言って自分の大きなリボンで縛ってポニーテールにした髪を苛立って思いつきり引っ張りながら歯ぎしりをした。

「あちゃあ、シンジ君がそこまで鈍感だったとは、私も予想外だったわ……」

見かねたミサトは、シンジを呼び寄せて耳打ちする。

「いきなり何でレイの事をほめたの？」

「リツコさんに綾波を褒めてと言われたのを思い出したからです」

「……はあ、シンジ君はどこまで鈍いのかなあ、アスカの事も考えなさいよ」

「あつ」

あきれた顔のミサトに言われて、シンジははじめてその事に気がついたようだ。

「じゃあ、今から急いでアスカの事を褒めに行きます！」

「待ちなさい、そんなガチガチに緊張しながら言っても、アスカはますます怒っちゃうわよ。だから私も前もってシンジ君に頼むのを止めておいたのに」

「どうしよう、ミサトさん」

「こうなったら、怒りが過ぎ去るのを待つしかないわね」

アスカは顔から湯気が出ているのではないかと思うぐらい真っ赤な顔をして怒っていた。

「アスカ、これから盆踊りで市民の皆さんの前で踊るんだからそんな鬼みたいな顔してないの」

「別に、怒ってなんか無いわよ！」

その後アスカは営業スマイルを浮かべて、盆踊りをこなして行っただが、シンジを見つめるアスカの目は全然笑って居なかった。

シンジはビクビクしながらアスカの方にチラチラと視線を送っていた。

「お疲れさま、じゃあ自由時間にしていいわよ」

ミサトがそう言うと、アスカは弾かれたように駆け出そうとする。しかし、そんなアスカの腕をシンジは捕まえる事が出来た。

アスカが慣れない浴衣や下駄を履いて、動きが遅かったと言つのも幸運だったのかもしれない。

「ちょっと、いきなり何をアタシの腕をつかんでいるのよ！」

「あ、ごめん」

アスカに怒鳴られてシンジは慌てて手を離れた。

そして立ち去ろうとしたアスカの手を、またシンジはつかもつとする。

「あつ……」

「いったい、何なのよ！ はっきり言いなさいよ！」

アスカの苛立ちは頂点に達している。

シンジは勇気を振り絞ってアスカに向かって顔を真っ赤にして叫ぶ。

「僕、アスカと仲直りしたいんだ！」

「ハア？」

「で、でも僕、どうやったらアスカが機嫌を直してくれるか分からなくて」

「そんなの自分で考えなさいよ」

アスカはあきれたような顔でため息をついた。

「そうね……じゃあ今日は全部シンジのおごりなら考えてあげてもいいわ」

とりあえず、許してもらえそうな様子にシンジはホッと胸をなで下ろす。

「じゃあ、綾波も誘って……」

シンジがそう言うと、アスカの目つきが厳しくなったのを見てシンジは慌てて言葉を止める。

そんなシンジの反応を見て、アスカも自分が大人げないと思ったのか、不本意だがレイと一緒に祭りを回る事を提案する。

「仕方ないわね、じゃあファーストのやつも一緒に……」

と言ったアスカとシンジが辺りを見回すと、レイはすでに側には居なかった。

「あ、あんな所に……」

「ファーストって相変わらず何を考えているのか分からないわね」

遠く離れた場所にあるお面を売っている店で、レイはウル　ラマンと　面ライダーの両方を手にとって悩んでいた。

付き合わされているミサトは退屈そうに欠伸をしている。

「僕達もあそこに行こうか？」

「いいんじゃないの、ファーストは自分の世界に入っちゃっているみたいだし」

「ヒカリ達もきつと来ていると思うから、夜店を回りながら探しましょ」

「もしかして、委員長やトウジやケンスケの分まで僕がおごるの？」

「当たり前じゃない、アタシに許してもらいたいんでしょう？」

「うん……それはそうだけど……」

予想外の出費にシンジは顔が青くなった。

「とりあえず、お腹が空いたから何か食べたいわね……あそこのお店からいい匂いがする」

アスカはそう言って焼きそば屋を指差した。

「うん、焼きそばを売っているんだね」

「日本のお祭りには他にどんなお店があるの？」

そうアスカに尋ねられると、シンジは困った顔で首を横に振った。

「僕はお祭りのお店とか、分からないんだ」

「だって、アンタは日本にずっと住んでいたんじゃないの？」

「……1人でお祭りに行ってもつまらないと思ったから」

シンジの憂鬱そうな表情を見て、アスカはマズイ事を言ってしまったと思った。

「とりあえず、焼きそば屋に行くわよ。グズグズしてないでついて来なさい！」

「う、うん」

アスカは落ち込みそうになったシンジに対して強引に声を掛けた。

「焼きそば1つ下さい」

「はいよ」

「アタシにも1つ」

後ろから顔を出して声を屋台の主人に注文したアスカにシンジは驚いた。

アスカは自分の財布からお金を出して焼きそばを買った。

「どうして、やっぱり僕におごってもらうのが嫌になったの？」

不安そうな顔をするシンジに、アスカはあきれた感じでため息をついた。

「シンジってどうして物事をそうネガティブに考えるのよ。シンジだってお祭りは初めてなんでしょう？ それなら焼きそばの味を体験するべきよ」

「そ、そう言われてみればそうだね」

アスカとシンジは黙々と焼きそばを平らげた後、たこ焼き屋に向かった。

そしてたこ焼きを2人前買って頼張る。

「アスカって優しいんだね」

突然、シンジにそんな事を言われたアスカはたこ焼きをのどに詰まらせてしまった。

「な、何を突然言い出すのよ」

「だって僕の事をさっきから落ち込まないように気遣ってくれし……」

「それは、アンタがネチネチしている顔を見るとイライラするからよー！」

「そ、そうだったんだ……」

アスカはシンジに言い返してしまった後に少しだけ後悔した。

しかし、シンジの内罰的なところにイラついていたのも本当だった。

「じゃあ、お詫びに綿あめをおごるよ」

シンジは慌てた様子でアスカから離れて綿あめを買いに行った。

「それにしても、ヒカリ達はどこに居るのよ」

アスカはそう言って夜店でにぎわう境内を見渡してもヒカリ達は見つからない。

「お待たせアスカ、キョロキョロしてどうしたの？」

「ねえ、ヒカリ達はここに来ているのよね？」

「うん、トウジ達は毎年お祭りに来ているって言ったけど……」

シンジはそう言ってアスカに綿あめを渡す。

「何で1つしか買って来なかったのよ？」

「だって、僕は甘いのは苦手だし……」

「食わず嫌いはダメよ、アンタも少しは食べなさい」

「う、うん……」

シンジは顔を真っ赤にして密着しそうなぐらいアスカと顔を近づける。

こうしてシンジとアスカは1本の綿あめを食べ合う事になったのだが……。

そんな2人の姿を夜店の影に隠れて見ていたのは、ヒカリ・トウジ・ケンスケの3人だった。

「まるで、カップルやないか」

「アスカったら大胆……」

ヒカリは顔を赤くしてアスカとシンジの姿を見つめている。

「……2人を邪魔しちゃ悪いだろうしな、行こうぜ」

「そやな」

3人はアスカとシンジに声を掛けずに離れて行った。

「ああ、おいしかった。日本のお祭りの食べ物っておいしいものが多いわね」

アスカはそう言って満ち足りた笑顔になった。

「よかった、僕もアスカが笑っている顔を見るのが好きだから」

穏やかな笑顔を浮かべるシンジにそう言われて、アスカは胸がドキツとした。

「どうしたの？」

「アンタ、今何を言ったのか分かってるの？」

「えっ……僕はアスカが好きだって……し、しまったあ！」

ドツボにハマってあたふたするシンジに、アスカの方まで落ち着かない気持ちになってしまった。

2人とも気まずい様子で顔を思わず背ける。

「じゃ、じゃあ、あの店に行ってみようか！ 楽しそうだし！」

と言ってシンジが指差したのは風鈴を売っている店だった。

風に揺られて涼しげな音色が辺りに鳴り響いている。

体中が火照った気がして、涼みたい気持ちだったアスカはシンジの提案に乗った。

「へえ、面白い音が出る鈴ね」

「これは風鈴って言うんだよ」

アスカは風鈴を1つ1つ手にとって興味深く見ている。

そして、赤い金魚の絵が描かれたガラスの風鈴が気に入ったようだ。

「アスカ、それが気に入ったの？」

「うん、面白いガラスの色をしているし」

「じゃあ、買ってあげるよ」

シンジはそう言って財布を取り出す。

「2、880円!？」

シンジは一番目立つところに飾られていたガラスの風鈴が1、200円だったのにと驚いた。

普通のガラスとは違う琉球ガラスを使った風鈴なので値段が倍以上すると言った話だった。

「アタシ、別に他のも……」

「買います!」

そう言って千円札3枚を風鈴屋の主人に突き付けたシンジは、風鈴屋の主人に男らしいと絶賛された。

「まったく、勝手に決めちゃうんだから」

「え、他にもっと欲しいのがあったの？」

「そう言うわけじゃないけど……ありがと、大切にするわよ」

ぶつきらぼうながらもアスカにお礼を言われて、シンジは照れ臭そうだった。

「間もなく、花火大会を始めます」

アナウンスの音が響き渡ると、祭りに来ていた人々は移動を始めた。境内の道が混雑し始める。

「アスカは、花火は見た事あるの？」

「ううん、ドイツに居た頃はネルフで訓練ばかりだったから。シンジは？」

「僕も誰かと一緒に見るのは初めてかな」

「そんな暗い顔しないの。一緒に楽しみましようよ」

アスカとシンジがそう言って花火の良く見える場所に移動しようとした時、2人の前方で悲鳴が上がった。

なんと包丁を持った男が、アスカを目掛けて突っ込んでくる！

「アスカ、逃げて！」

アスカは今日は浴衣を着ているため、身動きがとりづらい。履きなれない下駄を履いて居て、上手く走れなかった。

「きゃあっ！」

アスカは声を上げて転んでしまった。

手に持っていた風鈴は地面に落ちて割れてしまった。

そんなアスカの間近まで、凶器を持った男が迫っていた！

アスカは自分が刺されるのを覚悟して思わず目を閉じた。

しかし、その男の包丁がアスカを傷つける事は無かった。

シンジが横っ腹から体当たりをして男を突き飛ばしたのだった。

「シンジ！」

「このガキ、何しやがる！」

アスカの見ている前で、男は血走った目でシンジに向かって包丁を振り上げた。

そこへ間一髪、ミサトが駆けつけて男を取り押さえた。

「……みんなを困らせたかった、ですって！？　なんて幼稚な理由なのかしら」

その市民の男が騒ぎを起こした理由を聞いて、ミサトは腹を立てた。アスカを狙ったのは、目立つ髪の色だったからと言う事らしかった。残念なことにこの騒ぎが原因で、夏祭りは中止になってしまった。

「シンジ、アンタ危ない事するわね……」

「そうよ、刃物を持った男に近づくなんて、シンジ君が刺されたのかもしれないのよ」

「ごめんなさい……」

アスカとミサトに注意されて、シンジはしょげてしまった。

「でも、シンジ君のおかげでアスカが助かったわ、ありがとう」

コンフォート17の葛城家に戻ったアスカは、リビングの窓に傘の

部分が半分割れてしまった風鈴をつるした。
それを見たミサトがアスカに声を掛ける。

「リツコなら割れた風鈴ぐらい戻すのは朝飯前よ？」

ミサトにそう言われたアスカは首を横に振った。

「アタシにとってはこっちの方がいいのよ」

「ほほう、そう来ましたか」

ニヤニヤして笑いを浮かべるミサトに対して、アスカは慌てて言い返す。

「この方がその、ワビサビがあつていいのよ」

「へえ、アスカって日本の風流とか分かるんだね」

シンジは感心してそう呟いた。

「……それにこれはシンジがアタシの事を命を賭けて守ってくれた
って言う証だもの」

「え？」

アスカの呟きは、かろうじてシンジの耳に届かなかったようだった。

「別に何でもないわ、それに、また今度の夏祭りの時に新しい風鈴
を買うわよ」

「アスカ、来年も日本に居るつもりなの？ 使徒とか居ないかもし
れないんだよ？」

「はーん、アスカったらもしかしてシンちゃんと……」

ミサトはニヤニヤとした笑いを浮かべてアスカを見つめている。
アスカは顔を赤くして手足をバタバタさせながら言い訳をした。

「アタシは日本が気に入ったのよ！……その、ヒカリやクラスにも友達が出来たしね」

「そっか、僕もアスカが居てくれると楽しいよ」

告白に近い事をポロリと言つてもものほほんとしているシンジに、アスカとミサトは苦笑いを浮かべた。

「やっぱりバカね」

「でも、アスカもシンジ君の事、悪く思っていないんでしょう？」

「加持さんと比べるとまだまだ月とスッポンよ」

そしてその数日後、浅間山のマグマ溜りで使徒の幼生が発見され、捕獲作戦が行われた。

アスカは首尾良く使徒を殲滅させる事が出来たが、地上に回収される前に弐号機を支えるワイヤーが切れてしまう。

ゆつくりとマグマの底に沈んで行く弐号機。

しかし、アスカはシンジの乗る初号機の居る火口に向かって必死に手を伸ばした。

「シンジ……」

アスカが死の淵に瀕して助けを求めたのは、母親でも加持でも無く、シンジだった。

「アスカ！」

その気持ちに答えるように、ネルフの誰もが弐号機の救出を諦めた

が、シンジだけは諦めなかった。

そして、D型装備をしていない生身の初号機が、溶岩の海の中から
式号機を凄まじい力で引きあげると言う奇跡は起こった。

「バカバカバカ！ アタシを助けるために2回も無理しちゃって！
アంతは本当に大バカよ！」

アスカはネルフの病室で火傷を負って包帯を巻かされて寝ているシンジに向かってそう言った。

あふれだした涙をぬぐいながら、アスカはシンジの側から一晩中離れなかった。

そろそろ目を覚ますはずのシンジにアスカは怒りたい事が山ほどあった。

初号機まで溶岩の底に沈んでしまったら、ネルフは、いや世界は終わってしまうのだから。

でも、一番最初にすることは決まっている。

笑顔で「ありがとう」と言ってシンジに思いっきり抱きついてキス
をすることだ……。

ハルヒ×LASクロス短編 あたしは「変」がお気に入り

この小説は新世紀エヴァンゲリオンと涼宮ハルヒの憂鬱とのクロスオーバー作品です。

「シンジが学校で暴力を振るっただと!？」

「ええ、担任の先生の話だとシンジの方から殴ったようですよ。理由を聞いても黙ったままだとか」

「何だと……」

ゲンドウは困ったように頭を抱え込んだ。

ユイも悲しそうに首を振って下を向いて深々とため息をついた。

「それで、シンジはどうしている？」

「ずっと自分の部屋に閉じこもったままで、夕食の時間になっても出て来ないの」

「一言も話そうとしないのか」

「ごめんなさいって泣くだけで、理由を聞こうとすると顔を背けて口をつぐんでしまっ……」

「困ったものだ」

ゲンドウとユイの二人はしばらく考え込んだ後、ゲンドウの方からユイに話しかけた。

「シンジの友達に学校で何があったか聞くことはできないのか？」

「そうね、惣流さんの家のアスカちゃんなら……」

ユイはそう言って携帯電話を手にとって、惣流キョウコの番号を呼び出した。

「あ、キョウコ？ ……うん、シンジの事なんだけど……」

電話をしながら表情を変えるユイをゲンドウも不安そうな顔で見つめていた。

「わかったのか？」

そう尋ねるゲンドウに、ユイは気まずそうな顔で黙り込んだ。

「……どうした？」

「今、アスカちゃんが家に来てくれるそうですから、その時シンジと一緒に……」

「わかった」

数分経たないうちにアスカがシンジの家を訪ねて来た。

「おじ様、おば様、こんばんわ……シンジは部屋ですか？」

「そうなのよ」

ユイがあごに手を当てて困った顔になると、アスカは「おじやまします」と告げてシンジの部屋へと向かった。

アスカが部屋に入ると、背中を丸めて座り込んでいるシンジの姿を見つけた。

「シンジ、おじ様とおば様にまだ話して居ないの？」

「言いたくない」

「黙っていたって、おじ様とおば様を不安にさせるだけじゃない！」
「でも……話したら父さんが悲しい思いをするから」
「それは、そうかもしれないけど……」

シンジはアスカに手を引かれて部屋から出てきて、アスカと一緒にユイとゲンドウの前に正座した。

「えっと……」

「シンジ、言にくいならアタシから話そうか？」

「うん……」

ゲンドウとユイが見つめる中でアスカがゆっくりと話し始めた。

「実は……クラスでおじ様の風貌を馬鹿にする人が出てきて……」

ゲンドウはサングラスを押し上げてアスカの話を聞いていた。

「最初は数人が『変なおじさん』だって騒ぐぐらいだったから、シンジも無視していたんですけど、そのうちエスカレートして行っちゃって……」

「そのうち父さんの事を悪い事をしてそうな顔だとか、言いだして……」

「それで、シンジが我慢しきれなくて殴りかかって、先生がやって来て……」

アスカとシンジが辛そうに話す様子を、ゲンドウは静かに聞いていた。

「そうか。こんなサングラスなどをかけている私が悪いのだから仕方ない事だ」

「でも、なんで先生はその事を話してくださらなかったのかしら？」

ユイがそう言うと、アスカは怯えたような様子になった。
シンジが絞り出すように声を出す。

「先生は見ていだけで、何もしてくれなかったんだ」

シンジの発言にゲンドウとユイは目をむくほど驚いた。

「何だと、今の教師も情けなくなったものだ」

「最近、生徒に怒れない先生が増えてきているって言うけど……」

「僕は父さんが傷つくのが嫌だったから……だから僕が言わないでおけば……」

「シンジ、やっぱりあなたは優しすぎるほど、優しい子ね」

ユイは目に涙を浮かべてシンジを抱きしめた。

ゲンドウもシンジの言葉に感心しているようだった。

「私は『変なおじさん』でシンジに迷惑をかけているのか……」

「父さんが悪いわけじゃないよ」

「そつよ、おじ様」

辛そうにそつよやくゲンドウをシンジとアスカが慰めたがあまり効果が無かった様子で、碓家のリビングには重たい空気が流れていた。

次の日の朝、シンジ達のクラスは浮ついた雰囲気包まれていた。

「あそこに置かれた新しい机は、このクラスに来る転校生のためのものらしいぜ」

「しかも、その転校生は凄い美人だって話だ」

「それは楽しみだ」

うわさ話に夢中になっているクラスの生徒達は、シンジとアスカが教室に入ってもチラリと視線を向けただけで、また話に戻って行った。

シンジとアスカはホツとした様子で席についた。

「アタシ、今日は学校に来るのが嫌で仕方無かったけど、しばらくは転校生の話題で持ち切りね」

「そうだね、僕が殴っちゃった相手もそっちが気になるみたいだ」

「アタシは何もしてくれなかった担任の先生の顔を見るだけで腹が立つけどね」

「それは我慢するしかないよ」

ホームルームが始まり、転校生が入ってくるとクラスの中はどよめいた。

「ウワサ通りの美人だ!」

「ああ、惣流に負けていない」

「スタイルいいわね」

「本当にうらやましい」

男女問わず、クラスの生徒達は感心した様子で転校生に視線を送った。

転校生は教壇に立つと、担任の教師の言葉を待たずに自己紹介を始める。

「東中から来た、涼宮ハルヒ。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居たらあたしのところに来なさい！」

ハルヒの言葉に教室中が静まり返った。

その気まずい静寂に耐えきれなくなったのか、担任の教師がハルヒに着席するように促す。

ホームルームが終わると、クラスの生徒達はハルヒの側に群がった。しかし、ハルヒが周りの生徒に話を合わせる事の無い性格だと言う事を知ると、興味本位で話しかける生徒達の数は減って行った。

それでも一部の男子生徒はこりずに昼休みもハルヒに話しかけていた。

「そうだ涼宮さん、あそこに居る碇とは仲良くしない方が良いでしょう」

「あいつの親、変なおじさんだから」

「どんなおじさんなの？」

ハルヒが質問すると、男子生徒は笑いをこらえながら答える。

「サングラスをかけた髭がもじやもじやの2mの大男」

「授業参観に来た時の他の父兄たちに比べたら違和感が半端じゃない」

シンジを指差して笑う男子生徒を見て、お弁当を食べていたシンジとアスカは顔を曇らせた。

「まったくあいつら、気分が悪いつたらありやしない。シンジ、今度は安っぽい挑発に乗って手を出したらダメだからね」

「うん……」

しかしハルヒは何を思ったのか、自分の弁当箱を持ってシンジとアスカの席に近づいて来る。

シンジとアスカはただ驚いて空いた隣の席に座ったハルヒを見つめている。

「ねえ、あんたの親父さん、変で最高じゃない！」

無邪気な笑顔でシンジに話しかけて来たハルヒに、アスカとシンジだけでなく、クラスの生徒達も困惑した。

「あ、アンタ何言ってるのよ!? シンジを馬鹿にしてからかっているの?」

「馬鹿になんかしていないわよ。普通より変の方が面白いし、楽しいじゃない!」

「あの……涼宮さん、父さんの顔の特徴を聞いて怖いとか、嫌だとかは思わないの?」

「あたしにとって変って言うのは誉め言葉だわ、普通よりずっといい事じゃない」

シンジとアスカは元気に話すハルヒのテンションに少し戸惑いながらも、ハルヒと三人で楽しく話しながら昼休みを過ごした。

「ちえっ、碇のやつめ、惣流だけでなく涼宮とも仲良くなりやがって……」

その姿を眺めていた男子生徒は思いっきり面白くなさそうにシンジの顔をにらんでいた。

放課後、ハルヒはゲンドウに会いたいと言う事でにシンジとアスカと一緒にシンジの家まで下校する事になった。

「父さんは電気工事士の仕事をしているから、家にいつ帰ってくるか分からないんだよ」

「あたしは少しの間でも会ってみたいのよ」

「アンタも物好きね、自分からシンジのパパに会いたいなんて、そんなの初めてよ」

「そういえば、なんで碇君の親父さんはサングラスをかけているの？」

「仕事で火花が散って、目の辺りにやけどをしたから、それを隠すためらしいんだけど」

「そうなんだ、てつきりあたしはちょい悪系ファッションなのかと思っただわ」

そうこう話している間に、三人はシンジの家に到着した。

「ただいまー」

「おかえりなさい。アスカちゃんも一緒なの……」

玄関に姿を現したユイはシンジとアスカの二人と一緒に居るハルヒの姿を見て言葉を止めた。

「初めまして、碇君のお袋さん！ 変なおじさんに会いに来ましたー！」

「あ、あの……シンジ、この子は？」

シンジはため息をついてユイに事のいきさつを説明した。

ユイは信じられないと言った顔でシンジの話を聞いていたが、ハルヒのニコニコした笑顔を見て、悪意は無いと納得したようだ。

「仕方ないわね。……シンジ、悪いけどアスカちゃんと涼宮さんと一緒に家でお留守番をお願いね」

「どこかに出かけるの？」

「お夕飯の材料を追加で買いに行く事になったから」

ユイがそう言うのと、アスカが慌てて話しかける。

「あの、おば様、アタシ達が急に押しかけてご迷惑をおかけして……」

「別にいいのよ、シンジに新しいお友達が出来たお祝いだと思えば」

そう言うてユイは楽しそうに家を出て行った。

買い物から戻って来たユイが作った夕食は、言葉通りお祝い事のある日のように豪華だった。

「ちょっと張り切りすぎたかしら」

「ユイさんの料理美味しい！」

たくさん作りすぎてしまったかと思ったユイだったが、ハルヒの食欲もかなりのものだった。

「アンタ、よく食べるわね」

「はは……涼宮さんなら何人前も食べそうだね」

賑やかな夕食をとっていると、仕事を終えたゲンドウが家に帰って来た。

女の子の靴が2組あるのを見て、ゲンドウはアスカとヒカリが来ているのかと思ったようだった。

「惣流さんのところのアスカ君と洞木さんの所の子が遊びに来ているのか？」

「初めまして、碇君の親父さん！」

玄関からリビングに入ったゲンドウは、突然ハルヒに元気いっぱいにあいさつをされて驚いて固まってしまった。

「君は？」

「碇君のクラスに転校してきた涼宮ハルヒです、本当に変なおじさんですね！」

ハルヒにそう言われたゲンドウは少し表情を固くした。

ユイやシンジやアスカはハラハラしながらその様子を見守った。

「こうしてお会いできて嬉しいです！」

「会えて嬉しい？ 私と？」

「はいっ！」

笑顔でそう断言したハルヒにゲンドウは戸惑った。

「だって、普通だったらつまらないじゃないですか！」

「どうやら、涼宮さんにとっては変と言うのは褒め言葉らしいのよ」

ユイにそう言われてゲンドウは少し照れくさそうな表情になった。

その後の夕食の席でも、ハルヒはゲンドウの事を褒めていた。

ハルヒが帰った後、ゲンドウが上機嫌になったのを見て、ユイとシンジとアスカは安心した。

「私がこんなに顔の事を褒められたのは初めてだ、明るくていい子

だな」

「本当によかったですね」

ゲンドウとユイが喜ぶ様子を見て、アスカは安心する半面、ゲンドウとユイに気に入られてしまったハルヒがシンジとの恋のライバルになってしまうのかもしれないと焦っていた。

「せっかく1組の綾波さんにシンジの事を諦めるように成功させたのに……」

しかし、そのアスカの心配は無駄に終わった。

ハルヒは何回かゲンドウに会つと興味を無くしてしまったようだった。

ゲンドウはその事にちよつと寂しさを感じているようだ。

「涼宮君は最近、私に会いに家に来てくれないな」

「だって、あなたが変なのは外見だけ何ですもの、中身は普通なんですから」

「やっぱり性格も変じゃないといけないのか」

「やめてください、あなた」

その後ハルヒは数カ月後に学校に転校してきた”キョン”と言う変なあだ名の少年に興味を持って友達になり、結構ウマが合っているようだ。

アスカはゲンドウの問題もシンジとの恋の問題も解決して、本当にホッとしているようだった。

L A S 小説短編 レイとアスカ く楽しい恋、辛い恋く

L R S のカップリングが好きな読者の方には辛い話かもしれませんが、ご注意ください。

「レイ、学校生活はどう？」

「特に問題はありません」

これが、少し前までのリツコとレイの会話だった。しかし、最近はレイの返答が違っている。

「学校に行くのが楽しいです。碇君が居るから」

リツコはこのレイの言葉の変化を素直に喜んだ。

人形のようなだったレイにも感情が芽生えた事。

そして、一人の女の子としてシンジに好意を抱いている。

リツコはいつレイがシンジと恋人同士になれた報告をしてくれるのか、心待ちにしていた。

「何よ、シンジのわからずや！」

「アスカが悪いんじゃないか！」

「いい加減、止めてよ2人とも……」

葛城家の食卓で、アスカとシンジは今夜も言い争っていた。

ユニゾンの訓練をした直後は、まるで姉弟のように仲が良かったのに、最近はケンカの度合いが増している。

家族関係が崩れて欲しくないミサトは頭を抱えていた。

「ふんだ、シンジなんか大っ嫌い！」

「僕も、アスカなんか居ない方が楽が出来ていいよ！」

アスカは自分の部屋に籠ってしまい、シンジは不機嫌そうに夕食の片付けをしていた。

ミサトは飲んでいるビールの味がいつもより苦く感じている。

「シンちゃん、アスカにもうちよつと優しくしてあげたらどうなの？」

「アスカが僕に意地悪するからいけないんですよ。天才少女って言うぐらいなんだから本当は掃除とか料理とかできるんでしょう？僕を家政婦と何かと勘違いして居るんだ」

「アスカは、エヴァの訓練が忙しかつたのよ……」

ミサトが少し苦言を呈しても、シンジの苛立った表情は治らなかった。

「うーん、ビールを飲みすぎるとトイレが近くなるのかしら、利尿作用ってやつ？」

夜中にミサトはそう一人言を言って起き上がって、自分の部屋からトイレに行くために廊下に出る。

すると、アスカの部屋から泣き声のようなものが聞こえてくるのが分かった。

「まさか、あのアスカが泣いているわけないわよね」

ミサトは気のせいだと思い、アスカの部屋の前を通り過ぎてトイレへと向かった。

しかし、ミサトが用を足して戻って来てもアスカの部屋から泣き声が聞こえ続けていた。

「アスカ、どうしたの!？」

ミサトがアスカの部屋のドアを開けると、ベッドの上でサルのぬいぐるみを抱いて泣きはらしていた。

「アタシ、明日の朝、シンジと顔を合わせるのが怖い。だってシンジはアタシに怒っていると思うし」

「それなら何で、シンジ君に対して意地悪な事をするの？」

「シンジにかまって欲しかった。アタシはシンジの事が好きになっちゃったみたいなのよ」

「じゃあ、正直にシンジ君に告白すればいいじゃないの。何なら私が伝えてあげようか？」

ミサトがそう言うと、アスカは上目遣いで瞳に涙をためてミサトを見上げながら、首を激しく横に振りミサトのパジャマの袖をギュッとつかんで否定した。

「止めて、それだけはダメ。シンジがアタシの事を本当に嫌いだってわかったら、アタシはこの家に居られなくなる」

「でも、シンジ君に聞かないとわからないじゃないの」

「シンジは学校ではファーストと楽しそうに話すの。もしシンジがファーストの事が好きだなんてわかるなんて、それだけは嫌なのよ!」

もう、ミサトは泣きじゃくるアスカを自分の胸に抱きしめる事しか

できなかった。

「そう、アス力はそんな事で悩んでいるのね」

自分専用の研究室で、ミサトから電話でその話を聞いたリツコはそうため息をついた。

電話をしている間に、用事で訪れたレイが部屋に入ってくる。

リツコは電話を切って、レイを迎え入れる。

「レイ、学校ではシンジ君と居れて楽しい？」

「はい、碇君はセカンドの事が好きだって言う事は知っています」

軽い笑顔で答えたレイの言葉に、リツコは顔面蒼白になって固まった。

「私は碇君に振り回してもらう必要は無いんです。私が碇君を好きでいるだけで良い。だから楽しいんです」

さらにそう言ったレイの言葉に、リツコは心を打たれた。

リツコが高校生だった頃、リツコはただユイの夫であるゲンドウに憧れているだけで幸せな気持ちになれた。

それが今はゲンドウの弱みまで握って、ゲンドウを自分の所に引き寄せようとしている。

とても辛い辛い恋。

「私は碇君の側に居るだけで楽しいんです」

穏やかな微笑みを浮かべてそう言うレイの小さな頭を、リツコは大

粒の涙を滝のように流しながら強く抱きしめた。

残暑記念ハルキョン小説短編 気分は最高っ！

この作品ではハルヒとキョンは高校を卒業して大学生になります。

「ほらっキョン、もっとスピードを出しなさいよ、あたしは早く海に入りたいの！」

助手席でそう言って騒ぎ立てるやかましい女は SOS団”元”団長の涼宮ハルヒだ。

俺達が高校を卒業すると同時に、SOS団は解散して長門と朝比奈さんは未来に帰って、古泉も外国の大学に行ってしまった。

何の因果か、ハルヒにずっと受験勉強の指導を受けていた俺は、ハルヒと同じ大学に入っちゃった。

大学生になっても、俺に対してわがままな事を言う関係は全く変わらないように見える。

「無理言っなよ、車ごと海水浴したいのか？」

海岸通りを走る車のハンドルを慎重に操りながら、俺は皮肉を交えながらそう答えた。

俺は車の免許を取ってからまだ半年しか経っちゃいない。

この自分の車だって、大学に入ってから必死にバイトをして貯めた金と親から頼みこんで借金して、大学最初の夏休みに間に合うようにしたんだぜ？

「じゃあ、あたしが運転を代わろうか？」

「断固拒否する、買ったばかりの新車をスクラップにしたいくはない！」

俺はわめくハルヒの声をかき消すためにも、スピーカーのポリウー
ムを上げた。

車内をアーティストの夏の歌を満たす。

9月になっても依然として厳しい残暑が続いてはいたが、風はすっかり涼しくなっていた。

「うーん、サーフィンやるなら9月が海開きって感じよね」

「そうだな、8月の間は海水浴の客がごった返して、ブイとかで禁止区域が設けられているからな」

海水浴場に着いた俺は、2人分のサーフボードを車の屋根から降ろしながらハルヒの言葉にそう答えた。

夏休みの混雑から解放された浜辺は、俺達のようにサーフィンを楽しもうとやって来たであろう大学生や社会人の人影がまばらに見えるだけだった。

大学は8月から夏休みがやつと始まるところもあり、9月の半ばまで夏休みが続くのが一般的だ。

「キョン、早く来なさい！ 波と風がとっても気持ちいいわよ！」

真っ赤な水着に素早く着替えたハルヒが、俺に向かって手を振っている。

大学生になったハルヒは、高校生の時のスタイルの良さをそのまま維持した、なかなかの美女になっていた。

周囲から感じる羨望の眼差し、俺は嫌いじゃないぜ。

俺はハルヒの呼びかけに笑顔になって応じて、ハルヒの元へと駆けて行った。

波が太陽の光に反射して、とてもきれいに輝いている。

「良い波が来るといいな」

「絶対来るわよ、水曜にはでっかい波が来るって決まっているんだから！」

「それは映画の話だろう？」

俺はハルヒにそう答えながらも、もしかしてハルヒの言う通りに大きな波が来てしまうのではないかと思っていた。

ハルヒの持っていた自分の願いをかなえろと言う神がかり的な力はもう完全に失われている。

ごく普通の人間にハルヒはなってしまうているはずなのだが、自信たっぷりのハルヒにはそんな力が無くても願いを叶えてしまいたいそう
な、そんな気がした。

青い海と空の中で、俺とハルヒは波乗りを楽しみ、夏を満喫した。
しかし、空に浮かぶのは入道雲では無く、鱗雲。

「もう、空では秋になっているんだな」

「まだ、夏が終わっちゃう困るのよ！」

俺はハルヒの言葉に引っ掛かりを覚えた。

大学の課題はやってしまったから、ハルヒのやつは今度は一体何が
心残りなんだ？

今度はあの時みたいに無限ループを繰り返すわけには行かないぞ。
そんな事を考えているうちに、日はどんどん傾いて行った。

「でっかい波、来なかったな」

暮れなずむ浜辺で、俺はハルヒにそう声をかけた。

他のサーファーたちも波乗りを終えて、戻って来ていた。

「うん、でも別に構わないわ」

どういうことだ、ハルヒが夏にやり残したのはサーフィンじゃなかったのか？

じゃあ、なぜハルヒのやつは俺をしつこくサーフィンに誘ったんだ？

「あ、あのね、あんたをサーフィンに誘ったのは、本当はサーフィンがしたかっただけじゃないのよ……」

ハルヒは顔を赤らめながら、歯切れが悪そうに俺に向かってそう言った。

顔が赤いのは夕日のせいだけじゃないだろう、俺にもそれは分かる。

「分かっているよハルヒ、お前が素直に言い出せなかった事ぐらい」「恋愛は病気だって、言っちゃったしさ……」

ブツブツと顔を反らして言い訳をするハルヒに向かって、俺は告げる。

「ハルヒ、目を閉じてじっとして居ろ」

「う、うん」

ハルヒは俺に期待するようにそっと目を閉じた。

夕暮れの静かな浜辺、ムードも悪くない。

俺もやる時はやってやるさ。

「行くぞ、ハルヒ」

俺はそう言って、ハルヒの焼けた肌を熱く抱きしめた……。

残暑記念ハルキョン小説短編 気分は最高っ！（後書き）

倉木麻衣さんの「feel fine!」を聞いて浮かんで来たイメージを形にしました。

納涼記念ヨシユエス短篇　ブライト家の心霊写真アルバム

浮遊都市リベルアークでの世界の命運をかけた戦いを終えてからしばらくの間、エステルとヨシユアは自分達の家でゆっくりと休息を取っていた。

結社の企みは阻止する事が出来たが、ヨシユアは結社との戦いの決着をつけるためにエレボニア帝国へと旅立つ決意を話し、エステルも共に同行くと誓った。

エステルとヨシユアがリベル王国を後にすると決めた前日には、カシウスとシエラザードもブライト家に戻り、4人で懐かしい思い出に浸っていた。

「それで、私に視てもらいたい物って何？」

「これなのよ」

昼食の後、シエラザードに尋ねられたエステルがテーブルに置いたのは分厚い一冊のアルバムだった。

表紙には『思い出』と言う題名が書かれている。

「これが、あの時王都から戻って来たあたしの部屋の勉強机に置いてあったの」

「カシウスさんが作ったものではないんですね？」

「ああ、俺もそんな物があるとは、エステルに言われるまで知らなかった」

シエラザードに言われて、カシウスは首を横に振った。

アルバムのページをめくると、一番最初に目に付く写真はベッドに横たわるヨシユアと、その側に立つエステルの写真だった。

「これってあたしとヨシユアが出会った頃の写真よね」

「ふーん、エステルってかわいいじゃない」

3人とも、ヨシユアが浮かべる冷たい表情には触れずに次のページをめくった。

次は魚を釣り上げる元気一杯のエステルと、それを眺めているヨシユアの写真だった。

「この頃のエステルって、本当に色気の欠片も無いわね」

「余計なお世話よ、シエラ姉」

写真を見て笑うシエラザードとカシウスに、エステルはむくれた顔になった。

「でも、僕にはエステルの明るさが眩しい太陽に見えたんだよ……」

ヨシユアは誰にも聞こえない声でポツリとそう呟いた。

「あら、私まで写ってるじゃない」

リベール各地の支部を巡る準遊撃士の研修の旅から戻り、手土産をどつさり持ってブライト家を訪問したシエラザードと、ヨシユアの背中を思いつきり押してシエラザードに紹介するエステルの姿が映った写真。

「ヨシユアのこの驚いた表情って面白い！ 決定的瞬間ってやつよね！」

「恥ずかしいから、次の写真に行こうよ」

次の写真は、食材相手に苦戦して居るエステルと、涼しい顔をして

料理をこなすヨシユアの姿だった。

「これじゃあ、ヨシユアが女の子みたいじゃない」

シェラザードは苦笑しながら次の写真を見るためにページをめくろうとするが、それをエステルがちよつと待ったとばかりに阻んだ。

「次の写真は参考にならないと思うから、飛ばしましょうよ」

「だめだよ、今度はエステルが恥ずかしい思いをする番だよ」

さらにエステルの手を退けようとしたヨシユアと、エステルは揉み合いになってしまった。

「ほらほら、今さら姉弟ケンカみたいな事をしないの」

シェラザードがそう言って2人をたしなめながらアルバムの次のページを開いた。

するとそこには七耀教会のデバイン神父の講義の最中に居眠りをするエステルの姿が丸写しになっていた。

後ろの席ではエリッサが困ったような諦めたようなごまかし笑いを浮かべていた。

「あっちゃー、これは恥ずかしいわね」

エステルは赤くなって下を向くしかなかった。

そして次の写真は、ブライト家の庭で木刀の短剣と棒を構えて向き合うヨシユアとエステル、そしてその様子を見つめるカシウスの姿が映っていた。

「今までの写真は、カシウス先生が撮った可能性も考えられたけど

……」

「この通り、俺が写っている。俺が並はずれた能力の持ち主だとしても、自分自身は写せないだろう？」

「そうですね……」

カシウスの言葉に、シェラザードは納得したようにうなずいた。

次の写真はロレントの街の中へと場所が移る。

エステルとヨシユア、エリツサとティオの4人が並んで楽しそうに買い物をしながら歩いている姿が映されていた。

「俺が側に居なくて、エステルは寂しい思いをしているんじゃないかと思っていたこともあったが、この写真を見ると良い友人達に恵まれたようだな」

「そうだね、あたしは1人で沈んでいる事はあんまりなかったと思う」

次の写真は再び場所はブライト家の室内に戻り、酒の入ったグラスを持ちながら、レナの写真を前にうつむいて苦しい表情を浮かべているカシウスの姿が写っている写真だった。

「先生、まだ奥さんのレナさんの事を……」

写真の中のカシウスが人前で見せた事の無い表情を浮かべているのを見て、シェラザードは思わず言葉を詰まらせた。

「無様な所を見せてしまったな……」

カシウスが静かにそう言ったきり、しばらく重苦しい空気がブライト家の食卓を包む。

家の外で鳴く小鳥やセミの音が、その沈黙をわずかに和らげていた。

シエラザードは、その気まずい空気を破るためにも、次の写真を見るためにページをめくった。

するとそこには星空の輝く中、ブライト家の2階のバルコニーでハーマニカを吹くヨシユアと、嬉しそうに曲に聴き入るエステルが姿があった。

「これはずいぶん最近の写真ね。傍から見ても2人ともラブラブのカップルに見えるわよ」

「冷やかさないでよ、シエラ姉」

先ほどの重苦しい空気を吹き飛ばすためか、シエラザードは思いっきりエステルを冷やかし、エステルもおどけてそう答えた。

すっかり雰囲気がいっものブライト家の食卓に戻った中で、シエラザードはアルバムに収められた他の写真も眺めて、エステルとヨシユアとカシウスに向かって宣言する。

「間違いないわ、あなた達は憑かれているわね」

「嫌な言い方をしないでよ」

エステルは身震いをしてそう答えた。

「本人達に気付かれないように写真を取るなんて、生きている人間に出来る事じゃないわ。立派な心霊写真ね」

「心霊写真ですか」

「まあ、正確に言えば心霊が撮った写真とも言うべきかしら」

ヨシユアの眩きに対して、シエラザードはそう説明を付け加えた。

「レナは魂だけの存在になってしまっても、私達を見守っているんだな」

「母さんが側に居てくれるのは嬉しいけど、ちょっと恥ずかしいかも」

カシウスが感慨深く呟いたのに対して、エステルは顔を赤くして慌てた様子でそう言った。

「そうね、ロレントの街の写真もあるから場所もブライト家の中に限らず、昼も夜も関係無さそうね」

「それじゃあ、今日はヨシユアと一緒に部屋で寝るつもりだったけど、母さんに見られちゃうの？」

シエラザードの言葉を聞いて、つい本当の事をもらしてしまったエステルに、ヨシユアの顔が血の気が失せたように青くなった。

「ヨシユア、お前今夜エステルに手を出すつもりだったのか！」
「う、うわあ！」

怒り心頭に発したカシウスを見て、ヨシユアはエステルの手を引いて、慌てて玄関からブライト家を飛び出して逃げ出した。

「エレボニア帝国に旅立つなんて認めんぞ！ 戻って来い！」

大声を出して消えたヨシユアを追い掛けるカシウスを見送ったシエラザードはため息をつく。

「先生も、先生の奥さんのレナさんも、子離れがなかなかできないのかしら。エステルとヨシユアは大変ね」

しかし、親の顔も覚えていない孤児だったシエラザードは、それでもエステルとヨシユアの事をうらやましく思うのだった。

L A S 短 編 アスカのツンデレーション

「あーっ、退屈！　せっかくの休みなのに、ちっとも面白くないわ！」

アスカはリビングに寝っ転がって、そんな事を言っている。

「じゃあ、ここに居ないで外に遊びに行けばいいじゃないか、委員長の家とか」

「そんな気分になれないのよね」

僕も不満をもらすアスカの側に居たくないから、外で気晴らしをする事を勧めたんだけど、アスカはヘリクツをこねるんだ。

「じゃあ、どうしろって言うのさ。」

アスカはエヴァのエースパイロットだからって、僕や綾波に対していつも偉そうに見下したような態度を取ってわがままばかり。

学校ではトウジやケンスケの前で僕に文句を言って怒ってばかりいるんだ。

使徒との戦いも、エースパイロットだから僕達の助けは要らないって、いつも独断専行。

でも、弐号機がマグマの海に沈みそうになった時は僕の腕をしっかりとつかんでくれたんだよね。

今までアタシは、誰も信じる事が出来なかった。

ネルフの大人達は、アタシを使徒と戦うための駒としてしか見てく

れないと思っているから。

そう、もしかして加持さんもそうかもしれないって心の底で疑ってしまっていた。

でも、今のアタシはシンジを絶対的に信頼している。

だって、アタシを命懸けで助けてくれたから。

初号機だって、一緒にマグマの海に沈んじやうかもしれないかったのよ？

アタシだって、自分が死んでしまうって覚悟して居たのに。

シンジのおかげで、アタシはこうして生きている。

アタシはシンジの事が好きになってしまったかもしれないけど、それを認めたくないプライドが邪魔をしてシンジに辛く当たっちゃうのよね……。

シンジに構って欲しくて、振り向いて欲しくてちよっかいをだしているんだけど、シンジにはきつと伝わっていないわね……。

「面白いテレビ番組もやってないから、映画でも見に行きましょうよ」

アスカにそう言われて、僕は胸がドキリとした。

これって、アスカが僕をデートに誘っているんだよね。

「勘違いしないのよ、これは暇つぶしなんだからね」

アスカは無理やり怒っているような顔を作っているけど、その蒼い瞳は不安そうに泳いでいる。

そんな素直になれないアスカの不器用な表情も、僕は好きになれた。

「じゃあ、着替えてくるよ」

「当ったり前じゃない、アタシに恥をかかせるんじゃないわよ！」

そんな事を言ったアスカの方が服を選ぶのに時間がかかっていて、僕より部屋から出てくるのがずいぶん遅かった。

僕はテーブルの上にミサトさん宛てにアスカと映画を一緒に見に行く事と、夕食は自分で温めて食べるようにとメモを残して、コンフォート17を出た。

「あれ、碇君とアスカ、もしかしてデート？」

夕方になりはじめた街の中を映画館に向かってアスカと2人で歩いていると、買い物をしていた委員長に声をかけられた。

「アタシがバカシンジとデート？ そんなわけないじゃない。アタシが映画を見に行くって言ったなら、ついて来たのよ。まったく邪魔で仕方が無いわ」

アスカはそう言いながら大げさに困ったと言った感じのジェスチャーをした。

「そんな意地を張っちゃって」

「こんなやつをアタシが好きになるわけがないじゃない、やっぱり加持さんみたいに素敵な男性じゃないとね」

デートをしている事を疑いもしない委員長に、アスカは僕を指差してそんな事を言った。

アスカの照れ隠しだって僕にも分かっていたけど、加持さん比べられて僕はいい気分はしなかった。

買い物の途中だと言う委員長と別れて、僕とアス力は映画館に入った。

映画館の入口から席に着くまでの間、不機嫌だった僕はアス力となるべく口もきかないで目も合わせようとしなかった。

でも、映画の上映が始まって辺りが暗くなって静かになった時、アス力は座席の手すりの下で僕の手を繋いできたんだ。

もう委員長が見ているわけでもないのに、他のお客さんにも見えないうようにこっそりと。

アタシはまた大好きなシンジを傷つける事をしてしまった。

映画の上映が始まってしまつて、アタシはシンジを見つめる事も、声を出して謝る事も出来ない。

今、アタシがシンジに謝る事の出来る唯一の方法はシンジの手を握る事だけなの。

アタシが恐る恐る隣に座るシンジの手に向かって自分の手を伸ばすと、シンジも手を握り返してくれた。

「ごめんね」って気持ちを込めて、シンジを握る手に力を入れたり緩めたりしていると、シンジの方も優しく手を握ってくれた。

良かった、シンジはアタシの事を許してくれたみたい。

でも、アタシがシンジの事が好きだってことはシンジにしっかりと伝わっているのかしら。

アタシも不器用だし、シンジも鈍感なところもあるから……。

シンジとデートをしたいと思って、適当に選んだ映画は地球の人類が宇宙生命体と戦うホラーアクションだった。

途中で、主人公の男性がヒロインを守り切れずに殺されてしまうシーンが映し出されてアタシはショックを受けた。

アタシとシンジもエヴァのパイロットとして得体の知らない使徒と
言う生物と戦っている。

いつ命を落としてもおかしくない絶望的な運命の中に居るのよ。

決めた、家に帰ったらアタシはシンジに好きって気持ちを告白し
よう。

言わなくて後悔してしまうよりは絶対にマシだから。

アタシはそう決意してもう一度シンジと繋いだ手に少しでも力を込
めた。

L A S 短 編 アスカのツンデレーション（後書き）

この話は、p e r f u m e さんのp u p p y l o v e を聴きながら勢いで作ってしまった短編です。

L A S 小説短編　ねえアスカ、ハグしようか？

「ねえアスカ、ハグしようか」

「うん、お願いシンジ」

シンジの申し出をアスカが受諾すると、シンジはアスカの肩をぐつと引き寄せて抱きしめた。

アスカの方がシンジより背が少しだけ高いので、シンジの方がアスカに抱きついたようにも見える。

夜のコンフォート17の葛城家のリビングで抱き合っている二人の姿をそつと影から見つめているのは一人の女性と一匹のペンギン。家主のミサトとリビングを横切って寢床に戻ろうとしたところを取り押さえられたペンペンだった。

シンジとアスカも薄手のパジャマ姿だったので、お互いの体の感触が密接に感じられた。

目を閉じて二人は相手の暖かな体温、ゆっくりと胸を上下させる息遣い、心臓の脈打つ鼓動などを体中で感じ取るうとした。

この時のシンジとアスカには言葉は不要だった。

そして静かに抱き合って数分、アスカの心臓の鼓動がシンジの心臓とシンクロしたところでゆっくりと体を離す。

「気分は落ち着いた？」

「ありがと、これで今日もぐっすり眠れそうよ」

アスカはとても爽やかな微笑みをシンジに向けた。

二人が寝る前にハグをするようになったのは、第十五使徒アラエルとの戦いの後からだった。

使徒との戦いで心の中を侵され、さらにレイの乗る零号機に助けられた事でプライドまで激しく傷ついたアスカは、プラグスーツのま

まネルフの施設のビルの屋上まで駆け上がった。行つた。

慌てて追いかけたミサトと、続いて屋上までたどり着いたシンジの目に、とんでもない光景が飛び込んで来た。

フェンスを乗り越えて足を外に投げ出した形で座っているアスカの姿だった。

「アスカ、バカな事は止めなさい！」

「ふん、ミサトもシンジもファーストのやつも、みんな大っ嫌い！」

ミサトがいくら呼びかけても、アスカは振りかえらずにミサトやシンジ達への不満を口にして叫ぶばかり。

かなり興奮して今にもアスカは地面に身を投げ出しそうな危険な状態だった。

強引に力で取り押さえようとミサトが近づこうとすると、アスカは腰を浮かせて飛び降りそうなそぶりを見せたために、ミサトは二の足を踏んでいた。

しかし、シンジは決意を固めると、勇気を出してゆっくりとアスカの方へと歩いて行く。

「近づいたら飛び降りるって言っているのが解らないの！？ アンタが止めようとしても、多分間に合わないわよ！」

「アスカ、落ち着いて。僕はアスカの話を聞きに来たんだ」

シンジはそう言うと、アスカとフェンス越しに背中合わせに腰を下ろした。

ミサトもシンジについて行こうとしたが、シンジが視線を送ると、黙ってその場に止まった。

アスカはそれからもずっと特にシンジがシンクロ率が一番になってからいかにシンジの事が憎くてたまらなくなっただか、シンジに怒りをぶつけ続けた。

「家族ごっこなんて、アンタとミサトの二人でやっていればいいのよ、反吐が出るわ!」

アスカがそう叫んだ時、シンジは後ろに回されていたアスカの右手をそつと手にとつて優しく撫で、指を絡めて軽く握った。

そして手を握ったまま、シンジはアスカの事がどれほど好きなのかを三十分位話し続けた。

「ねえアスカ、ハグしようか」

「はあ? アンタ何を言ってるのよ?」

体をねじつて振りかえり、驚いた瞳で見つめてくるアスカに対して、シンジは自分がエヴァに乗るのが嫌になって第三新東京市から逃げ出そうとした時、ミサトによって引き止められた事を話した。

「だから、ハグをすれば僕の気持ちのアスカに伝わると思うんだ。さあ、こっちに来てよアスカ」

シンジの呼びかけからしばらくして、アスカは自分でフェンスを乗り越えて待ち受けていたシンジの胸に飛び込んで行った。

こうして無事に仲直りを果たす事が出来たアスカとシンジ。

ミサトとの3人の家族生活も取り戻す事も出来て、アスカのシンク口率も安定した。

しかし使徒の攻撃を受けた後遺症からか、アスカは毎晩悪夢にうなされるようになってしまった。

そこでアスカの心を落ち着けるためにシンジがアスカをハグする事になったのだった。

「シンちゃん、今度はお姉さんが大人のキスの仕方を教えてあげよ

うか？ アスカとの初キスは失敗しちゃったんでしょ？」

「そ、そこまで教えてくれなくていいですっ！」

「そうよ、何言っているのよミサト！」

今のシンジとアスカにとっては、ハグで十分に満ち足りていた。そのうちに自然と次の段階へと進んでいくのだろう。アスカの言葉を幕開けに。

「ねえシンジ、キスしようか」

「ほらシンジ、何やっているのよ！　グズグズしないで早くハンバーグを作っちゃいなさいよ、アタシはお腹が空いているんだから！」
「わ、わかったよ！」

アタシが苛立った声を掛けると、シンジはハンバーグをこねる速度を上げた。

シンジの手元は相変わらず手慣れていない様子で、おっかなびつきで料理を作っている。

はつきり言ってシンジの作るハンバーグは美味しくはない。

でも、コンビ二で売っているレトルトのハンバーグはもっと嫌だった。

全く、何をいちいち迷っているのかしら？

どうせ上手く作れないんだから、もっと早く作ればいいのに。

自信が無いから優柔不断になるのよ。

「そうだアンタ、いつも背中を丸めて下ばかり向いて道の端っこを歩いているじゃない、もっと堂々と真ん中を歩かなきゃダメよ」

「何でアスカにそんな事言われなくちゃならないんだよ」

「いい、アタシ達はエヴァンゲリオンのパイロットなの、世界人類のために戦っているのよ。それだけで誇らしい事じゃない！」

「でも、エヴァに乗って無かったら僕達はただの中学生じゃないか」

シンジの放った言葉はアタシの胸をえぐった。

そう、エヴァのパイロットだからみんなアタシを見てくれる、アタシに優しくしてくれる。

ミサトがアタシを引き取ったのも同居していた方が作戦部長として都合が良いから？

シンジも命令だからいやいやアタシと同居しているの？

アタシは怖くて聞く事が出来なかった。

壺中ではアタシはドイツ人の血を引くクォーターと言う事で、男子生徒や女子生徒に羨望の眼差しで見られてアイドルのようになっていた。

でも、アタシに声を掛けてくれるのはヒカリだけ。

アタシのルックスに惹かれた一部の男子生徒も交際を迫ってくるけど、それはここが日本だから。

ドイツの大学では周りより身長が低くて、チビ扱いされてコンプレックスを抱くほどだった。

そんな事を考えていたアタシは不機嫌そうな顔でシンジの作ったハンバーグをかきこむように食べた。

味なんか全然分からなかった。

「あ、あのさ……」

「何よ？」

「ご、ごめん……」

アタシがシンジをにらみつけると、シンジは下を向いて黙り込んだ。このシンジの態度がアタシをイライラさせる。

「言いたい事があるなら言いなさいよ！」

「別にいいんだ、全部僕が悪いんだから」

「はあ！？ 何勝手に自分で納得しちゃっているのよ、そんなところの内罰的な」

「そ、そうかな……」

「もっと自信を持ちなさいよ！」

アタシはシンジの鼻先に人差し指を突きつけて、自分の部屋に戻った。

全くあいつの辛気臭い顔を見ているとムカついて来る。

やっぱり、アタシに相応しい男は加持さんしか居ないわ。

でも、加持さんだったらいくらアタシが好きだって言っても分かってくれないんだから。

「アス力は背伸びをしている。ありのままのアス力を好きになってくれる相手を探すべきさ」

加持さんはアタシを子供扱いしている。

アタシはもう子供じゃないのに。

ミサトと親しく話している所を見ると胸が痛くなる。

加持さんもアタシよりミサトの方がいいんだ。

襲いかかってくる使徒を倒して行くうちにシンジの態度も変わって来た。

シンクロ率もアタシを追い上げるようになって戦闘中でも自分から指示を出すようになった。

アンタが勝てているのはエースパイロットのアタシが居るからなんだからね、調子に乗るんじゃないわよ！

シンジが自信をつけて行くにつれて、アタシは何となく面白く居なくなってきた。

アタシに対しても納豆や魚を食べろって言うようになるし。

あげくの果てにはデートに誘われたとかで有頂天になっている。

でも、シンジは他に好きな子が居るって断ったみたいだけど。

シンジの好きな子ってアタシ……なわけないわよね。

いつも文句ばかり言って怒鳴りつけているアタシなんか好きになつてくれるはずなんかない。

きっとファーストに決まっている。

そう思ったアタシはそれから一段とシンジにきつく当たるようにした。

とある使徒との戦いで、ミサトの命令に逆らって突撃したシンジは

エヴァごと使徒に飲み込まれてしまった。

「これって、独断専行じゃない！」

「そうね、戻ってきたらたっぷり叱らないとね」

アタシのつぶやきにミサトも同意していた。

なのに戻って来たシンジはミサトに怒られる事も無く、何の処分も下される事は無かった。

何よそれ！ 結局ミサトも碇司令も、シンジやファーストばかり大事にして、アタシなんかどうでもいいんだわ！

シンクロ率もシンジに抜かされたアタシは、ついにエヴァでも認められなくなった……。

家に戻ったアタシは、シンジやミサトの顔を見るのも嫌になって部屋に閉じこもった。

ミサトやシンジと一緒にの空気なんて、吸いたくもない。

「アスカ、ご飯だよ！」

シンジに呼びかけられても、アタシは背中を丸めて座ったまま動かないでいた。

廊下を歩くシンジの音が近づいて来て、アタシの部屋のドアを開けた。

何で部屋に鍵を掛けられないのよ、日本の家屋って！

アタシは内心そう毒突きながら、部屋に入って来たシンジに文句を言っただけと振りかえる。

「何で勝手に部屋に入ってくるのよ、ドアに掛けてある『立入禁止』の札が見えないの！」

「うん、わかっているけど」

アタシが怒ってにらみつけてもシンジは目を反らさずに見つめ返して来た。

至って静かな、落ち着いた瞳だった。

「アスカにハンバーグだけは食べてもらいたかったんだ」

「何よそれ!？」

今さらハンバーグがどうしたって言うのよ。

アタシはシンジの考えが理解できなかった。

「ごめんアスカ」

シンジはそう言うと、強引にアタシの口の中に小さく切り分けたハンバーグを押し込んで来た。

アタシの口の中いっぱいに肉汁が広がる。

お腹が空いていた事もあって、アタシはハンバーグを吐きださずに咀嚼して飲み込んでしまった。

「どう? やつと最近になって上手く焼けるようになったんだよ?

こねるときも空気が入るようになったし……」

確かに同居を始めた頃のシンジのハンバーグはとても不味いものだった。

それがさっきのハンバーグはよだれが出るほどおいしいものに仕上がっている。

アタシは今まで思い違いをしていた事に気がついた。

シンジはグズグズとハンバーグを作っていたんじゃない。

どうすればおいしいハンバーグが作れるか自分なりに考えながら作っていたんだ。

食べてもらっ相手……アタシの事を思っ

そんなシンジを小突くなんてアタシは何て恥ずかしい事をしたのだろっ。

「どうして、アタシみたいな性格の悪い女にそこまでするのよ」

「そんな事無いよ、アスカは僕の事を励ましてくれたし、何よりもアスカの側にいると明るくなれるんだ」

「励ますって……アタシはただ文句を言っただけで……」

「アスカ、私は仕事の上だけで他人と一緒に住めるような物事を割り切れる人間じゃないわ」

いつの間にか、ミサトまでアタシの部屋の入口に姿を現していた。

「私は、シンジ君とアスカを、弟と妹のように思っているのよ、誤解しないで」

2人に優しい言葉を掛けられて、アタシは目に涙が浮かんでくるのを感じた。

「アスカ、自分をつまらない人間だと思いこまないでよ。もっと自信を持ってよ」

「ふう、アンタに説教されるなんてアタシも落ちたものね」

アタシはあきれた仕草でため息をつこうとした。

でも、アタシはきつと泣き笑いの笑顔を浮かべてしまっているに違いない。

口元が思わず緩んでしまっているのを感じる。

だって胸の中は嬉しさでいっぱいになったから。

「ハンバーグ、おいしかったけど80点って所ね」

「厳しいなあ」

シンジとミサトと笑顔で話せるなんて、ずいぶん久しぶりな感じがする。

アタシはとつてもすがすがしい気持ちになった。

きつとありのままの自分を好きになってくれると言つ自信が湧いて来たからね。

L A S 小説短編 シンジが死んじゃったのよ！

世界観は学園エヴァとなっています。

使徒やゼーレなどは出て来ません。

シンジとアスカの両親も健在です。

碓家と惣流家は隣同士となっている幼馴染版 L A S です。

第三新東京市第壱中学校二年 A 組の女子、惣流アスカ。

アスカはとても元気な声で朝のあいさつをする少女だった。

しかし、今朝登校して来たアスカは暗い顔で教室に居る誰ともあいさつを交わさずに自分の席に着くと塞ぎこんだ。

アスカの親友である洞木ヒカリでさえ、アスカが登校して来た事にしばらく気が付かなかった。

「アスカ、来ていたの!？」

「あ、ヒカリ……」

ヒカリに声を掛けられて机から顔を上げたアスカは目の下に大きなくまを作っていた。

「アスカ!？」

「惣流、なんちゅう不細工な顔してるんや」

「せつかくの顔が台無しだな……いや、これは珍しい写真が撮れるかも」

そう言ってカメラに手を伸ばそうとしたケンスケの手をヒカリが押し止める。

「まったく相田ってば不謹慎なんだから。アスカ、いったい何があったの？」

「今朝起きたら、シンジが……冷たくなっていたのよ、ベッドの中で」

アスカが悲しさに満ちあふれた口調でそう言うと、ヒカリ、トウジ、ケンスケの3人も重苦しくため息を吐いた。

「そうか、シンジのやつ調子が悪そうやったしな……」

「やっぱり、病気だったのかしら」

「でも、今年で14歳だろう？ 長く生きた方じゃないのか」

トウジ達が話す横でアスカは切なそうにため息を吐き出した。

「病院に行って治療すればよかったのよ」

「無理な延命処置は止めようって……」

ヒカリの言葉にアスカは目に涙を浮かべて答えた。

「最近は何を歩くことも出来なくなっ、ご飯も食べられなくなっていたんでしょう？」

「そりゃあ内臓も悪くなっ居たんだろうな」

「きつと苦しかったんやろうな」

「昨日の夜もシンジの苦しそうな声がアタシの部屋まで聞こえて来て……静かになった明け方までアタシも心配で眠れなかったの」

アスカは感極まって涙を流し始める。

「きつと最後は声も出せないほど力が無くなってしまったのよ、あ

の時シンジの側に行けば死に目に会えたかもしれないのに……」

泣き出してしまったアスカを前にして、ヒカリ達は何も声を掛ける事が出来ずに顔を見合わせるだけだった。

そして、泣きつかれて涙を止めたアスカにヒカリが恐る恐る声を掛ける。

「それで、お葬式はいつやるの？」

「明日にでも、シンジは火葬にされちゃうってママが……」

「そうか、俺も放課後、会いに行ってもええか」

「うん、シンジってば鈴原と仲が良かったもんね」

「私もお菓子を作って持って行ってもいい？」

「シンジってばヒカリのクッキーが大好物だったわね」

アスカは昔を懐かしむように視線を遠く窓の外へと移した。

「シンジと初めて会った時は、アタシも赤ん坊だったから良く覚えていないけど……」

「シンジのやつは周りから好かれていて友達も多かったよな」

「うん、友達のジョンやベツカム、ダイアンからもお見舞いのお花が届いていたわ。また元気に外で遊ぼうって」

アスカがそこまで話した時、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

ヒカリ達はカバンの置かれていないとある男子生徒の机に視線を送ると、困った顔でため息をつく。

「全く碇のやつ、惣流を泣かせたままにして置いてからに……」

「小さい頃からずっと一緒に居た幼馴染なんだろう？」

「私達が励ますより碇君が側に居る方がずっとアスカは元気になるって言うのに」

ヒカリ達は口々に責めるような言葉を言いながら自分達の席へと着席した。

その時教室に息を切らせて掛け込んで来た一人の男子生徒を見て、ヒカリは声を荒げる。

「碓君！ 今頃になって登校してくるなんて！」

「ごめん委員長、アスカは？」

「惣流のやつ、シンジが死んだって朝からグツタリしてたから自分が必死に励ましていた所や！」

トウジの言葉を聞いて、シンジは慌ててアスカの所へ駆け寄る。

「ごめん……いつも元気で笑顔を絶やさないアスカが、大声を上げて泣いているところを初めてみたから、どうしたらいいのか分からなくて……朝から顔を合わせられずにいたんだ」

「アタシもシンジは近いうちに死んじゃうって覚悟はしていたんだけど……空っぽになったシンジのベッドを見たら急にシンジが居なくなっちゃったって実感がわいちゃって、とても悲しくなってしまうたのよ」

「碓、こういう時は胸を貸してやるんだよ」

ケンスケに言われたシンジはアスカの顔をそつと自分の胸に抱き寄せた。

アスカはまたせきを切ったように泣きはじめた。

廊下で教室の前のドアの入口から中をのぞきこんだ2・A担任教師の葛城ミサトは、出席番号1番の綾波レイを手招きして事情を聞く。

「いったい何が起こったの？」

「惣流さんの家で飼っていた犬が死んじゃって惣流さんが泣いてい

るので、碇君が慰めているんです」

「そっか、もうしばらくそっとしてあげるか」

ミサトはそうつぶやくと、2・Aの教室を通り過ぎ、校舎をゆつくりと歩いてもう一周してから朝のホームルームを始めるために教室へ入った。

この作品は以前に公開した作品の部分修正版です（Ver1.0
2）。

この物語にはエヴァは登場しません。ゲンドウとユイは親バカ夫婦です。

「あなた、今年のクリスマスプレゼントはどうしましょう？」

「もうそんな時期か。時の経つのは早いものだな」

「去年と同じ絵本にしましょうか？シンジは本を読むのが大好きですものね」

「それに関して、少し気になる事があるのだが……シンジは少し内向的ではないか？このままだと学校に入ったとき困ってしまうぞ」

「あなたに似てシンジは照れ屋さんですからね」

「そこで私は考えたのだが……」

「……まあ、それは良いアイデアね」

「全てはシナリオ通りに」

「あなた、その変な笑い方止めてください！シンジが真似したらどうするんですか！」

「そ、それは問題があるな……善処しよう」

12月25日のクリスマスの朝。碓家の一人息子シンジがベッドの中で違和感を覚えて目を開くと……すぐ横では金髪の同い年の女の子が寝息を立てていた。

「うわあ！なんで女の子がおとなりで寝ているの！？」

シンジの大声でその女の子は目を覚ましたようだ。

「うわっ！なんで男の子が同じベッドに居るの？」

パニックになった女の子はポカポカとシンジを叩きだした。

しかしそのパンチは力の弱いものでシンジにとっては痛いというよりくすぐったい。

「くすぐったいよ。やめてよう」

しばらくして、その女の子はなぜ自分がここに居るのか気が付いたようだ。

「そうだ、アタシはサントさんに頼まれてシーちゃんとお友達になるように言われたんだった」

女の子はにつこりと笑ってシンジに手を差し出した。

「アタシはアスカよ。よろしくねシーちゃん」

しかし、シンジはそれを無視してパイツと横を向いてしまった。

「僕はお友達なんていないんだ。本を読んでいる方が好きなんだ」

それを聞いたアスカは泣き出しそうな顔になってしまふ。

「シーちゃんもアタシの事嫌いだからお友達になつてくれないの？」

暗く沈みこむような声にシンジは慌てて伸ばされたアスカの手を握る。

「お友達になるから泣かないでよ……」

それでもアスカはまだ暗い表情を崩さない。

「ならどうしてアタシの方を見てくれないの？ いやいやお友達になつてくれても、うれしくない」

「だって、アーちゃんは本に出て来るお姫様みたいに綺麗な青い目をしていて美人だから」

顔を赤らめてアスカの方をちらつと見てそう言うシンジに、アスカは歡喜の涙を流した。

「アーちゃん、僕は何かひどい事を言つた？ ごめんね、泣かないで」
「違ふの。アタシは日本に来てから髪の毛を引っ張られて抜かれちゃったり、目が青いからって公園の遊び仲間に入れてくれなかったんだ」

「僕はアーちゃんみたいにかわいい女の子は見た事無いのに」

「嬉しい、シーちゃん大好き」

アスカは上機嫌になってシンジに抱きついた。

シンジはちよつと困つた顔になったが、アスカをはねのける事はしなかった。

二人がベッドの上でそうして居ると、頃合いを見計らつたようにユイとゲンドウが部屋に入つて来た。

「アスカちゃんはもうシンジと仲良くなったのね」

ユイはそう言つて笑顔でシンジとアスカの頭を優しくなでる。

「よかったなシンジ。友達ができればおねしょもきつと治るぞ」

「ふふっ、シンジは寂しがり屋ですものね」

「ひどいなあ、アーちゃんの前で言わないでよ」

「これからシーちゃんが寂しくないように一緒に居てあげるね」

そう言つてアスカはシンジの唇にそのサクランボのようなかわいい唇をほんの一瞬押しつけた。

驚いたシンジをアスカは満足げに眺めると、ゲンドウの方に顔を向けて礼を述べた。

「ありがとうサンタさん。素敵なプレゼントをくれて」

「問題無い」

「まったくあなたも、不器用なんですから……」

その後アスカは碇家に滞在する事になり、シンジとアスカは一緒に時を過ごす事になった。

朝の着替えも食事も……お風呂も寝るのまで……外を散歩する時はいつも手を繋いでいた。

そんな生活が一週間ほど続き、シンジとアスカが生活に慣れ始めたころ、二人はゲンドウに別れを告げられた。

「そんな、アーちゃんが帰っちゃうなんて嫌だよ！」

「アタシもシーちゃんと一緒に居たいけど……」

「シンジ、アスカちゃんも両親の居る家に帰らないといけないのだ」

そう宥めているアスカとゲンドウの前でシンジはまたもダダをこねた。

「じゃあ今度は僕がアーちゃんの家に行く!」

「シンジ! いい加減にしなさい!」

そんなシンジの顔をユイが平手打ちにした。

「我がまま言うのもいいかげんにしなさい!」

「嫌だっ! 僕はアーちゃんと結婚するんだ!」

「アスカちゃんのご両親もね、もう一週間近くも離れ離れになって寂しがっているのよ。シンジは自分のことしか考えられないそんな悪い子なの?」

そこへゲンドウが助け船を出す。

「シンジ、いい子にしていれば、またアスカちゃんと会わせてやる」

「本当? じゃあ僕はいい子になる!」

「シーちゃん、じゃあ約束しよう。ゆびきりげんまん、うそついたら、はりせんぼんのーます」

シンジとアスカが小指を絡める様子をユイとゲンドウは微笑ましく温かく見守った。

「シンジが反抗するなんて初めての事ですネ、あなた」

「ああ。シンジは今まで大人しすぎたからな。あいつも男の目をするようになった」

しかし、そのシンジとアスカの誓いは果たされることが無かった。

「お父さん、アーちゃんにはもう会えないの?」

「シンジ……すまない」

「アスカちゃんの家族はまたドイツに引っ越しちゃったのよ。ごめんない」

アスカによつて明るい性格になったと思われたシンジは、また以前のような内向的な性格に戻ってしまった。

学校でも教室で静かに本を読んでいるシンジには親しい友達もできず、シンジが家に友達を連れて帰る事も無かった。

携帯電話の着信履歴も両親からのものだけ。

ゲンドウとユイもシンジが素直な子に育ってくれた事には安心してしたが、いまいち覇気の感じられないシンジに不安を感じていた。

「シンジは近くで照らしてくれる子が居ないと明るくなれない性格なのだな」

「どこかにアスカちゃんみたいにシンジの気を引いてくれる子が居ないものかしらね……」

「この前隣に引っ越してきた綾波さんの娘はどうだろう？」

「ああ、レイちゃんですか？ あの子もアルビノが原因でクラスにお友達が居ないらしいですね」

「シンジはきつと友達になれるだろう」

ゲンドウはニヤリと薄笑いを浮かべた。

ユイが電話を綾波家にかけると、レイの母親は上機嫌だった。

「あら碇さん」

「そちらのレイちゃんに友達ができないというお話ですが……」

ユイがそう切り出すと、レイの母親は嬉しそうに話し出した。

「レイの件ではご相談に乗っていただいておりますでした。」

あの後すぐにレイにもお友達ができたんですよ」

「えっ、そうなんですか？」

「私の知り合いの渚さんのところのカヲル君も、アルビノで悩んでいたんですけど、碇さんのお話通りレイを隣に寝かせたらすぐに仲良くなってしまうって……」

「それは、おめでとunggざいます」

レイの母親にユイはシンジの事を切り出せずに電話を切るしかなかった。

「あなた、ごめんなさい。私がシンジとアスカちゃんの馴れ初めを綾波さんにお話したばかりに……」

「まさか、即座に実行に移すとは想定外だったな」

ゲンドウとユイの碇シンジ育成計画に何の進展が見られないままシンジは小学校を卒業し、中学生となっていた。

進学してもシンジは相変わらずクラスで孤立し、真面目すぎる性格と優秀な成績は時にはからかいやいじめの対象となった。

シンジは学校であった嫌な事を日記に書いて憂さを晴らすという消極的なストレス解消方法しか持たなかった。

しかし、シンジが中学二年生、14歳のクリスマスを迎える頃になってゲンドウとユイの下にとある朗報が飛び込んだ。

「あなた、見てください。シンジったら、同じクラスの子に彼女を自慢されたから自分も彼女が欲しいなんて日記に書いてますよ」

「これである計画を実行しても問題は無いな」

2015年12月25日。碇家の一人息子シンジがベッドの中で違

和感を感じて目を覚ますと、隣に金髪の同い年の少女が眠りこけている事に気が付いた。

「うわあ！なんで女の子が隣で寝ているの？……ってアスカ！？」

シンジの大声で寝ていたアスカも目を覚ましたようだ。

「きゃああ！ 何で男が隣に寝てるのよ！？ スケベ、変態！」

アスカはシンジの顔に思いっきり平手打ちを喰らわせて突き飛ばした。

「痛いよアスカ！」

涙目で訴えるシンジの姿を見てアスカはここは日本のシンジの部屋だと思い出したようだ。

「ごめんシンジ！ 痛かった？」

そう言つてアスカはシンジの赤く腫れあがったほおを優しくなでる。もつとも、シンジの顔が赤いのは叩かれた事だけが原因ではなかったのだが。

そこへ聞き耳を立ててタイミングを見計らったゲンドウとユイが部屋に入ってきた。

「二人をここに集めたのは理由があったからなのだ」

「私とゲンドウさん、アスカちゃんのご両親は仕事の都合で南極に行かなくてはいけなくなつたのよ」

「南極に？」

不思議そうに首をひねるシンジとアスカを急かすようにゲンドウが喋りはじめた。

「とにかく着替えて、朝食を食べる。日本でシンジ達の面倒を見てくれる方がここに来るからな」

「うん……わかったよ」

いそいそと朝食を終えたシンジとアスカは、ユイの運転する車で出て行ったゲンドウ達を見送った。

しばらくすると、インターフォンが押され、玄関前にメイド服を着た黒髪の女性が立っているのが見えた。

「碇シンジ君に、惣流・アスカ・ラングレーさんね？ 私は家政婦紹介所から来た葛城ミサト。あなた達の世話をするように頼まれて来たの」

「ずいぶん態度のでかいメイドね」

「でも、何か明るいお姉さんって感じがするよね」

シンジはドアを開けて、ミサトを家に迎え入れた。

「よろしくお願いします、葛城さん」

深々とお辞儀をしたシンジにミサトは笑顔を浮かべて、手を上下に振る仕草をする。

「まあまあ、そんなにかしこまらないで。私もあなたたちをシンちゃん、アスカちゃんって呼ぶから、ミサト、でいいわよ」

「ありがとうございます、ミサトさん」

「サンキュー、ミサト」

「アスカ、さっそく呼び捨てにしたわね……」

ミサトは仕事である家事や洗濯、掃除などをするが小学生より下手だとシンジ達は思った。

「……さっきから掃除しているけど全然汚れが落ちていない気がするんですが」

「さては、落ちこぼれメイドね？ ミサトは」

「うっさいわね！ 文句があるなら自分達でやりなさい！」

怒ったミサトはそれから一切家事の類をやるうとはしなかった。

「職務怠慢よ、ミサト！」

「ミサトさん、真面目に働いて下さいよ」

「それじゃあシンちゃん達が家事をすればいいじゃないの」

アスカとシンジが訴えても、ミサトはへらへらと笑って相手にしなかった。

その日の夜、出張先に出発する前のゲンドウがミサトに電話をかけた。

「葛城君、くれぐれも二人の事を頼む」

「はい、計画通りだらない保護者役を精いっぱい演じさせていただきます」

「君は普通どおりに生活して居ればいい。そうすればシンジとアスカ君は協力して料理や家事をしようとするはずだ」

「そんな、私も社会人として一通りの事はできますよ……」

「君はずばらでがざつで、婚期を逃して恋人をからかう事が一番の趣味の三十路直前の素晴らしい人材としてリツコ君の推薦を受けて選ばれたのだ」

そう断言するゲンドウにミサトは肩を落としたのだった。

次の日、ミサトの部屋に入ったシンジとアスカは足の踏み場もないほどの散らかりように驚いた。

今まで両親にまかせっきりで掃除などした事が無いシンジとアスカだったが、これはまずいと二人で協力して家事をする事になった。

そしてダメ押しとばかりにミサトのカレーを食べた二人は激しく苦しみ、数日後にはお揃いのエプロンをつけて二人は料理をすることになる。

「あらまあ、お揃いのエプロンなんかしちゃって新婚さんみたいね」
「ふふふ、ミサトったら」

ミサトが冷やかしてもシンジとアスカは余裕で受け流す。

入浴は別々だったが、パジャマに着替えたアスカは当然のようにシンジの部屋に向かう。

さすがにこれはマズイと思ったのかミサトは寝る時の部屋は別々にするように言うのだが、2人は聞く耳を持たない。

「だって僕達は小さい頃から一緒に寝ていたんですよ」
「シンジと一緒に寝ると、心がポカポカするの」

シンジの部屋に入ってしまった2人を見送ったミサトは、やりきれない気持ちになってリビングでビールを飲みまくる。

「私がかかけなくても、あの2人は勝手にラブラブになっているじゃないの」

こうして2人の生活はおおむねゲンドウとユイの計画通りになったのだが、シンジとアスカのラブラブはエスカレートしてきた。

「シンちゃん。ビール持ってきて」

夕食の席でビールをせがむミサトを前にして、シンジとアスカは熱い視線を交わしていた。

「シンジ。食べさせてあげる。あーん」

アスカが箸でつかんだおかずをシンジは幸せそうに頬張る。

「アスカちゃんが食べさせてくれるとおいしいね」

「あつたりまえよ、アタシはシンジのお嫁さんなんだから」

二人のやり取りを見ていたミサトは青い顔をして胸を抑え出した。

「アスカのお口にご飯粒が付いているよ」

「シンジが取って」

シンジは舌を伸ばしてアスカの唇についたご飯粒を舐めとる。

「私には痛すぎるラブラブフィールドだわ」

その後しばらく半年ほど、月曜日から金曜日は学校でイチヤイチャ、土日は公園や遊園地でデートをしながらイチヤイチャと言うラブラブな生活が続いた。

「ミサト、アタシ達修学旅行に行かなきゃダメなの？」

「どうして、そんなこと聞くのよ？」

「だって、夜はシンジと一緒に寝れなくなるじゃない」
「アスカ、あなたねえ……」

ミサトはあきれ果ててため息をついた。
そしてキスをしたことによって、シンジとアスカの結びつきは強くなっていた。

キスの回数が増えることにシンジとアスカは強く唇を重ねていた。

「大人のキスよ……学校から帰ったら続きをしましょう」
「うん、楽しみにしているよ……アスカ」

そしてある日放課後、図書委員の仕事を終えて学校から帰ろうとしたシンジは教室で待っているはずのアスカの姿が無いことに気が付いた。

「アスカ、先に家に帰っちゃったのかな……」

シンジが家に帰ると、リビングに紙が置かれている事に気が付いた。その紙を手にとると、シンジにとって驚くべきメッセージが目飛び込んできた。

これ以上シンジとは一緒に居られない、さようなら

A s u k a

「何の冗談だよ！ 日本に戻って来たアスカはずっと一緒に居られるんじゃないのかよ！」

そう叫ぶシンジの肩に、いつの間にか追いついていたミサトが手を置いた。

「アスカは自分の意思でドイツにいるご親戚のところへ行つたのよ……」

「そうだ、アスカはきつとどこかに隠れて僕をドッキリさせようとしているんだ！ じゃあ僕はアスカの大好物のハンバーグを作つてアスカを驚かせてあげよう！」

シンジは大声でそう喚きながら、台所でハンバーグを作り始めた。料理を作り終えたシンジは3人分の食事をテーブルに並べる。しかし、いつまで経ってもアスカが帰って来るはずは無かった。

「ミサトさん、アスカが早く帰ってこないとせつかく作つたご飯が

冷めちゃうよ……」

「シンジ君、いい加減に現実を認めなさい。アスカはもう日本には居ないのよ」

アスカの姿が見えない事を確認すると、シンジは膝を折ってへたりこんでしまった。

「シンジ、アスカちゃんはこのまま一緒に居ると良くないと思ってシンジから離れたのよ」

「ミサトさん、アスカは僕の奥さんなんですよ？ お嫁さんになってくれたんでしょう？」

「アスカちゃんはシンジと結婚をしたわけじゃないわ。まだ口約束の段階だった」

「アスカは僕の事が嫌いになってしまったのかな……」

シンジはその日からまた輝きを失った生活に戻って行った。

それからのクリスマスの日、目を覚ました時シンジは隣にアスカが寝ていないか探すのだが、サンタクロースの贈り物は無かった。

日本から遠く離れたドイツで暮らすアスカは、学校で遠くに居るシンジの事を思っていた。

「シンジ……一緒に居るとアタシはムラムラしてきて我慢できなくなるのよ」

そしてアスカの頭の中にはピンク色の妄想が広まる。

「でも、18歳のクリスマスの朝にはシンジのベッドに潜り込んで……ジュルリ」

授業中によだれを垂らして、ニヤケ顔になるアスカを、クラスの友達達は気味悪がっていましたとさ。

2010年 ヨシユア誕生日記念ヨシユエス短篇 ヨシユアの一番欲しい物

エステルとヨシユアがリベール王国の各支部の遊撃士協会を巡る旅を終えてロレントに戻って来てからしばらくした時の事。

「え？ ヨシユアの一番欲しい物ですって？」

ヨシユアの誕生日、エステルは息を弾ませてシェラザードの居る遊撃士協会の2階の部屋へとやって来た。

エステルに聞かれたシェラザードは少し驚いて聞き返した。

「占いが得意なシェラ姉なら分かると思って」

「タロットにしても、水晶球にしても、抽象的な答えばかりで、具体的な物は分からないわね」

「そっか、ヨシユアっては何をあげてもありがとうって受け取ってくれるから、今年こそは本当に喜ぶ物をプレゼントしたいのよね」

エステルはそう言う残念そうにため息をついた。

ヨシユアは今日1日休みを貰ったので、家でゆっくりとくつろいでいる。

エステルは街で買い物をしてくると言って1人で家を出て行ったのだが、ヨシユアにはバレバレだった。

「そうね、ヨシユアとあんたの馴染のロレントの街の人に聞いてみれば、誰かが何かを知っているかもしれないわね」

「うん、あたし、街のみんなに聞いて来る！」

シェラザードの提案を聞いて、エステルは元氣100倍になって遊撃士協会の建物を飛び出して行った。

「ヨシユアはエステルが笑顔で側に居てくれるだけで喜んでいると思うけど……ま、結果が出たら教えてもらいますか」

シエラザードは1階に降り、受付のアイナと2人でエステルが戻って来るのを楽しみに待つことにした。

エステルが最初に向かったのは遊撃士協会の隣にあるエルガー武器商会だった。

ヨシユアがカシウスに拾われてブライト家で暮らすようになってから準遊撃士の旅に出るまで、ヨシユアはこの店の手伝いをして居たのだ。

「そう言えば、ヨシユアはナイフの手入れを良くしているわよね」

店に入ったエステルが店主のエルガー、ステラ夫妻にヨシユアの好きなナイフについて尋ねると2人とも渋い顔をした。

「エステル、ヨシユアがナイフの手入れを熱心にするのは、遊撃士の仕事で生き残るためだと思うぞ」

「そうなの？」

「そりゃ、長い間使っているナイフに愛着が湧いてきたりはするだろうが、あいつは新作のナイフとかに飛びつくようなやつじゃ無かったな」

「それに、女の子がナイフをプレゼントするのはおばさん、ちょっとはしたないと思うの」

「言われてみればそうかも……」

「そうだエステルちゃんも、もうスニーカーを集めるとか止めてもうちよつと女の子らしく……」

「あ、あたし他の人にも聞きに行くから、またね！」

いつものステラの説教が始まったと察したエステルは、エルガー武器商会を飛び出して行った。

次がエステルが向かったのは、自分とヨシユアの共通の幼友達であるエリッサが看板娘をしている居酒屋アーベントだった。

「え、ヨシユア君の欲しそうな物？」

「そうそう、ヨシユアってば自分で何が欲しいとか言わないからさ、エリッサにも知恵を貸して欲しいのよ、ほら、ヨシユアをビックリさせる料理とかさ」

「エステルって、単純な料理しか作れなかったわよね？　リベール各地を巡る旅をして少しは料理の腕も上達した？」

「それが各地の料理を食べてばかりで、料理は全てヨシユアやクローゼにお任せ……」

「やつぱりね……じゃあ、バッタとかなんか虫でも焼いて食べさせてあげたら？」

「それは試してみたけど、あんまり嬉しくなかったみたい。シエラ姉が言うには引きつった笑顔だったって」

「本当にやっていたとは怖いわね……そうだ、ティオにも聞いてみたらどう？」

「うん、そうしてみる。ありがとうエリッサ、相談に乗ってもらって」

「こつちこそ、役に立てなくてごめんね」

エステルはエリッサに手を振ってロレントの街の郊外、パーゼル農園へと向かう事にした。

パーゼル農園に着いたエステルはすぐに入口の側のナス畑で仕事をしているティオの姿を見つけた。

「やつぽー、ティオ」

「あれエステル、1人で居るなんて珍しいね」

「今日は休みだから、ヨシユアは家でのんびりとくつろいでいるわ」

エステルの隣にヨシユアが居ないのを不思議に思ったティオが尋ねると、エステルはそう答えた。

「そう言えば、今日はヨシユア君の誕生日だっけ。サプライズのお祝いはまだ続けているの？」

「うん、それで今年こそ本当にヨシユアが欲しい物を突き止めてプレゼントしてあげようかなと思ってさ」

「エステルも良く飽きないわね、前は”伝説のあの虫”をプレゼントするとか言ってミストヴァルトの森に行ったりするし」

「あの時はみんなに心配をかけちゃったわね」

ティオに言われたエステルは苦笑を浮かべた。

「確かにヨシユア君ってば、何が好きだとか嫌いだとか表に示さないわね」

「その優しさが逆に困った事になってしまつのよね」

エステルは疲れた表情でため息をついた。

「あ、そうだ、うちの農園に来てヨシユア君が1番嬉しそうだって見えた瞬間はね」

「うんうん」

目を輝かせてエステルはティオの言葉の続きを待った。

「妹のチエルと弟のウィルと遊んでいる時かな、いつも固いヨシユア君の雰囲気はその時はとっても柔らかくなるの」

「うーん、それじゃあチエルとウィルをプレゼントしてあげようか」

「バカねエステル、そんなことできるわけないでしょう」

ここでもヨシユアへのプレゼントを思いつかなかったエステルはテイオにお礼を言ってパーゼル農園を立ち去り、ロレントの街でまた考える事にした。

帰り道のミルヒ街道を歩きながら、エステルはジェニス王立学園でヨシユアの親友になったハンスの言葉を思い返した。

「ヨシユア、もう幸せを取り戻せないなんて事は無いわ、太陽はまぶしいだけのものじゃない」

エステルはそうつぶやくと、何かを思いついたのか遊撃士協会の建物へと駆け込んで行った。

「あらエステル、ヨシユア君に渡す誕生日プレゼントの内容は決まったの？」

息を弾ませて遊撃士協会の建物の中に入って来たエステルに、受付に居たアイナが声を掛けた。

「シエラ姉、居る？」

「ええ、依頼をこなして2階で休んでいると思うけど……もしかして、ヨシユア君に渡すプレゼントが決まったの？」

「うん、それでシエラ姉の助けを借りようと思って……」

「ふふ、頑張つてね」

エステルはアイナに見送られて2階へと行き、シエラザードに思いついた内容を話した。

ブライト家で1人休息を取っていたヨシユアは、自分の部屋で読書をしていた。

遊撃士の旅をしながら本を読む事はできるが、自分の部屋から旅先に持って行ける本には限りがあった。

「もう、こんな時間になってしまっていたんだ……」

ヨシユアは窓の外を見て、部屋にあった何冊もの蔵書を夢中になって読んでいるうちにすっかり日が傾いてしまっている事に気がついた。

「エステルが居ないとこんなに静かだなって」

そう口に出してから、ヨシユアはクスリと笑った。

朝から街に買い物に行くと出て行ったエステルは、この時間になっても帰って来ない。

「またエステルってば、お腹を空かせて戻ってくるんだろうな」

ヨシユアは自分の部屋を出て、夕食を作り始める事にした。

毎年ヨシユアへのプレゼントを探すのに夢中になったエステルは、昼ご飯を食べるのを忘れて辺りを駆け回って帰って来る。

そしてヨシユアにプレゼントを渡した後盛大にお腹の虫をならすのだった。

「あれ……？」

1階に降りたヨシユアは外からハーモニカの音色が聞こえてくる事に気がついた。

その調べはヨシユアが良く知っている『星の在り処』だった。

ここまで上手くハーモニカで吹ける人物の心当たりは一人しか存在しない。

ヨシユアは玄関の扉を開けて、庭に居ると思われる音の主を探す。すると、庭の大きな樹の下で黒い長い髪、白いドレスを着た女性がハーモニカを吹いている姿が目に入った。

「カリン姉さん……？」

驚いた顔でヨシユアがゆっくりと近づいて行くと、長い黒髪の女性は無言で微笑んだ。

「幻じゃないよね？」

ヨシユアが問い掛けると、長い黒髪の女性は首を横に振ってヨシユアに向かって両手を広げた。

「姉さん、姉さん……！」

胸元で泣きじゃくるヨシユアを、長い黒髪の女性はゆっくりと抱きしめた。

「ありがとう、エステル。今までの中で最高の誕生日プレゼントだったよ」

エステルの胸の中で泣いていたヨシユアは、顔をあげると笑顔でエステルに微笑みかけた。

「……あ、やっぱりわかつちやった？」

「うん、最初からエステルだって分かってた。でも、君が髪を黒く染めてまで姉さんの真似をしようとしているのを見て驚いたよ」

「そっか、すっかりお見通しだったのね」

「だけど、エステルがそこまでしてくれた好意に、僕も甘えようかと思って」

エステルはヨシユアに向かってスツと手を伸ばす。

「ヨシユア、亡くなってしまったお姉さんとレオンハルトさんは戻って来ないけど、あたし達はまた新しい家族を作る事が出来るはずよ」

「えっと、それはどういう意味だい？」

エステルの言葉を聞いて、ヨシユアは顔を赤らめる。

「だから、あたしもヨシユアの旅について行く！そしてレンをあたし達の新しい家族にしてあげるのよ」

「そっということか……」

ヨシユアはホツとしたように息を吐き出した。

そして、ヨシユアは差し出されたエステルの手をグツと握った。

「僕がエステルを置いて行くはず無いだろう？ エステルは僕の家族なんだから」

その時エステルのお腹の虫が盛大な音を立てた。

「さあ、まず腹ごしらえをしないとね」

ヨシユアはエステルの手を引いてブライト家の中へと入って行った。

あたしはサンタクロースっていうのは、居るとは断言できないけど、完璧に居ないと証明されたわけでもないと思うのよね。

そりゃあ、枕元にプレゼントを夜こっそり置いて行ったのは父親だつて言うのは小さい頃から解っていたわ。

でも、それは親達がサンタの真似事をしているだけかもしれないじゃない？

同じように宇宙人、未来人、異世界人だつて居ないと科学的に証明されたわけじゃない。

探査ロケットに地球外生命体の可能性を感じさせる細胞が付着していたつて言うじゃない。

未来人だつて、正しい歴史を調べるために潜んでいるかもしれないし、異世界人だつてあたし達の世界に溶け込んでこちらの住人になつて居るかもしれない。

だから、もしかして居るかもしれないって思った方が面白いじゃない！

今日は12月18日、クリスマスが近いこの日に大事件が起こったの。

あたし達はクリスマスパーティに必要な物を街で買いそろえるために部室を出ただけ……。

部活棟の階段を降りている時に、キョンが後ろから転げ落ちて来たのよ！

目を丸くしながら叫び声を上げたキョンの体が宙に舞って振り返ったあたしの目の前を横に通り過ぎて、後頭部から床へと落ちて行くのが見えた。

キヨンが床に叩きつけられる大きな音がしてみくるちゃんが悲鳴をあげた。

でも、あたしは倒れたキヨンの事よりも、振り返った瞬間に見えたキヨンを突き落とした人影を見てショックを受けた。
なんで、あんたがそこに居るの!?

北高の制服をひるがえしてその人影は逃げて行く。

「……救急車」

有希が119番に電話を掛ける姿を見て、あたしはやつとキヨンの身に何が起こったのか知って、体中から血の気が引くのを感じた。

「キヨンくん、キヨンくん!」

みくるちゃんはぐったりとして動かなくなったキヨンの名前を呼んでオロオロしている。

「みくるちゃん、有希の電話の声が相手に聞こえないから静かにしてよ!」

あたしはついみくるちゃんを怒鳴りつけてしまった。

みくるちゃんがビクツと体を震わせて黙り込む。

きつい言い方になってしまったけど、あたしもキヨンの事がそれだけ心配だったのよ。

キヨンはぐったりと倒れ込んで気を失っていて動かない。

もし二度と目を開かない、なんて事になったら?

こらあたし、いったい何を演技でも無い事を想像しているのよ!

でも、あたしの胸の動悸は治まらなかった。

学校に救急車が到着して、校庭の中に救急車が入って来る。

ほとんど残って居なかった北高のみんなも何事かと辺りが騒がしく

なるのがわかった。

古泉君が慌ただしく部活棟の外へ出て行く。

みくるちゃんはおぼろ然自失して崩れ落ちてしまっているわ。

あたしも、有希から見たらみくるちゃんと同じ状態なのかもしれない。

頭がぼーっとして何も考えられなかったから。

「こちらです」

救急隊員の人達が古泉君に案内されてやって来た。

そして協力してキヨンを担架に乗せる。

その間もキヨンはぐったりとしていて一度も目を開かない。

悲しくなって、あたしの目に涙が浮かんた。

「涼宮さん、ご家族への連絡は僕がしておきます。あなたは彼に着いて居て下さい」

あたしは無言で古泉君の言葉にうなづく。

視界がぼやけて古泉君の表情がよく見えない。

こんな状態で歩いてあたしまで怪我をしてしまったらどうしようもない。

泣いているのがみんなに分かってしまうけど、あたしは腕で涙をぬぐった。

運ばれるキヨンを急いで追いかけたあたしは、救急隊員の人に一緒に救急車に乗せてもらうように頼んだ。

「君、この子の彼女かい？」

おじさんの救急隊員の人に聞かれて、あたしは首を縦に振ってしまった。

いつものあたしならきっぱり否定するところだけど、この時ばかりはキヨンが心配だったから、そんなの問題にしていられなかったわ。あたしの真剣さが伝わったのか、あたしは救急車に乗る事を許された。

古泉君と話していた救急隊員の人が運転席に乗り込んで、あたしとキヨンを乗せた救急車はサイレンを鳴らして走りだした。

いつかは乗ってみたいと冗談交じりで話していた救急車にまさかこんな形で乗る事になるなんて、本当に最悪だわ。

救急車の中で、あたしはキヨンが落ちた時の状況を聞かれたけど、一瞬の事だったから後頭部を打ったとだけしか言えなかった。病院に運ばれたキヨンはすぐにCT検査を受ける事になった。

あたしが廊下の椅子に座って検査の結果を待っていると、タクシーで追いかけて来た古泉君と有希とみくるちゃんがやって来た。

キヨンの家族も古泉君の連絡を受けてすぐに駆けつけて来るみたい。初めてキヨンのおじさんとおばさんと顔を合わせる事になったんだけど、2人ともあたし達の自己紹介などほとんど耳に入っていない感じだった。

あたしはキヨンは大丈夫って救急車の中で励まされたから少し冷静になれたけど、よく聞かされていないおじさん達が心配するのも当然なのかもしれない。

妹ちゃんもみくるちゃんと同じぐらい泣きわめいてしまっただ変だったわ。

病院の中だから静かにしようって言い聞かせるはずのみくるちゃんが泣いているんだもの。

キヨンに外傷が無く、脳内出血なども見られないって聞いてあたしは一安心した。

でも、キヨンの意識が戻らない原因は先生にも分からないって。もしかしたら、長い間目が覚めないかもしれないって医師の先生が言っと、泣きつかれていた妹ちゃんとみくるちゃんがまた泣き出した。

だから、あたしは2人を安心させるために空元気を出してこう言ったの。

「あたしがキヨンの目が覚めるまでつきっきりで看病してあげるから！」

学校もほうりだして、ずっとキヨンの病室に泊まり込むなんて、あたしのわがままだった。

でも、キヨンのおじさんとおばさんはあたしにキヨンの事を任せてくれたし、古泉君は寝袋とか食事とか持ってきてくれて、便宜を図ってくれた。

学校が終わってから古泉君、有希、みくるちゃんが交代であたしとキヨンの居る病室に来てくれる事になったみたい。

あたしは悪質な風邪をひいたって事で学校を休ませてもらっている。でも、このままキヨンが何週間、何ヶ月も目が覚めなかったらあたしもずっと病院に居るわけにはいなくなる。

ううん、そんなダラダラと病院のベッドで寝ているなんて許さないんだから！

「団長命令よ、いい加減に起きなさいよ！」

何度このセリフを繰り返しただろうか。

ついにキヨンが意識を失ってから2日目の夜を迎えてしまった。

昨日に引き続いて、この病室に泊まり込んでから不思議な夢を見るようになった。

その夢の中のあたしは光陽園学院の制服を着て古泉君と一緒にクラスで学校に通っている。

おかしい、光陽園学院は女子高のはずなのに。

でも、違和感を感じたのはそこに居たあたしの表情だった。

あたしからみたあたしは苛立っている、退屈そうな顔をしていた。

SOS団なんてまったく知らない、あの楽しい日々とはまるで別の生活を送っているあたし。

そんなあたしとキヨンが夢の世界でまた会う事になる。

キヨンはあたしにジョン・スミスと名乗ったのだ。

「はっ、まさか……そんなわけ無いわよね」

夢の内容に驚いて、あたしは目を覚ましてしまった。

カーテン越しの月明かりに照らされたキヨンの寝顔を見て、あたしは自分に言い聞かせる。

高校に入学して前の席に座っていた男子が偶然ジョン・スミスだなんて言う夢物語なんてありえない、と。

きつと他人の空似よ。

次の日にやって来たみくるちゃんに、運命の再会ってあり得る？

って聞いたら、みくるちゃんは目を輝かせて、もしそんなことがあったらロマンチックだって言っていたわ。

そうよ、そんな偶然……無いとは言えないけど……まさか、そんな展開をあたしが望んでいるから、そんな夢を見ちゃうって言うの？ それこそあり得ないわよ。

キヨンが気を失ってからついに3日目。

なぜか今日中にキヨンの目が覚めないと、ずっとキヨンは眠ったままになってしまいかもしれないって胸騒ぎがしたわ。

あたしは有希が持ってきた童話の本へ目を向けた。

その童話は呪いで眠らされたお姫様が、王子様のキスで目覚めてハッピーエンドで終わると言う結末の内容だった。

無口な有希の事だから、本の内容がそのままあたしへのメッセージになっているのだろう。

だけど、あたしは寝ているキヨンにキスをするという事は絶対にしなくなかった。

だって、それってフェアじゃないし……って何を考えているのよあ

たし！？

みくるちゃんが帰った後、無情にも日は暮れて行く。

何度目のため息だろう、あたしは数える気力が無くなった。

七夕の時期の思い出し憂鬱より重症ね。

そして、その日もあたしは寝袋に潜り込んで泊まる事にした。

昨日の夢の続きなのか、光陽園学院の制服を着たあたしとキヨンが古泉君と一緒に3人でいつもあたし達が集まっている喫茶店で話している。

キヨンは以前にあたしにもした有希が宇宙人、みくるちゃんが未来人、古泉君が超能力者と言う話をしていた。

「こつちの世界のハルヒは理解が早いな。前に話した時はまるで信用されなかつたんだぜ？」

「そのあたしは本当にバカね」

同じあたしなのにバカにされると腹が立って来た。

でもそのあたしは驚く事にだんだんと嬉しそうに目を輝かせて行った。

そして、向こうの世界のあたしもSOS団を創ると宣言を宣言をしたの！

即断即決、やると決めたあたしはすぐに北高に直行、書道部に居たみくるちゃんをさらって有希の居る文芸部の部室へと足を踏み入れた。

そして、部室にはあたし達SOS団の5人がそろった。

このままじゃキヨンがあつちのあたしに取られてしまう。

こつちのあたしは用が無くなってしまふ、そんな気持ちに捕らわれた。

胸が痛くなつて、その後文芸部の部室であたしや古泉君、有希やみくるちゃん、キヨンがどんな会話をしていたかなんて耳に入らなかった。

でも、最後にキヨンが言った言葉だけが耳に残った。

「俺は今まで過ごして来たSOS団が気に入っているんだ、だから新たなSOS団に入るつもりはないのさ」

眼鏡を掛けた有希がキヨンの言葉を聞いて、悲しそうな笑顔を浮かべたように見えた。

でも、あたしは有希への同情より、心の底から暖かくなるような嬉しさで胸がいっぱいだった。

やっぱり、キヨンはあたし達と過ごしたSOS団の方が楽しいと思ってくれたのね。

あたしは幸福感に包まれたまま、このままずっと眠っていたいと思っただけ。

だけど、誰かにほつぺを思いつきつねられた。

この痛みは夢じゃない、現実だ。

「わあっ!？」

目を開けたら、あたしのほつぺを触っているのがキヨンだと知ってあたしは驚いてしまった。

あたしは首を激しく揺り動かして眠っていた頭を強引に目覚めさせた。

「キヨン、起きるなら起きるっていいなさいよ、あたしにも準備があるんだからね!」

あたしは無防備な寝顔をキヨンに見られた気恥かしさからキヨンに大声で言ってしまった。

すると、キヨンは口元に人差し指を立てて、『静かに』のジェスチャーをした。

「心配を掛けて、すまなかったな」

「ふん、団長が団員の心配をするのは当たり前なのよ」

病院の消灯時間をとくに過ぎていた事もあって、あたしとキヨンの顔を照らすのは月明かりだけだった。

普通の大きさの声で話す事も出来なくて、あたし達は抑えた声でひそひそと話す事しかできなかった。

その声があたしの眠りを誘ったのだろう、あたしはいつの間にかキヨンのベッドに突っ伏して眠ってしまったらしい。

あの不思議な夢は見なくなった。

次にあたしが目を覚ました時には、キヨンの病室には古泉君、有希、みくるちゃんもやって来ていた。

「おや、お目覚めですか」

目を覚ましたあたしに声を掛けたのは、いつもと変わらない笑顔を浮かべた古泉君。

持ってきたお見舞いの花束を花瓶に活けているみくるちゃん。

冬の制服を着てキヨンのベッドの側に立っている有希。

やっと元のSOS団が戻ってきたのだと実感した。

あたしが寝ている側で、キヨンが目を覚ましたと病室には医師や看護師が駆けつけて来てとんでもない騒ぎになっていたみたい。

そんな中グース力寝ていたあたしの姿を思い浮かべるととんでもなく間抜けな気がする。

「キヨン、この数日のSOS団無断欠勤の罪は重いわ、罰ゲームとしてクリスマスはトナカイの衣装を着て一発芸をする事！ もちろん子供会でもね！」

他のみんなが居る手前、あたしはキヨンにそう言い残して古泉君達と一緒にキヨンの病室を出た。

病院の廊下であたし達はキヨンのおばさんと妹ちゃんにすれ違った。軽くあいさつを交わすだけにする。

だって、2人は早くキヨンの無事な姿をみたいはずだもの、引き止めるわけには行かないわ。

「さて、退院祝いはどうしましょうか」

帰りのタクシーの中で古泉君がそう言うと、あたしの中でパツと面白いアイデアが浮かんだ。

「ねえ、今度のクリスマスパーティーの事だけど……」

あたしのサプライズプレゼントに古泉君やみくるちゃん、有希も賛成してくれたわ。

自分で鍋料理を作るなんて初めてだから上手く行くかどうか分からないけど、きつとおいしいものを作って見せるんだから！

あたし特製の鍋を食べて驚くがいいわ、キヨン！

さっそく一回目の練習をするために、家に帰る予定だったあたし達は街でタクシーを降りる事にした。

キヨンのお見舞いで疲れているかもしれないのにごめんね、と謝っておく。

料理する場所は一人暮らしたと言う有希の部屋を使わせてもらう事にした。

調理器具がそろっているのに、使わないなんてもったいなさすぎるわよ、有希。

有希に料理の仕方を教えながら、あたしはふと思い浮かんだ疑問を有希にぶつける。

「有希、あんた双子だったりしないわよね？」

有希は首を無言で横に振った。

じゃあ、キヨンを階段の上から突き落とした人影は……。

それこそ、他人の空似の幻覚よね。

あたしはそう結論付ける事にした。

キヨンが突然目を覚ました事も、脳に後遺症が残っていない事も、医学的にはとても信じられない事だと聞いた。

きつとこの奇跡はサンタクロースがプレゼントをくれたのよ。

さすが、本物のサンタは親達よりも数百倍気前がいいわね！

今年は楽しいクリスマスを迎えられそうだ。

あたしはサンタクロースに心から感謝した。

惣流アスカと碇シンジは幼稚園の頃からの幼なじみ。

第三新東京市のコンフォート17に住んでいたシンジの家族の隣に、ドイツからアスカの家族が越して来たのだ。

最初アスカはドイツ語しか話せなかったで、周囲から孤立していた。

そんなアスカに初めての友達になってあげたのがシンジだった。

ゲンドウは学生時代ドイツに留学していた経験があったので、ドイツ語は上手かった。

しかし、ゲンドウは自分がアスカの理解者になるより、息子にその役目をさせる事を考えたのだ。

ユイも隣家の少女が孤立してしまっている事に心を痛めてシンジがアスカと仲良くなるように後押しをした。

アスカはシンジと友達になれた事で、シンジの妹のレイ、友達であるトウジ、ケンスケ、ヒカリとも仲良くなれた。

そして、日本語も上手に話せるようになってクラスメイト達ともコミュニケーションがとれるようになって、アスカの親友はシンジである事には変わりは無かった。

「アスカ、女の子にクリスマスプレゼントを贈りたいんだけど相談に乗ってくれないかな？」

小年生になって初めてのクリスマス、シンジから話を持ちかけられた時はアスカは嬉しさで心の中で飛び上がりそんな気持ちになった。それを必死に押し隠して、シンジに答える。

「ま、まあシンジじゃ変なものを選んでしまいそうだしね。アタシが見てあげるわよ」

「よかった、アスカが選んでくれるなら安心だよ！」

シンジは笑顔になってアスカに感謝の言葉を述べた。

「そりゃあ、アタシが貰うものだし当然よ」

「アスカ、何か言った？」

「ううん、何にも！」

アスカのつぶやきはシンジの耳に届かなかったようで、シンジに尋ねられたアスカは首を横に振った。

シンジとアスカはその日の放課後、商店街の洋品店へと足を運んだ。

「ねえ、手袋なんて良いんじゃない？」

アスカは赤い小さな手袋を指差して、シンジに勧めた。

「プレゼントしたら、喜んでくれるかな？」

「これから寒い季節だし、ピッタリよ！」

「うん、お母さんからお金をもらって今度買いに来るよ、ありがとうアスカ」

自信たっぷりのアスカの言い分に納得したのか、シンジは赤い手袋を買い、事を即座に決断した。

そして、クリスマスイブの日。

シンジとアスカはシンジの部屋でお互いのプレゼントを交換する事になった。

「はい、いつもみんなに配っているプレゼントだからシンジにもあげるわ」

アスカはそう言ってクッキーの入った袋を渡した。

「うわあ、アスカのお母さんが焼いてくれるクッキーっておいしいんだよね」

アスカの家族はドイツに住んでいたもので、そのクッキーはレープクーヘンと呼ばれる特別なものだった。

レープクーヘンとはクリスマスの飾り付けに使われる、はちみつがたっぷり、スパイスの香りがたっぷりと効いた焼き菓子だった。

「こ、今年のレープクーヘンは特別製だからいつもと違った味がするかもね」

「そうなの？」

アスカは少し顔を赤らめながらシンジにそう言った。

急にシンジにプレゼントをもらう事になったアスカだったが、どんなプレゼントを用意すればいいか思いつかず、自分の手でレープクーヘンを焼く事で気持ちを込める事にしたのだ。

「ねえ、食べてみてよ」

「今すぐ？」

早くシンジに気が付いて欲しいアスカは、レープクーヘンを食べるように急かした。

シンジはレープクーヘンを口の中に入れてじゅくりと味わう。

「うーん、いつもと変わらないおいしいレープクーヘンだと思うけど？」

「そ、そう？」

シンジの味覚が鈍いのか、アスカの料理の腕がキョウコに肉薄しているのか。

感想を聞いてアスカはガックリと肩を落とした。

「僕もプレゼントをもらってばかりで悪いから、今年はお返しをしようと思って」

シンジの言葉を聞いたアスカは気分を直して顔をあげた。

アスカがシンジからプレゼントの箱を受け取って開けると、その中にはアスカが選んだ赤い手袋が入っている。

「ありがとうシンジ」

アスカは笑顔になってシンジにお礼を言っ、赤い手袋を胸に抱え、シンジの部屋を出てリビングに向かった。

レイやユイにシンジからもらったプレゼントを見せるためだ。

しかし、碓家のリビングに着いたアスカはレイが真っ赤な手袋をしているのに気が付き青い顔になった。

「レイ、その手袋は？」

「お兄ちゃんからのクリスマスプレゼント、アスカお姉ちゃんも、もらったの？」

無邪気な笑顔で答えるレイ。

アスカは後ろから追いかけて来たシンジの方を振り向くと、顔を真っ赤にして怒り出す。

「ぬか喜びさせないでよ、このバカシンジ！」

アスカはシンジに赤い手袋を投げつけると、泣きながらシンジの家

を出て行ってしまった。

「ど、どうしたの？」

突然キレたアスカにシンジは訳が分からず戸惑うばかり。

「シンジ、今すぐこれを持ってアスカちゃんを追いかけてなさい！」

「どうして？」

「女の子を泣かせたのよ、早く！」

「う、うん……！」

ユイに言われたシンジは、手のひらでユイからのプレゼントを受け取ると急いで家を出て隣のアスカの家へと向かった。

「ユイ、レイ、シンジ、帰ったぞ」

「お帰りなさいませお父様」

その日の晩、家に帰ったゲンドウは玄関で正座して出迎えたアスカを見て目を丸くした。

「ど、どういう事だ？」

「だって、アタシとシンジは婚約したんですもの」

アスカの言葉を聞いたゲンドウは吹き出して膝を折って倒れ込んだ。嬉しそうな笑顔を浮かべるアスカの左手の薬指には指輪がつけられていた。

しかし、サイズは少し大きめだったようだ。

「……これはユイが付けていた指輪か？」

「そうよ、もちろん左手の薬指の指輪はあげてはいませんがね。」

右手の方をアスカちゃんに」

ゲンドウの言葉に、遅れて玄関に顔を出したユイが笑顔で答えた。

「だってアスカちゃんって可愛いんだもの、是非レイのお姉さんにしてあげたいわ」

ユイは後ろから引っ張って来たレイの頭とアスカの頭を抱きしめた。そして3学期の始業式の日、アスカは朝のホームルームで教壇に立った担任のミサトを押し退けて、シンジとの婚約発表をするのだった。

クラスメイトのおめでとうの言葉に囲まれたシンジは、アスカと共に照れ臭い顔でありがとうと答えるのだった。

L A S 小説短編 八方美人と明鏡止水

アタシは第三新東京市第壱中学校、2年A組、惣流アスカ。

日本人の血とドイツ人の血が混じったクォーターなの。

それだけあって、アタシは宝石のような青い瞳、紅茶色の髪、ママ譲りの美貌を持った、プロポーションも完璧な容姿端麗を絵に描いた存在ってわけ。

さらに、成績優秀、スポーツ万能、クラスメイトと教師からも受けがいい、そして学級委員で生徒会役員！

これだけ条件がそろえばクラスメイト全員、いえ、学校中の生徒達の尊敬と注目の的のはずだったんだけど……。

アタシはクラスメイト全員の注目を浴び続けるわけにはいかなかった。

同じクラスに憎いアタシのライバルが居るからだ。

そいつの名は碇シンジ！

幼稚園の頃に知り合った、腐れ縁とも言うべき存在。

全くあんなグズでドジでのろまでさえないヤツのどこがいいのかしら？

ルックスも平々凡々、背も他の男子に比べて低いし、成績も運動神経も平均以下。

おまけにそんなに話上手ってわけじゃないのに、アイツの側には男子女子を問わず人が集まる。

シンジが授業で解らなかった所があると言うと、周りの子が親切に教えた。

「ありがとう」

「あ、でも惣流さんに教えてもらった方が良くないんじゃないの？」

シンジと目があったアタシは微笑んだけど、心の中では怒っていた。

「うつん、惣流さんは忙しそうだから」

「そうよね、いろいろな委員会に引っ張りだこだもんね」

シンジはそうしたアタシの心中を心得ているのか、遠回しにその提案を断っていた。

そう、シンジは学校の外でのアタシの姿を知っているのだ。

学校では爽やかな優等生を演じているアタシ。

趣味もクラシック音楽鑑賞、部活もクラシックバレエとお嬢様そのもので通している。

「アスカ、この前貸していたアニソンのアルバムは持ってきてないよね、ケンスケが借りたと言ってうんだ」

「バカっ、アタシが学校にそんな物を持つてくるはず無いでしょう？」

「そ、そうだよね、ごめん」

人気のない廊下で声をかけて来たシンジをアタシは追い散らした。

アタシの本当の姿をばらしてしまわないようにアタシはシンジに口うるさく念を押していた。

学校ではアタシはシンジとの接触を極端に避けている。

いつアタシの地の性格が飛び出してしまうか分からないからだ。

クラスの生徒達はアタシの仮面にすっかりだまされて勉強を教えてくれなどとアタシの側にやって来る。

アタシはそんな子達に喜んで勉強を教えたし、感謝されるのも快感だった。

しかし、クラスの人気を独り占めするという事はシンジが居る限り出来なかった。

さらに、学校のたいていの男子達はアタシにラブレターを送ったり、告白をしてきたりしてくるけど、シンジはそういうそぶりを見せな

いのが気に入らない。

シンジが自分から声を掛ける女子とさえいつも教室の片隅の自分の席で本を読んでいる綾波って子だ。

出席番号が1番だけって以外、何の特徴も無さそうな地味な女の子。まあシンジにはアタシみたいな輝きすぎている存在はまぶしすぎるから、同じような地味な存在に親近感を覚えるんでしょね。

アタシはそう強がってはみたけれど、シンジが告白をして来ないのは気に入らなかった。

でも、中学校に入ってから積み上げて来た優等生と言うブランドが崩れ落ちる日は意外にも早くやって来た。

ある冬の日曜日、アタシはどてらにもんぺと言う田舎のおばあちゃんのような服装でこたつでテレビを見ながらダラダラと過ごしていた。

朝からパパとママも出かけてしまっているから、髪型もくしをいれて下ろすだけになっていた。

インターフォンが鳴らされたので、出て見るとシンジだった。

用件を聞くと、この前貸したアルバムを返してもらいに来たと言う。アタシはコタツに戻ってシンジに言い放つ。

「面倒くさいから、アタシの部屋から適当に持って行ってよ」

「アス力、日曜だからってだらけすぎじゃないの？」

「別にいいの、学校では完璧な優等生を演じているんだから疲れちゃうのよ、休息も必要なわけ」

「そんなくだらない事やってるから疲れるんだよ」

「何よ、アンタは人に褒められたり、感謝されたり、尊敬されたりして嬉しくないわけ？」

「嫌じゃないけど」

「じゃあ、アタシの事は放って置いて！」

イラだったアタシはそこでシンジとの会話を打ち切った。
シンジはアタシの部屋で少しの間アルバムを探して、外へと出て行った。

「ふん、いちいちうるさいんだから」

アタシはそうもらしながら戸棚からせんべいを取り出してかじり始めた。

しかし、数分も経たないうちにまたインターフォンが鳴らされた。

「どうせまたシンジでしょ、まったく腹が立つ！」

シンジは別れた後も、すぐに用事を思い出して引き返して来るような事が何度もあった。

それがアタシの油断を誘ったのだ。

アタシは相手を確認しないでドアを開けてしまった。

「バカシンジ、寒いんだから用事は一回で済ませなさいよ、このアホンダラ！」

「惣流さん……？」

「洞木さん？」

アタシは玄関先に立っていたクラスメイトの女の子を見て、持っていたせんべいを地面に落としてしまった。

洞木さんはお下げ髪の真面目っぽい子としか印象に残っていない。
休日にあたしの家を訪ねてくるなんて、ありえないはずだ。

「これを惣流さんの家に届けてくるようにって頼まれて……」

洞木さんは顔を赤くしながら、アタシに小さな包みを手渡した。どうやら、PTAでママが洞木さんの親御さんと知り合って、約束をしたようだ。

「え、えつと、これはね……」

「じゃ、じゃあ惣流さん、さようなら！」

アタシが言い訳をしようとする前に洞木さんは走り去ってしまった。洞木さんにどてらもんぺ姿を見られてしまった。

ぼさぼさの髪の毛とせんべいまで……。

しかも、シンジに対する下品な言葉遣いまで聞かれてしまった。

洞木さんはみんなに私の事を話してしまうかもしれない。

真面目そうな子だけど、無いとは言い切れないし……。

「身の破滅よ！ もうお終いだわ！」

アタシは頭の中が真っ白になった気分になって頭を抱えてそう叫んでしまった。

「アスカ、一体どうしたのさ？」

アタシのそんな姿を見たのか、アタシの大声が聞こえてしまったのか、隣の家からシンジが出てきてしまった。

「アタシのこのどてら姿を洞木さんに見られてしまったのよ、とんだイメージダウンよ！」

「そんな事言っただって、その姿で玄関に出ちゃったアスカが悪いんじゃないか」

「明日、学校ではきつとクラス中からの笑い者よ、もう二度と学校

に行けないわ」

「そんな事でアスカを嫌いになる人達となんて、付き合う必要無いじゃないか！」

シンジに突然両肩をつかまれて、アタシはドキッとした。

「何よ、アンタにアタシの何が分かるって言うのよ！」

「少なくとも、学校のみんなよりはずっと知っているよ、アスカが褒められたいからって必死に努力している事も」

「そうよ、じゃあ分かるでしょう、アタシの立場がまずくなっただけ」

「アスカはもう、アスカのお母さんに充分褒めてもらっているじゃないか、それ以上何を頑張る必要があるんだよ」

シンジに言われてアタシの頭の中にママと会話を交わすアタシの声が聞こえて来た。

そうだ、テストで満点を取ったのも、運動会で1位になったのも、全部ママに褒めてもらって頭をなでもらったためだったんだ……。それがいつの間にこんな見栄っ張りになってしまったの……。

「僕は嬉しそうにしているアスカの姿がずっと好きだった」

「嘘っ、じゃあ何であの綾波って子と仲良くしていたのよ」

「綾波さんはクラス図書の係だったから話してただけだよ」

「そう言えば、あの子って本が好きだったから立候補したんだっけ」

アタシ達の学校では読書を推奨するためにクラスごとに本棚が置かれていた事を思い出した。

「もしかして、妬いてくれた？ そうだったら、嬉しいな」

「な、何をうぬぼれているのよ！」

ここで認めてしまったら、シンジにアタシがほれてたって事で主導権を握られちゃうじゃないの！

「僕は、アスカに好きになってもらえばそれで満足だから」

シンジの言葉を聞いて、アタシは胸を撃たれる思いがした。だけど、この感覚は痛いものじゃない。

嬉しさで舞い上がってしまいそんな気持ちがした。

「アタシも……」

アタシは胸が締め付けられてこれだけ答えるので精一杯だった。

この時からシンジとアタシは彼氏と彼女になった。

「でも、やっぱりアタシは学校に行きたくない、洞木さんもきっとアタシを見て幻滅したと思うし」

「そんな事無いわ！」

絞り出すような洞木さんの声が聞こえて、アタシはビックリしてシンジから体を離して振り返ってしまった。

「洞木さん、どうしてここに！？」

「ごめんなさい、惣流さんの姿を見て驚いて立ち去ってしまって、悪い事をしたなって思って戻って来たの」

シンジが尋ねると、洞木さんは走って来たのか息を切らしていた。

「私、惣流さんの服装を見てガッカリしてないわ。逆に嬉しいと思うもの」

「どうして、アタシは洞木さんの前で醜態をさらしたのよ？」

「だって、惣流さんは外見も中身も完璧だったから、雲の上の存在のような気がして近寄りにくかったと言うか……あつ、ごめんなさい、悪い意味じゃないのよ？」

「うっん、私も洞木さんの言いたい事が分かったから」

洞木さんがアタシの事を軽べつしていない事を知って、アタシはホツとすると同時に胸が暖かくなるのを感じた。

「アスカ、立ち話を続けても寒いから、洞木さんに中に入れてもらおうよ」

「えっ、でもお邪魔だろうし……」

「遠慮しないで、アタシ達は友達でしょう？」

「そうね」

洞木さんが笑顔でうなずいてくれてアタシはホツとした。

思えば、中学に入ってから本当の友達と呼べる存在は誰も居なかった。

それはそうね、嘘の自分と本当の友達になってくれる人なんていないもの。

それからアタシとシンジと洞木さんはコタツに入りながらいろんな事を楽しくおしゃべりした。

洞木さんもこれからはヒカリって呼んで良いって言ってくれたしとても嬉しかった。

「でもバカシンジが何でクラスのみんなからあんなに好かれるかどうかが理解できないのよね。アタシみたいに才能あふれる人間ならともかく」

「アスカはひどい事言うなあ」

「碇君は自分をよく見せようと無理をしないで自然体でいるから、

みんなに好かれるのよ」

「自分勝手って事？」

アタシが尋ねると、ヒカリは首を振ってさらに説明を重ねる。

「『明鏡止水』って言葉の語源を知ってる？　ありのままの自分で碇君と付き合う事が出来るから、気疲れしたりしないのよ」

「そっか、シンジもありのままのアタシを好きだって言ってくれたし」

思わずそうつぶやいてしまったアタシは、あわてて口を手で押さえた。

しまった、ヒカリの目の前だった。

「アスカはその碇君の告白の言葉に心をすっかり奪われてしまったってわけね」

「お願いヒカリ、今は聞かなかった事にして誰にも言わないで！」

「どうしようかな、アスカってからかうと可愛いし」

「あーん、ヒカリのいじわる！」

アタシは今まで自分を優等生と言う粹に無理やりはめようとなんてバカな事をしていたのだろう。

明日からは正直な自分をさらけだして行こうと思う。

まずは、元気一杯に朝のあいさつをすることから始めよう。

クラスみんなはそんなアタシの事をどう思うかしら？

仮面を被っていたズルイ女だって軽べつするだろうか？

うん、絶対に居ないとは言い切れない。

でも、アタシは嫌われたり、傷つく事を恐れない。

だって、アタシには支えてくれるシンジやヒカリが居るんだから。

L A S 小説短編 犬はかすがい（前編）

「えっ、ギターが欲しい？」

葛城家の夕食の食卓で、シンジに話を切り出されたミサトは驚いてそう言った。

「アンタ女の子にもてたいからそんな事言いだして、あーいやらしい」

アスカがからかうような表情でシンジを見つめる。

「そんなんじゃないよ、トウジ達とバンドを続けようって話になったんだよ」

「チェロがあるじゃないの」

力説するシンジにアスカはそう返した。

「まあ、バンドをやるならギターがあった方がいいわね」

ミサトは腕組みをしながらうなずいた。

「何でシンジがギターをやるのよ？ 文化祭ではキーボードを弾いていたじゃない」

「うん、綾波がキーボードをやってくれる事になったから」

シンジのこの発言を聞いたアスカは目を三角にして怒り出した。

「勝手に何してんのよー！」

「だって、ケンスケがアスカより綾波の方が反対もしないし、誘いやすいだろうって」

「あちゃあシンジ君、それは火に油よ」

鬼のように荒れ狂うアスカを見て、ミサトはため息をついた。

「シンジ君、バンドに使うギターは何万円もするのよ」

「えっ、そうなんですか？」

「ミサト、バンドやってた事あるの？」

「いやあ、ちよつち酔った勢いで友達のギターをポツキリと折っちゃった事があってね、弁償したのよ」

ミサトはバツが悪そうに頭をかいた。

「ほらみなさい、中学生程度の小遣いで買えると思ってるの？」

「トウジ達には悪いけど、バンドは諦めようかな……」

アスカが勝ち誇ったように腰に手を当てて言うと、シンジはうなだれた。

「シンジ君、気を落とすのはまだ早いわ」

ミサトは笑顔でそう言うと、シンジの前に10万円の束を突き付けた。

「ミサトさん、このお金は？」

「シンジ君も頑張ってるからね、ボーナスよ」

「ちよつとミサト、シンジに甘すぎるんじゃないの？」

シンジに向かってウィンクしたミサトにアスカは怒鳴り散らした。

「余ったお金でアスカの服も買っていていいから」
「本当!？」

ミサトの言葉を聞いてアスカは目を輝かせた。

「こ、これはデートじゃないんだから勘違いしないでよね!」
「分かってるよ」

翌朝、アスカとシンジはそんな言い合いをしながら葛城家の玄関を出て行った。

「シンジ君もようやく打ち込めるものが出来たのね、よかったわ」

ミサトは微笑みを浮かべながらシンジ達を見送った。

だが、戻って来たシンジ達の姿はミサトの予想を裏切る物だった。
アスカの胸にはトイプードルが抱かれていたのだ。
そして、シンジはケージ（檻）やトイレシートなど犬用のグッズを
汗を流しながら持っている。

「アスカ、その犬はどうしたのよ!？」

「ペットショップで見たら飼いたくなっちゃった」

アスカは満面の笑みを浮かべてミサトにそう答えた。

「じゃあ、シンジ君のギターは？」

「買えませんでした……」

シンジは気弱そうな表情でミサトに微笑み返した。

「全く、家にはペンペンも居るのよ？」
「クエツ？」

大型冷蔵庫から出て来たペンペンとアスカの抱いているトイプードルとの目が合った。
すると、トイプードルは顔を背けて吠え出した。

「こらっ、驚かすんじゃないわよ、この子が怯えているじゃないの！」
「クエエエッ」

ペンペンは何もしていないのにアスカに怒られてしまった。
やるせない気持ちになったペンペンは悲しそうな鳴き声を上げる。

「かわいそうにね、とんだ濡れ衣よね」

ミサトはそう言ってペンペンを胸に抱きあげた。

「で、この犬の名前は考えたの？」
「ブツにしようと思って」
「ドイツ語で小さな子って意味ね」
「シンプルな名前だね」

シンジはほめたつもりなのだが、アスカの逆鱗に触れてしまったようだ。

「アタシが単細胞だって言いたいのに！」

「呼びやすくて良い名前じゃない。アスカ、あんまり大きな声を出すとブツが怖がってしまうわ」

ミサトがその声を掛けると、アスカは気がついたように表情を和らげる。

「大きな声で怒鳴ったりしてごめんね、ブツ」

アスカは猫なで声で子犬のブツに声を掛ける。

シンジはそんなアスカの姿をじっと見つめていた。

「どうしたのシンちゃん、アスカの顔をじっと見つめちゃって」

ニヤケ顔でミサトがそつと耳打ちする。

「あ、いや、アスカもあんな優しい表情ができるんだなって」

「そんな事アスカに聞かれたら叩かれちゃうわよ」

シンジとミサトのヒソヒソ話はブツに夢中になっているアスカの耳には入っていないようだ。

「ほらシンジ、ぼーっとしていないでブツのケージを準備してよ」
「その優しさを少しでも僕に向けて欲しいよ、まったく」

シンジの皮肉もアスカに無視され、シンジはブツブツ言いながらケージを奥の和室へと運んだ。

リビングはケージを置くスペースがすでに無かったし、ペンペンの冷蔵庫を移動させるわけにもいかないからだ。

トイレは座敷犬と言われるように、散歩の時以外はトイレも寝るのも屋内だった。

その日のアスカは上機嫌で、ブツツの前である事もあり、激しく怒ると言う事も無かった。

そして夜になって寝るときも、アスカはブツツを離そうとしない。そんなアスカに向かってシンジが忠告をする。

「アスカ、犬は夜にはケージに戻さないといけないんだよ」

「何を言っているのよ、アタシはブツツを抱いて寝るんだから。トイプードルを飼っている人の中には抱いて寝ている人も居るじゃない」

「ダメだよ、子犬にはケージを家だと思い込ませるまで躾けないと」
「そうそう、ブツツのためよ」

シンジとミサトに説得されて、アスカはやっとブツツを離れた。

「ブツツ、狭いけど我慢してね」

アスカはケージに入れられたブツツにそう声を掛けた。

そして葛城家で最初の夜を迎えることになったブツツは予想通り夜鳴きをした。

悲しげなブツツの鳴き声に耐え切れず、シンジは部屋を出てブツツの様子を見に行くことにした。

リビングに足を踏み入れた時、シンジはアスカが先にブツツの元にやって来ている事に気がつき、そっと廊下の物陰に隠れた。

「ブツツ、一人で寂しいの？ そうよね、アタシと同じでママともパパとも引き離されてしまったものね」

「アスカ……」

シンジはブツに手を差し伸べるアスカを見てそうつぶやいた。

「だから、アタシがブツのママになってあげる。寂しい思いは絶対にさせないから！」

アスカは我慢しきれなくなってしまい、ケージを開けてブツを抱き締めてしまっていた。

騾から言つとアスカの行動はいけない事なのだが、シンジはアスカに注意をせず、黙って自分の部屋に戻った。

次の日の朝、自分より早く起きているアスカにシンジは驚いた。

アスカはシンジが起きたのも気が付かずに、熱心にブツのトイレやケージの汚れなどを掃除している。

「アスカってば自分の部屋は掃除しないのに、ブツのためなら一生懸命なんだね」

シンジは皮肉めいた言い方でアスカの背中に声を掛けると、アスカは飛び上がって驚いてシンジの方を振り向いた。

「まだ朝早いじゃない。アンタ、今日は早起きしたの？」

「そんなこと無いよ、僕はいつもこれぐらいの時間に起きているよ。洗濯物を干したり、お弁当を作ったりしなくちゃいけないし」

「……いつも悪いわね」

「えっ？」

アスカから聞こえた言葉に、シンジは耳を疑って聞き返した。

「ありがとって言うてるの、何度も言わせないでよ！」
「うっ、うん」

シンジは少し顔を赤くしながら、キッチンに向かい、朝の準備に取り掛かるのだった。

そしてしばらくして起き出して来たミサトも、アスカが先に起きていることに驚いた。

毎朝シンジに起こされるとき揉めていたのがうそのようだった。

ブツとずっと一緒に居たいから学校を休むというアスカのわがままはミサトに却下された。

それどころかアスカがわがままを言うのならブツを飼うのに反対すると家主のミサトに言われては、アスカは引き下がるしかなかった。

「ペンペン、ブツをいじめるんじゃないわよ！」

「クエエ……」

アスカはペンペンに念を押してシンジと共に玄関を出て行った。

「ペンペンがブツをいじめるわけじゃないじゃない」

「クエッ」

ミサトはペンペンと見つめ合ってそうつぶやいた。

ブツは昨日より葛城家の雰囲気慣れたのか、ちょこまかと部屋の中を歩き回っていた。

そして、ペンペンに対しても怖がらなくなっていた。

「クエッ？」

「キャンキャン」

「クエーッ！」

ついにはブツの方がペンペンを追い回し始めてしまった。

「こらこら、ペンペンをいじめちゃダメよ！ まったく、この子は内弁慶になりそうね」

ミサトはペンペンを吠えて追いかけるブツを見てため息をつくのだった。

「へえ、アスカってば犬を飼い始めたんだ」

「うん、トイブードルよ。ちっちゃいからブツって名前を付けたんだけど、とつてもかわいいの！」

学校に登校したアスカはさっそくヒカリに飼った子犬の事を楽しそうに話し始めた。

「何やて、やっぱバンドはやめるやと！」

同じ頃、教室にトウジの怒声が響き渡った。

「昨日、街で会ったときはミサトさんにギターを買うためのお金を貰ったって喜んでいたじゃないか」

「あの後ペットショップの前を通りかかってアスカが犬を飼いたいてって言うのを断りきれなくて」

ケンスケが尋ねると、シンジは困った顔でそう謝った。

「何や、惣流が悪いんか！」

トウジはそう言うのとヒカリと楽しそうに話しているアスカのところへ向かい、アスカとの言い争いが始まった。

「碇、綾波もバンドがやれるって楽しみにしていたんだぜ」

ケンスケに言われて、シンジはレイの席に視線を向けた。するとレイは怒りを感じさせる視線でシンジをにらみかえした。それはシンジが初めて目にするレイの表情だった。

「ご、ごめん綾波」

「あなたはセカンドのわがままをきいてしまうのね」

期待を裏切られたレイの怒りは冷ややかながら鋭いものだった。シンジはそれ以上レイに謝ることもできずに自分の席へと戻るのだった。

それに反してアスカは授業中も笑顔を絶やすことが無かった。ブツツが自分に慣れて来たらヒカリやクラスの女子に紹介すると約束までしていた。

そして、アスカは同じように犬を飼っているクラスメイトとも急速に親しくなり、ヒカリがうらやましがるほどだった。

「さあシンジ、ブツツが待っているわ、早く帰るわよ！」

アスカに声を掛けられて帰ろうとしたシンジを、トウジが引き止める。

「待てや、センスはワシらとゲーセンに行くんや」

「そうだ、新型のビートマニアが入ったからやりに行くのを忘れた

のか、碇？」

「ごめん、僕も早く帰ってブツツに会いたいから」

シンジは頭を下げて謝り、アスカの元へと駆けていく。

「こらっ、男の友情より犬っところをとるんか！」

「犬っところとは何よ、ブツツはとってもかわいいんだから！」

アスカはトウジに怒鳴り返して学校を走り去るのだった。

帰り道の通学路、シンジはアスカに腕を引かれて走って行く。

「ほら、もっと早く走りなさいよ！」

「精一杯走ってるよ！」

周囲の注目もどこ吹く風、笑顔のアスカには家で待っているブツツの事しか頭に無いようだった。

アスカとシンジが葛城家に帰ると、ブツツはアスカに向かって飛び付いて来た。

「ブツツ、アタシも寂しかったわ。おお、よしよし」

アスカはブツツを胸に抱き寄せてその頭をなでる。

シンジはブツツを抱きしめるアスカをうらやましそうに眺めている。

シンジもアスカに劣らずブツツの事が気になってしまったのだ。

「シンジもブツツを抱っこしたいの？」

「いや、別にそんな事は無いけど」

シンジは口では否定したが、アスカはからかうような顔でシンジを見つめる。

「仕方無いわね、ブッツが人見知りしたままじゃ困るし、他の人にも慣れさせなきゃいけないわ」

アスカはため息をつく、シンジにブッツを近づける。

シンジがブッツに震えながら手を伸ばすと、アスカがそれをとがめた。

「ダメよそんなおぼつかない様子じゃ、シンジが警戒している事がブッツにも伝わっちゃうでしょう?」

「ご、ごめん」

シンジは意を決してブッツをしっかりと抱きしめた。
するとブッツの方も暴れる事無くシンジに抱かれている。

「うわあ、かわいいな」

「当たり前よ」

歓声をあげながらシンジはブッツを抱き続けている。

そんなブッツにしつとしたのか、ペンペンがシンジのふくらはぎを固いくちばしで突つつく。

「もう、しょうがないな」

シンジは抱き上げていたブッツを床に降ろしてペンペンの餌を用意する。

ペンペンの餌に興味を持ったのか、ブッツが顔を近づける。

「ク、クエツ？」

「こらっ、ペンペンは雑食で何でも食べるけど、ブッツが食べたらお腹を壊しちゃうんだからダメよ」

「すっかり自分がペンペンより上だって思い込んでるね」

「シンジより上だと思っているかもしれないわよ」

「そうだったらひどいな」

アスカとシンジは声をあげて笑った。

シンジが夕食の準備をしている間も、アスカはブッツと遊んでいた。

「早く慣れて、みんなと外で遊べるようになるうね」

ブッツに躰を覚えさせようと、アスカは張り切っているようだった。シンジは苦笑しながらそんなアスカとブッツの様子を見ていたのだが、突然ブッツが床に倒れ込んだ。

「ブッツ、どうしたの？　しっかりして！」

アスカの悲鳴が上がり、シンジも驚いて駆け寄った。

アスカの腕の中で、ブッツはグッタリとして何の反応も示さない。

「ただいまー……ってどうしたの2人とも？」

帰って来たミサトがただならぬ雰囲気を感じ取り声を掛けた。

「ミサト、ブッツがさっきまで元気だったのに……」

「いきなり倒れてしまったんです」

アスカもシンジも目に涙を浮かべてミサトに言った。

特にアスカの方は号泣寸前だ。
事態の深刻さを悟ったミサトはネルフのリッコに電話を掛けた。

意識不明の重体となったブッツはミサトの超スピードの運転によってネルフに運ばれた。

「頑張つてブッツ……アタシはもう誰かに置いて行かれるのは嫌なの……！」

車の中でアスカは涙を流してブッツを抱きしめていた。
そしてネルフ本部の医療スタッフにより診察が行われた。

「リッコ……！」

医務室から出て来たリッコに、廊下で待っていたアスカ達が駆け寄る。

「リッコさん、ブッツが倒れたのは何かの病気が原因ですか？」
「そんな、予防接種も受けさせたのに」

シンジとアスカの前でリッコは首を横に振った。

「違うわ、あの子犬が倒れたのは体力の低下が原因よ。ゆっくり休ませればじきに良くなるわ」

「よかった、病気じゃ無かったのね」

リッコの言葉を聞いて、アスカは安心して大きく息を吐き出した。

「油断しちゃダメよ。子犬は休ませてあげないとね、遊び過ぎて死んでしまう事があるの」

「アタシのせいだ、ごめんね、ブツ」

アスカはガラス越しにベッドに寝かされているブツに声を掛けた。

「赤木博士、これは何の騒ぎだ」

「碇司令、実は……」

リツコが担ぎ込まれたブツの事を話すと、ゲンドウは渋い顔をした。

「犬だと、くだらん。そんなものエヴァのパイロットには必要無い手放せ」

「嫌だ」

シンジが答えると、ゲンドウはシンジをにらみつける。

「これは命令だ。その犬を手放せ」

「止めてよ父さん、アスカの、僕達の大切な家族を奪わないで！」

シンジがそう言ってゲンドウをにらみ返す。

そして、シンジは決してゲンドウから視線を反らさない。

「好きにしる」

先に目を反らしたのはゲンドウの方だった。

そして、ゲンドウは面白くなさそうな顔で立ち去って行った。

「やるじゃないシンジ、司令に逆らうなんて。腰抜けとばかり思っ

ていたけど、今回はアンタを見直したわ」

「そ、そうかな？」

アスカにほめられたシンジは照れ臭そうに頭をかく。

そして楽しそうに話しながらミサトと3人でブツの居る医務室の中へ入って行く。

「あら、レイ？」

リツコも続いて医務室に入ろうと思った時、いつから見ていたのか、レイが廊下に立っているのに気がついた。

「赤木博士。私もペットが……欲しいです」

「困ったわね、そうね、猫なら何とかなるかもしれないけど……」

レイの見つめる前で、リツコは祖母の住んでいる家へと電話を掛けるのだった。

早朝の葛城家のキッチンで、シンジは自分とアスカとミサトの分のお弁当、そして朝食を作っている。
そこまでは普通の朝だった。

「うえええっ!?!」

静かな葛城家にアスカの悲鳴が響き渡った。

「どうしたの、アスカ!?!」

シンジがアスカの部屋に駆けつけると、そこには何とアスカが2人居た。

片方のアスカはシンジがいつも見慣れたタンクトップにショートパンツ姿のアスカ。

もう片方のアスカは、熊さんのキャラクターが入った子供っぽいパジャマを着たアスカだった。

「アンタ、何者よ? どうして、アタシそっくりなのよ?」

「それはこっちこそ聞きたいわよ」

両方のアスカはお互い相手を怪しんでそんな事を言い合っていた。

「もしかして、新手の使徒!?!」

タンクトップ姿のアスカがそう言うと、シンジの顔にも緊張が走った。

「何よ使徒って?」

そう言つて身を乗り出して来たパジャマ姿のアスカが身を乗り出すと、タンクトップ姿のアスカはパジャマ姿のアスカを突き飛ばす。

「離れなさいよ!」

「痛っ!」

突き飛ばされたパジャマ姿のアスカはしりもちを着いて顔をゆがめた。

「大丈夫?」

その姿を見たシンジは警戒を一気に解いてアスカに駆け寄つて助け起こした。

「シンジ、そいつは使徒かもしれないのよ? 早く離れなさい!」

「嫌だ、使徒だったとしても、いきなり突き飛ばすなんてやりすぎだよ」

「シンジ……」

タンクトップ姿のアスカにシンジが言い返すと、パジャマ姿のアスカの表情が華やいだ。

「ちっ、じゃあミサトに言つてその使徒をきっちり殲滅してもらうから!」

タンクトップ姿のアスカはそう言つて部屋を飛び出して行った。

シンジは追いかけて引き止めようとしたが、不安そうなパジャマ姿のアスカに腕を引かれて、その場に止まった。

「シンジも、あたしの事は知らないの？」

「うん、残念だけど、さっき話していたアスカしか知らないんだよ」
「そっか……目が覚めたら、あたしの部屋と違う場所に居るし、どうなっちゃうのかしら……」

パジャマ姿のアスカは自然にシンジに体を預けるような形で抱きついてしまっていた。

シンジはそんなアスカを振り払う事は出来なかった。

「あーっ、何でシンジに抱きついてるのよ！」

ミサトを連れて部屋に戻って来たタンクトップ姿のアスカは怒った顔で人差し指を突き付けた。

シンジはパジャマ姿のアスカをかばうような発言をする。

「アスカはいきなり知らない場所に来て心細いんだよ」

「ミサト、使徒は色仕掛けを使ってシンジを陥落させるつもりよ」
「だから、使徒って何なのよ？」

言い争う2人のアスカを前にして、腕組みをしたミサトはため息を吐き出す。

「こうなったら、ネルフ本部に来てもらって使徒かどうか検査するのが一番ね」

ミサトの提案に従い、シンジ達は葛城家を出て行くこととしたが、玄関でパジャマ姿のアスカは大声を発する。

「ちょっと、パジャマで外に出て行けって言うの!？」

「そうよ、着替えている暇なんて無いわ」

「……じゃあ、僕のジャンパーを羽織ると良いよ」

シンジは急いで自分の部屋に戻ってジャンパーを持って来ると、アスカに渡した。

「ありがとうシンジ、優しいのね」

「そ、そんな事無いよ」

「ウオッホン！」

いい雰囲気になりかけた2人を邪魔するかのように、タンクトップ姿のアスカはわざとらしく咳払いをした。

ネルフ本部に向かう車の中はミサトが運転席、タンクトップ姿のアスカが助手席、後ろの席にシンジとパジヤマ姿のアスカが並んで座った。

運転しながらミサトはパジヤマ姿のアスカに緊張をほぐすような感じでそれとなく質問をする。

「ねえ、アスカちゃんの着ているパジヤマって可愛いわね」

「これは、ママに買ってもらったから仕方無く……」

「ママって？」

「惣流キョウコ、ミサトも知らないの？」

パジヤマ姿のアスカの言葉を聞いて、シンジとタンクトップ姿のアスカは息を飲んだ。

ミサトは心の中で思考を巡らせる。

（……もし使徒がアスカに擬態するとしたら、隣に居るアスカの真似をしようとするはずだわ。となると、後ろに居るアスカは別の可能性が……）

推論を確信に変えるために、ミサトはパジャマ姿のアスカにさらに質問を続ける。

「シンジ君のご両親について教えてくれるかしら？」

「ユイおばさんとゲンドウおじさんの事？」

またもやシンジとタンクトップ姿のアスカは驚いた。
これにはミサトもショックを受けて動揺した。

「ゲンドウおじさんったら、この前なんか町内会を巻き込んで運動会なんか開催しちゃってさ。ユイおばさんをお姫様だっこしたら腰を悪くしちゃったのよ」

「アスカ、その辺で良いから止めて！」

楽しそうに話し出したパジャマ姿のアスカをミサトは慌てて制止した。

いくらなんでも受ける衝撃が大きすぎる。

タンクトップ姿のアスカもシンジも冷汗を流して黙って座りこんでいた。

ネルフ本部に到着すると、リッコ達も実際にアスカが2人居る事に驚いていた。

「さあ、とつとと検査とやらをしちゃってよ」

パジャマ姿のアスカがぶつきらばうにそう言い放って怒った顔でリッコ達をにらみつけた。

「ごめんねアスカちゃん」

「あ、いえ、別に伊吹先生に怒っているわけじゃないから」

謝るマヤに向かって、アスカは優しい口調でそう答えた。
そして、不安そうな顔でシンジの方をチラッと見つめる。

「ねえ、もしあたしが使徒って事になったら、殺されちゃうの？」
「そんな事無いよ、大丈夫だよ」

優しく微笑みかけるシンジを、タンクトップ姿のアスカは膨れてに
らみつけた。

そして、リッコ達に従って医務室に入って行ったアスカをシンジ達
は息を飲んで見守った。

「検査の結果、使徒の反応は全く見られなかったわ。まったく普通の人間よ」

リッコがそう言うと、パジャマ姿のアスカは堂々と腰に手を当てて
言い放った。

「ほら、あたしを化け物呼ばわりして突き飛ばすなんてひどかった
じゃない」

「悪かったわね」

タンクトップ姿のアスカは口をとがらせながらも頭を下げた謝った。

「でも、それならいったいどういう事かしら？」

リッコのつぶやきを聞いて、ミサトは自分の推論を話した。
パジャマ姿のアスカは、こことは異なる世界パラレルワールドから
やって来た存在なのではないかと。

話を聞いたリッコ達もそのミサトの仮説に同意した。

「でも、アスカが2人じゃ区別がしにくいわね」

「それじゃあ、アスカA、アスカBにすればいいじゃない？」

「それは嫌！」

難しい顔をしてつぶやくリツコにミサトがそう提案すると、2人のアスカは声をそろえて反論した。

「そうね、もともとこの世界に居たアスカを『アスカ』、この世界にやって来た可愛いパジャマ姿のアスカを『あすか』って呼ぶ事にはしない？」

「AとかBよりはだいがマシね」

「まあ、それなら……」

アスカとあすかは納得したようにうなずいた。

「あすか、ちょっと実験に付き合ってくれないかしら」

「何ですか、赤木先生？」

リツコの目が怪しく光るのを見逃さなかったアスカは、あすかの前に立ちはだかった。

「もしかして、エヴァに乗せるつもり？」

「良く分かったわね」

「あすかは今までエヴァなんかに関係無い世界で生きていたのよ？興味本位で巻き込むなんて絶対許さないんだからね！」

「わ、わかったわよ」

アスカの剣幕に驚いたリツコはやむなく引き下がった。

「さ、早く帰りましょう。こんな所に長く居ると、あすかが実験材料にされちゃうわ!」

怒った顔でそう言ったアスカは、あすかの手を引いて部屋を出て行くとした。

苦笑しながらミサトとシンジが後を着いて行く。

アスカとあすかは打ち解けた後は双子のように仲良くなっていた。帰りの車の中ではシンジも入りこめないぐらい話していた。

葛城家に戻ると、アスカとあすかはアスカの部屋で着替える事になった。

「絶対のぞくんじゃないわよ!」

「分かってるよ、命は惜しいしね」

アスカの言葉にシンジはそうため息をついたが、アスカの部屋から聴こえてくる楽しそうな声にはドキドキしていた。

「じゃあ、私はネルフに戻って仕事にかかるから。今夜の夕飯、私の分はあすかにあげて」

「あすかはこれからどうなるんでしょうか?」

シンジは不安そうに顔を曇らせると、ミサトは明るく励ます。

「とりあえず、しばらくここに居てもらう事になるわね。アスカもあすかとすっかり打ち解けたみたいだし、同じ部屋でも構わないと思うわ」

「そうですね」

ミサトの言葉を聞いて、シンジはほっと息を吐き出した。

「シンちゃん、今日から文字通り両手に花生活じゃない、羨ましいわ」

「からかわないでください」

ため息をついたシンジに見送られて、ミサトは葛城家を出て行った。しばらく考え込んだシンジは、商店街に買い物に出かける事にした。あすかが来たのでハンバーグを作ろうと思ったのだ。きつと喜んでくれると思ったシンジは鼻歌交じりに葛城家を後にした。

「これなら鏡が要らないわね」

アスカはあすかに次々と服を着せて、満足気に眺めていた。

「その頭に付けているのは何よ？」

「ああ、これはエヴァのインターフェイス・ヘッドセットよ。エヴァとシンクロし易いように付けているの」

「何かダサいわね。ほら、リボンの方が可愛いわよ」

あすかはそう言うと、アスカの頭からインターフェイス・ヘッドセットを取り外して自分の付けていたリボンを結びつけた。

「そうだ、入れ替わってシンジをからかつちゃおうか？」

「面白そうね、それって」

アスカの提案に、あすかは笑って答えた。

あすかはインターフェイス・ヘッドセットを自分の頭に付けた。

「あ、あの服なんか着てみたいわね」

あすかはそう言うと、部屋にかけられていたレモン色のワンピースを指差した。

「アンタ、持ってないの？」

「ママはあたしに可愛い服を着せるのが好きなのよ。だから、持っている服もフリフリのリルが付いたものとか、そんなのを勧められちゃう」

「……アンタのママって、アンタを愛してくれている？」

「うん、もう面倒になるくらい抱きしめてくるのよ……あつ」

暗そうな表情になったアスカを見て、あすかは気まずい表情になる。

「ごめん、あんたの気持ちを考えずにこんな事言つて」

「謝らなければいけないのはアタシの方よ、勝手に落ち込んだりして」

アスカは軽く首を振ってそう言うと、あすかの脱いだパジャマを拾い上げて顔を赤らめながら尋ねる。

「このパジャマ、アタシも着てみていい？」

「良いわよ、少しきつくなって来た所だし、アスカにあげる」

あすかの言葉にアスカは喜んだが、あすかの胸やお尻を見ると少しむくれた表情になる。

（……どうせ、アタシはガリガリですよーだ）

アスカは心の中でそうつぶやいた。

夕食の席で、アスカはシンジがあすかがアスカだと騙される位ずらを楽しみにしていた。

頭のインターフェイス・ヘッドセットとリボンが入れ替わっているのに気が付かないはずだ。

「あすかの口に合うと良いけど……」

「あ、ありがとう」

あすかは戸惑ったようにシンジに答えた。

「どーして分かったのよ!？」

「そ、それは……」

シンジは気まずそうにレモン色のワンピースを着るあすかの開いた胸元に視線を送った。

「この、スケベっ!」

顔を真っ赤にしたアスカは思いつきりシンジの足を踏みつけた。

そんなハプニングもあったが、3人は夕食を食べ始めた。

アスカは少しむくれた表情になっていた。

シンジは今夜のおかずはアジの開きと肉じゃがだと言っていたのに、あすかが来てハンバーグを張り切って作ったのに腹が立ったのだ。あすかとシンジが楽しそうに話しているのにもさらに腹が立った。

しかし、アスカは怒って自分の部屋に戻ると言う事はせず、不機嫌ながらもシンジとあすかの会話に参加していた。

せっかく姉妹のような存在ができたのに1人になるのは寂しかったのだ。

「でも、学校ではあすかの事をどう説明したらいいんだろう?」

「ええっ、あすかを学校に行かせるの?」

「だって、ずっとあすかを家に閉じ込めておくわけにも行かないじ

やないか」

「生き別れの姉が居たって言うのが一番無難かもね」

「何でアタシが妹になるのよ？」

「だって、あたしの方が背もスタイルも良いし」

あすかが自慢気に胸を張ると、アスカは渋い顔になった。

外見が似ている2人だが、夕食の後に見るテレビの好みは違った。

「こんなトーク番組、面白くないじゃないの」

アスカがチャンネルを変えた。

「ハプニング映像番組なんて、つまんない」

あすかがチャンネルをトーク番組に戻した。

そのうちアスカとあすかはリモコンを奪い合い取っ組み合いのケンカになってしまった。

「仲が良かったと思ったら、急にケンカするんだから」

シンジは疲れた顔でため息をついた。

アスカがお風呂に入って居る時、あすかとシンジはリビングで2人きりになった。

「今日は助けてくれてありがとうね」

「そんな、あすかの事を放っておけなかったから……」

シンジは照れたように頭をかいてそう答えた。

「でも、シンジってばレイにも優しくしてあげるんでしょっ？」

「うん、綾波も放って置けないところがあって」

「それは結構なことだけどさ、自分を放って置かれてレイと仲良くしているシンジを見ているとイラつく事があるのよね」

あすかがそう言っただけ息をつく、シンジは驚いて目を丸くする。

「えっ、それってあすかが僕の事を気にかけているって事？」

「ま、まあ、そんな所ね」

あすかは少し顔を赤らめながらもシンジの言葉を否定しなかった。

「アスカってば、いつも僕に辛く当たるから、ストレートに甘える加持さんの事が好きだとばかり思っていたよ」

「あんたの事だから、そうだろうと思ってたわよ」

あすかは再びあきれたようにため息をついた。

「じゃあアスカも僕の事を気にかけているのかな？」

「調子に乗るんじゃないわよ、あんたは加持さんに比べたらまだまだガキよ」

少し嬉しそうに笑顔を浮かべたシンジに、アスカはそう言い放った。

「そっか……でも、どうしてあすかは僕に話してくれたの？」

「あたしが使徒かもしれないってアスカに言われても、助けてくれたのが嬉しかったからかな」

「ずいぶんと仲良くなっているじゃない？」

あすかとシンジが見つめ合って話していると、お風呂からあがったアスカが鋭い目つきでにらんでいた。

そして、アスカはシンジ達に言い訳する時間を与えずに怒った様子で部屋の中へと入って行った。

「さすが、我ながら分かりやすい怒り方ね」

「僕が綾波とばかり話していると、アスカを怒らせてしまうのか」

「ま、あたしの顔色ばかりうかがうようになって困るけど、少しは鈍感を直してアスカを気にかけてやってね」

「うん、何かあすかつてアスカのお姉さんみたいだ」

「な、何を言ってるのよ!」

あすかは照れ臭そうに逃げるようにお風呂へと入って行った。

「アスカ、またあすかと仲が悪くならないといいけど……」

アスカと仲直りしたくても、良い言葉が思い付かないシンジはリビングでそう祈るしか無かった。

あすかがお風呂から出て来て、アスカの部屋に入る。

部屋の中から2人の話声が聞こえるが、すぐにあすかが追い出されない所を見ると、アスカもそんなには怒っていないらしい。

安心したシンジはお風呂に入る事にした。

「そうだ、アスカのシャンプーの減りが2倍速くなるんだっけ、気を付けないと……」

シンジはそんな事を心配していた。

「何よ、シンジとの仲良し話は終わったの?」

アスカの部屋にあすかが入ると、アスカは背中を向けたままそう嫌味を言った。

「あたしにシンジを取られそうだって、嫉妬しているの？」
「別に、嫉妬なんかしてないわよ！」

あすかに言われたアスカは勢い良くあすかの方に振り返った。

「隠さなくても分かるわよ、同じあたしなんだから。まあ、加持さんに比べると情けなくて頼りないけどね」

「そうね、加持さんよりは落ちるけど……ね」

渋々ながらアスカもあすかの意見に同意した。

「でも、シンジの方もアスカに気があるみたいじゃない。あたしとあんたが入れ替わってもすぐに見抜いたし」

「あいつ、アタシの事をやらしい目で見てただけよ」

「仕方無いじゃん、男なんだから。あたしもしんじからそう言う視線を感じた事があるし」

「ずいぶん余裕じゃない。もしかして、しんじとキスは済ませたの？」

「ええ」

「ふーん」

「5歳ぐらいの頃したらしいわ。あたしもしんじも良く覚えて無いけど」

「それって、してないのも同然じゃない」

「じゃあ、シンジとキスしちゃうかな？」

「何ですって!？」

アスカが血相を変えて叫ぶと、あすかは大きな声で笑い出した。

「ほら、やっぱりシンジが気になるんじゃない」

「くーっ、騙したわね！」

「素直になれないのは分かるけどさ、少しは優しくしてあげないとレイにシンジを取られちゃうわよ」

「そんな恥ずかしい事できるわけ無いじゃない！」

「嫉妬してもシンジが気付かなくちゃ意味が無いわよ」

「解ったわ、ほんの少しだけ優しくしてやってもいいわよ」

ふくれた顔でアスカがそう言うのと、あすかは満足そうにうなずいた。

「でも、あすかがこのままずっと元居た世界に帰れなかったら、シンジの事を好きになったりするの……？」

「それは……」

アスカとあすかは気まずそうに見つめていた。

しばらくの間、沈黙が流れた後、その雰囲気を変そうとあすかが声を掛ける。

「もう寝よっか」

「そうね」

アスカはあすかからもらったパジャマに着替えた。

そして、毛布を持ってきて床で寝ようとした。

あすかはそんなアスカに声を掛ける。

「あたしが床で寝るわよ、ここはあなたの部屋なんだからさ」

「アンタこそ、朝から色々あって疲れたでしょう？ ベッドはあなたに譲るわよ」

アスカの言葉を聞いたあすかはため息をつくと、後ろからアスカを抱きあげて、ベッドへと運ぶ。

「こうして2人ともベッドで寝ればいいじゃない」

「でも、それじゃあ狭いでしょ？」

「別にあたしは構わないけど」

「じゃあ、アタシが壁際に代わってあげるわ」

アスカが顔を真っ赤にして言うと、あすかは苦笑を浮かべた。
これはアスカが壁際に代わりたいたいと言う強い意思表示だ。

「ありがとう」

あすかはそう言ってアスカと位置が変わった。

(……ありがとうを言うのはアタシの方よ)

アスカは心の中であすかに感謝した。

ベッドで誰かと2人で寝る事はアスカにとって初めての事だった。
その事がこんなにも心地が良い事だとはアスカは思ってもみなかった。

今日は悪い夢を見なくて済むと思ったアスカはすぐに眠りについてしまった。

「ママ……どうして死んじゃったの……？」

眠りかけていたあすかはアスカのつぶやきを聞いて目を覚ました。
そして涙を流すアスカを慰めるようにギュッと抱きしめる。

「あたしは、ママの代わりにはなれないけど、アスカのお姉さんになるから。寂しい時ずっと側に居てあげるから……」
「ごめん、ありがとうあすか」

アスカもあすかの胸に抱かれ、安心したように眠りについた。
そしてその翌日。

なかなか起きて来ないアスカとあすかを心配してシンジがアスカの部屋に足を踏み入れると、シンジは驚いた。
ベッドにはアスカとあすかの姿が無かったのだ。

「ミサトさん、大変です！ アスカとあすかが居ないんです！」
「アスカとあすかが居ないですって！？」

たちまち葛城家はパニックになった。

そんな葛城家の様子を遥か遠く、赤い空が広がる世界から眺めている2人の男女の姿があった。

「上手く行きそうで良かったわね」
「うん、アスカがあすかを使徒だと言って突き飛ばした時はどうなるかと思ったよ」

「今度はこっちの世界の番ね」

「もう、アスカはあすかをすっかり信頼しているから大丈夫だと思うよ」

「神様って言うのも、意外と大変ね。使徒を倒しちゃったり、ママを復活させるとか、奇跡を起こしちゃえば良いんじゃないの？」

「ダメだよ、人間はなるべく人間の力で物事を乗り越えさせなくちゃ」

「人の可能性か。アタシも早くシンジの事を信じて居ればアタシ達の居るこの世界はこんな結末にはならなかったのに」

「悔やんでも仕方無いよ、僕達は世界を想像する力は持っていてやり直す事は出来ないんだからさ」

「はいはい、これからもアンタの暇潰しに付き合っただけあげるわよ」
「暇潰しとは酷い言い方だなあ。でも自己満足に過ぎないかもしれ

ないけどね」

シンジは少し寂しそうな顔で微笑んだ。

「そうだ、お腹が空いたからハンバーグ作ってよ。シンジが作っているのを見たら食べたくなっちゃった」

「神様になってもお腹が空くんのだ？」

「気持ちの問題よ！」

アスカの言葉にシンジは苦笑して、何も無い空間に1軒の小さな家を出現させた。

そしてアスカとシンジの2人は楽しそうにその家の中に入って行くのだった。

「シンジ、話があるの」

夕食の片づけを終えたシンジは、葛城家のリビングでテレビを見ていたアスカに呼ばれた。

何の話だろうと、アスカの所へ行くシンジ。

数分の会話の後、目を疑うような光景が展開されていた。

丈の長いジーンパンとシャツに着替えたアスカが、シンジを膝枕しているのだ。

ミサトが見たら冷やかされそうなものだった。

「さあミサトが来ないうちにさっさと済ませてしまおうよ」

アスカもその事を分かっているのか、耳かき棒を取り出してシンジの耳を掘り出した。

「アスカ、本当に大丈夫？」

「初めてでも耳かきなんか簡単よ！」

不安そうに聞くシンジに、アスカは自信満々にそう答えた。

「シンジの耳の穴って見やすいわね、これは耳かきがやり易そうだしわ」

アスカの言葉を聞いて、シンジはホッと息をもらした。

アスカの操る耳かき棒は順調にシンジの耳垢を取り除いて行く。

「それにしても、耳かきなんて他の人にしてもらえるなんて、思わ

なかったよ。僕は小さい頃に母さんを亡くしてしまったし」

「ふふん、ありがたく思いなさい」

「アスカが耳かきをしてくれるなんてかなり驚いたし」

「何よ、アタシにはそんな事似合わないって言いたいのか？」

アスカが身を乗り出すと、アスカの胸がシンジの目前まで迫った。

「うわっ」

自分の顔に触れそうになった所でシンジが声を上げると、アスカもあわててシンジから体を離す。

「やらしいわね」

「勝手に近づけたのはアスカだろう？」

シンジがアスカに強く言い返そうと頭をあげると、またシンジとアスカの胸との距離が近くなった。

「ほら、頭を下げなさいよ！」

「分かったよ……」

シンジはアスカの言葉に従い、頭をアスカの膝に付けた。

アスカは興奮してしまっているのか、耳かきの仕方先程より雑になってしまった。

「さあ、終わったわよ！」

アスカはそう宣言するとさっさと立ち上がろうとした。そのアスカをシンジがあわてて引き止める。

「待つてよ、両方やるって約束したじゃないか」

「……仕方無いわね」

「自分で言い出した事じゃないか」

反対側の耳を掃除するためにシンジは顔の向きを変えた。

こちらからはアスカの体は見えない。

さらにほつぺたに感じるのは固いジーンズの感触。

シンジは残念な気がしてならなかった。

それでも、アスカに耳掃除をしてもらっていると言っるのは気分の良いものだった。

「はい、今度こそ終わったわよ」

シンジの至福の時間は意外と早く終わってしまった。

もつと耳垢が取りにくい耳だったら良かったのに。

そんな事をシンジは思っていた。

「たった10分で5,000円何て高すぎると思っけど」

シンジは苦笑しながらアスカに5,000円札を渡した。

「耳垢を全部とるって約束だったじゃない。それとも、膝枕に期待してたの？」

「そ、そんな事無いよ」

シンジは真っ赤になってアスカの言葉を否定した。

夕食の片付けの後、小遣いの前借りをミサトに断られたアスカは、今度はシンジにお金を貸してくれるように頼んだ。

しかしシンジの財布の紐も固かった。

そこで、アスカはシンジの耳かきをすると提案して来たのだ。

タンクトップにショートパンツと言った刺激的な服装のアスカに言われたシンジは、その誘惑に乗ってしまった。甘い妄想が打ち砕かれてしまったとは言え、シンジは詐欺だとアスカに訴える気持ちは起こらなかった。

「どうせ、加持さんとのデート代に使うんだろうけど」

お金を手に入れて嬉しそうにするアスカを見て、シンジは少し寂しそうにそうつぶやいた。

その一週間後のひな祭りの日、シンジとトウジとケンスケの3人は葛城家のリビングで部屋の飾り付けをさせられていた。

ここでひな祭りパーティをやると言うのだ。

言い出したのはアスカで、ミサトも賛成したと言う事だった。

「どうせミサトさんはお酒が飲めれば何でもいいんでしょう」

「甘酒なんてお酒のうちに入らないわよ」

夕食の席でミサトはシンジにそう答えていた。

「しかし、惣流と委員長はワシらに準備を押し付けて何をやっとなのや」

「委員長の家で準備をしているって言っけど」

「何の準備や？」

「もちろん、あれだろう？ 今日の良い被写体が撮れそうだ」

ケンスケは予想が付いているようで、楽しそうにカメラの調整をしていた。

部屋の飾り付けや料理の準備が終わった所でインターホンが鳴られる。

アスカ達が来たようだ。

「うわあアスカ、その着物……」

玄関を開けたシンジは驚いた。

目の前には髪を結って赤い着物を着こなしたアスカが立っていたからだ。

「ヒカリのお姉さんに着せてもらったのよ、どう？ 見とれて声も出ない？」

「……うん」

シンジが素直に感動を表すと、アスカは少し顔を赤くしたが誇らしげな表情になる。

「これで、アンタの言っていた大和撫子ってのにグッと近づいたでしょう」

「アスカ、あの事を気にしてたの？」

アスカが得意顔でシンジにそう言うと、シンジは驚きの声を上げる。少し前にシンジはアスカと言い争いをした。

その時怒ったシンジはアスカを大和撫子とは正反対の女性だと馬鹿にするように言ったのだ。

ケンカは収まったがアスカはシンジにリベンジする機会をうかがっていたらしい。

「別に僕はアスカに大和撫子になってもらいたいって言ったつもりは無いんだけど……」

「酷い言い草ね、せっかくアンタに借りたお金を足して着物を買ったのに」

「お金が必要だって言うのは、着物を買ったためだったの？」

「まあまあ、良いじゃない。着物を着たアス力が可愛いって言うのは事実なんだし」

むくれたアス力をなだめるようにミサトがそう声を掛けた。

「お、委員長も着物やったんか」

「うん、お姉さんのお古を着せてもらったの。まだ少しサイズが大きいけど」

トウジに言われると、ヒカリは少し顔を赤らめながらそう答えた。

「ミサトさんは何で着物じゃないんですか？」

「忙しくて仕立てる時間が無かったのよ」

ケンスケに言われてミサトは苦笑しながら答えた。

サイズがきつくなつて着れなくなつたとは言えない。

「それにしても、着物を着た委員長は大和撫子そのものやけど、惣流は馬子にも衣装やな」

「何ですって!？」

トウジの言葉を聞いたアス力は、怒ってトウジに殴りかかるうとした。

「アスカってば、大和撫子は殴っちゃいけないのよ」

「むうう」

「おー恐、やっぱり惣流はじゃじゃ馬や」

ヒカリに止められて、アスカは寸前で引き下がった。

「シンジ君は大和撫子タイプの子が好きなの？」

「分かりません、でもアスカは今のままの方が良いような気がします」

「そうね、しおらしいアスカは何か調子が狂うわ」

「ミサトもシンジも言ってくれるじゃないの！」

ミサトとシンジの会話はアスカの耳に届いてしまったようだ。

「そうだ、綾波は誘ったの？」

「誘ったわよ、でも来るのは嫌だって」

シンジの質問にアスカはため息をついて答えた。

「そっか、まだ賑やかなパーティとか苦手なのかな」

納得したようにシンジは寂しそうにつぶやいた。

そのパーティの翌日、シンクロテストのためにネルフに行ったシンジとアスカは青い着物姿のレイを見て驚いた。

一目見てその着物の価値に気が付いたアスカは震える声でレイに尋ねる。

「ファースト、その高そうな着物はどうしたのよ？」

「昨日あなたは電話でひな祭りパーティで大和撫子の姿を碇君に見せると言っていた。だから私も碇君に大和撫子を見てもらうの」

「もしかして、綾波は着物が無かったから家に来なかったの？」

シンジの言葉にレイはうなずく。

「碇君、私の大和撫子はどう？」

「う、うん、良いと思うよ」

シンジは冷汗を浮かべて退き気味にそう答えた。

レイは褒められたと思いわずかに顔を赤くした。

「その着物はどうしたの？」

「碇司令に欲しいと言ったらすぐに用意してくれたの」

レイの言葉を聞いたシンジとアスカの顔は険しくなる。

（（……えこひいき））

シンジとアスカの心の声は一致した。

自分達には小遣いの前借りは決して認めないのにレイの要望は聞き入れる。

2人はそんなゲンドウに腹を立てた。

ゲンドウはそんな2人の心には気付かず、着物を着たレイを見て機嫌が悪かった。

レイも着物が気に入ってしまったのか、私服はすっかりその着物になっちゃった。

「綾波はまだ僕が大和撫子が好きだって勘違いし続けているよ……」

着物姿のレイをネルフで見かける度にシンジはレイの誤解をどうやって解けばいいのか思い悩んだ。

見かねたアスカとヒカリが協力してレイの私服を街に買いに行くと
言う事で、やっと騒動は収まるのだった。

2011年 バレンタイン記念LAS小説短編 バレンタイン・キッス

寒さも依然として厳しい2月の冬、教室でシンジとトウジとケンスケは声をひそめて話していた。

もちろん話題は翌日に迫ったバレンタインの事である。

「今年もセンセはぎょうさんチョコレートをもらっんやろうなあ」

「そんなあ、みんながくれるのは義理チョコばかりだよ」

トウジが冷やかすと、シンジはため息をついて否定した。

「だって僕はそんなにハンサムでもないし、頭だって良くないし、スポーツマンでも無いし……」

「いやいや、碇の演奏するチェロはかなりのもんだぞ、いつもファンの子が音楽室に聴きに來ているじゃないか」

「チェロだって下手の横好きだよ」

「お前って本当に自覚ないんだな。義理チョコの中に本命が混じっているかもって考えた事も無いのかよ」

シンジの言葉を聞いて、ケンスケとトウジが大げさにため息をついた。

「だってさ、僕は小さい頃からずっとアスカから、義理チョコしかもらった事が無いんだよ！」

「碇、声が大きい！」

うわずった声で反論したシンジの口を、ケンスケが慌てて押さえた。同じ教室に居るアスカ達の方を見ると、シンジの発言に気が付かないようにおしゃべりを続けていた。

「ふーっ、聞こえなかったみたいやな」

トウジとケンスケとシンジは大きく息を吐き出した。

しかし、アスカ達の耳にはしつかりと聞こえていたのだ。

（……チャンス！ シンジ君はアスカの照れ隠しに気が付いて居ないわ。今年は思い切って本命をあげちゃおうかな）

マナはそんな事を思っただけで笑んだ。

（は、恥ずかしいけど、碇君に本命と言って渡しちゃうかな……）

レイはそんな事を思っただけでモジモジしていた。

（ぎ、義理も渡した事が無いけど、勇気を出して碇君にチョコレートを渡してみようかな。初めて渡すチョコレートが本命なんて、碇君は驚いてしまうかしら）

シンジと委員会で話した事のあるマユミもそんな事を考えて顔を赤くした。

（うーん、シンちゃんも義理しかもらった事が無いと思い込んでいたら、今年は本命だと言って渡してからかっちゃんかっちゃん）

シンジの近所のお姉さん兼担任教師のミサトもそんな事を考えてニヤニヤ笑いを浮かべていた。

しかし、アスカだけは浮かない顔をしていた。

アスカは5歳から毎年シンジにバレンタインにはチョコを欠かさずあげていた。

シンジの周りの女子はシンジとアスカが付き合っているのかと思う事もあったが、アスカがあまりに義理チョコだと言う事を強調するため、それならば自分達もとシンジにチョコをあげていた。

アスカは嫉妬心からシンジが他の女子から受け取ったチョコは全て義理なんだからと言い聞かせ、シンジもそうだと同調していた。

いつか自分の気持ちにシンジの方から気付いてくれるだろうとアスカは思ったのだが、シンジの鈍感な筋金入りだった。

「惣流さんは今年も碇君にチョコをあげるの？」

「え、ええまあ隣に住んでいる付き合いで義理だけだね」

「やっぱり、義理なんだ」

「当たり前じゃない、アタシの本命は加持先生に決まっているじゃないの！」

突然マナに尋ねられたアスカはその場の勢いでそう答えてしまった。

「そうよね、加持先生ってスポーツマンで紳士的だもんね」

「葛城先生と付き合っているのに、アスカも大変ね」

マナとヒカリに励まされて、アスカは憂鬱な気持ちになった。

アスカが体育教師の加持に熱を上げているのはクラスの生徒が誰もが知る事だった。

しかし、アスカがそう見せているのは自分のプライドがそうさせていたポーズだったのだ。

本当は加持にあげているチョコが義理でシンジにあげているチョコが本命なんて恥ずかしくて言う事が出来るわけがない。

そんな自分の態度がシンジに自分を失わせていると感じたアスカは一大決心をした。

「よしっ、今年こそシンジに本命チョコをあげて素直になるわよ！」

アス力は気合を入れて、力強い眼差しでシンジを見つめた。

「セ、センセ、惣流のやつごっつい怖い顔でこっちをにらんどるで」

そのアス力の姿を見たトウジがシンジにそう話しかけた。

「やっぱりさっきの話が聞こえちゃったのかな？」

「後で謝っていた方が良くないじゃないか」

「う、うん」

シンジはケンスケの言葉にうなずき、放課後真っ先にアス力の席へ行って謝る事にした。

「あ、あのさ……」

「ア、アタシ用事があるからっ！」

シンジが話し掛けようとする、アス力は顔を赤くして教室から走り去ってしまった。

アス力は照れ臭くなってシンジと顔を合わせられなかったのだが、シンジとトウジは違うふうに受け取った。

「惣流のやつ、顔を赤くしてまで怒つとるんか」

「俺にはそうみえなかったけどな」

ケンスケはトウジの言葉に異議を唱えた。

「アス力をそんなに怒らせる事をしたかな？」

シンジは首をひねって考え込んでいた。

「あんな女の事なんてパーツとゲーセンで遊んで忘れてしもうたらええやん」

「うん……」

シンジはトウジの誘いに乗って、ケンスケと3人でゲームセンターに寄り道する事にした。

しかし、しばらくゲームセンターで遊んでもシンジの心は晴れず、ため息ばかり付いていた。

「何やセンス、そんなに惣流の事が気になるんかいな」

「それなら、会って話して気持ちをスッキリさせた方がいいかもな」
「うん、アスカと話して来るよ」

シンジはトウジとケンスケに別れを告げて、大急ぎで家に戻った。
碓家と惣流家は、コンフォート17と言う分譲マンションの隣り合った部屋同士だった。

家に帰ったシンジは玄関にカバンを投げ捨て、隣の惣流家のチャイムを鳴らした。

「ごめんね、アスカってばシンジ君に会いたくないらしいの」

「そんな!」

惣流家の玄関でアスカの母親であるキョウコに止められたシンジは青い顔になった。

「少して良いから、アスカに話をさせてください」

「それが、アスカは絶対にシンジ君を通さないでって」

「そつですか……」

キョウコにそう言われてしまったのは、シンジは引き下がるしか無かった。

自分の部屋に戻ったシンジは、ベランダで繋がっているアスカの部屋の窓に厚いカーテンが下ろされているのを見てため息をついた。何度アスカの携帯に掛けても、携帯電話の電源は切られてしまっていた。

いつでも会えると思っていたアスカに会えなくなった事に、シンジは寂しさを感じるのだった。

アスカがかたくなにシンジと会うのを拒んでいたのは、放課後に買いい物をして家に帰って来てからシンジのためのチョコレートを作っていたからだった。

「ふふ、アスカってばこんなにチョコレートを作っちゃって。シンジ君が見たら、これだけで涙を流して喜んでくれるわよ?」

たくさんチョコレートが並べられたテーブルを見て、キョウコは微笑んだ。

アスカはシンジに送るチョコレートに試作品を何個も作っていたのだ。

「ママ、お台所を占領しちゃってごめんね」

「いいのよ、今日は出前にするから」

キョウコの協力も得たアスカは気合を入れてチョコレートを作り続けた。

「I Love Shinji from Asuka」なんて、やっぱり恥ずかしい……」

「でも、ストレートに伝わって良いじゃない、もうシンジ君に誤解されたくないんでしょう?」

「うん……」

アスカはキョウコの言葉にうなずき、ホワイトチョコで”I Love Shinji from Asuka”と書いたハート形のチョコレートをシンジに贈る事に決めた。

「そうだ、加持先生にあげるチョコレートも作らないと」

「それなら、義理ってしっかり書いた方が良いんじゃないかしら？」

「でも……それってやりすぎじゃない……？」

キョウコの言葉を聞いたアスカは冷汗を浮かべながらそう答えた。しかし、結局キョウコの助言に耳を貸してでかく「義理」の文字が刻まれた加持宛てのチョコレートを作ったのだった。

「やっと……シンジにあげるチョコが出来た……」

アスカはかなり緊張していたのか、糸が緩むと疲れて座り込んだ。

「そうだ、箱にリボンを掛けてあげればもっと可愛らしくなるわよ」

「それは良いアイデアね……」

そう言っただけでリボンを買いに行こうとするアスカは、よろけて床に座り込んでしまった。

「パパに言って帰りにリボンを買ってきてもらうから、今はゆっくり休みなさい」

「ありがとっ、ママ」

後をキョウコに任せてアスカは自分の部屋で休む事になった。

「ふふ、私も手作りチョコをジェイコブさんにプレゼントしようかしら……」

キョウコも夫に手作りチョコレートをプレゼントしようと台所でチョコレートを作り始めたのだった。

次の日、バレンタイン当日は日曜日だった。

学校でならばさりげなくシンジにチョコレートを渡せるのだが、このままではアスカに先を越されて渡されてしまう。

そう考えたシンジに思いを寄せている恋する乙女達は立ち上がった。

「霧島さん……」

「綾波さんも、もしかしてシンジ君の家に？」

コンフォート17の近くで、レイとマナはバッタリ出会ってしまった。

「やっぱり、考える事は同じみたいね」

そう言ったマナとレイは顔を見合わせて苦笑した。

「おんやあ、マナちゃんとレイちゃんじゃないの」

コンフォート17に向かって歩き出そうとしたマナとレイは後ろから担任教師のミサトに声を掛けられた。

ミサトは恥ずかしそうにうつむいているマユミを連れていた。

「山岸さん？」

「マユミちゃんたらね、シンちゃんにチョコレートを渡したいってあたしに住所を聞いて来たのよ、健気じゃない？」

（（葛城先生は、面白がっているだけだと思うわ……））

レイの驚きの声にミサトは笑みを浮かべながら説明したが、マナとレイは心の中でそうツツコミを入れた。

4人は足並みをそろえてシンジの家を訪問する事になった。

「どうもユイさん、教え子達と一緒にシンジ君にチョコレートをお届けに上がりました」

明るくおどけながらやって来たミサトをユイは相変わらずだと苦笑しながら出迎えた。

ミサトは良くゲンドウとユイの酒の相手をするので、碓家とは顔なじみだったのだ。

そして、アスカ達と一緒にシンジの家に遊びに来ているレイとマナの姿を見ると、ユイは部屋に居るシンジに声を大声で呼んだ。

「あれ、みんな遊びに来てくれたの？ アスカは？」

シンジはアスカの姿が見えない事に真っ先に違和感を覚え口にした。

「さあ、私達は知らないけど？ いつも一緒に居るわけじゃないし」

自分達はアスカのお供ではないと、マナが不満そうに答えた。

「とりあえず、上がってよ」

「……お邪魔します」「……」

シンジに言われて、マナ達は碓家のリビングへとあがりこんだ。

ゲンドウは追いやられるように自分の部屋へと移動した。

そして、シンジがマナ達にチョコレートを渡される姿を少しうやましそうに見ていた。

同時にチョコレートを渡す事になってしまったマナ達3人は、冗談でも本命だと話す事が出来ず、何となく言葉を濁すような微妙な雰囲気となってしまった。

「あれって、甘すぎよね」

「私はあの甘さがいいと思うわ」

「碇君はどう思う？」

「僕は、もうちょっと甘い方が良いかな？」

「では、もう少しチョコレートも甘く味付けした方が良かったのでしょうか……」

「そんな事無いですよ、山岸さん」

マナとレイとマユミはしばらくシンジと話した後、チョコレートを置いて帰って行った。

ミサトは担任教師として、マユミを家まで送って行った。

マナ達を見送ったシンジは無表情でリビングの椅子に腰かけていた。

「どうしたのシンジ、3個もチョコレートをもらえて嬉しくないの？」

「そうだ、もつと喜べ」

「うん……」

ユイとゲンドウに言われても、シンジは生返事をするばかり。

部屋に戻ったシンジは憂鬱そうにカーテンが下がったままのアスカの部屋を眺めていた。

朝からずっとアスカの部屋のカーテンは閉ざされたままだった。

シンジはマナ達からもらった3個のチョコレートを食べたが、少し

も甘く感じなかった。

重苦しさがシンジの胸を支配し、シンジはずっとベッドに横になっていた。

夕方になって日が沈み始めた頃、シンジの携帯電話にアスカからのコールが来る。

「今すぐ、近くの公園に来なさいっ！」

シンジが出るとアスカは有無を言わずにそう言って電話を切ってしまった。

乱暴な言い方だったが、シンジはアスカに会える事を喜んで、急いで部屋を飛び出した。

コンフォート17の廊下から公園を見下ろすと、アスカが立って待っている姿が見えた。

一刻も早くアスカに会いたいシンジは息を切らせて階段を駆け下りてアスカの所へ向かった。

空が真っ赤に染まる公園で、シンジはアスカと2日振りの対面を果たした。

「ちょっと、何でアタシの顔を見て泣きそうになっているのよ！」

アスカはシンジの顔を見てそう言い放った。

「だって、毎日会っていたアスカにいきなり会えなくなるなんて思わなかったから……」

「そ、そりゃあ、悪かったわね。はい、バレンタインのチョココレー
ト」

「あ、ありがとう」

いきなりラッピングされた箱を突き出されたシンジは戸惑いながら

も受け取った。

「で、今すぐここで開けてくれない？」

「チョコレートの箱を？」

「いいから、開けなさいよ！」

アスカに迫られたシンジはチョコレートの入った箱を開封した。

中からは”I Love Shinji from Asuka”

と書かれたハート形のチョコレートが出てくるはずだ。

その勢いでアスカはシンジに告白するつもりだった。

「義理って書いてあるけど？」

「な、何ですって！？」

シンジの言葉を聞くと、アスカは声が裏返るほど驚いた。

確認すると、シンジが持っているのは義理と大きく書かれた板型のチョコだった。

アスカはシンジにあげる本命チョコレートの箱と加持にあげる義理チョコレートの箱を間違えてしまったのだ。

「ありがとう、義理でももらえてうれしいよ。でも義理ってこんなに強調してくれなくてもいいのに……」

シンジは涙をこらえてアスカに微笑みかけた。

「こ、これは加持さんにあげるつもりで作ったチョコレートで……ママが散らかしたせいで間違えちゃったのよ！」

「そんな嘘まで付いて慰めてくれなくて良いよ。アスカは加持先生みたいなスポーツマンが好きなんだろう？」

アスカは慌てて言い訳をするが、シンジは諦め切った悲しそうな顔でそうつぶやいた。

仕方無くアスカは最後の手段を取る事にした。

アスカはシンジの腕を取ると、正面からシンジを抱き寄せ、瞳を閉じて唇をシンジに向かって突き出した。

いわゆるキスして体勢だ。

「アスカ、冗談はやめてよ」

「……シンジは、アタシとキスしたくないの？」

震える声でそう言うアスカの顔は赤く染まっているようにシンジには見えた。

シンジは自分の唇をゆっくりとアスカに重ねた……。

「アタシのチョコレート、とっても甘かったでしょう？」

アスカはシンジから唇を離すと、シンジにそう尋ねた。

「えっ、まだ食べて無いけど？」

シンジは不思議そうに自分の手に持ったチョコレートを見て答えた。アスカが黙って自分の唇を指差すと、シンジは顔を真っ赤に染める。

「うん、大人の味もしたよ」

シンジが答えると、アスカは耳まで顔を真っ赤に染める。

「こ、これは夕陽のせいなんだからね！」

「う、うん……わかったよ」

「さあ、暗くなって来たから帰りましょ」

シンジはアスカに差し出された手を握った。

「それとシンジ、アタシが告白したんだからもつと自分に自信を持ちなさいよ」

「そう言われても……」

「スポーツマンではなくても、シンジは加持さんより良い所がたくさんあるわ。アタシはそれを知っているんだから」

「例えば？」

「そうね、チェロが上手く弾けるとか……」

「他には？」

「はあ、っ、アタシに全部聞かないと分からないの？」

「ごめん。でも、何か少し自信が出て来たよ」

アスカとシンジは手をつないで仲良く話しながらコンフォート17の建物の中へと入って行った……。

[illegible]

支援ヨシユエス小説短編 共に笑顔

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

リベール王国で起きた2度の大事件を解決したエステルとヨシユアは旅に出た。

結社との戦いの後消息をくらましてしまった少女、レンを探すために。

帝国の街を回っていた2人は、いつしかロレントの街に似た雰囲気
の街にたどり着いた。

故郷を感じさせる街並みに、エステルとヨシユアの気持ちも軽くなつた。

しかし、広場に通じる道を歩いていたエステルは暗い表情になって歩みを止めた。

「どうかしたの？」

不思議に思ったヨシユアがエステルに尋ねると、エステルは黙って視線を広場の方へ移した。

ヨシユアが広場の中心部を見ると、そこには倒壊した時計台の骸がそのままになっていた。

どうやら先日の災害で壊れてしまったようだった。

「そうか、レナさんの事を思い出してしまったのか……」

「……ちよつとね」

エステル之母のレナは、帝国軍の砲撃によって崩れたロレントの街の時計台で、小さな頃のエステルをがれきから守って命を落としてしまったのだ。

「別に我慢しなくても良いんだよ」

「えっ？」

「僕は約束したじゃないか、エステルが泣きたくなったらいつでも胸を貸してあげるって」

「でも、泣くなんてあたしらしくないし」

「無理して笑っているエステルの顔を見ている方が悲しいよ」

「じゃあ……」

エステルはヨシユアの胸にすがりついて静かに涙を流し始めた。

それと同時に、辺りには冷たい雨が降り始めた。

ヨシユアはエステルを雨からかばうように抱きしめながらそつと話し掛ける。

「悲しかった事は、全て涙で洗い流してしまおうよ。僕もエステルと再会したあの海岸でそうしたんだ」

ヨシユアの言葉を聞いたエステルはかすかにうなずいて涙を流し続けた。

あの時は泣いているヨシユアの背中にエステルが抱きついて慰めて

いた。

今は2人の立場は逆だ。

「泣き終わったら、今度は2人で楽しい事を考えようよ。もう僕は2度とエステルから離れない、ずっと一緒に歩いて行くなって誓うよ」

ヨシユアが優しくエステルに話しかけると、エステルはヨシユアの手をぎゅっと握ってうつむいていた顔を上げた。

「もう大丈夫？」

「うん」

エステルはヨシユアに強くうなずいて返事をする、もう片方の手で目にたまった涙をふいて微笑み返す。

「それじゃあ、また約束しようよ。2人で一緒に歩いて行くなって」

「そうだね」

エステルに言われて、ヨシユアはエステルと握った手を強く握りしめた。

2人に笑顔が戻ると、それを祝福するかのように雨が上がり、雲の間から太陽が顔をのぞかせた。

「あつ、綺麗な虹！」

エステルが嬉しそうに青空にかかった虹を指差した。

ヨシユアも穏やかな微笑みを浮かべて虹を眺めた。

「ねえ、レンともこうして笑い合う事ができるのかな？」

「歩き続けられれば、きっと大丈夫だよ」

ヨシユアはそう言って優しくエステルを抱きしめた。

2011年 4月1日記念ハルキョ ン小説短編 晴れのち土砂降り

「何で、キョンが出てくるのよ！」

それは先程まで見ていた不思議な夢の内容を思い出したからだ。

グラウンドで暴れる青い巨人。

そこまで思い出したハルヒは否定しようと激しく頭をかきむしった。

今日は休日、外は晴れ。

思い立つたら即実行がモットーのハルヒは、古泉イツキ、長門ユキ、朝比奈ミクル、キヨンに電話をかけて招集しようとした。

しかし、キヨンに電話を掛ける時になってハルヒは今日が4月1日だと言う事に気が付いた。

何か面白い嘘をつこうと考えたハルヒは電話に出たキヨンに傘を持って来るように告げた。

案の定、キヨンからは疑問の声が返って来る。

「天気予報では降水確率は0%だと言っているぞ。それにほら、現に晴れていて雨なんか降りそうにないじゃないか」

「そうと見せかけて、夕立が降るのよ！」

「夕立は夏だけだろう」

「あんた、団長の言う事が信用できないの？　傘を持って来なさい、団長命令よ！」

知識を持っていたキヨンを強引にねじ伏せ、なんとかハルヒは嘘をつき通した。

1人だけ傘を持っているキヨンは周りからとても浮いた存在になるだろう。

つまらない嘘だが、付かないよりはマシだ。

夢の中でキヨンに言われた言葉を思い出したハルヒは出掛ける前に髪型をポニーテールに変えた。

そして、着て行く服はお気に入りのピンクのスカート。

いつも頭に付けている黄色いリボンの位置を整えると、ハルヒは鏡の前で満足したようにポーズをとる。

「よし、バッチリ決まったわね……って何でこんなに気合を入れているのよ、デートじゃあるまいし！」

ハルヒが集合場所に行くと、待っていたのはなんとキヨン1人だけだった。

「他のみんなはどうしたのよ？」

「急に都合が悪くなつて来れなくなったようだな。ハルヒ、今日はお前がおこる番だぞ」

「バ、バカっ、何を言っているのよ！」

ハルヒはキヨンの笑顔を見ていられずに目を反らした。

あの夢を見てから自分の心の中が変だとハルヒは思った。

キヨンと目を合わせる事が出来ない。

まさか自分が恋をしてしまったと認める事はどうしてもできなかった。

恋愛は病気的一种だと公言してしまっていたのだ。

いつもの喫茶店の中でハルヒとキヨンの2人だけのSOS団の定例会議をしていると、信じられない事に今まで晴れていた空模様が一気に土砂降りへと変わった。

街を行きかう人々は慌てて雨宿りをする。

「嘘っ、本当に雨が降って来た！」

「……やれやれ」

ハルヒとは対照的にキyonは驚く事も無く諦めた顔でため息をついた。

その後2人は喫茶店で時間を潰したが、雨が止む気配は無かった。

「仕方無い、妹に電話をして傘を持ってきてもらうか」

「どうしてよ、あんたは傘を持っているじゃない？」

「だって、ハルヒの分の傘が無いじゃないか」

「1本あれば十分よ」

ハルヒはキヨンの差す傘に入って家へと帰る事になった。

キyonの方も照れがあるようで、ハルヒから体を離すように傘を差

していた。

「もっと体を寄せなさいよ、そのままじゃあんたがずぶ濡れになっちゃうじゃない」

「2人で行っているんだから濡れるのは仕方無いじゃないか」

「ああもうっ、じれったいわね」

ハルヒはそう言うと、キヨンの腕をとって強引に抱き寄せた。
2人の体が密着する。

「あんたが濡れて風邪でも引いたら、お見舞いに行くのが面倒だからこうしているんだからね！」

「分かった、また去年の12月のように迷惑をかけてもマズイしな」

キヨンはハルヒが腕に抱きつくのを感じながらゆっくりとハルヒと歩調を合わせて進んで行った。

「……ほら、お前の家に着いたぞ」

家の前に着いても、ハルヒはしばらくじっと立ちつくしていた。

「ハルヒ、どうした？」

「な、何でも無いわよ、それじゃあまた明日、学校でね！」

ハルヒはそう言って家の玄関へと走って行った。

「お前のポニーテール、似合っているぞ」

「何をバカな事言ってるのよ！」

キヨンがそう呼びとめると、ハルヒは振り返ってキヨンに言い返し

- - - - -
- - - - -
- - - - -

寒さも和らぐ日々が訪れ始めた3月の中頃、自然とホワイトデーの話が教室のそこかしこでされるようになった。
バレンタインデーのお返しを考えていたシンジはクラス的女子が話をしているのを聞いて驚いてしまった。

「まさか、バレンタインデーのお返しにそんな決まりがあるなんて……」

シンジは困惑した顔でそうつぶやいた。

先日のバレンタインデーにシンジはアスカから『大人の味がするとても甘いチョコレート』を受け取ってしまったのだ。

それは値段の付けようの無い物で、しかも形の無い物だったので、3倍高価な物にするとか、3倍の量を返す事など不可能だった。

「やっぱり、1度に3回連続は無理だろうから、朝と昼と夜に分けた方が良いかな」

「何を難しい顔をして考えているのよ」

「ひゃあっ！」

突然アスカに声をかけられて、シンジは驚いて飛び上がってしまう。

「アスカ、ビツクリさせないでよ」

「驚いたのはこっちよ。さつきから暗い顔してブツブツ言ってるけど、深刻な悩み？ アタシが相談に乗ろうか？」

「だ、大丈夫、たいした事じゃないから……」

「そう、でも1人で抱え込まない方が良いわよ」

アスカが立ち去ると、シンジはホツとしたように胸をなで下ろして息を吐き出す。

「こんな事アスカに相談できるわけが無いじゃないか……でも、アスカの都合も考えてあげた方が良いのかな……」

シンジは忘れないようにホワイトデーの予定を紙に書いて置いた。

そして、放課後にシンジは義理チョコ（本人達にとっては本命チョコなのだが）をくれたレイ、マナ、マユミへのお返しを買いに商店街へと出掛けた。

そのシンジの姿を目ざとく見つけたアスカはこっそりと後を追いかけて行く。

「シンジのやつ、アタシがせっかく本命チョコを渡してやったんだから、他の子達と同じ物じゃ承知しないわよ」

アスカはシンジはお返しに高級なスイーツを贈ろうと考えているのが分かった。

おいしいスイーツが食べられるのは嬉しかったが、特別なプレゼントを期待していただけにアスカは少し寂しさを覚えた。

帰り道にシンジがアスカへの特別なプレゼントを買い求めるのかと期待していたが、アスカのしている前でシンジは真っ直ぐに家へと帰ってしまった。

「シンジったら甲斐性の無い男ね、つまんないの」

アスカは気落ちした様子で自分の家へと戻るのだった。

今ごろシンジは部屋でバレンタインのお返しのスイーツを準備しているのだろう。

それを邪魔するわけにもいかなかったと思ったアスカはシンジにちょっかいを出さずに退屈な時を過ごした。

その日の夜、アスカの携帯電話にシンジからの電話が入った。

シンジは明日の朝、登校前にバレンタインデーのお返しをしたいから部屋に来て欲しいとアスカに告げた。

「おはようございます、おばさま」

「いらつしゃい、アスカちゃん。今日シンジは珍しく早起きしているのよ」

「あはは、そうですか」

アスカはユイにあいさつをして、シンジの部屋へ入る。

すると、しっかりと服装と髪型を整えたシンジがアスカを待っていた。

「シンジ、お返しなら学校で渡せば良いじゃない」

「だって、みんなのっている前じゃ恥ずかしかったんだ」

「ただ渡すだけで何をそんなもったいぶっているのよ」

「ごめん」

アスカに言われて、シンジは苦笑しながら謝った。

「それで、プレゼントのスイーツはどこにあるの？」

「うん、もう用意しているよ」

アスカは口に出してしまってから、しまったと思った。

これでは昨日シンジの買い物の後をつけた事がばれてしまう。
しかし、シンジは気にしない様子でそう答えた。

「じゃあ、目を閉じて」

「……えっ？」

シンジに突然言われたアスカは驚いて聞き返した。

「だって、キスのお返しは、キスでするしか無いじゃないか」

「ちよつと……！」

赤い顔をして戸惑うアスカに、シンジは必死に頭を下げて頼み込む。

「お願いアスカ、僕にもお返しをさせてよ！」

「わ、分かったわよ……」

数分後、顔を赤くしたアスカとシンジが部屋から顔を出すのだった。
通学路を歩く頃になっても、アスカの顔は熱を帯びている。

「シンジったら、鈍いくせに大胆なんだから」

学校に登校したシンジは、レイとマナとマユミにバレンタインのお返しを渡した。

「碇君、ありがとう」

「このスイーツ、結構高いんじゃない？」

「あの……惣流さんの分は……？」

「アスカには、学校に来る前に渡したんだよ」

心配したマユミが尋ねると、シンジはそう答えた。

「えーっ、抜け駆けなんてズルイよ、惣流さん！」

「あなたは、もう食べたの？」

「そ、そうね、とっても甘くて大人の味がしたわ」

レイに聞かれてアスカは少ししどろもどろになりながらそう答えた。

「それは頂くのが楽しみですね」

マユミはシンジに渡されたスイーツの入った小箱を軽く抱きしめながらそう答えた。

そのアスカの言葉を聞いてシンジは慌てた様子でアスカにそつと耳打ちする。

「アスカ、適当な事言わないでよ」

「アタシは正直に感想を言っただけよ」

とりあえず、バレンタインのお返しは特別な物を貰ったと満足したアスカ。

しかし、シンジがまだ落ち着かない様子でいるのは気になった。

アスカと視線が合うと、シンジは赤くなって目を反らした。

「あいつ、まだ動揺から立ち直っていないのかしら、相変わらず気が小さいわね」

アスカはあきれた顔でため息をついた。

そしてその日の放課後、女子ゴルフ部の部活を終えたアスカは校門でシンジが待っていた事に驚いた。

吹奏楽部のシンジとは時間が合わずに、シンジが先に帰っている事が多かったのだ。

「何か用事があるならこんなに遅くまで待っていないで電話で呼んでくれれば良かったのに」

「ううん、今頃の方が都合が良いから」

シンジはそう言って、茜色に染まり始めた空を指差した。

ソワソワするシンジの様子にアスカは首をかしげながらも、一緒の通学路を歩いた。

そして、コンフォート17が近づくと、シンジは公園を指差した。

そこはバレンタインの日にアスカとシンジがキスをした場所だった。シンジの真意を悟ったアスカは顔を赤くして叫ぶ。

「まさか、またキスしようって言うんじゃないでしょうね！」

アスカの言葉に、シンジはぎこちない動きでうなずいた。

「アンタ、いつからそんなキス魔になったのよ」

「こ、これはバレンタインのお返しだから……」

アスカに強く追及されたシンジはしどろもどろになって答えた。

その時強い風が吹いて、シンジのポケットから白い紙が舞い落ちた。紙を拾い上げたアスカは驚いた。

そこにはシンジが1日で3回キスをするためのプランが書かれていた。

夜の予定は星空の下、ベランダでキスすると書かれていた。

「シンジ、これって……」

「だって、ホワイトデーにするお返しは3倍返しってクラスの子達

が話しているのを聞いたから！」

「だからって、1日にキスを3回なんてハードよ」

「……ごめん、強引に押し付けられたら迷惑だよね」

シンジはすっかり元気を失ってうなだれてしまった。

すると、アスカは夕陽に負けないぐらいに顔を真っ赤にしながら話し出す。

「仕方無いわね、今日だけシンジに付き合ってあげるわよ」

アスカはそう言って目を閉じてシンジに唇を突き出した。

そして夕陽に照らされた2人のシルエットが重なった……。

2011年 5月記念LAS小説短編 冥王星

この作品はフィクションです、冥王星の扱いは実際と異なります。
(冥王星が惑星の定義から外されたのは2013年ではありません。
セカンドインパクトのせいで観測が遅れた設定にしています)

登場する博物館は実在の博物館とは異なります。

ネルフ本部に新しいパイロットとしてアスカが来日し、立て続けに
2体の使徒を倒してしばらく経った。

エヴァのエースパイロットとして自信に満ちたアスカは、第壱中学校
でも憧れの的となり輝いているようにシンジには見えた。

今日は第壱中学校の社会科見学で、シンジ達の2年A組のクラスメ
イト達は科学未来博物館へとやって来ていた。

シンジ達が居る展示されているのは太陽系の惑星に関する模型や写
真などだった。

トウジとケンスケと一緒に模型を眺めていたシンジは、ポツリと疑
問を口にする。

「あれ、冥王星って惑星じゃないの？」

「シンジ、知らないのか？ 去年ニュースでやっていたじゃないか、
アメリカでの会議で惑星から外すって決定したって」

「どうして？」

シンジに聞かれたケンスケが説明をしようとすると、アスカが現れ
てそれをさえぎって自分から話し始める。

「冥王星はね、正確な観測がされるようになって、惑星だと思われ

ていた頃より実際はとても小さい星だって分かったのよ」

アスカはその後も得意顔で冥王星に関する知識を披露して行った。
アスカの親友ヒカリやクラスの女友達は感心した様子で歓声を上げる。

「アスカってば、頭良いのね」

「これぐらい常識よ！」

アスカは腕を組んだままで堂々とそう言い切った。

「ちえっ、俺だってそのくらい知っているのにさ」

ケンスケは面白くなさそうな顔で舌打ちした。

アスカはシンジに言いたい事を言って満足したのか、ヒカリ達と一緒に十二星座についての展示がされているコーナーへと行ってしまった。

「へえ、ヒカリは水瓶座なんだ」

「アスカは？」

「アタシは射手座よ」

アスカ達は自分の星座をお互いに報告し合っていた。

「ほら碇、俺達は他所へ行こうぜ」

「うん」

不機嫌そうな顔のケンスケに促されて、シンジ達は宇宙関係の展示スペースから立ち去った。

その日の夜、シンジとアスカだけの2人の夕食が終わった後、葛城家にドイツからの国際電話が掛かって来た。

受話器を取ったシンジが言葉が分からずに困惑していると、アスカがシンジから受話器を奪って話し始めた。

時には笑い声を上げて楽しそうにドイツ語で話すアスカを、シンジはぼう然として見ていた。

「ふう」

疲れたようにため息をついて受話器を置いたアスカにシンジが疑問を口にする。

「ドイツに居るアスカの知り合いの人からだったの？」

「そう、アタシの新しいママはドイツ語しか話せないのよ」

ユニゾン戦闘の特訓のために強制的に同居させられた時に、シンジとアスカは自分達の母親が小さい頃に命を落としている事はお互いに話していた。

「アスカって、新しいお母さんが居たんだ」

「そう、血の繋がりは無いけど、身元引受人になってくれたのよ」

「ドイツに家族が居るんだね」

「アンタの方はどうなのよ、司令とじゃなくてミサトと暮らしているなんてさ」

アスカに尋ね返されたシンジは暗い表情になって下を向いてつぶやく。

「母さんが死んだ時、父さんは僕を先生に預けて行っちゃったんだ」

「まあネルフの総司令となれば忙しくて仕方が無い事なのかもね」

シンジの話を聞いてアス力はため息をついた。

「でも、先生は僕の面倒を見てくれて居たとは言ってもやっぱり他人だよ。こっちに来てから1度も連絡が来ないし」

「そっか」

「家に居てもお互い必要以上に顔を合わせようとしなかったし、1人暮らしとほとんど変わらなかったよ」

シンジは悲しそうな目をしてやめ息を吐き出した後、テーブルの方に視線を送る。

「ミサトさんと一緒に暮らし始める前は、誰かと一緒に食事する事なんて無かった……」

そこまで話したシンジは、アス力を見つめてつぶやく。

「アス力は良いよね、お母さんと仲が良さそうで」

「そんな事無いわ、表面上を取り繕ったってアタシと今のママの間には壁のようなものがあるのよ。アンタと同じよ」

アス力は首を振って否定した。

「アス力は違うじゃないか、遠く離れていてもこうして気遣って電話して来てくれるんだから」

「シンジだって、血の繋がったパパが居るじゃない」

「きつと父さんは僕がいらなくなつたから捨てたんだ」

シンジが首を振りながら悲しそうにつぶやくと、アス力はあきれたようにシンジを見つめる。

「それって、司令から直接言われたの？」

「いや、何も話そうとしない父さんから逃げてしまったから」

「アンタの勝手な思い込みって事もあるわけだ」

「そうかな……」

「全く情けないわね、しっかりしなさいよ」

「うん。……ゴメン、ウジウジとした話をしちゃって」

アス力に励まされたシンジは心が少し軽くなったような気持ちになってアス力に笑みをこぼした。

それからしばらく経った日、シンジは母親のユイの命日に父親のゲンドウと墓参りに行く約束をした。

父親のゲンドウが毎年行っている事を知ったシンジが、一緒に行きたいとゲンドウに伝えたのだ。

ゲンドウはシンジが来る事を拒否しなかった。

しかし約束をした後、シンジはとても落ち着かない様子だった。

シンクロテストの間も、家に帰って家事をしている時も、アス力と一緒に夕食を食べて居る時もソワソワしっぱなしだった。

そんなシンジの姿に、アス力はイライラした様子で怒鳴りつける。

「まったく何をオドオドしているのよ。見ているこっちまで落ち着かない気分になるじゃないの」

「だって、父さんと長い間2人きりで何を話せばいいのかわからなくて。変な事を言って嫌われたらどうしよう」

「アンタね、女の子とデートするんじゃないんだから」

アスカはあきれたようにため息をついた。

そしてアスカはシンジに思いっきり人差し指を突き立てる。

「そんな挙動不審な態度をとっていた方が、よっぽど気に障るわよ」
「そ、そうかな……」

ズバリ指摘されたシンジは気落ちした様子で下を向いた。

「アンタ、デートした事はないの？」

「そ、そそそ、そんな事あるわけじゃないじゃないか！ 女の子をデートに誘った事もないし、誘われた事もないよ！」

アスカに言われて、シンジは顔を真っ赤にして否定した。

そのシンジの慌てぶりが面白くて、アスカはお腹を抱えて笑った。

「そんなに笑う事無いじゃないか」

「ゴメンゴメン」

アスカは笑いすぎて出た涙を人差し指でぬぐいながらそう答えた。
何か思いついたのか、アスカは手をポンと叩く。

「そうだ、アンタの上がり症を克服するためにデートでもしてみよ
っか」

「えっ、でででデート!?!」

アスカに提案されたシンジは、声を裏返させるほどに驚いた。

「もしかしてアンタ、怖くてデートもできないの?」

「出来るよデートぐらい、やってやろうじゃないか！」

挑発されたシンジはアスカにそう答えた。

シンジの返事を聞いたアスカはニヤリと笑いを浮かべた。

チェシャ猫のようなアスカの笑顔を見て、シンジはアスカの思惑に乗せられた事に気が付いた。

「明日はちょうど日曜日だから、さっそくデートしましょう。どんな物を買ってもらえるか今から楽しみ」

「そんな、ひどいよアスカ」

「授業料よ、授業料」

せっかく節約して貯めた小遣いをアスカに巻き上げられるのが目に浮かんだシンジは青い顔になった。

次の日の朝、着替えて居間にやって来たアスカの姿にシンジは驚いた。

いつものラフな服装とは違って、アスカはリボンをあしらったワンピースを着ていた。

シンジの格好を見たアスカは、顔を真っ赤にしてシンジの顔をグーパーンチで殴った。

「アンタバカア！？ そんな格好でアタシとデートをするつもりだったの？ アタシの事舐めているでしょう」

「そ、そんな事無いよ！」

アスカに殴られてしりもちをついたシンジは顔を手で押さえながら困惑した顔で言い返した。

急いでシンジは部屋に戻って着替え、アスカに平謝りしてどうにか許してもらえた。

葛城家の玄関を出たシンジはアスカに突然手を握られて驚いて跳び上がった。

「デートなんだから、手を繋ぐのは当然でしょう」
「う、うん」

シンジは緊張しながらアスカの手を握り返した。

アスカの手を握ったシンジは、自分が想像していたよりずっとアスカの手が堅かった事に気が付いた。

少し前にエヴァに乗り始めた自分の手とは大違いだ。

「何よ、アタシの手を撫でまわしたりして」
「う、ごめん」

つい夢中になってアスカの手の感触を確かめてしまったようだ。

シンジが正直に理由を話すと、アスカはエースパイロットなのだから当然よと胸を張った。

そしてシンジから手を離れたアスカは、今度はシンジと腕を組んだ。

「うわっ、どうして？」
「この方が、もっと効果的な特訓になるからよ」

アスカと腕を組んで歩き出したシンジは、周囲の視線がとても気になった。

自分達はカップルに見られているのだろうか。

シンジはアスカより少しだけ背が低かった事もあって、姉弟きょうだいに見られているかもしれないと考えたりしていた。

そして買い物をして、映画を見て、ケーキ屋で観た映画の感想を話

し合つと言つデートの定番をこなした。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか」

ケーキ屋を出たシンジがアスカにそう言うと、アスカは首を横に振る。

「ちょっと、まだデートは終わって無いわよ」

「えっ、まだ何かあるの？」

「シンジ、どこか景色のいい場所を知らない？」

アスカにそう尋ねられたシンジは、アスカを第三新東京市の街並みを一望できる展望台へと案内した。

ここはかつてミサトが使徒を倒したシンジに教えた場所だ。

「へえ、良い場所じゃない」

夕陽に照らされる第三新東京市の街並みを見て、アスカは感心したようにそつつぶやいた。

「それで、ここで何をするの？」

「アンタねえ、そこまでアタシに言わせる気？ デートの最後にする事と言えば、キスに決まっているじゃない」

「き、キスっ!？」

アスカの言葉に驚いたシンジの声が裏返った。

「ほら、せっかく良いムードなんだからさ、しっかりしなさいよ」
「うっ、うん」

アスカに言われて、シンジは正面からアスカと向き合った。

「お互いの歯がぶつからないように、顔を傾けるのよ。後、鼻息がくすぐったいから興奮しないで、静かに息をして」

そう言うと、アスカは目を閉じてシンジに顔をゆっくりと近づけて行った。

しかし、アスカの唇がシンジに到着する前に、シンジはアスカの体を押し返す。

「やっぱり、止めよう」

「えっ!？」

突き離されたアスカが驚いて目を見開いた。

「やっぱり軽い気持ちでキスするのはいけないと思うんだ」

シンジがアスカの目を見つめてそう言い放つと、アスカはじつと顔を伏せて悔しそうに歯をかみしめる。

「……分かったわよ」

「ごめん」

「謝らないでよ」

シンジとアスカは一言も話さずに葛城家へと直行した。

葛城家の玄関に足を踏み入れると、ミサトに出迎えられた。

タイミングが良いのか悪いのか、ミサトはネルフの仕事が早く終わって帰宅していたのだ。

ミサトはシンジとアスカの服装を見ると、ニヤケ顔になる。

「おんやあ、シンちゃんとアスカ、今までデートして来たの？」

「デートじゃないわよ、ただ暇潰しに映画を見て来ただけ」

「それを世間一般ではデートって言つのよ。2人ともおめかしなにかしちゃって、気合が入っているじゃない」

「からかわないで下さいよ」

アスカとシンジが止めても、ミサトはからかい続ける。

「それでそれで、キスなんかしちゃったの？」

ミサトがそう尋ねると、アスカは怒った顔で言い返す。

「アタシがバカシンジとキスなんて、あり得ないわよ！」

「そう？」

「あの、ミサトさんもこれからどこかへ出掛けるんですか？」

シンジはミサトの服装を見てそう尋ねた。

「仕事が早く終わったからね、これからリツコと加持と3人で飲みに行くのよ」

「えーっ、アタシも行きたい！」

「アスカはお酒は飲めないでしょ」

ミサトはそう言って玄関を出て行った。

その後の夕食の間、アスカはずっとイライラし通しだった。

「ミサトったら、朝帰りするんじゃないでしょうね」

「まさかあ、加持さんも一緒だし、大丈夫だよ」

「だからよ」

夜遅くに、ベロベロに酔っぱらったミサトが加持に背負われて家へと帰って来たのだった。

アスカとのデート特訓の成果か、シンジは墓参りで短いながらもゲンドウと会話を交わす事が出来た。

使徒との戦いにおいてもシンジはアスカ、レイの3人と力を合わせて勝利を重ね、ゲンドウから評価を得られるようになった。

積極的にシンクロテストなどの訓練をこなすようになったシンジは、シンクロ率を伸ばして行った。

そして、ある日のシンクロテストでシンジのシンクロ率はついにアスカを追い越した。

「おめでとう、今日のシンクロテストのトップはシンジ君よ」

「シンちゃん、頑張ったじゃない」

リツコとミサトに褒められたシンジは、素直に喜んだ。

「ふん、でもテストの結果だけ良くてもね。実戦ではアタシの方が上よ」

「うん、アスカの足手まといにならないように頑張るよ」

シンジはアスカに笑顔でそう答えた。

全てが良い方向に進んでいるとシンジは思っていたが、アスカの心境の変化に気がついていなかった。

その次のシンクロテストから、アスカのシンクロ率は低下し始めた。焦れば焦るほどアスカのシンクロ率は不安定さを増して行く。

「大丈夫だよ、アスカの調子が悪い分は僕が頑張るから」

自信たっぷりにシンジがアスカに言うと、アスカは悔しそうに顔を歪ませた。

その後からシンジはアスカがいつも苛立っているように感じられた。学校でも、夕食の時でも、刺々しい言葉と空気をまとっている。部屋にこもってしまう事も多くなった。

シンジは自分がアスカに対して何かマズイ事をしてしまったのかと考えたが、思い付かなかった。

「そっか、加持さんか」

最近、加持がミサトを誘う事が多くなり、アスカは加持の事が好きだと言っていたから面白くないのだと思った。

シンジは仲が良さそうなミサトと加持の姿を嬉しく思っていたが、イライラしているアスカの姿を見ると心中は複雑だった。

いい加減に加持さんを追いかけるのを止めて他の子と付き合ってくれた方が良いのに……。

例えば僕とか……。

シンジはアスカと初めてデートをした時の事を思い返した。

あの時は緊張し過ぎていたが、今考えるととても楽しい事のように思えた。

もう1回アスカとデートをしてみたいと考えたが、シンジはまだアスカに告白する勇気が出なかった。

そして次に使徒が襲来した時、シンジはミサトにオフェンスを命じられた。

そこはエースパイロットを自称するアスカのいつものポジション。サポートに回される事になったアスカは当然のように不満を述べる。

ミサトはシンジにもいろいろな経験を積ませたいのだと説明した。

「ふん、シンジなんかにはオフェンスができるのかしら」

アスカの挑発的な言い方に、シンジはムツとした表情になる。

「やってやろうじゃないか」

シンジは怒気を含みそう言って、パレットガンを装備して空中に浮遊する使徒へと近づいて行った。

強気なシンジの態度を見て、アスカは舌打ちして後へと続いた。
その使徒との戦いは、初号機が黒い影に飲み込まれてしまうアクシデントがあつたものの、初号機単独で使徒を殲滅させた。

「あーあ、お一人で使徒を倒してしまわれるなんて、さすがエースパイロットのシンジ様ですね」

「止めてよ、エースパイロットはアスカじゃないか」

「いえいえ、アタクシなどシンジ様のお足下にも及びませんわ」
「アスカ、止めなさい」

その場でミサトに止められたものの、アスカは事あるごとに『シンジ様』と呼び続けた。

バカシンジと呼ばれる事は全く無くなり、家の中でもアスカは夕食の時以外シンジと顔を合わせる事を避けるようになった。

「ゴメン、僕が調子に乗ったから悪いんだ」

夕食の席でシンジがアスカにそう謝ると、アスカは自分の怒りをシンジにぶちまける。

「アタシはね、小さい頃からエヴァに乗っているのよ。それをぽつと出のアンタ何かに負けるなんて……！」

アスカはそう言うと、部屋の中に閉じこもってしまった。

シンジは自分が知らないうちにアスカを傷つけてしまっていた事にショックを受けた。

今のシンジにはアスカを慰めるべき適切な言葉が全く思い浮かばない。

アスカのシンクロ率が復活する事をただ祈るだけだった。

しかし、奇跡は起こらずその後のシンクロテストにおいてもアスカのシンクロ率は低迷を続けた。

ついにはアスカのシンクロ率は起動指数を割り込むようになってしまった。

そして、シンクロテストを行うシンジ達の前に1人の銀髪の少年がミサトに伴われて姿を現した。

「君は？」

「僕は渚カヲル、フォースチルドレンさ」

シンジの質問に、カヲルは笑顔を浮かべて答えた。

「彼には式号機のパイロットしに来てもらったのよ」

ミサトがそう言うと、アスカとシンジの顔は真っ青になった。

ついに、来るべき時が来てしまった。

「フン、アタシはお役御免って事？」

「アスカ、今までお疲れ様」

「嫌よ、交代だなんて！ それにアタシの式号機にコイツを乗せるなんて……」

アスカは憎しみをこめた目でカヲルを見つめた。

「どうやら僕は嫌われてしまったようだね」

アスカの差すような視線を受けてもカヲルは涼しげな顔をしていた。カヲルはネルフ本部に到着して早々にシンクロテストをする事になった。

その様子を固唾を飲んで見守るシンジ達。

そしてシンジ達の目の前でカヲルは今までのアスカを超えるシンクロ率を簡単に出したのだった。

自分のシンクロ率を超える人物が2人も出現した。

それはアスカのプライドを激しく傷つける。

「そ、そんな……アタシは……」

アスカは手で頭を抱え込んでしゃがみこんで倒れてしまった。

そんなアスカをシンジが慌てて支える。

「アスカっ！」

「2人とも、今日の所は家に帰りなさい」

アスカの様子を見て、ミサトはシンジ達にそう告げた。

ネルフの諜報部の車に乗せられて葛城家へと戻ったシンジとアスカ。車の中でも、家に戻った後もアスカはずっと黙って顔を伏せていた。シンジが声を掛けてもアスカは何も答えない。

困ったシンジは、自分の心も落ち着かせるためにチェロを弾き始め

た。

演奏に集中すると、心が洗われて行くような気がした。

シンジが気がつく、アスカが立ってシンジの事を見つめていた。手を止めたシンジに、アスカはそつと続けるように促した。

落ち着いたチエロの旋律はアスカの心も静めたのだろうか、アスカは目を閉じて聴いていた。

シンジもそんな穏やかなアスカの姿を見て安心して弾き続けた。

「アンタにこんな特技があつたなんてね、見直しちゃった」

「そんな、小さい頃から続けていてこの程度だから、恥ずかしいよ」

「いつから始めたの？」

「5歳の頃から、先生に勧められて」

「そう……」

シンジの答えを聞いて、アスカの表情はまた暗いものになった。

そして小さな声でつぶやく。

「アタシがエヴァのパイロットの訓練を本格的に始めたのも、その歳くらいよ」

シンジはデートの時に握ったアスカの手の感触が堅かった事を思い出した。

それは小さい頃からのアスカの努力の証だった。

「ドイツではエースパイロットとして送り出されたのに、パイロットをクビだなんて。戻ったら、きつとみんなから白い目でみられるんじゃないかね」

「アスカにはドイツに家族が居るじゃないか」

「ママはエヴァのパイロットのアタシを誇りに思ってくれているのよ？ 顔を合わせられるわけが無いじゃない」

「それって、アスカの勝手な思い込みじゃないの？」

「そうかもしれないけど……」

アスカはそう言って口をつぐんだ。

「ドイツに帰りたくないのなら、ここに居なよ」

「えっ、アンタ何を言っているのよ？」

シンジは社会科見学に行った時のパンフレットを取り出し、冥王星のページをアスカに見せた。

「冥王星か、惑星から外された星ね。エヴァのパイロットを外されたアタシと同じ、人々から忘れ去られる存在ね」

アスカが悲しそうな顔でつぶやくと、シンジは首を振って否定する。

「違う、冥王星は惑星から外されても今も太陽系の仲間じゃないか。……だからエヴァのパイロットじゃなくなってもアスカは僕の家族だよ」

「シンジ……」

アスカは目に涙をためて、シンジを見つめた。

「それに、肩書きなんて関係ないよ。冥王星は惑星と呼ばれたずっと昔から、そして今も変わらない。……アスカはアスカだよ」

「アタシ、ドイツに戻ってママ達と向き合ってみようと思う、エヴァのパイロットじゃない」アスカ”自身として。……ありがとう」

「そんな、お礼を言われる事じゃないよ」

そして、アスカはシンジに見送られてドイツへと飛び立った。
シンジはアスカが母親と打ち解けあってくれる事を星空を見上げて
冥王星に祈るのだった。

2011年 シンジ誕生日記念LAS短編 6月の花嫁

あの使徒との戦いが終わってから10年。

エヴァンゲリオンのパイロットだったシンジとアスカは再建された第三新東京市のコンフォート17の1世帯の部屋で同棲生活を送っている。

保護者役のミサトは3年前にここを明け渡して出て行った。

戦いが終結した直後から交際を始めたネルフのオペレータの日向マコトと結婚したからだった。

加持リョウジと言う恋人を失った傷心のミサトは、マコトに励まされるうちに彼の愛を受け入れていった。

今では3歳の男の子と、2歳の女の子の母親が板についている。

専業主婦になったミサトは休日を狙ってシンジとアスカが住むこの場所に、2人の子供を連れて遊びに来るのだ。

言葉を話せるようになったミサトの子供達はシンジの事を『おじちゃん』、アスカを『おばちゃん』と呼んでなついていた。

シンジとアスカは苦笑しながら、ミサトの子供達を近くの公園に散歩に連れて行ったり、部屋でゲームの相手をして遊んで上げてあげていた。

そして、帰るのを渋って泣きわめくミサトの子供達を見送った後、シンジとアスカはリビングに散らかったおもちゃを片付けて一息つくのだった。

「まったく、ミサトにも困っちゃうわね」

「うん、顔を合わせる度に結婚しろって言って来るよね」

アスカとシンジのいつものやり取り。

2人は仕事が忙しいとミサトに言い訳をしていた。

しかし、今日のアスカは違った。

「ねえシンジ、そろそろ結婚しようか？」

軽い感じで話を切り出したアスカにシンジは驚く。

「えっ」

「何よ、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして」

「だって、アスカは今まで結婚を怖がっていたじゃないか」

「そうね……」

アスカはシンジの言葉にうなずいた。

今まで2人がずっと同棲状態だったのは、アスカがシンジのプロポーズを拒み続けていたからだだった。

シンジにはアスカの抱える不安が解っていた。

だからシンジもアスカの側を離れる事は無かったのだ。

「アタシは誰かに愛を与えられる自信が持てなかったわ。だけど…

…」

「うん、ミサトさんの子達だね」

シンジの言葉に、アスカはうなずく。

「小さい子ってやっぱり可愛いわね。あの子達の笑顔を見てるだけでアタシの心も優しく暖かくなって来ちゃう」

「ミサトさんが口で説得するよりずっと効いたみたいだね」

アスカの顔が自然とほころぶのを見て、シンジも微笑みを浮かべた。

「それで急な話だけど、結婚は6月にしようと思うのよ」

「ジューン・ブライドだね、僕も聞いたことあるよ」

「そう、6月に結婚した花嫁は幸せになれるって言い伝えよ、発祥は諸説あるけどね」

「アスカが安心できるなら大賛成だよ」

シンジは嬉しさに顔を上気させてうなずいた。

「それで、日取りは6月6日にしようと思っただけど、どう？」

「アスカ、それって僕の誕生日だよ」

「そうよ、ベタだけど、今年の誕生日にはアタシをあげる……」

アスカは顔を真っ赤にしてシンジにそう言った。

恥じらうアスカの姿を見て、シンジは飛び上がって喜んでアスカの両手を握る。

「ありがとうアスカ、とっても嬉しい誕生日プレゼントだよ！」

「こんなに喜んでくれると、アタシの方も嬉しいわ」

「じゃあ早速式場を予約しないと！」

舞い上がったシンジはすぐにパソコンに向かった。

しかし、しばらくインターネットをしていたシンジは渋い顔になった。

どこの式場も6月6日は予約が一杯だったのだ。

「やっぱり、1年ぐらい前から予約は埋まっているわね」

「うん、さらに休日と大安が重なっている人気日だからね」

アスカとシンジは顔を見合わせて残念そうにため息をついた。

「じゃあ、6月じゃ無くて構わないわよ」

「そんな、せっかくなんだからさ」

あっさりと折れてしまったアスカをシンジが励ました。

「でも、シンジにまた1年我慢させてしまう事になるじゃない。ごめんね、アタシのワガママのせいでシンジに迷惑を掛けて」

「別にアスカが悪いわけじゃないよ」

悲しげな沈黙がリビングを支配した。

落ち込んだアスカを何とか元氣付ける手は無いものかとシンジは考えを巡らし、顔を上げる。

「そうだ、父さんに頼めば何とかなるかもしれない」

シンジがそうつぶやくと、アスカは苦い顔をした。

使徒との戦いが終わった後から、アスカとゲンドウの仲は最悪だったのだ。

人類補完計画を知ったアスカは、母親を失う事になる実験を見過ごしたゲンドウの事を憎んだ。

頭を下げて謝るゲンドウを母親の仇とばかりに平手打ちを食らわし、それきり顔を合わせる事も無かった。

シンジもアスカの前でゲンドウの事を話題にするのは避けていた。

しかし、アスカの願いをかなえるためにシンジは伝家の宝刀を抜いたのだ。

「あ、アタシは嫌よ、そんな事で借りを作るなんてさ」

「そんな事言わないで、父さんに償いをさせるチャンスをくれないかな」

固い表情をしたアスカに、シンジは拝むように頼み込んだ。リビングに緊迫した空気が流れる。

アスカは腕組みをして考え込んでいた。
シンジは息を飲んでアスカの返事を待った。

「いいわよ、アタシも子供じゃないんだし、いつまでもつむじを曲
げているわけにはいかないわ」
「よかった」

表情を和らげたアスカがそう言うと、シンジはホッとしたように胸
をなで下ろした。

長く続いた平穏な生活は、アスカの心を軟化させていたのだ。
ただ仲直りするきっかけが今まで無かったのかもしれない。

シンジはアスカの気持ちが変わらないうちにと、自分の携帯電話で
ゲンドウに電話を掛ける。

すると、小悪魔的な笑顔を浮かべたアスカはシンジから携帯電話を
奪う。

「ご無沙汰しております、お父様」

アスカが電話でそう話すのを聞いてシンジは目を丸くして驚いた。
しかし、電話を受けたゲンドウはもっと驚いて椅子から転がり落ち
てしまったようで、電話口の向こうで元副司令の冬月が慌てている
のがアスカには聞こえた。

その様子を聞いたアスカは口元に手を当てて笑い声を押さえた。
何とか落ち着きを取り戻したゲンドウはアスカに尋ねる。

アスカの母親の実験に加担してしまった自分を赦してくれるのかと。
ゲンドウの問いにアスカは穏やかに「はい」と答えた。

アスカの答えを聞いたゲンドウは感無量なのか、黙り込んだ。

そして、アスカはゆっくりとゲンドウに電話をした理由を話す。

アスカの話聞いたゲンドウは興奮した口調で、すぐに式場を押さ
えると宣言した。

シンジとそっくりな反応に、アスカは苦笑する。

「でも、アタシ達のせいで誰が結婚式を挙げられなくなるのは気まずいので、強引な事はしないで下さい」

暴走しそうなゲンドウにアスカが釘を刺すと、ゲンドウはうなずいた。

そして、アスカはシンジと電話を代わった。

ゲンドウとの電話を終えたシンジに、アスカは冷やかすような笑みを浮かべて話し掛ける。

「司令はアンタを子供として愛していたのね」

「多分、アスカもだよ。男親は女の子が可愛いつて言うし」

「そう？ でも、アタシは甘えるつもりは無いけどね」

「はは、僕だって父さんとアスカがベタベタして居たら複雑な気分になるよ」

ゲンドウとアスカが和解すると、シンジとアスカは重荷が下りたようにすがすがしい気持ちになった。

そして、その日の夜も更けた頃、寝巻に着替えたアスカは顔を赤くしてシンジの服の袖を引っ張る。

「ねえ、アタシ達も勇気を出して次のステップに進むべきだと思わない？」

「そうだね」

アスカの言葉にシンジはうなずいて寝室へと入って行った。

その後、ゲンドウはネルフの大宴会場をシンジとアスカの結婚式の会場にして2人を少し困惑させた。

ネルフの中には多数の監視カメラやセンサーが存在している事は周知の事実だったので、全ての行動がMAGIに記録されるかもしれないと思うと緊張してしまった。

結婚式では2人の馴れ初めとして、エヴァ初号機と弐号機がユニゾン攻撃で使徒を撃破する映像が映し出された。

結婚後の2人の初めての共同作業は、ウェディングケーキとシンジのバースデーケーキが2段重ねになったケーキへの入刀だった。

拍手と共にシンジの誕生日を祝う声とシンジとアスカの結婚を祝う声が式に参加したゲンドウ達から投げ掛けられる。

「おめでとう」

「めでたいな」

「おめでとう」

新郎の席に座ったシンジは隣の新婦の席に座ったアスカと一緒に笑顔で言葉を返す。

「「ありがとう」」

シンジにとって6月6日は1年の内比べ物にならない程嬉しい日となった。

L A S 小説短編 A i r / まごころを、君に S h i n j i & a m p ; A s u k

シンジとアスカが高校生位で、少し性格的に成長していたらと仮定しての話です。

<ネルフ本部 第一発令所>

最後の使徒である渚カヲルはシンジの乗る初号機によりせん滅された。

発令所に戻ってきた暗い表情のシンジを出迎えたのはミサトだった。

「シンジ君、使徒せん滅お疲れ様」

ミサトはそう言ってシンジの肩に手を置いたが、シンジはそのミサトの手をはねのけた。

そして、怒りを込めた視線を真っ直ぐにミサトにぶつける。

「何で、渚君が死ななければならいんですか」

「それは……彼が使徒だからよ」

「解ってます……だけど、渚君は僕達人間とほとんど変わらなかったじゃないですか」

冷酷に言い放ったミサトの言葉に、シンジは唇をかみしめて悔しかった。

発令所に居る人間は、誰もがシンジがカヲルと接触していた事を把握していた。

シンジの悲痛な姿を見ていたオペレータの三人も、慰めの言葉は思いつかず、黙り込んでいた。

その静寂を破ったのはミサトの発言だった。

「それでは司令、第一種戦闘配備を解除して構いませんね？」

「いや、このまま継続だ」

ゲンドウがミサトの質問にそう答えると、発令所は騒然となった。オペレータの三人も戸惑った顔をして見合わせた。

「使徒は全て居なくなっただんじやないの!？」

「ああ、これで俺達の仕事も終わったと思っただがな」

マヤとシゲルに聞こえない小さな声で、難しい顔をしたマコトはポツリとつぶやく。

「まさか、補完計画が発動されるのか……?」

ネルフ周辺の状況を映し出していたモニターから次々と大きな爆音が聞こえて来た。

戦略自衛隊の部隊がネルフの軍事施設を破壊し、ネルフの軍や職員を急襲したのだ。

爆音と悲鳴が混じる地獄絵図のような風景を、発令所に居るミサトやシンジ、オペレータ達はぼう然と見ていた。

すると、副司令の冬月の前にある電話が突然鳴り始めた。

冬月はすぐに受話器を取り耳に当てると、ゲンドウに告げる。

「碇、先程第二新東京市の日本政府がA - 801を発令したぞ」

「何が起こっているんですか、副司令!？」

「戦略自衛隊が攻めて来たのだよ、ネルフを滅ぼし我が物とするために」

ミサトの言葉に冬月がそう答えると、発令所の空気の温度が下がった。

「最後の敵は人間か」

ゲンドウが落ち着いた低い声でそうつぶやいた。
厳しい表情になったミサトは発令所に居るメンバーに言い聞かせるように大声を発する。

「多分、やつらの目的はエヴァとパイロットよ！」

ミサトの言葉を聞いたマコトは端末を操作して、アスカの所在を確認する。

「セカンドチルドレンは303号病室です、第4グループが護衛中」

アスカは使徒アラエルとの戦いで精神に異常をきたし、意識を失って寝たきりの状態が続いていたのだ。

「わかった、私がアスカを連れて行くわ」

マコトの報告を聞いたミサトはマコトにそう告げた。

「ミサトさん、僕もアスカの所へ行かせてください！」

シンジは頭を下げミサトに頼み込んだ。

「だめよ、あなたは直ちに初号機へ乗ってもらわないと」
「最後に一目で良いからアスカに会いたいんです！」

ミサトはシンジの気持ちが痛い程解った。
この戦いは生きて帰れる保証は限りなく低い。
これが今生の別れになるかもしれない。

「わかったわシンジ君、早くアスカの所へ行きましょう」

うなずいたミサトはシンジの手を取って駆け出した。

「葛城三佐！」

ゲンドウの制止する声にも振り返らず、ミサトとシンジは発令所を出て行った。

<ネルフ本部 303号室>

非常用連絡通路を使って、ミサトとシンジは早くにアスカの病室にたどり着いた。

しかしここもいつまでも安全と言うわけにはいかない。

敵はネルフ本部の中心に向かって攻め込んで来て居るのだ。

シンジはベッドで眠るアスカに優しい口調で話し掛ける。

「ねえアスカ、君が眠っている間に大変な事が起こったんだよ」

シンジが話し掛けても、アスカは何の反応も示さない。

「渚君も助けられなかったんだ、僕の守りたいものは次々と失われてしまふんだよ、トウジも、加持さんも、綾波も」

そこまで話したシンジは感極まり、目から涙を溢れさせた。そしてそつとアスカの手を取る。

「……アスカの手は、まだ暖かい」

「シンジ君、そろそろ行かないとマズイわ」

タイミングをギリギリまで引き延ばしたミサトが辛そうな顔で声を掛けた。

ミサトの言葉にシンジはうなずいて、身を屈めてアスカの顔に自分の顔を近づける。

そして、シンジはアスカの唇に自分の唇をそつと重ねた。触れるか触れないかスレスレの優しい物だった。

「でも、僕にはまだ守りたいものがまだ残っているんだ。だから、僕は行ってくるよ」

顔を離れたシンジはアスカに向かってそう言つて微笑むと、他のネルフの職員に付き添われて病室を出て、初号機の所へ向かった。

シンジを見送ったミサトは、ベッドで寝ているアスカに向かって話し掛ける。

「アスカ、いい加減に起きなさいよ。童話なら王子様のキスで眠り姫は目を覚ますはずじゃないの」

ミサトがそう言つても、アスカは何の反応も示さない。そんなアスカを見て、ミサトは段々と腹を立て始める。

「起きろつて言っているのが聞こえないの!？」

ミサトはアスカの胸倉をつかんでアスカの顔を思いつきり平手打ちにした。

何度も何度もアスカの顔を叩く。

たちまちアスカの顔は真っ赤になった。

「起きなさい！」

周りの護衛が止めてもミサトは振り払ってアスカを叩き続けた。すると、アスカは目を開けて身体を震えさせて小さな声でつぶやく。

「怖い……」

「アスカっ！」

アスカが目を覚ましたのに気がついたミサトはアスカの腕をつかみ上げる。

「さあ、行くわよ」

「行くって……どこへ？」

アスカが怯えた瞳でミサトに尋ねた。

「決まっているじゃない、エヴァのところよ」

「嫌よっ、もうエヴァには乗りたくない！」

「しっかりしなさい、シンジ君一人に戦わせる気？」

ミサトは厳しい表情でそう言うと、アスカの顔を強引につかんで自分に向けさせた。

しかし、やはりアスカはミサトから目を反らしてしまう。

そのアスカの態度を見たミサトは強い失望感と激しい憤りを感じる。

「あの自信に満ちあふれたアスカはどこへ行ってしまったのよ！」
「アタシは式号機に拒絶されたのよ……」

目を合わせようとしないアスカが弱々しくそう答えると、ミサトは首を横に振って否定する。

「式号機がアスカを拒絶するはずが無いわ、心を閉ざしてしまったのはアスカ、あなたの方なのよ」

「そんなのどっちでも式号機に乗れない事には変わらないじゃない」
「全然違うわ」

ミサトとアスカが言い争いをしていると、護衛をしていたネルフの職員達の悲鳴が聞こえて来た。

ついにここにまで戦略自衛隊の侵攻部隊がやって来たのだ。

「セカンドチルドレンを発見した、こっちだ！」

「直ちに確保しろ、抵抗するなら殺しても構わん！」

戦略自衛隊の兵士達は容赦無くネルフの職員達に向かって発砲をする。

戦う意思の無い職員に向けてもだ。

ミサトの反撃により兵士達は倒されたが、側にいた護衛達は大怪我を負うか絶命していた。

目の前で人が死んで行く姿に、アスカは少なからずショックを受けた。

「式号機の所へ行くわよ、急いで！」

「嫌っ、どうせ死ぬのならここで死んでも同じよ！」

「まだそんな事を言っているの！」

アスカがそう言うと、ミサトはアスカのほおを思いつき叩いた。
ミサトに叩かれたアスカは怯えた表情でミサトを見上げる。

アスカにこのような表情をさせてしまったミサトは後悔し、優しくアスカに微笑みかける。

「私はね、アスカに生きる希望を持って欲しいのよ」

そう言っただけでミサトは、アスカをしっかりと抱きしめた。
突然抱きしめられたアスカはミサトを振り払おうとはしなかった。

「だからアスカには何としても式号機に乗ってもらいたい。そうすれば、きっと道が拓けるから」

ミサトの言葉を聞いたアスカは、無言だったが大人しくミサトに従う様子を示した。

そんなアスカの手を取ってミサトは迫りくる戦略自衛隊の兵士から走って逃げるのだった……。

<ネルフ本部 地下駐車場>

アスカを連れてミサトは地下駐車場までやって来た。

そして自分の愛車が無事だと確認すると、アスカを助手席に乗り込ませる。

「アスカ、これから私が知り得た全ての情報をあなたに話すわ」

ミサトはそう言って、車のエンジンを掛けた。

そしてミサトは助手席に座るアスカに、ネルフが秘密裏に行っていた人類補完計画の内容を話した。

ミサトの話を、アスカは青い顔をして聞いていた。

「にわかに信じ難いとは思うけど、全て本当の話よ」

「ママがエヴァに取り込まれたって、そんな……」

アスカは頭を抱え込んでそうつぶやいた。

そんな時、今まで雑音が流れていたスピーカーから発令所に居るマコトの声が聞こえて来る。

「聞こえますか、葛城三佐」

「聞こえるわ、シンジ君の状況は？」

「現在、人造湖で戦自と戦闘中！」

「シンジ君、反撃して！」

マコトの背後で、マヤが初号機のシンジに指示している声が聞こえた。

どうやらシンジは戦略自衛隊に対して攻撃するのを戸惑っている様子だった。

シンジが戦っている事を知ったアスカは驚いて顔を上げる。

「シンジ君に伝えて、アスカが行くまで頑張れって」

ミサトは発令所のマコトにそう言うと、運転していた車のスピードを上げた。

そしてミサト達の行く手にも戦略自衛隊の部隊が現れるようになった。

どうやらネルフ本部のかなり深部にまで侵攻部隊がやって来ているようだった。

発令所との連絡も再び途絶え、爆音が周囲に鳴り響く。

どれほどの被害が出ているのか、誰が無事であるのか全く把握できない。

戦略自衛隊の攻撃を受けてもミサトはただひたすら目的地へと向かって車を走らせた。

<ネルフ本部 ジオフロント>

その頃、戦略自衛隊の部隊と戦っていた初号機に乗るシンジは、ミサトから弐号機を出撃させると聞いて狂ったように攻撃を始めた。病み上がりのアスカが乗った弐号機を戦わせるわけにはいかない、こうなったら自分の手で敵を全滅させると決意を固めたのだ。

「うおおっ！」

S2機関を取り込んだ初号機は、暴走したように戦略自衛隊の戦闘機、戦車、戦艦を次々となぎ倒して行った。

しかし、戦略自衛隊はネルフ本部や初号機への攻撃を止める事は無い。

ついにはN2爆雷まで投下し、ネルフ本部のジオフロントを地上へと露出させた。

A.Tフィールドを張っている初号機はその強烈な衝撃にも耐えた。

「エヴァには一万二千枚の特殊装甲と、A.Tフィールドがあるんだから、いくら攻撃をしても無駄なんだよ！」

初号機のエントリープラグの中でシンジはそう叫んだ。

シンジの言葉通り、初号機の装甲に致命的なダメージを与えられることなく戦略自衛隊の部隊はやられて行った。

そして、戦略自衛隊の部隊の大部分がやられ、壊滅すると思われたその時、シンジの目の前の上空に輸送機にぶら下げられた九機の白いエヴァの姿が見えた。

「まさか、あれがミサトさんの言っていたエヴァシリーズ？」

ぼうつ然とつぶやいたシンジの目の前で、九機の白いエヴァは輸送機から放出され、初号機を取り囲むように降り立った。状況の厳しさを悟ったシンジは冷汗を垂らす。

「一対九か……圧倒的にこっちが不利だね」

しかし、自分が戦うしかないと知っているシンジは、目に力を入れてエヴァ量産機をにらみつける。

「逃げちゃダメだ」

シンジはそうつぶやいて初号機で目の前のエヴァ量産機に向かって突進して行った。

<ネルフ本部 R20エレベータ>

ミサトとアスカはついにR20エレベータがある場所へとたどり着いた。

このエレベータに乗れば、弐号機が収められているケージに三十秒で行ける。

しかし、ミサト達のすぐ背後まで戦略自衛隊の兵士達は迫っていた。そして、アスカを銃弾からかばったミサトは背中にかんりの銃弾を受けてしまう。

アスカと共に何とかR20エレベータに乗り込んだミサトだったが、かなりの出血をしており、このままでは助からない事は明白だった。

「ミサト、死なないでよ、アタシを置いて行かないでよ！」

下降するエレベータの中で、目に涙を浮かべたアスカはミサトに声を掛けた。

「ごめんなさいアスカ、あなたを一人で行かせる事になって……」

ミサトは苦しげに息をしながらアスカに答えた。

「ダメよ、無理をして喋っちゃ！」

「私はもう助からないって、私自身が一番良く分かっているわ……アスカ、もっとこっちへ来て」

アスカは無言でミサトの言葉にうなずき、ミサトに身体を近づけた。すると、ミサトは残された力を振り絞ってアスカを抱きしめる。

「今までいろいろ厳しい事を言ってごめんなさい。私はアスカを本当の妹のように思っていたのよ」

「うん、アタシもミサトを……」

「シンジ君を助けてあげて。きっとアスカの助けが必要だから。私からの最後のお……ね……が……い」

ミサトはそこまで話すと、急に身体から力を抜いた。

アスカの背中にまわした腕もダラリと垂れた。

ミサトが事切れた事を知ったアスカは涙を流した。

それからしばらくしてエレベータが停止する。

どうやら式号機の居るケージへと到着したようだ。

アスカは腕で涙をふいてエレベータの外へと出た。

しかし、ケージへと到着すると式号機の姿はそこには無い。

アスカの目に映ったのは緊急避難措置プログラムが発令されたと表示するモニター。

式号機が戦略自衛隊の部隊の手に落ちる事を恐れたネルフは、式号機を地底湖の湖底へと沈めてしまっていたのだ。

「そんな……これじゃあ式号機に乗れないじゃないの。ミサトと……シンジを助けに行くって約束したのに……」

アスカの顔に絶望の色が広がった。

しかし、アスカは祈るような姿勢を取って、念じながら湖底に居る式号機に向かってつぶやいた。

「……お願い、ママっ！」

するとアスカの呼び声に応じるかのように、式号機が浮上し、水面に姿を現した。

「ママっ、ミサトの言う通り式号機の中に居たのね！」

式号機の姿を見たアスカは、満面の笑みを浮かべた。

そして式号機のエントリープラグがエヴァの側から開かれる。

式号機に乗り込んだアスカは、自分の母親の気持ちを感じる事が出来た。

これなら式号機とシンクロ出来ると、アスカは安心した。

ジオフロントへの射出カタパルトまで式号機を移動させたアスカは、エントリープラグの中からそっと笑顔で式号機に話し掛ける。

「今までアタシを守ってくれてありがとう。……またアタシに力を貸して、ママ」

幸いにもカタパルトの電源は破壊を免れていて、式号機はジオフロントへと発進することが出来た。

<ネルフ本部 ジオフロント>

人造湖で量産型エヴァ九機と戦っていたシンジは、苦戦を強いられていた。

量産型エヴァの持つ武器は、ATフィールドを紙のようにあっさりと貫通し初号機に傷を負わせる。

シンジは必死に交わして致命傷は避けていたが、ダメージは着実に蓄積して行った。

初号機の痛みが伝わり、意識が朦朧しかけていたシンジに、式号機からの通信が入る。

「お待ちせ、シンジ……」

「アスカ、大丈夫なの!？」

モニターに映し出されたアスカの穏やかな笑顔を見たシンジは驚きの声を上げた。

何があったのかシンジには理解できなかったが、アスカはしっかりと立ち直ったように見えた。

「アスカ……よかった……」

感激したシンジはアスカに聞こえないような小さな声でそつとつぶやく。

「シンジ、アタシも協力するから、こいつらを倒しちゃいましょう!」

「ダメだアスカ、こっちへ来ちゃ!」

「えっ、どうして!？」

厳しい表情でそう言い放ったシンジに、アスカは驚いて聞き返した。

「……僕は初号機を自爆させてやつらを倒す。出来るだけ引きつけてた皆さんの相手を道連れにするつもりだよ。やつらの数が減ったら、きっとアスカも戦いやすくなるよ」

「バカシンジ、何を言ってるのよ!」

「最後にアスカと話せて良かった」

シンジはそう言って、式号機との通信を切った。

「シンジ!」

式号機のアスカが真っ暗になったモニターにいくら呼びかけても、返答は全く無い。

「あのバカっ、一人で格好つけちゃって!」

アスカはそう言って初号機の元へ向かって全力で走った。走りながらアスカは浮かび上がった疑惑について考える。

「おかしいわ、ネルフを壊滅させるだけならエヴァは九体も必要無いはず……」

アスカの頭の中で、ミサトに聞かされた人類補完計画の内容と、九体の量産型エヴァ達が繋がる。

「まさか、ゼーレはサードインパクトをここで起こすつもりなの!？」

胸騒ぎを覚えたアスカは、必死に初号機の元へと急ごうとした。
シンジの乗る初号機が利用される予感がしたのだ。

今までバラバラの動きをしていた量産型エヴァ達が初号機を中心に陣形を整えているのを見て、アスカの予感確信へと変わった。

量産型エヴァ達は一斉に初号機向かって突進した。

それを目の前で見たアスカは初号機の自爆を止めようと叫び声を上げる。

「シンジ、ダメっ！」

アスカの制止も通じず、初号機からまぶしい光が広まった。

「シンジーっ！」

真っ白になった視界に向かって、アスカは涙を流しながら叫んだ。
そして次の瞬間、アスカの意識と視界はブラックアウトした……。

<?????>

「アスカ、アスカっ！」

「シンジ？」

「良かった……」

横たわっていたアスカがうつすらと目を開けてそう答えると、シンジは嬉しそうに息をもらした。

「ちつとも良くないわよ、この大バカシンジ！」

怒ったアスカはシンジの胸倉をつかみ上げた。
そして、シンジを思いっきりにらみつけて言い放つ。

「アタシを勝手に置き去りにするなんて、許さないんだからね！」

「ごめん……」

「でも、こうしてまた会えたんだから、シンジを責めるのはもう止めるわ」

アスカが優しい口調でそう言っただけでシンジをつかみ上げていた手を離すと、シンジは安心したように顔を上げて周りを見回した。

二人の周囲に広がるのは紅い空と白い砂浜、紅い海が広がる世界。音は打ち寄せる波の音以外、何も聞こえなかった。

「いったい何が起こってしまったんだろう？ 僕は初号機で自爆したはずなのに」

「きっと、サードインパクトが起きてしまったのよ。それで人類補完計画の通りになってしまった……」

「僕とアスカがこうして居られるのは？」

「多分、エヴァの中に居たから無事だったのよ。アタシ達のママ達が守ってくれたんだわ」

「そうか……でも、僕が原因なんだろうね」

シンジもある程度察しはついていたのか、暗い顔でそうつぶやいた。

「そんな事はないわ、これは仕組まれていた事なのよ」

アスカはシンジの手を優しく握って、シンジを励ました。

「どっちだって同じだよ、僕が世界を滅ぼした元凶だって事には代

わりは無いよ」

「いえ、アタシとシンジがこうしてここにいると言う事は、人類の補完は完全に行われていないって事になるわ」
「えっ？」

アスカの言葉を聞いたシンジは驚いてアスカを見つめた。

「もしかして、世界の姿が元に戻る可能性が残されているかもしれないって事よ」

アスカが希望を持ってシンジを励まそうとするが、シンジの表情はさえない。

「元に戻ったとしても、僕は嬉しくないよ」

「どうしてよ？」

「だって、サードインパクトが僕のせいで起こったと知ったら、きっとみんなは僕を許してはくれないよ」

そう言っただけで身体を震えさせるシンジの前で、アスカは太陽のような微笑みをたたえてシンジを見つめる。

「みんなシンジが悪いんだって言っても、アタシはシンジを責めたりなんかしないわ」

「アスカ……」

シンジの視線と、アスカの視線がぶつかった。

「世界の全てを敵に回しても、アタシはシンジの側に居るから……」

アスカはそう言ってシンジを抱きしめると、シンジにそっと優しく

口づけをした……。

その二人の姿を紅いＬＣＬの海に溶け込んだ全人類が目撃していた。彼らは何を思っただろうか、それを知る術は無い……。

2011年 6月記念LAS小説短編 きつと雨のせい

使徒との戦いが終わり、碇シンジ、惣流・アスカ・ラングレー、綾波レイの3人はエヴァンゲリオン専属パイロットの任から解放された。

そしてシンジ達を待っていたのは平穏で平凡な中学生としての生活。第三新東京市は目的の変わったネルフを中心に、戦禍を乗り越えようとしていた。

激しくなった使徒との戦いで他の地域に避難していた人々も、少なからず戻って来ていたのだ。

シンジ達の通う第三中学校は、3年の1学期から再開された。それは早くシンジ達に中学生としての生活を送らせてあげたいと言うミサト達の努力の成果だった。

しかし、高校受験を控える3年生にとっては1年はとても短い。それでもシンジ達は5月の連休までは取り戻した中学生の生活を満喫するかのように遊びに没頭した。

その余韻が冷めやらぬ6月のある日の事、シンジはアスカと商店街で買い物をしていた。

シンジとアスカは以前と変わらず葛城家でミサトと同居生活を続けて居たのだ。

だが今日の買い物はいつもの夕食と違って量が多かった。

それは葛城家のリビングでシンジの誕生日パーティをやるからだ。

最初はレイとヒカリとアスカが料理を担当し、トウジとケンスケがシンジの材料の調達に付き合うはずだった。

しかし、アスカはこの前の家庭科の調理実習で中は生焼け、表面は黒こげのハンバーグを披露。

トウジのカレーやケンスケの野菜炒めの方が十分おいしいという結果に、ヒカリも苦笑するしか無かった。

そこでアスカは名誉挽回のために買い出しに立候補した。

「どうせアタシは暴力女よ、鈴原も相田も、アタシの分まで料理を作ってあげればいいでしょう！」

アスカは怒った様子でトウジとケンスケの同行を拒否したが、これは一部にアスカの思いやりが込められているのかもしれないとシンジは思った。

トウジとケンスケは前にシンジに得意料理を食べさせると言っていたからだった。

そんなアスカの性格を知っているシンジは苦笑した。

だがアスカだけで全ての食材を買って来れるはずは無く、誕生日を祝ってもらう側のシンジがアスカの荷物持ちの手伝いをすると言うおかしい事になってしまった。

そしてシンジにはたくさんのお食材を持たせて、自分は大きなケーキの箱を持っているだけと言うのもまたアスカらしい。

「でも、そんな高級なケーキにしくなくても良かったんじゃないかな」「うるさいわね、アタシが選んだケーキに文句があるの？」

ケーキ屋でアスカは、イチゴのたっぷり詰まったケーキを選んだ。しかし、そのケーキの値段を聞いたシンジは目玉が飛び出るほど驚いた。

よりによってアスカが選んだケーキは特選の大粒の高級イチゴをふんだんに使ったものだったのだ。

ミサトから誕生日パーティのために貰ったお金では足りなかった。

「アスカ、予算が足りないから他のケーキにしようよ」

「妥協したら負けを認める事になるわ、そんなの悔しいじゃない！」

シンジがこっそりアスカに耳打ちすると、アスカは毅然とした表情

で首を振った。

そして自分の財布からお金を取り出して店員に支払った。そのアスカの行動にシンジは開いた口が塞がらなかった。

アスカの買いい物に付き合わされると、シンジが買わされる事が多かったのに、ケちなアスカがどうして？ と驚愕したのだ。

アスカがケチだと言うのはシンジの思い違いで、シンジがアスカの女心を見抜けなかったただけなのだ。

シンジはアスカは負けず嫌いで、言ってしまった勢いでケーキを買ってしまったのだろうと思って納得した。

その推理はだいたい合っていた。

アスカもアスカで、シンジに渡す誕生日プレゼントを用意できていなかったのも、偶然とは言えこうして渡す事ができて安心していた。シンジは自分で何が欲しいと主張するタイプではない。

もちろん、高級なチエロを欲しがっていたのは知っていたが、さすがにそれはアスカの小遣いでは手が出ない。

手編みのマフラーや手料理なんて出来っこないと諦めた。

「アタシのおごりなんだからね、心して味わいなさいよ」

「うん、みんなに言うとか笑われるかもしれないと黙っていたけど僕はイチゴが好きだったんだ」

「そ、そう、それは良かったじゃない」

シンジの笑顔を見て、アスカは照れ臭そうに顔を背けた。

葛城家の帰り道を歩くシンジとアスカは、行く手の上空に灰色の雲が広がっているのに気がつく。

「家に戻るまでに降られるかな？」

「走るわよ！」

「待ってよアスカ！」

たくさんの荷物を抱えているシンジは顔を真っ赤にして汗を流し、息を切らせながら必死にケーキの箱だけを持ったアス力を追いかけた。

しかし、無情にも数分で雨は降り出した。

「ほらっ、シンジがノロノロしているから降り出したじゃないの！」
「そ、そんな事言われたって……」

このまま立ちつくしていたら2人ともびしょ濡れになってしまう。
シンジとアス力は近くの公園の樹の下で雨宿りをする事になった。

「あーあ、すっかり濡れちゃった」

この日アス力は白いブラウスを着ていた。
当然濡れてしまうととても面倒な事になってしまう。

「シンジ、ずっとあっちを向いてなさいよ」
「分かってるよ」

シンジはすぐ側に立つアス力にドギマギしながら、食材が濡れないように気にしながら立っていた。

「……すぐに通り過ぎるわよね？」
「そうじゃないと困るな、食材が無いとみんなも料理を始められないだろうし」

降り出した雨は弱まるどころか、さらに激しさを増しているように見えた。

シンジとアス力は無言で空を見上げている。
その沈黙に耐えきれなくなったのか、アス力が口を開く。

「……ねえシンジ、アタシ達と一緒にエヴァに乗って戦った事も、今こうして2人で居る事も、この雨みたいに遠い思い出になって通り過ぎて行っちゃうのよね」

「アスカ？」

沈んだ声で話し掛けてきたアスカに、シンジは驚いて振り返った。

「小さい頃にママが居なくなっちゃってから、アタシはずっと独りぼっちのままだと思ってた」

シンジはアスカの話に口を挟まず、じっと瞳を見つめていた。

「だけど、気が付いたらいつの間にかアタシの側にはシンジが居た。アタシがパイロット失格だって言われてヤケになってた時も、ずっとアタシを見ていてくれた」

アスカに見つめ返されてそう言われたシンジは、体中がかゆくなるような照れ臭い気持ちでいっぱいになった。

しかし、アスカは真剣に話しているのだからシンジは目を反らして逃げてしまっわけにはいかないと思ってこらえた。

「でもね、優しくしてくれたママの思い出がアタシの中で薄れて行ってしまうのを感じると悲しくなっちゃうのよ。どんなに優しくされても遠く離れてしまうと、消えて無くなってしまっのかなって」

そう言っつてうつむいたアスカに、シンジはどんな言葉を掛ければ良いか迷った。

そんなシンジの心境を察して、アスカはため息をつきながら謝る。

「悪かったわね、せつかくの誕生日なのにこんな湿っぽい話をしてシンジに迷惑かけて」

「そんな事無いよ、アスカがこうしてありのままを話してくれて嬉しかったよ。雨って不思議な気分になさしてくれるよね」

シンジがそう言うのと、アスカはうつむいていた顔を上げてシンジを見つめた。

「アスカが話してくれたから僕も話すね。僕もアスカが居てくれて助かってるんだ。だって、アスカは僕にいつもたくさんの元気をくれるから」

「な、何を言ってるのよバカシンジ、アタシはアンタがあまりにウジウジして情けないから気合を入れてやってるだけよ」

笑顔でそう言い放つシンジに、アスカは顔を真っ赤にしてそう言い返した。

「だからアスカ、お願い中学を卒業してもドイツへ帰ってりしないでよ」

「どうしてよ？」

シンジの言葉の意味は解っていたが、アスカは尋ねた。

「アスカにはこれからもずっと側にいて欲しいんだ。笑うかもしれないけど、アスカと同じ高校へ通って思い出を作って行きたいのが僕のありのままの気持ちなんだ」

「じゃあ、身体を張ってアタシを引き止めてみせてよ」

「……うん」

アスカの言葉にシンジはうなずいた。

そしてシンジとアスカはしばらくの間黙って見つめ合っていた。

激しい雨音が周囲に響いている。

それ以上言葉は要らなかった。

持っていた荷物を置いたシンジとアスカは雨が降り終るまで抱き合っていた。

雨が止んだ後、2人の明日を祝福するかのように綺麗な虹が空にかかっていた。

2011年 七夕記念ハルキョン小説短編 ハルヒがポニーにする理由

俺が初めてハルヒのポニーテール姿を見たのは、あの閉鎖空間に巻き込まれた翌日の教室での事だった。

その時のハルヒは新学期にそれまで伸ばしていた髪を切っちゃったもんだから、ポニーテールと言えるのか怪しいもんだったがな。

やはり閉鎖空間でハルヒにキスをする前に何を言って良いのか解らなくて口走ってしまった言葉が原因なんだろうな。

お前は偶然ポニーテールもどきの髪型にしたと言っが、無理があるぞ。

やっぱりあの頃から少しでも俺の事を意識し始めていたんじゃないのか？

長門に閉鎖空間からの脱出方法を聞かされた時は驚いたよ。

それが俺がハルヒを意識し始めたきっかけには相違無い。

俺はまるっきり好きでも無い女にキスをするなんて芸当が出来るほど器用では無いからな。

次にハルヒのポニーテール姿を見たのは七夕も迫った七月の事だ。

喜緑さんがSOS団の部室を訪れ、俺達は行方不明になったコンピ研の部長氏の部屋へ行き調査する事になった。

そこでもハルヒは傍若無人に振る舞い、冷蔵庫の中を漁りわらび餅を食べてしまうわ、勝手に部長氏のパソコンのDドライブを覗いてしまうやりたい放題だった。

部長氏は長門と古泉の活躍によって閉鎖空間から救い出せたわけだが、ハルヒは部長氏に報酬としてさらにパソコンを要求したのだ。そして部長氏が拒否すると、ハルヒは例によって脅迫を始めやがった！

「そう、それならあんたが部屋のパソコンで見たサイトの履歴を暴露するわ。それとも、Dドライブの中身の方が良いかしら？」

「や、止めてくれ！」

部長氏はすでにハルヒからパソコンを一台奪われている。

こんな悪習が何回も通じるとハルヒのやつに味を占めさせてはいけない、さすがに部長氏がかawaiiそうになってきた。

そこで俺はハルヒを止める事にした。

「何よキョン、団長に盾つくなんていい度胸しているわね！」

いつもならハルヒの迫力に圧されてしまふのだが、今回の俺は本気だった。

「ハルヒ、自分の欲しいものが何でも手に入ると思ったら大間違いだぞ！ 他人から無理やり奪い取るなんて言語道断だ！」

側に居た古泉の顔色が変わるのを無視して、俺はハルヒに説教を始めた。

ハルヒは口をアヒルみたいにとがらせて聞いていた。

「わかったわよ、ただパソコンが欲しいなって言うてみただけ」

不機嫌そうにハルヒはそう言うのと、コンピ研の部室を出て行った。

その後のハルヒは団長席で静かに黙り込んでいた。

突然「帰る」と一言つぶやき、俺と目を合わせる事無く部室を出て行った。

「涼宮さんはすっかりつむじを曲げてしまわれたようですね」

「古泉、あんまりハルヒを甘やかすな」

俺は目の前のハルヒの横暴を見過ごした古泉に腹が立っていた。しかし、古泉はいつもの微笑みを俺に返すだけだった。

その日の翌日、ハルヒは教室の自分の席で面白くなさそうな顔で頬杖をついていた。

ハルヒの髪型はポニーテールだった。

この時の俺は、まだハルヒの意図をくみ取れる程では無かった。

たぶん、気まぐれでポニーテールにしたのだろうと結論を出した。

いや、心の底ではひよっとしたらと疑問を持っていたのだが、否定する気持ちの方が強かったんだ。

俺が決定的にそれを確信したのは文化祭に向けた映画撮影をしている最中であった。

ハルヒは文化祭においてSOS団で映画を公開すると言い出して、

俺達を巻き込んだ。

俺もハルヒの提案に魅力を感じないわけではない。

だから映画撮影そのものには反対はしなかった。

しかし、俺達SOS団のメンバーを人形だと言われた時は本当に腹が立った。

俺達SOS団は仲間じゃなかったのかよ！

そう思っていた俺は悔しくて、古泉が止めるより早くハルヒを思いっきりぶん殴っていた。

殴られたハルヒは目を丸くして俺を見ていた。

ハルヒに驚かされる事は日常茶飯事だが、ハルヒが驚くのは珍しいから俺の方が驚いちまったぜ。

そしてその後に見せたハルヒの表情は、俺を驚愕させた。

ハルヒは目から涙を流して顔を真っ赤にして怒りだした。

それはまるで子供が癇癪^{かんしゃく}を起こした様だった。

そしてハルヒは腕に着けていた”超監督”の腕章を叩き付けて俺達の前から立ち去って行った。

俺達はハルヒに何も声を掛ける事は出来なかった。

ハルヒの姿が消えた後、古泉はいつに無く真剣な眼差しで俺をにらみつけて来る。

「いったいどういふつもりですか、涼宮さんに手を上げるなんて？」

「じゃあ黙ってハルヒの言う通りにしていればいいのか」

「その通りです、我々は涼宮さんの精神安定剤なのですから」

「だからって、ハルヒを腫れ物に触るように扱う事は俺には出来ん」

「僕はとてもあなたの考えには賛成できませんよ」

古泉はハルヒが中学生の時散々振り回されているんだからな、そんな先入観を持って恐れてしまうのは解る。

でも、少しはハルヒのやつを信じてやっても良いんじゃないか？

あいつも自分で気付いても良い頃さ。

地面に置き去りにされた”超監督”の腕章を拾い上げながら想像していた。

明日の朝、ハルヒは教室でポニーテール姿で俺を待っているだろうと。

そしてそれは予想通りになった。

ハルヒのその姿を見た俺は、笑い出したくなった。

お前は何て不器用なやつなんだ。

俺にはお前が謝っている事は解っているさ、ハルヒ。

だから俺はもうお前を責める事はしないぜ。

「ハルヒ、これを落として行ったぞ」

俺はさりげない仕草でハルヒに”超監督”の腕章を返してやった。

腕章を受け取ったハルヒは太陽のような笑顔になって元気を取り戻した。

その日の放課後も映画の撮影が再開されたのは言うまでもない。

「キョン、早く来なさい！　水が冷たくて気持ち良いわよ！」

ポニーテールで水着姿のハルヒがそう言って俺を手招きした。

夏休みを目前に控えた7月7日、俺達は海に来ている。

周りには長門や古泉、朝比奈さんの姿は無い。

なぜかと言えば、俺とハルヒは長門や古泉、朝比奈さん達と違う大学に進学したからだ。

俺とハルヒは世間一般で言うデートと言っているからだ。

そして、ハルヒは今日だけでなく昨日もおとといもその前も、ずっと髪型はポニーテールだ。

でも、俺達の間には別に困る事は無いんだ。

「悪かったわね、アンタが課題の締め切りに追われていたのに海に出掛けたい何てワガママ言ってたさ」

「良いんだ、そのおかげで俺も課題を早く完成させることが出来たからな。補講の心配が無くなったんだ、今日は思いっきり遊ぶぞ！」

……だって、こうしてハルヒは素直に謝る事が出来るようになったからな。

それにハルヒはこんな穏やかな笑顔を浮かべられるようになったし、ポニーテールで魅力は136%に上がった。

過去の俺が今の俺を見たら凄く羨ましがらるだろう。

そう言えば今日はポニーテールの日だったな。

由来は少し強引な気もするが、ポニーテールを考えついた人物に感

謝だ。

使徒との戦いを終えてエヴァンゲリオンのパイロットの責務から解放されたシンジとアスカは、筑波にある民間企業の研究所で働いていた。

そのままネルフで働き続けなかったかとゲンドウに勧められたのだが、2人はそれを断った。

そして高校、大学、大学院と進学したシンジとアスカが選んだ道は研究者としての道だった。

人工進化研究所と名前を変えたネルフからも誘いを受けたが、シンジとアスカはこの研究所を選んだ。

ここで功績が認められたアスカは専用の研究室を持つに至り、シンジは雑用をまとめる助手の立場に甘んじていた。

シンジとアスカが結婚していると知っている同じ研究所の所員の中には、シンジの立場をバカにして笑う者も居る。

しかし、シンジは職場でアスカより立場が下と言う事に、何の不満も感じていなかった。

何よりも家庭での生活に充実感を覚えていたからだ。

ある晴れた日の事、休暇を取ったシンジとアスカは2人の子供を連れて近くの利根川の河川敷に遊びに来ていた。

周囲には葦が生い茂り、土手は草地で覆われていた。

岸边には小魚を取るための漁師の網が仕掛けられていて、ちらほらと釣り人の姿が見える。

「この辺りはたつぷりと自然が残っているわね」

「そうだね、ジオフロントは人間の手によって都合良く作られた緑

と言った感じがしたよね」

陽の光を浴びて気持ち良さそうに伸びをするアスカ。

そのアスカには今年で2歳になる娘のユキが抱きついている。

シンジは右手に網を持ち、左手で3歳になる息子のゲンキの手を引いて歩いていた。

「あつ、シンジ！」

アスカが葦の間に浮かぶ小さな丸太を指差した。

シンジが視線を向けると、そこでは小さなカメが甲羅干しをしている。

「ミドリガメの赤ん坊だね」

「カメさんだー」

言葉を覚え始めたばかりのゲンキが嬉しそうに歓声を上げた。

「かみついたりしないの？」

「かみつくのはカミツキカメやワニカメだよ」

「それじゃあ、あのカメを捕ってよ」

「よしっ」

しかし、シンジがカメの乗る丸太を岸边に引き寄せた時は小さなミドリガメは丸太の上から姿を消していた。

「きつと水の中に潜ってしまったんだ」

「そう、残念ね」

「こっちの方へ来て居れば捕まえる事が出来るんだけどね」

「カメさんはー？」

そう問い掛けるユキに、シンジは優しく微笑みかける。

「また後で捕まえられるかもしれないよ」

「そうなの？」

「うん、カメは甲羅干しをするために地上に出なければいけないからね」

「ふーん、ずっと水の中に居るわけじゃないんだ」

シンジの説明に、アスカは感心したようにうなずいた。

その後岸辺をうろついたシンジは、網でタニシを2匹捕まえる。

「ほら、こっちがゲンキの分で、これがユキの分だよ」

「パパとママの分はー？」

ユキにそう言われたシンジはクスクスと笑った後、またタニシを新たに2匹捕まえるのだった。

「ねえ、あっちに居る人達は何を釣っているの？」

「多分、マブナとかヘラブナだろうね。そうだ、ライギョなんかも捕まえられるかもしれない、ちよつと行って来るよ」

そうアスカ達に告げると、シンジは網を持って歩いて行ってしまった。

「まったく、パパってばアンタ達に良い所を見せようと張り切っちゃって」

豆粒のようになってしまったシンジの姿を見て、アスカはゲンキとユキにそう語りかけた。

「うーん、オタマジャクシしか捕まえられなかったよ」

手ぶらで戻ってきたシンジは、アスカ達に向かって少し残念そうにつぶやいた。

しかし、そんなシンジに幸運が舞い降りた。

先程の小さなミドリガメが同じ場所で甲羅干しをしていたのだ。そのチャンスを逃さず、シンジはミドリガメを捕まえる事に成功する。

「やるじゃない、シンジ！」

「すごい」

アスカとゲンキに褒められたシンジは少し照れくさそうに笑う。

「じゃあ、次はこのカメの餌を取らないとね」

「カメの餌って何？」

「ウシガエルとかかな」

「カエルう！？ 気持ち悪い」

シンジはそんなアスカのつぶやきを聞いて苦笑した。

そしてシンジは捕った小さなミドリガメをアスカに預けて、水田の用水路に向かう。

この辺りの用水路はコンクリートで固められている事は無く、自然にあふれていた。

水面を眺めていたシンジは何かを見つけたのか、用水路に何回か網を入れるが、捕れたのはマブナの死体と小さなヘラブナだった。

「小さなメダカが2匹、追いかけてっこをしているのが見えたんだけどね」

「へえ、メダカが居るなんて、この辺りの水は澄んでいるのね」

その後もメダカを狙って用水路をウロウロするシンジの姿を見ていたアスカは、持っていたミドリカメが甲羅から首を出して辺りを見回しているのに気付く。

「ふふ、逃げようとしているのね」

ゲンキとユキもそのカメの様子が面白いのか、楽しそうに甲羅を突いていた。

そして、2時間ほど河川敷や水田でねばったシンジだったが、結局メダカを捕まえる事は出来なかった。

「水草が生えて居たら、そこに網を入れれば捕まえられるんだけどね」

「やっぱり、田んぼにあげる水なんだから薬とか少し入っているんじゃないの？」

釣果はカメとタニシだけだったが、たつぷりと遊んだシンジ達は家へと帰るのだった。

家に帰って夕食の時間になると、ゲンキとユキはシンジにテレビゲームをやるようにせがんだ。

それは、銃の形をした専用コントローラを使って標的を撃ち落とすゲームだった。

「パパ、ゲームやってー」

「ママもー」

「もう、ゲームはご飯を食べてからでしょう」

ユキに腕を引っ張られたアスカは、そう言いながらもゲーム機のコ

ントローラを手にした。

「目標をセンターに入れてスイッチ……目標をセンターに入れてスイッチ……」

このゲームはいつもシンジの圧勝だった。

アスカはすぐに両手を上げて降参のポーズを取る。

「やれやれ、射撃はシンジには敵わないわね」

「パパ、つよいー」

褒められたシンジはくすぐったそうに微笑んだ。

そして、満足したゲンキとユキは夕食を摂ると、眠ってしまうのだった。

「ふふっ、今日のシンジはすっかりゲンキとユキのヒーローね」

「喜んでくれて良かったよ」

アスカが優しくシンジに微笑みかけると、シンジは穏やかな笑顔を返した。

「僕は小さい頃、ずっと一人で遊ぶ事が多かったからね。田んぼで魚とか虫を捕まえてばかり居たんだよ」

「シンジ……」

シンジの言葉を聞いたアスカが悲しそうな瞳でシンジを見つめると、シンジは首を横に振ってアスカに語りかける。

「アスカ、そんな顔をしないでよ。僕はそんな経験を父親となった今になって活かす事が出来て嬉しいんだから」

「そっか、シンジがそう思うならそれで良いわ」

シンジがそう言うのと、アスカは納得したようにそうつぶやいて明るく微笑みかけた。

親戚に預けられて孤独な少年時代を送り、エヴァンゲリオンのパイロットとして厳しい訓練をさせられたのは悲しい経験だ。

しかし、こうしてシンジはその経験を楽しいものに転化させている。第三新東京市では無く自然豊かな筑波の地に住んで働こうと2人が決意したのもシンジの希望があつての事だった。

シンジとアスカがリビングでゆったりとした時間を過ごしているとシンジの携帯電話が鳴る。

「電話は父さんからだったよ。贈ったネクタイを気に入ってもらえたみたいだ」

「そう、良かったわね」

シンジとアスカは父の日のプレゼントとしてゲンドウにネクタイを贈っていた。

「ねえ、何でシンジはそんなに司令に感謝しているの？ だって、

司令はお世辞でも良い父親だ何て言えないじゃない」

「はは、アスカはハッキリと言うね」

シンジはアスカの言葉に苦笑した。

シンジがゲンドウに深く感謝をしている事は自分の子供にゲンキと言つ名前をつけた事からも感じられる。

「父さんにとって僕は利用するだけの存在だったかもしれないけど、

それだけじゃない気がするんだ。それに……」

「それに？」

「父さんが僕をエヴァンゲリオンのパイロットに選んでくれたから、僕はアスカと出会う事が出来たんだ。だから僕は父さんにいくら感謝しても感謝しきれないぐらいだよ」

シンジの言葉を聞いたアスカは沸騰したように顔を真っ赤にさせる。

「な、なんて事を言うのよ、バカシンジ！」

そんな事を言うアスカのほおは嬉しさで緩み切っていた。

ミサトに見送られ、アスカを助けるためにエヴァ初号機で量産機の輪の中へ飛び込んだシンジ。

その救援はギリギリのタイミングで間に合った。

自分を助けると言うシンジの言葉を聞いて、アスカは弐号機のエントリープラグの中で歓喜の涙を流した。

しかし、現実是非情な物だ。

すでに動けなくなっていた弐号機はロンギヌスの槍の餌食となり、

シンジの乗る初号機も量産機に捕らえられた。

そして、空中に描かれる巨大な光る紋様。

シンジ達の奮闘もむなしく、ゼーレの人類補完計画のシナリオ通りにサードインパクトは起こってしまった。

碧き世界は紅い空に包まれ、人類すべての人間は溶け合い、紅い海となってしまった。

ただ2人の例外、碇シンジと惣流アスカラングレーを除いて。

世界の姿がすっかり様変わりしたのを目の当たりにしたシンジの視線はしばらくの間、虚空をさまよっていた。

打ち寄せる波の音しか聞こえないこの奇妙な空間は不思議とシンジの心を落ち着かせて行く。

「あれは、アスカ!？」

シンジは白い砂浜に倒れているプラグスーツ姿のアスカを見つけると期待と不安を抱きながら駆け寄った。

ロンギヌスの槍に串刺しにされる弐号機の姿と、アスカの絶叫が頭にこびりついていたからだ。

幸いにも、アスカは気を失っているだけで無傷だった。

アスカの無事に、シンジは目を輝かせる。

シンジはアスカを起こそうと、肩をつかんで揺り動かした。
揺さぶられたアスカがゆっくりと目を開くと、シンジは嬉しそうな笑顔になる。

「よかったアスカ、僕達は助かったみたいだよ！」

テンションが上がったシンジとは対照的に、起き上がったアスカは周囲を見回すと冷ややかな表情でシンジを見つめる。

「アンタ、馬鹿……？　こんな変な世界になっちゃって、どこが助かったって言うのよ」

「でも、僕達はこうして生きているんだし」

シンジは気弱そうな表情でアスカに言い返した。

しかし、シンジも段々とこの波の音しか聞こえてこない世界を不気味に思ってきた。

そして頭の中に浮かんだ不安な懸念をアスカに話す。

「もしかして、サードインパクトが起きてしまったのかな？」

「ええ、多分そうよ」

シンジの質問にアスカはうなずいた。

さらにアスカは皮肉めいた言い方で言葉を続ける。

「加持さんが言っていた、人類補完計画は実行されてしまったんだわ。アタシ達が補完されずに済んだのはどういうカラクリなんだかわからないけどね」

「そんな……」

予想していた事とは言え、シンジは大きく落胆してうなだれた。

「アタシ達にして来た事は、全部無駄に終わったのよ」

アスカはそう言ってシンジに背中を向けると、海へと向かって歩き出した。

驚いたシンジは慌ててアスカを追いかける。

シンジはアスカが紅い海に腰まで浸かり始めた所で追い付き、アスカの腕をつかむ事が出来た。

「アスカ、一体何をするつもりだよ!？」

「決まってるじゃない、このまま海の中へ入るのよ」

アスカは振り返らずに淡々とした口調でそう答えた。

そんなアスカの言葉を聞いたシンジはアスカをそれ以上行かせないと肩をつかんで連れ戻そうとする。

「アスカ、死んじゃダメだよ!」

「うるさい、生きて居たって仕方が無いじゃないの!」

怒ったアスカは振り返ってシンジに向かってそう言い放った。

そのアスカの瞳には涙が溜まっている。

悲しみと悔しさに満ちたアスカの表情を見たシンジは何も慰めの言葉が出て来なかった。

こんな時、加持さんだったらアスカにどんな言葉を掛けるだろう…

…。

シンジがそう考えた時だった。

シンジの頭の中に直接、加持の言葉が飛び込んで来た。

「おいおいアスカ、何を言ってるんだ」

「加持さん!？」

アスカにも加持の声が聞こえているらしく、驚いた顔で辺りを見回していた。

しかし、声はすれど姿は見えない。

「俺は加持リョウジでもあり、加持では無い。融け合った人類の統合思念体の中から、加持リョウジの表層意識が君達に語りかけているだけだ」

戸惑うシンジ達の頭に再び加持の声が響いたが、その説明でシンジ達の疑問が解けるはずは無かった。それは加持の方も心得ている様子で、落ち着いた加持の声が再びシンジ達の頭の中に響く。

「俺の正体はどうでもいいだろう。それよりアスカはどうして死んでしまいたいなんて思うんだ？」

すると、アスカは再び悔しさがこみあげたのか、涙を流しながら話し始める。

「アタシは今まで、エヴァンゲリオンパイロットとして生きて来たわ。でも、使徒との戦いが終わったら、何の意味が無いじゃない」

「それは違うな」

「何が違うのよ!」

加持から否定の言葉が返って来ると、アスカは怒って言い返した。これには慰めの言葉が掛けられると思ったシンジも驚いた。

「生きてきたんじゃない、これから生きるのさ。君達はまだ14歳じゃないか」

加持の言葉を聞いたシンジは目を覚まされた気がした。
シンジもアスカと同じ気持ちを抱えていたのだ。

「でも、アタシはこれからどうやって生きて行けばいいのよ……」
「それは自分で見つけるんだ、シンジ君と一緒にな」

アスカは涙でぬれた瞳でシンジをじっと見つめた。
何も言葉が浮かんでこないシンジの頭に再び加持の声が響く。

「こんな時は、言葉は不要だ。分かるだろう、シンジ君？」

シンジはうなずいて正面からゆっくりとアスカを抱きしめた。
アスカもシンジに抵抗する事無く身体を預けた。

「君達2人は人類最後の希望だ、頼んだぞ……」

消え入るような優しいげな加持の声をシンジとアスカは黙って聞いていた。

その言葉の意味を加持に尋ねてみたい気持ちもあった。
しかしそれよりも、シンジとアスカはお互いの温もりをしっかりと
感じる事に集中していたのだった。

アスカが泣き止むまでシンジはずっとそのままアスカを抱きしめて
いた。

「シンジ、アタシはもう大丈夫よ」

シンジから身体を離れたアスカは穏やかに微笑んだ。
それはまだ強がっている見せかけの笑顔かもしれない。
しかし、シンジもアスカに笑顔を返す。

2人の胸には小さな希望が芽生えていたのだ。

本当に加持の人格が2人に話し掛けてきたのかは分からない。

アスカとシンジは葛城家でのミサトの異変から加持が死んでしまったのかもしれないと考えていたからだ。

しかし、自分達に兄の様に接してくれていた加持ならきっと同じ言葉を掛けてくれるのだろうと信じる事にした。

「行こう、アスカ」

シンジの言葉にアスカはシンジの目を見つめてすっかりとうなずいた。

そして2人は互いに手を繋いで紅い海を飛び出し、白い砂浜を駆けて行った。

その残された足跡を波が静かにさらって行く。

まるで2人の頭を優しくなでるかのよう……。

そして、アスカとシンジの目の前には2人の心の中を現すような青い空が広がり始めていた。

ハッピーエンドとなるかは読者様の想像にお任せする、と言う方向性で公開したのですが、それではご満足して頂けないと言う感想が寄せられたので、ハッピーエンドを予想させる最後の一行を加えました。

ハルキョン大学生カップル設定。

ぬいぐるみのクレーンゲームの内容は、文章では説明しにくいので実際と少し変えてあります。

うつかり、ハルヒの前で”海ほ　る”の事なんか話題にしたのがま
ずかった。

海の上に建てられた観光スポットなどと聞いて、ハルヒが黙ってい
るはずが無い。

えっ？　宇宙人や未来人、超能力者などと全く関係ないだろうって？

大学生になつてからのハルヒには興味事が一つ増えたんだ。

”恋愛”と言うジャンルだ。

434

「キョン、あんた車を運転できるんでしょう？」

「おい、ここから片道8時間近くかかるじゃないか」

「大丈夫、あたしと交代しながら走れば5時間じゃない」

おい、何で俺の方が2時間多いんだよ。

まあ、8時間ぶっ続けで運転しろと言わないだけ昔のハルヒに比べ
たらはるかにマシだが。

「決まっているじゃない、あんたに花を持たせてあげるのよ」

俺の心が読めるのか、ハルヒはそんな事を言い出した。

正直に集中力がそれぐらいしか持たないと言ったらどうだ。

「あたしはね、瞬発力はあるけど持続力はキヨンの方が上じゃないの」

「ああ、思いつきで兵庫県から千葉県まで行こうとするやつだからな」

「陸続きなんだから平気よ」

こうしたハルヒの強引さは出会った頃からちつとも変わらん。

ヘンテコな神の力なんぞ使わなくても実現可能な事であるのが救いか。

途中まで新幹線や飛行機で行く、夜行バスで行くなどの案は却下された。

「だってさ、今のうちは高速道路にいくら乗っても1、000円なんでしょう？ このチャンスを逃す手は無いじゃない！」

「来週の日曜日を最後に廃止するらしいけどな」

他にも理由はあって、2人きりで色々な場所を寄り道できるからだそうだ。

初めツンツン、後はデレデレと言うのが谷口の言う真のツンデレの意味らしいが、谷口の事だからな、あまり信用していない。

そう言えばあいつは長続きする恋人がどうして出来無いんだろうな。意地の悪いやつだとは思わないが。

「そんなの決まっているじゃない、理想の虚像を演じ続けようとして痛々しいのよ。要する見栄っ張りで子供だからよ」

「うわっ、バツサリと斬りやがった」

谷口、在りのままのお前を愛してくれる女性がいつか現れてくれる事を祈るぞ。

「谷口の事なんてどうでもいいでしょ、今は”海ほた”に行く計画を建てるのが先決よ！」

「そうだったな」

片道8時間もかかる行程だ、運転経験の浅い俺達が無理をしないで行くためには千葉県で一泊するのが妥当だと結論が出た。

俺とハルヒが2人きりで泊まりの旅行へ行くなんて初めての事だ。もちろん、大学生になったのだから親の同意を取るべき事でも無いのだが、俺とハルヒの顔は真っ赤になった。

「なあ、シングルの部屋2つじゃ無くてダブルの部屋1つを取るのが効率的だよな」

「ねえ、あたしとキョンが1つのベッドで寝れば経済的にもならない……？」

待て、そこまではやりすぎだろう。

俺が慌てて首を横に振って否定すると、ハルヒは冗談だと少し残念そうに笑った。

別に俺はハルヒの事が嫌いだからそう言っているわけじゃないぞ。俺の理性が持つ自信が無いだけだ。

高校卒業の時に告白されてからデートは数え切れないぐらいしたけどな。

しかし、現実的に計画を建てる段階になって俺達は何んでもない事に気が付いた。

車で行くとなったらガソリン代は物凄く掛かりそうだ。

長門に電話をして事情を話して計算してもらった所、とんでもない金額になって俺は悲鳴を上げたくなった。

「こりゃあ、成田か羽田まで飛行機で行った方がいいんじゃないか？」

「それじゃあ、海　たるを通る必要が無くなってしまっじゃない！」

ハルヒは憤慨した顔でそう怒鳴った。

俺に怒られても困るんだが。

しかも、千葉県のホテルに泊まるとなるともつと時間も費用もかかるし、無理があるな。

するとハルヒは俺の部屋の椅子の上に立って、自信満々の笑顔になっ
てこう言い放つ。

「この物語は、フィクションだから細かい事は気にしないって設定にすれば良いのよ！」

「おいっ！」

俺は声に出してツツコミを入れてしまった。

あーっ、もうどうにでもなりやがれ。

そして、ついに迎えてしまった長距離デートの日。

俺達の東海道中の詳細な出来事は省略させて頂く。

連載作品にならなければ語りつくせない程になってしまっただろうかな。

朝早くに家を出た俺達は何だかんだで夜に海ほ　るに着いた。

長時間・長距離運転してきたにもかかわらずハルヒは元気な物だった。

それにしても、左を見回しても、右を見回しても、手を繋いだカッブルがいるな。

こうして手を繋いでいる俺とハルヒもそのうちの一組として溶け込んでしまっているけどな。

着いた俺達はまず腹ごしらえをするために5階のレストラン街へ行

く事にした。

俺達を選んだのは海が一望できる席があるセルフサービス形式のレストランだ。

カウンターで注文して番号札を貰い、注文の料理が完成したら呼び出し音が鳴るので取りに行く流れなのだが、ハルヒはメニューを見るなり不機嫌になる。

「ただのメニューには興味が無いのよ！」

眺めは申し分ないのだが、ハルヒはカレーやきつねうどんなどの平凡なメニューが多い事が気に食わないらしい。

他に回転寿司屋があったのだが、そこは一皿105円のリーズナブルな店では無く、最低150円もする店だった。

550円する皿もあるぐらいだぞ。

ハルヒが本気で食ったら1万は行きそうな気がするからな、社会人にならともかく大学生の俺の財布には厳しい。

遅刻しての罰金は無くなったが、デートは全て俺がおごりだ。

「ほらほら、せっかくデートに来たんだ。そんな口をとがらせるなよ、可愛い顔が台無しだぞ」

「分かってるわよ」

太陽のような笑顔までは行かないが、何とかハルヒは持ち直してくれたようだ。

こうなれば食事以外の部分で挽回するしかないな。

俺達が4階に降りると、そこにはゲームセンターのような施設があって、クレイゲームの筐体があった。

中には45センチと大きなサイズのぬいぐるみが入っている。

入口ではマイクを持った係員が盛んに呼び込みをしている。

「面白そうね、みくるちゃんへのお土産にぬいぐるみをゲットして帰りましょうよ！」

俺は笑顔のハルヒに手を引かれてゲームセンターの中へ入った。サン オヤデイ ニーのキャラクターの大きなサイズのぬいぐるみが窮屈そうに座らされている。

そして、そのぬいぐるみの前には大きな穴が開けられていた。クレーンはどこにでもある様な通常サイズのようなもので、どうにかしてぬいぐるみを穴に落とせばゲットできるみたいだ。

それにしても、1ゲーム300円、2ゲーム500円と客の心理を巧みについた心憎い値段だ。

俺とハルヒがビッグサイズのぬいぐるみクレーンゲームに苦戦していると、呼び込みをしていた係員が営業スマイルを浮かべて声を掛けて来る。

「大きいぬいぐるみはバランスが重すぎて、アームの力ではつかんで持ち上げる事は出来ないんですよ」

そう言つて係員は俺達の目の前でアームを操作し始めた。

アームが大きなぬいぐるみの後頭部を殴るように叩くと、大きなぬいぐるみは転がって頭から穴に落ちた。

その鮮やかな手際を見て、ハルヒは目を輝かせて興奮する。

「キョン、財布にありつただけの1000円札を全て1000円に両替しなさい！」

まるで全てのぬいぐるみを根こそぎ取つてやると言わんばかりにハルヒはそう宣言した。

俺はため息をつきながら小銭入れを握りしめると両替機へと向かったのだった。

何でもこなすハルヒならすぐにコツをつかむだろうと思って、俺も青ざめる係員の顔を思い浮かべていたんだけどな。

「あーっ、もう止めっ！ 悔しいわ、あの係員は一発で取れたって言うのにさ」

結局3000円ほどつぎ込んだが、大きなぬいぐるみは1ミリたりとも体勢を崩していないように見えた、畜生め。

こうなつて来ると係員の得意げなスマイルが憎たらしく思えて来たぜ。

「キョン、あたしがぬいぐるみを取れなかった事は内緒だからね。団長としての沽券に関わるから」

やれやれ、そう言えばさっきの係員の立ち振る舞いは何となく古泉に似ている気がしたな。

それでハルヒは古泉に負けたように感じたのかもしれない。

ゲームセンターで負けてしまった俺とハルヒは頭を冷やす事も兼ねて外へ出た。

ライトアップされた景色はきつと俺達を和ませてくれる。

そう思っていたんだが……。

「何よ、東タワーも、レンボブリッジも全然大きく光って無いじゃない！」

「あー、そう言えば節電しているんだっけか」

周りを見回しても広がるのは真っ黒な海。

豪華な客船が浮かんでいる様子もない。

俺達のいるこの建物自体にも暗がりが出来ているぐらいだ。それ幸いに盛り上がっているカップルも居るようだけどな。

「あーあ、何か気が抜けちゃったわね」

ハルヒはそう言って大きな欠伸をした。

無理もない、朝からずっと運転して来たんだ。

眠くもなるさ。

この後俺達は千葉県のホテルで一泊する事になるんだが、そこで起こった出来事については別の機会に話す事にしよう。

ホテルで泊まった後の帰り道。

俺達は早朝の海 たるにやって来ていた。

昨日の夜とは打って変わって、レストランには俺達の他には客が2、3人居るだけだった。

しかもカップルでは無く、高速道路のパーキングエリアに似つかわしいトラックの運転手達だ。

外の通路にはほとんど人が居ない。

「静かなもんね」

「そうだな」

落ち着いた顔で長いポニーテールの髪を潮風にそよがせるハルヒの姿は、100万ワットの元気な笑顔とはまた違った良さがあつた。

ハルヒのどちらの表情も独り占めできる俺は何て幸せ者なんだと思う。

俺とハルヒはしばらく黙って海を眺めていたのだが、ハルヒは何か面白い事を思いついたのか、表情を100万ワットの笑顔に切り替えて話し始める。

「ねえ、退屈だから王様ゲームでもやらない？」

「何だと？」

ハルヒはそう言うとのあのレストランから持って来たのだろう、2本に別れた割り箸を俺の前に差し出した。

どうしても俺はこの笑顔には逆らえない。

俺が引いた割り箸はハズレだったようだ。

「あたしが王様ね！」

参加者が俺とハルヒの2人しか居ないんだからそうなって当然だよな。

それと、お前は自覚していないようだが王様じゃ無くて神様だろう？

「じゃあ1番の人は、王様に大好きと言って抱きしめてキスをする事！」

何だよ、結局それがしたかったのか。

俺はハルヒの言葉を聞くと首を横に振って拒否した。

すると、ハルヒの笑顔は凍りついた。

そして次にハルヒは泣き出しそんな顔になる。

「何よ、王様の命令が聞けないって言うの！」

ああ、久しぶりに見たなハルヒのこの表情は。

大学生になってもハルヒは変わらない部分があるんだな。

おっと、早くフォローを入れないとあの映画撮影の時と同じ事になってしまう。

ハルヒが本気で怒って立ち去る様な事があれば、特大の閉鎖空間で古泉也大慌てだろうしな。

「待てよ、俺は命令だからって言われてキスするのが嫌なんだ」
「な、何よ、紛らわしい事言わないでよ、このアホキョン！」

ハルヒは思いっきり顔を赤くして目をつぶって怒鳴った。

本当にハルヒは表情が豊かで面白いやつだ。

別に俺はハルヒをいじめたいわけじゃないんだが、ハルヒが可愛いからからかいたくなるのさ。

涙に濡れたハルヒの瞳が俺をじっと見上げる。

そのハルヒの顔を見た俺は思わずハルヒの身体を抱き寄せて……耳元で好きだと囁きながらキスをしてしまったのさ。

傍から見れば、何て思考回路のおかしい女だと思つかもしれない。俺も入学式の後の教室の自己紹介で、「普通の人間には興味が無い」と聞いた時は冗談かと思ったさ。

しかし、ハルヒのやつは本気だった。

しかも厄介な事にハルヒとはある解釈によると、自分の願望を無意識のうちに叶えてしまうパワーを持っているらしい。

高校が始まって数カ月も経たないうちに長門有希と言う宇宙人、朝比奈みくると言う未来人、古泉一樹と言う超能力者をSOS団に集めやがった。

だが、肝心のハルヒ本人は3人がレアな存在に気が付いておらず、気付かせてもいけないらしい。

だから、現在のSOS団の活動はオカルトめいた面白い事を探索しつつ、七夕などのイベントをお祭り騒ぎで楽しむレベルで落ち着いている。

ハルヒの退屈を紛らわすためにクラスの友達や妹までをメンバーに加えて市の野球大会に出たり、七夕の短冊に願い事を書いたり。

夏休みには古泉の提供で孤島の別荘に合宿にも行ったな。

こうして、俺もハルヒに雑用係としてしごかれながらも、SOS団に居心地の良さと愛着を覚え始めていた。

仲間である団員や我らが団長、涼宮ハルヒにもな。

しかし、ハルヒ発案の文化祭で公開すると言う自主製作映画の撮影中に事件は起きた。

ハルヒはいつもの”団長”の腕章の代わりに”超監督”の腕章をつけ、俺達相手に好き放題をやっていた。

以前にも入学早々にコンピ研からパソコンを巻き上げたり悪事は働いていたんだが、今回俺をキレさせたのはハルヒの一言だった。

朝比奈さんを酔わせて抵抗出来なくさせてから、古泉とキスをさせようとしたハルヒに俺はこう言ってやったんだ。

「無茶言うんじゃない、朝比奈さんも古泉もお前の人形じゃないん

だぞ！ 軽々しくキスなんてさせるな！」

「うるさいわね、あんた達は監督のあたしの言う通りに動く人形でいいのよ！ 余計な演出は要らないわ！」

何て女だ、俺達を物扱いかよ！

裏切られた気持ちになった俺はハルヒをぶん殴って立ち去った。

後ろでハルヒが何やらわめいていたが、俺は顔も見なくなかったから、一度も振り返らなかった。

「どうしたのキョンくん、とっても怖い顔〜」

家に帰ると、俺の雰囲気を感じてか、妹が心配そうに声を掛けて来た。

まだ怒りの収まらない俺は、妹に笑顔を返す事も出来ずに部屋のベッドで仰向けになった。

「畜生、ハルヒのやつ……」

俺がそうつぶやきながら虚空に視線を泳がせていると、家のインターホンが鳴らされる音が聞こえた。

妹の友達でも来たのか？

と俺は大して気にも留めないでいたのだが、妹が息を切らせて部屋に入ってくる。

「キョン君、ハルにゃんが来たよ！ でも、さっきのキョンくんみたいにとっても怖い顔してる」

どうしてハルヒが俺の家に？

あいつは俺の家に来た事は無いはずだろ？

そんな疑問が俺の頭の中を巡ったが、それよりも俺はまだハルヒを

許せない気持ちが強く残っていた。

「悪いな、俺は会いたくないんだ」

「でも……」

俺と妹が話していると、俺の部屋のドアがゆっくりと開かれ、隙間から怒りの表情をしたハルヒが顔をのぞかせた。

ここまで来てしまっっては門前払いも出来ないと言った俺は、妹に部屋の外へ出て行くように促した。

妹が完全に部屋の外へ出て行くと、ハルヒは大声で俺に向かって怒鳴り散らす。

「何で映画の撮影中に勝手に家に帰ってんのよ！」

「別にナレーションの俺が居なくても、映画の撮影は続けられるだろう？」

俺はあきれたようにハルヒにそう言い返した。

すると、ハルヒの目から堰を切ったように涙が流れ出した。

もちろん、俺はハルヒが涙を流すのを見た事は無いから、自分が怒っていた事を忘れるほど驚いた。

「あの後みんな帰っちゃったわよ、みくるちゃんも古泉君も有希も！」

やっぱり、古泉や朝比奈さんや長門も腹にすえかねたんだろうな。

「もしこのままずっとあたし1人になったら、SOS団はどうなるのよ……」

こいつ、失って初めて大事な物に気が付いたんだな。

まあそれはハルヒに限らず人間誰しも大なり小なりある事だが。

「せっかく高校になって楽しくなって来たと思ったのに、キョン、あんたが側に居ないと全然楽しくない……」

そう言って子供のように泣きじゃくるハルヒを見て、俺はハルヒがかわいそうになって来た。

ハルヒは今まで他人の気持ちを考えるなんて少しも意識していなかった残酷な子供だったのだ。

しかし、今回の件でハルヒは身を以って成長しただろう。

俺は妹をあやす時のようにハルヒの頭を胸に抱き寄せて優しく言い聞かせるように話し掛ける。

「なあハルヒ、お前が俺達SOS団のメンバーの事を好きだと思っ
て居てくれる事は解る。でもな、言葉つてのは気を付けなきゃい
けないんだ。口から出たら取り消せないし、誤解させてしまう事あ
るからな」

「うん…… 本当にゴメン、あたしバカだ、あんな事を言っ……」

俺はハルヒが泣き止むまで、優しく背中をさすってやった。
泣き止んだハルヒは、不安そうな顔になって俺に尋ねる。

「ねえ、みくるちゃんと古泉も有希も、あたしの事を許してくれる
かしら？」

こんな自信の無さそうなハルヒの顔を見たのも初めてだ。
俺はハルヒを元気づけるために肩を抱いて語りかける。

「お前が心を込めて謝れば、きっと朝比奈さんも古泉も長門も、解
つてくれるはずさ。だって、SOS団の仲間だろう？」

「当たり前じゃない！」

そう言うと、ハルヒは俺に太陽のように光り輝く笑顔を向けて来た。この分ならもうハルヒは大丈夫だろう。

俺の心も晴れ上がって行くのを感じた。

ハルヒは早速朝比奈さん達に謝りに行くと言って部屋を出て行った。不安なら俺がついて行こうかと提案したが、ハルヒは自信たっぷり一人で平気だと答えた。

ハルヒが出て行った後、不思議そうな顔をした妹が部屋へと入って来る。

「キョンくん、ハルにゃんがとっても嬉しそうな顔をしていたけど、どうしたの？」

「さあな、秘密だ」

「おかーさん、キョンくんがハルにゃんと部屋でした事は秘密だっ
て教えてくれないの？」

「誤解を招くような発言は慎みなさい！」

俺は慌てて妹にツツコミを入れた。

次の日、登校するとニヤケ顔の谷口が俺に話しかけて来る。

「よおキョン、昨日涼宮にお前の家の場所を聞かれたんだが、あの後どうしたんだ？」

「さあな」

俺は妹に答えたのと同じ返答をした。
ハルヒに教えたのはお前だったのか。

「何だよ、その余裕ぶった笑顔は？　もしかして、お前涼宮とそんな関係になっちまったのか？」

どんな関係だよと心の中で谷口にツツコミを入れながらも俺は愉快で笑いが止まらない気分だった。

何しろ、俺はハルヒの喜怒哀楽をコントロールする力を持っていると気がついてしまったからだ。

もちろん、俺はハルヒをわざと泣かせる趣味なんて無いぞ。

これからお前をたくさん笑顔にさせてやるからな、ハルヒ。

この力を他の誰にも渡したくないなんて思う俺は、欲張りなんだろうな。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

英雄伝説 空の軌跡SS

ヨシユエスVer. サブタイトル『太陽が消える前に』

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ヨシユアは帝国の片田舎のハーメル村で暮らす普通の少年だった。村は貧しくても、優しい姉カリンとカリンの恋人であり兄代わりだったレオンハルトに見守られ、ヨシユアは幸せな生活を送っていた。しかし、平和な日常は突然破られた。

謎の武装集団がハーメル村を襲ったのだ。
為す術もなく殺されて行く村人達。

村の外れまで姉カリンと逃げ延びたヨシユア。
だが、村を襲ったやつらの追手が2人に迫った。

ヨシユアは目の前の地面に横たわる村人の死体を持っていたナイフを拾い上げると、追手の男の心臓に突き刺した！

まさか村の少年であるヨシユアが反撃してくるとは思ってもよらなかった男は叫び声を上げて絶命した。

だが、ヨシユア達を追って来たのはその男だけでは無かった。

レオンハルトがヨシユアを助けに駆けつけた時、ヨシユアは人の命を奪ってしまった事と、目の前で姉の命が奪われた2重のショックで、すっかり心が壊れてしまった。

そして、レオンハルトとヨシユアは結社と呼ばれる組織に入った。

ヨシユアは結社に『漆黒の牙』と言う肩書きを授けられ、暗殺者としての技術を教え込まれて行った。

”Sランク遊撃士カシウス・ブライトを暗殺せよ”

結社から暗殺命令を受けて仕事中的カシウスを襲ったヨシユアだが、カシウスに歯が立たなかった。

”任務を失敗した自分には存在価値が無い”

自分で命を絶とうとしたヨシユアだったが、カシウスに阻止される。

「どうして、あなたは自分の命を狙った僕を助けようとするんだ。

そのまま放って置いて死ねば、敵が減ると言うのに」

「何でだろうなあ、俺にもお前さんと同じ年頃の子供が居るからかな」

「そんな理由になってない！」

その後もヨシユアはカシウスに質問を浴びせるが、カシウスはのりくくりとはぐらかされてしまう。

さらにカシウスに言いくるめられたヨシユアはカシウスに引き取られてブライト家の家族となる事を了解してしまった。

しかし、名の売れた遊撃士である家を留守にすることが多い。

ブライト家の居候となったヨシユアの側にいつも居るのは、カシウスの実の娘、エステルだった。

カシウスに兄弟が欲しいとせがんでいたエステルだが、幼い頃に母が他界してしまったため、それも叶わなくなった。

そこにカシウスが新しい家族として連れて来たヨシユアは、エステルにとって待望の『兄弟』だった。

エステルはヨシユアより数ヵ月ほど年下だったのだが、ブライト家に長く居る身として、姉としての地位を主張し、ヨシユアの世話を焼き始めた。

しかし、その世話の焼き方はかなり個性的でヨシユアを困らせる事になる。

「ほら、ダンゴ虫をあげるから元気を出して！」

ブライト家の庭の木で寄りかかっていたヨシユアに、エステルが無邪気な笑顔で話し掛けた。

「……僕に構うな」

心を閉ざしていたヨシユアは、エステルにも冷たく接した。

だがエステルはそんなヨシユアの態度にも臆すること無くヨシユアに対して暖かい笑顔を向け続ける。

「うーん、じゃあこの蝶ならどう？ 変な模様があつて面白いよ」

エステルはそう言つてヨシユアの前に蝶を差し出したが、ヨシユアは黙つて顔を背けた。

「それでもダメか、じゃあとおきのを持って来るから覚悟して置きなさい！」

エステルはヨシユアに人差し指をビシッと突き付けて宣言すると、家の中へ戻つて行った。

そして2階の自分の部屋を引っかき回す音がヨシユアにも聞こえて

来る。

ヨシユアの所へ戻ってきたエステルは手に大きな虫がこのようなものを持っていた。

「じゃーん。マルガオオトカゲだよ！」

結社によってあらゆる知識を詰め込まれたヨシユアは、マルガオオトカゲの事を知っていた。

マルガオオトカゲは口の中に伝染病の細菌を保有しており、人間がかみつかれたら死に至る場合もある。

そんな危険な生物を10歳前後の子供がペットにしているとは驚きである。

カシウスは家を空ける事が多いと聞いているが、知っているのだろうか。

ヨシユアが何も答えないでいると、エステルはその沈黙の意味を勘違いしたのか、悔しそうな顔になる。

「よし、じゃあ森でヨシユアが思いつきり驚く虫を探して来る！」

エステルはそう言って、ミストヴァルトの森へ向かって駆け出して行ってしまった。

「別の意味で驚いたよ……」

ヨシユアは去って行くエステルの後ろ姿を見てそうつぶやいた。

エステルの気配が消えたのを確認したヨシユアは、マルガオオトカゲを家の庭から遠く離れた場所へと放す。

これでエステルが間違っただけで済んでしまう事も無くなるはずだ。

いや、エステルがどうやって捕まえたのか知らないで安心はできない。

すると、ヨシユアは森に向かったエステルが気になって仕方が無くなって来る。

ヨシユアは急いでエステルを追いかけて行った。

「きゃあああっ！」

森に着いた途端に、ヨシユアの耳にエステルの悲鳴が聞こえて来た。悲鳴が聞こえた場所に駆けつけると、そこには魔獣に囲まれたエステルの姿があった。

ヨシユアは素早くエステルの側に飛び込んで魔獣達を蹴散らす。

「何でこんな危険な事ばかりするんだ！」

「だって、どうしてもヨシユアに喜んで欲しかったんだもん」

ヨシユアが思いつきりしかると、エステルは目に涙を浮かべてそう反論した。

「僕なんかのために、そこまですること無いだろう……」

エステルの言葉を聞いたヨシユアは、ショックを受けてそうつぶやいた。

「ほら、捕まえた！ この虫ならヨシユアも満足でしょ！」

泣いたカラスがもう笑ったと言うべきか、エステルの両手には巨大なナブトムシが握られていた。

そのエステルの太陽のような笑顔に、ヨシユアの凍りついた心も徐々に解け始めて行った。

そして、ヨシユアは見てて危なっかしいエステルの世話を焼き始める事になる。

料理を作らせてもヨシユアの方が器用。

日曜教会で授業中に寝てしまったエステルをヨシユアが起こす。

ヨシユアの心の中で、エステルの存在は大きくなって行った。

カシウスにこれからどう生きるかと尋ねられた時、ヨシユアは迷わずエステルと同じ遊撃士を目指すと答えた。

遊撃士になってもエステルを支え続けたいとヨシユアは本気で思うようになった。

エステルと言う太陽を得たヨシユアは、他人に心を開く様になり、遊撃士になるための修行の旅の中で様々な人々に触れ合って成長して行った。

ロレントの街の市長邸から盗まれた宝石を取り戻したり、ボースの街でおきた飛行船ハイジャック事件の解決に協力したり、ルーアンの街の市長の悪事を暴いたり……。

ついには王都グランセルの街で起きたクーデター事件の解決に協力した功績が認められ、表彰されるまでになった。

ヨシユアはこれからもずっと、エステルとコンビを組んで遊撃士の仕事を続けられると信じていた。

しかし、そんなヨシユアの希望を打ち砕くような無慈悲な出来事が起きる。

平和を祝う女王生誕祭の中でたまたま1人になったヨシユアに、結社の人間が接触して来たのだ。

「君が彼女の側に居ると彼女を不幸にする」「血で汚れ切った君に彼女の側に居る資格があるのか」

結社の人間はヨシユアの心の闇を突くような言葉を次々と投げ掛ける。

その言葉に負けてしまったヨシユアは、その日の夜エステルの側から黙って姿を消した。

エステルと別れたヨシユアは、単身で結社への復讐を行おうと決意

を固め、その準備を進めた。

時間を掛けて慎重に情報収集を行ったヨシユアは、結社のアジトである飛行船の場所をつき止めた。

このアジトを飛行中に爆破する。

そうすれば結社に大きな被害を与えられるに違いない。

上手くすれば幹部の何人かを墜落に巻き込んで倒せるかもしれない。もちろん、脱出のタイミングを間違えれば自分の命は無い。

それだけ危険な事は分かっているが、ヨシユアはためらわなかった。しかし、そんなヨシユアの前に立ち塞がったのはまたもやカシウスだった。

「こんな所に居たのか、ずいぶんと探したぞ」

「あなたは、僕を連れ戻しに来たんですか？」

「そうだ、戻って来てはくれないか、俺のためでは無く他でもないエステルのために」

「でも、僕はエステルの側に居る資格なんかありません、彼女を不幸にするだけです」

ヨシユアが強い拒否の態度を示すと、カシウスは困ったような表情をして語りかける。

「お前が姿を消した後、エステルは悲しみを隠して周囲には笑顔を見せていた。いつかお前に再び会えると信じてな」

「くっ……」

カシウスの言葉を聞いて、ヨシユアは悔しそうに顔をしかめた。

「だが、この前結社の連中がお前の名前をエサにして、エステルをだまし討ちにしようとしたんだ」

「何だって？」

ヨシユアは目をむいて驚いた。

「それで今までこらえていた気持ちがあふれだしたんだろう、エステルはずっと泣きっぱなしだ。あの笑顔の絶えなかった娘が……」

カシウスに言われて、ヨシユアはエステルの泣いた顔を想像しようとしたが、エステルの泣いた顔は数年前に1回見たきりだ。なかなか想像する事は出来なかった。

その代わりに脳裏に浮かぶのはエステルの笑顔ばかり。

ヨシユアもエステルの笑顔が恋しくなっていた。

「このままエステルを泣かせたまままで良いと思っているのか？」

「いいえ、僕の考えが浅かったようです」

カシウスが尋ねるとヨシユアは首を強く振って否定し、自分の決意をカシウスに伝えるのだった。

「ヨシユア！」

カシウスの計らいでグランセル城の空中庭園で2人は再会を果たした。

「こんなにエステルを泣かせてしまうなんて、僕は何て事をしてしまったんだ。だけど、これからはずっと側で君を守るから……」

泣き笑いの表情を浮かべるエステルを抱き締めてヨシユアはそっとそう誓うのだった。

- - - - -
- - - - -

新世紀エヴァンゲリオンSS

LASVer・サブタイトル『黄色いワンピース』

(ラブラブアスカシンジ)

- - - - -
- - - - -

シンジは幼少の頃、事故により母親を失ってから、父親により伯父の家に預けられた。

伯父夫婦は自分の子供達とシンジを区別して接したため、シンジは内向的な性格に育ってしまった。

中学2年の時、父によって第三新東京市のネルフにエヴァンゲリオンのパイロットとして呼ばれるまで、無気力な生活を送っていた。しかし、そんなシンジの暗い性格を心配したミサトはシンジを強引に自分の家へと住まわせる。

陽気な性格のミサトに引つ張られる形でシンジは少しずつ周囲に興味を向けるようになった。

新たに通う事になった第三中学校でも友達と呼べる存在が出来た。使徒と戦うエヴァンゲリオンのパイロットと普通の男子中学生と言う2足の草鞋わだかを履いた生活を送るシンジ。

ドイツのヴィルヘルムスハーフェンを出て日本へと向かう船の甲板で、シンジとアスカは出会った。

黄色いワンピースを着て堂々とした態度で腰に手を当てたぷりの余裕を持った笑みを浮かべたアスカの姿を見て、シンジはアスカに強く惹かれるものを感じた。

「ふーん、アンタがサードチルドレン？ 何かさえないわね」

アスカがシンジを少しバカにするように声を掛けても、シンジはアスカに見とれていた。

自分には無い輝きのようなものを持っていると思ったからだ。

直後に使徒が2人と弐号機を載せる船に襲来し、シンジとアスカは2人で弐号機のエントリープラグに入る事になった。

目の前でアスカの操縦技術を見たシンジは目を見張り、エヴァのパイロットしてもアスカに憧れを抱くようになる。

次に出現した使徒に対して、シンジとアスカの攻撃のタイミングをピタリと合わせる必要があると判断したミサト。

そこでシンジとアスカの生活リズムを合わせるためにアスカもミサトの家で同居させると宣言した。

同じ屋根の下で暮らす事に猛反発したシンジとアスカだったが、作戦だと言われては逆らう事は出来なかった。

こうして、始まった同居生活も続けて行くうちに次第に家族へと変化して行く。

ある日の夜、寝ていたアスカが母親の名前を呼んで涙を流しながらうなされているのを見たシンジは、アスカが自分の境遇と似ているのだと知った。

惚れた男の弱みと言うべきか、それからシンジは出来る限りアスカの望みを叶えるように努力を始めるようになった。

アスカがドイツ風のハンバーグが食べたいと言えばいつもより遅くまで起きて料理本を読んで研究する。

愛用しているシャンプーが切れたならば、遠く離れた店まで買いに行く。

最初はエースパイロットして優遇されるのは当然だと受け止めていたアスカだったが、ある出来事をきっかけにシンジの好意に気がつく事になる。

ある日火山のマグマたまりの中に使徒を発見したネルフはエヴァによるせん滅を決定。

高熱のマグマに耐えられるように耐熱防護服を装備したアスカの乗

る弐号機がその任務に当たった。
命綱となるワイヤーにつり下げられ、使徒の居るマグマの海の底へと潜って行く弐号機。

そして使徒と遭遇した弐号機はプログナイフを使った戦闘の末、使徒を撃破する事に成功する。

しかし、使徒の最後の攻撃がアスカの乗る弐号機をつり下げるワイヤーを全て切り裂いてしまった。

命綱を失った弐号機はゆっくりとマグマの底へと沈み始めた。

「これからだと思ったのに、もうアタシはここで終わっちゃうの……？」

アスカも自分の命運が尽きたと覚悟したその時、弐号機を引っ張り上げたのは火口で待機していたシンジの乗る初号機だった。

初号機は耐熱装備をしておらず、通常装備のままだった。

その初号機でマグマの中に手を伸ばし、弐号機を引き上げたのだ。

エヴァのダメージはシンクロしているパイロットにも伝わる。

乗っているシンジは熱湯に手を突っ込んで火傷したような痛みを感じているだろう。

「無茶しちゃって、バカシンジ……ありがとう」

アスカは目に嬉し涙を浮かべながらシンジにお礼を言うのだった。

これからアスカの方もシンジに心を許して行くようになる。

素直にシンジに好意を示す事が出来なかったアスカだが、揃って登下校をしたり、食材の買い物をする姿は夫婦のようだからかわれた。

友達以上恋人未満の生活でも、2人はとても楽しかったのだ。

使徒との戦いも息のあったコンビネーションを発揮し、ミサトの立てた少し無茶だと思われた作戦も遂行して行った。

2機のエヴァが手を繋がれば向かう所敵無しとまで言われた。しかし次第に激しさを増して行く使徒との戦い。

そんな状況下でもシンクロ率を伸ばして自信を着けて行くシンジ。ついには上回っていたアスカのシンクロ率を追い越してしまった。焦るアスカは、シンクロ率を大幅に落として行ってしまう。

アスカは日常生活でも笑う事が無くなってしまった。

葛城家も灯が消えたような暗い雰囲気包まれている。

大気圏外の衛星軌道に出現した使徒に対して、ネルフは弐号機を出撃させた。

初号機は直前に現れた使徒との戦いで暴走したため、ネルフの司令であるシンジの父ゲンドウによって待機命令を下されたのだ。

空中の使徒から発せられる光線が弐号機を直撃し、エントリープラグの中のアスカが苦しそうな声を上げる。

「司令、このままでは弐号機パイロットが危険です、収容して下さいー！」

ミサトはそう言って、オペレータに弐号機をネルフの中に引き上げさせようと合図を送ったが、ゲンドウは大声でそれをさえぎる。

「ならぬ、弐号機はそのまま使徒の攻撃を引きつける」

ゲンドウの言葉を聞いて、ネルフの誰もが弐号機は捨て駒に使われたのだと理解した。

しかし、ゲンドウの命令にネルフの誰も逆らえない。

それはミサトもシンジも例外では無かった。

「レイ、ドグマに降りて槍を使い」

「はい」

ゲンドウは冷静に命令を下し、零号機に乗る綾波レイも淡々と従う。レイが地下に潜って地上へと戻るまでの間、シンジは目と耳を塞いでアスカが苦しんでいる姿と声をシャットアウトしようとした。

「ロンギヌスの槍、準備完了。3、2、1……」

オペレータの合図によって零号機から投げられたロンギヌスの槍は衛星軌道上に居た使徒の核^{コア}を直撃し、弐号機はやっと使徒の攻撃から解放された。

戦闘が終わると、シンジは一人でたたずむアスカの所へゆつくりと歩いて行った。

「アスカが無事で良かったよ、綾波に感謝しないかね」

落ち込んでいるアスカの背中にシンジが声を掛けると、アスカは振り返らずにわめき散らす。

「何が感謝よ、へどが出るわっ！」

「そんな、綾波のおかげで助かったんだからさ」

空気の読めない発言を続けるシンジに堪忍袋の緒が切れたアスカは、怒りに燃えた表情でシンジの方を振り返った。

その青い瞳にはたくさんの涙が溜まっている。

「どうして、シンジが助けに来てくれなかったのよ！」

アスカに詰め寄られたシンジはアスカから目を反らして下を向いてボソボソと言いつづける。

「だって、初号機は父さんの命令で動かせなかったし、仕方無かつ

「ただ」

「アタシが使徒の攻撃で苦しめられて居るのを初号機のエントリープラグの中で見ていたんでしょう、どうしてずっと黙ったままだったのよ！」

式号機のエントリープラグからも、初号機のエントリープラグの様子は解る。

アスカは使徒の攻撃に苦しまされながらも、シンジが何もしていない事を覚えていたのだった。

「ネルフでは司令である父さんの命令は絶対じゃないか、だから抵抗しても無駄だったんだ」

シンジが話している事は、後付けの言い逃れであるとアスカは見抜いている。

「それは違うわ、シンジは使徒が怖かったんでしょう、この臆病者！」

図星を突かれてしまったシンジは顔を上げる事も、何も言い返す事も出来なかった。

「バカシンジに期待したアタシの方が大バカだったわ！」

「えっ？」

アスカの言葉を聞いてシンジが驚いて顔を上げると、シンジが何か言う前にアスカは走り去って行った。

「アスカ、泣いていたな……僕が泣かしてしまったんだ」

プライドの高いアスカは人前で涙を流した事は無いとシンジはミサトからも聞いていた。

家に帰ったらひたすらアスカに謝るしかないと思ったシンジだが、なかなか家に帰る決意がつかず、葛城家に戻ったのは夜も遅くなつてからの事だった。

「シンジ君おかえり……遅かったわね」

「ミサトさん」

玄関でシンジを出迎えたミサトは静かな怒りを押さえている様子だった。

そのミサトの雰囲気には圧されて後ずさりするシンジ。

そんなシンジの手をミサトがつかんで、アスカの部屋へと連れて行く。

「見てよこの部屋……さっきアスカが荒らして行ったのよ」

ミサトは皮肉めいた口調でシンジにそう話した。

アスカの部屋の中は、泥棒でも入ったかのように荒らされていた。

特にシンジとの思い出に関係すると思われる2人が映っている写真などは入念に引き裂かれていた。

そこからもアスカのシンジに対する憎しみの深さが分かる。

「アスカは泣き叫びながらシンジ君を何度も呼んでいたわ。私もアスカが人目にも気にせず泣くのを初めて見たわ」

「ごめんなさいミサトさん、僕のせいでアスカがこんな事に」

「そうね、アスカをこんなに弱くしてしまったのはシンジ君のせいかもね」

ミサトの言葉を聞いたシンジは驚いてミサトの顔を見つめた。

いつの間にかミサトは優しく微笑んだ表情へと変わっている。

「さあ、行きなさい。アスカは友達の間木さんの家へ行ったわ。そこでシンジ君の思いをアスカに伝えるのよ」

「分かりました」

強くうなずいたシンジは床に落ちていたアスカの黄色いワンピースを拾い上げると、それを持って洞木ヒカリの家へと向かうのだった。駆けつけたシンジの姿を見ると、ヒカリはほっとしたような表情を浮かべてシンジを自分の部屋へと案内する。

「碇君、アスカの事は任せたからね」

「うん、委員長こそありがとう」

ヒカリに見送られてシンジは部屋の中へと入ってアスカに声を掛ける。

「アスカっ！」

「今さら何よ」

背中を向けたアスカに、シンジは思い付く限りの謝罪の言葉を述べて家へ帰って来て欲しいと訴えたが、アスカは固く拒否し続けた。決して振り返ろうとしないアスカをシンジは後ろから抱きしめた。思わぬシンジの行動にアスカは驚きの声を上げる。

「ちょっと、どういっつもりよシンジ！」

すると、シンジはアスカを抱き締めたまま、黄色いワンピースをアスカの前にかざして訴えかける。

「この黄色いワンピースは僕とアスカが出会った時にアスカが着ていたんだよね」

「それがどうしたのよ」

シンジの言葉の意味が分からないアスカは、不機嫌そうな声でシンジに聞き返す。

「あの時の自信たっぷりのアスカの笑顔、僕は好きだったよ」

「フン、どうせ今のアタシは可愛げのない顔をしているわよ」

「それって、アスカが自分で自分を追い詰めているだけじゃないのかな」

「何ですって!?!」

アスカは怒った顔になってシンジの体を振り払った。

そしてシンジに人差し指を突き付けて怒鳴る。

「シンジにアタシの何が解るって言うのよ!」

「解らない……解らないよ……でも、僕はアスカを泣かせてしまった分だけ、今度はアスカを笑わせてあげたい。その気持ちだけは本物だから」

シンジはアスカの目をしっかりと見つめてそう訴えかけた。

そして、アスカはシンジの目を見つめ返してゆっくりと尋ねる。

「今度こそ、信じて良いのね?」

「うん、僕はもう逃げない」

シンジが力強くうなずくと、アスカは泣き笑いの表情になってシンジの胸に飛び込んで行った。

そしてそれからしばらくして、シンジの隣で黄色いワンピースを着

て笑顔を浮かべるアスカの姿があったのだった。

学園エヴァです。

（エヴァンゲリオンは出て来ません）

中学2年生の夏休みのある晴れた日。

第三新東京市の街並みを一望できる公園で、碇シンジは友達のとウジ達と待ち合わせをしていた。

容赦無く照りつける太陽の日差しを恨めしそうに眺めながら、シンジは集合時間の10分前に来てしまう自分の真面目な性格に苦笑する。

「今日は風が吹いているから、まだ良いんだけどね」

自分に言い聞かせて慰めるようにシンジはつぶやいた。

「ねえ、第壹中学校はどこかしら？ アンタ、こちら辺の子でしょ、知らない？」

黄色いワンピースを着て麦わら帽子をかぶった少女がシンジの側にやって来た。

「えっ、君は？」

見ず知らずの少女に話し掛けられて、シンジは驚いた。

「アタシ、今度この街に転校して来る事になったのよ」
「へえ、そうなんだ」

シンジは照れながら少女の顔をチラチラと見ながら尋ねた。
しかしシンジは困ってしまった。
シンジは待ち合わせの最中だったのだ。

「でも、僕は……」

「碓君、その子は誰？」

少女がシンジの言葉に答えようとした時、待ち合わせをしていたレイが姿を現して声を掛けた。
すると、少女は青い顔になって必死に言い訳をする。

「ア、アタシは自分で行くわ！」

少女は慌てて逃げるように立ち去ってしまった。
シンジとレイは訳が分からないと言った様子で、少女の後ろ姿を見送った。

しばらく2人で立ちつくしていると、レイが何か思い付いたかのよう
にシンジに話し掛ける。

「もしかして、私と碓君がデートの待ち合わせをしていたのかと思
ったのかも」

「そっか、誤解されちゃったのか」

シンジはレイの言葉に納得したようにうなずいた。
そんなシンジのつぶやきを聞いたレイは悲しそうな顔になる。

「本当にデートなら良かったのに……」

シンジに聞こえない小さな声でレイはそうつぶやいた。
そのレイの視線の先には、友達であるトウジとケンスケ、ヒカリが

やって来る姿があった。

トウジとケンスケは興奮した様子で待っていたシンジとレイに話し掛ける。

「おい、今そこでえらい可愛い娘とすれ違ったで！」

「ああ、スタイルが良くて綺麗な髪をしていて、まるでアイドルみたいだったよ」

「まったく、鈴原つたら……」

ヒカリは少し冷めた目でトウジを見つめてため息をついた。

「待ち合わせをして居なかったら声を掛ける事ができたのになあ」

「せやな」

「鈴原っ！」

ケンスケのぼやきにうなずいたトウジをヒカリがまた怒鳴った。

レイはシンジが黙って考え事をしているのに気がついて声を掛ける。

「碇君、またあの子の事を考えているの？」

「あっ、ごめん……」

レイに言われたシンジは照れ臭そうな顔をして謝った。

「でも、素敵な話ね。ヒマワリ畑で会った女の子だなんて」

ヒカリは陶醉に浸るように両手を胸の前で握って目を閉じながら言った。

「はん、どこに住んでいるのか名前もわからん女の事をいつまで引きずっておるんや」

「現実味が無い話だな」

「嘘じゃないってば、だってヒマワリの種もくれたし」

トウジとケンスケがあきれたようにため息をつくとき、シンジは悔しそうな顔をして言い返した。

「それから碇君は、その女の子に見せたいって、毎年ヒマワリを育てているんだっけ」

「うん、ヒマワリの種は何年も持たないって父さんが言ってたからヒカリが尋ねると、シンジはそう答えた。」

「碇の親父の研究所でもいろいろなヒマワリを育てているんだろう？ そっから持ってきて見せればいいじゃないか」

「まったく、相田ってば夢の無い事を言うのね」

ケンスケの言葉に、ヒカリはため息をついた。

「うん、だけど気持ちの問題だから。ヒマワリって受粉が上手くいかないと発芽する種が出来ないらしいし、ずっと続けられるとは限らないし」

シンジは少し悲しそうな顔をしてそうつぶやいた。

レイはそのシンジの横顔を複雑な心境で見つめている。

碇家のプランターに植えられているヒマワリが無くなってしまえば、シンジはその少女を想う事は止めるだろう。

しかし、シンジはとても悲しむに違いない。

その後、シンジ達5人は夏休みを満喫するように遊んだが、シンジは時折り物思いにふけてしまう時がある。

その度にトウジとケンスケは夏の思い出し憂鬱だと言ってシンジを

からかうのだった。

シンジが今日、ヒマワリ畑で会った少女の事を思い出したのは、さつき出会った少女があまりにも似ていたからだった。

友達のトウジ達には話していなかったが、その少女も麦わら帽子をかぶっていたのだ。

夏休みが終わり、始まった2学期。

シンジの教室に新しい机が1つ増えているのに気が付いたクラスメイト達は騒いでいた。

「転校生は男やろか、女やろか？」

「男だったら面白い性格のやつ、女だったら美少女が良いな」

トウジとケンスケも他のクラスメイト達と同じように盛り上がっていた。

そして、担任のミサトの後について教室に入ってきた転校生の姿を見て、シンジ達は驚いた。

シンジのクラスにやって来た転校生は夏休みに麦わら帽子をひろってあげた少女だった。

突然現れた美少女に、クラスはさらに騒然となる。

「はいはい、静かに」

ミサトは陽気な笑顔でそう言うってから、転校生の少女に自己紹介をするように言った。

「惣流・アスカ・ラングレーです」

ミサトの横に立った少女は表情を変えずに落ち着いた声でそう言った。

教室の中がしんと静まり返る。

その雰囲気は何とかしようとしてミサトは冷汗を浮かべながらもアスカに話し掛ける。

「もしかして、もうおしまい？　もうちょっと、何かあるんじゃない？」

「ありません」

「あ、そう……」

アスカにキツパリと断言されてしまったミサトはとりつく島も無いと判断したのか、ヒカリの席の隣に追加した新しい席に座るように指示した。

「私、このクラスで学級委員をしている洞木ヒカリ。解らない事があつたら、何でも聞いてね」

ヒカリは笑顔でアスカに話し掛けたが、アスカはヒカリの顔をチラッと見た後、返事をせずに席に座った。

拒絶されたヒカリの顔がさっと青ざめた。

シヨックを受けたヒカリの姿を見たトウジがアスカに向かって怒鳴る。

「イインチョをシカトするとはどういう事や！」

「鈴原、私の事は別に良いから！」

ヒカリはトウジの方を向いてそう叫んだ。

席に座ったアスカはほおづえを突いたまま動かない。

そんなアスカに、レイが声を掛ける。

「惣流さん、洞木さんに謝った方が良いと思う」

レイに言われたアスカは体を震わせたが、答えようとはせずに顔を伏せてしまった。

そのアスカの態度に、クラスメイト達からため息がもれた。

ミサトもアスカにどう声を掛けて良いものか困り果てていると、1時間目の開始を告げるチャイムが鳴る。

仕方無くミサトは教室の外へと出て行った。

ミサトも彼女の担当する英語の授業があるのだ。

そして休み時間が終わっても、仏頂面ぶつちやうめんのアスカに声を掛けるクラスメイトは誰も居なかった。

「あーあ、せつかくの美少女なのに、もったいないよな」

「あんな性格の暗いやつ、絶対友達なんかできへんわ」

遠巻きにアスカを眺めていたケンスケとトウジはぼやいたが、ヒカリも止めたりはしなかった。

しかし、シンジは異議を唱える。

「おかしいな、夏休みに会った時はあんな感じじゃ無かったんだけど」

「何や、あの女と会った事があるんか？」

「うん、その時は普通に笑ったりしていたんだけど」

「他人の空似じゃないのか？」

疑う言葉を掛けるトウジとケンスケだったが、レイもシンジに同調する意見を話す。

「私もほんの少ししか惣流さんと話して無いけど、今みたいな感じ

じゃ無かったわ」

「どうしたんだろう?」

シンジの質問に誰も答える事は出来なかった。

その日の放課後、シンジは駅前通りで制服姿のアスカを偶然見かけた。

アスカは手に地図を持って外国人の男性とバスターミナルを歩いていた。

最初シンジは、アスカがデートをしているのかと思った。

興味を持ったシンジは、しばらくアスカの姿を追いかける事にした。アスカはバス停で待っているいろいろな人に尋ねて回っている。

どうやら外国人の男性の道案内をしているようだった。

やがて目的のバス停を見つけたのか、外国人の男性はアスカにお礼を言ってバスに乗り込んで行った。

それを見届けたアスカの背中に、シンジは声を掛ける。

「やっぱり惣流さんって、優しい人なんだね」

シンジに声を掛けられたアスカは、驚いて飛び上がる。

「何でアンタがここに!?!」

「うん、さっき駅前で偶然、惣流さんを見かけて……」

顔を真っ赤にしたアスカは、シンジに背を向けて逃げようとした。シンジは逃げようとしたアスカの肩をつかんでしまった。

「離してよ!」

「あつ、ごめん」

アスカに言われて、シンジは慌てて手を離れた。

「どうして、アタシみたいのに構うのよ」

「1人で辛そうにしている惣流さんをどうしても放っておけない気がしたから」

アスカとシンジは同じ方向にゆっくりと歩きながら話を始めた。

「アタシは、1人で居るのが好きなのよ」

「僕にはそう見えなかった。洞木さんや綾波と話したくても、わざと我慢している気がするんだけど」

アスカはシンジの言葉に返事をせずに2人とも黙って歩き続けた。

「どこまでついて来る気？」

しばらく歩いて、しびれを切らしたように足を止めてシンジに尋ねた。

「だって、僕の家はこっちの方向だから」

シンジの返事を聞いたアスカは再び歩き始めた。

そして、ついにコンフォート17まで着いてしまったアスカとシンジは驚いて顔を見合わせる。

「アンタの家って、このマンションなの？」

「惣流さんの家もこのマンションだったんだ。でも、今まで見かけなかった気がするけど」

「夏休みの間は荷物が届かなくてホテル暮らしだったんだけど、今日からなんとか入居できるようになったのよ」

「そうなんだ」

シンジとアスカはエレベータのボタンを押そうとして指が重なる。

「5階なんだ」

「そう、5階よ」

「同じ階だなんて、凄い偶然だね」

シンジはそう言って穏やかに微笑んだ。

シンジとアスカが連れ立ってエレベータを降りると、碇家の隣の部屋が引越して慌ただしい事に気がついた。

「シンジ、帰って来たか。お前も惣流さんの家の引越を手伝え」
「ええっ、惣流さんの家って隣だったの？」

父親のゲンドウに声を掛けられたシンジは驚きの声を上げた。

それからシンジはゲンドウとユイと一緒にアスカの家の引越を手伝う事になった。

普段は研究所で忙しく働いているゲンドウも、この日は早退したようだった。

引越しの作業が終わった後、アスカ達の家族も碇家で夕食を一緒に食べる事になった。

夕食の席での話題は、アスカの父親の仕事の話になった。

アスカの父親は、ゲンドウと同じ組織でヒマワリによる土壤汚染を浄化する研究員として世界の支部を転々として来たと言う話だった。しかし、今回は日本に長く居られる事になったと話すと、アスカの顔がぱあっと明るくなる。

「パパ、それなら学校を卒業するまでずっと日本に居られるの？」
「そうだな、アスカが中学だけでなく高校を卒業するまでも居られると思う」

「やった！」

アスカは側に居たシンジの手を取って、跳び上がって喜んだ。

「ちょっと、アスカ!？」

シンジが驚いた声を出して、ユイ達のニヤケた顔に見つめられたアスカは、恥ずかしそうに顔を伏せて手を離れた。

夕食が終わると、惣流家の家族は碓家にお礼を言って帰って行った。部屋に戻ったシンジは、宿題をするために机を向かった。

そんなシンジに自分の名前を呼ぶアスカの声が聞こえて来る。

シンジが碓家のベランダに出ると、隣の惣流家のベランダにはアスカが立っていた。

「ごめん、シンジともっと話したくて。別に構わないわよね？」

「うん、いいけど。名前で呼ばれるなんて少し恥ずかしいな」

「これからアタシの事は惣流さんじゃなくて、アスカって呼んでねっ？」

笑顔のアスカにノーと言う事も出来ず、シンジはうなずいた。

「でも、アスカはもう宿題は済ませたの？」

「ええっ、宿題なんてあったの!？」

シンジの言葉を聞いて、アスカは目を丸くして驚いた。
そのアスカの表情に少し笑ってシンジは漢字テストの宿題が出ている事を説明した。

「アタシ、外国の生活が長かったから漢字は読む事も書く事も出来ないのよ」

アスカが困った顔になってそう言うと、シンジは不思議そうな顔をして尋ねる。

「でも、あの男の人を案内していたじゃないか」

「漢字が読めないから、他の人に教えてもらってたのよ」

シンジの質問にそう答えたアスカは、憂鬱そうにため息をついた。

「じゃあ、僕が教えてあげようか？」

「本当！？　ありがと！」

シンジの言葉を聞いたアスカは嬉しそうに目を輝かせた。

「じゃあ、ちょっと待ってて！」

そう言っアスカは急いで自分の部屋へと戻り、ノートとペンを持ってベランダへとやって来た。

「これ、持ってた」

「えっ？」

シンジは戸惑った顔をしながらも、アスカのノートとペンを受け取った。

そして、シンジの目の前でアスカはベランダの手すりを乗り越えた。アスカのようなかわいい子がそこまですると思わなかったシンジは驚く。

「ちょっと、こんな所を通らなくても……」

「近道だから、いいじゃない」

アスカは悪びれた様子も無く、シンジにそう答えた。

さつさとシンジの部屋に入るアスカの後を慌てて追いかけた。

シンジが教えるとアスカは、すぐに宿題の範囲の漢字を覚えた。

アスカは宿題の範囲に含まれていない漢字も、シンジに尋ねて覚えようとする。

そのアスカの学習意欲にシンジはとても感心した。

「凄いね、こんなにたくさん漢字を覚えようとするなんて」

「だってこれからずっと日本にいられるんだから、無駄になったりしないでしょう？」

アスカはそう言って、今まで父親の仕事の都合でどれくらい転校を繰り返したか話し始めた。

同じ学校に通っていられたのは一番長くて6ヶ月。

1ヶ月で転校してしまうなんて事もあったらしい。

「アタシはせつかくできた友達と離れたくないから、何度もパパに転校したくないってお願いしたわ」

アスカはその時の気持ちを思い出したのか、悲しそうな顔になった。

「ごめんね、アスカに辛い事を思い出させて」

「別に良いのよ、アタシが話し始めた事だし」

シンジが謝ると、アスカは首を横に振って話を続ける。

「どうせ悲しい思いをするのなら友達なんて作りたくない、ずっと1人で居ようと思うようになったの。だから、新しい国に行っても言葉なんか、真面目に勉強する事も無くなったわ」

「でも、アスカは日本語の発音とか上手いよね」

「うん、ママも日本人だし、パパもドイツと日本のハーフだから、家ではいつも日本語で話していたのよ」

「だからアスカはわざと人を寄せ付けないようにしていたんだね。だけど、長くここに居られるんだからその必要はもう無くなったんだね」

シンジが笑顔で話し掛けると、アスカは突然涙を流し始めた。

驚いたシンジがアスカに慌てて声を掛ける。

「ど、どうしたの!？」

「アタシ、洞木さんや綾波さんにひどい事をしちゃった……」

「大丈夫だよ、2人とも事情を話せばきっと許してくれるって!」

シンジは泣きじゃくるアスカの手を取って慰めた。

アスカが落ち着くまで、シンジはアスカの手を優しく握っていた。

「ごめんね、すっかり甘えちゃって。明日、学校に行く勇気が出て来たわ、ありがとう」

「どういたしまして」

泣き止んだアスカがシンジにお礼を言うと、シンジは照れ臭そうに顔を赤くした。

すると今度はアスカの方が、顔を赤くしてモジモジとしながらシン

ジに尋ねる。

「シンジって、好きな子はいるの？」

ドキドキとして期待に目を輝かせるアスカに見つめられて、シンジは胸が痛んだ。

しかし、シンジはアスカにウソをつく事は出来ない。

「うん、僕には好きな子が居るんだ」

シンジがそう言うと、アスカの表情はお通夜のように沈む。

「やっぱり、綾波さん？ アタシとシンジが初めて会った時も待ち合わせしてたもんね」

「違うよ、名前も知らない女の子なんだ」

「どついう事？」

シンジの言葉を聞いて、アスカは目を丸くして驚いた。

アスカに尋ねられたシンジは、ヒマワリ畑で出会った少女の事を説明し始めた……。

シンジがその少女と出会ったのは、父が勤める研究組織の所有するヒマワリ畑の1つで、松代市にあるものだった。

父ゲンドウに連れられてやってきたのだが、ゲンドウは仕事の話を始めてしまい、シンジは1人でヒマワリ畑の中をふらついていた。

「ねえ、アタシと一緒に遊ばない？」

ヒマワリの間から姿を現したのは、麦わら帽子をかぶったシンジと同じ年くらいの少女だった。

少女を見た時、赤い髪の毛の色からシンジは外国人の子かと思ったが、目の前の少女は日本語を話している。

返事をする前に少女に手を引っ張られたシンジはそのまま崩しにその少女と一緒に遊ぶ事になってしまった。

ヒマワリ畑を2人で駆けて遊んでいる途中に、少女の大きな麦わら帽子は何度もヒマワリに引っ掛かった。

シンジのかぶっている麦わら帽子より明らかに大きい。

不思議に思っただけで少女に尋ねると、母親の麦わら帽子を借りてかぶっているのだ答えた。

「アタシのパパ達ってどうして、ヒマワリ畑を作って居るか知ってる？」

「うーん、よく解らないよ」

遊んでいる途中に少女に尋ねられて、シンジは首を横に振った。

「アタシもよく解らない。でも、ヒマワリ畑を作ればみんなが喜ぶってパパが言っているの」

「へえ、みんなが喜ぶんだ」

シンジも父親のゲンドウに理由を聞いた事があるが、『土壤浄化』だの『プロジェクト』だの訳の解らない単語を並べられて困ってしまった。

要するにゲンドウはかみくだいて簡単な言葉で説明するのが苦手だったのだ。

「だから、アタシもパパに協力してヒマワリの種を植える事にしたの！」

少女はそう言って、ポケットからヒマワリの種を取り出した。

その少女も、父親の仕事の内容を正確に理解しているわけでは無さそうだったが、やる気に満ちた明るい笑顔をしているとシンジには思えた。

ヒマワリの種をその小さな手いっぱいにつかんだ少女は、シンジに向かって手を差し出した。

どうやら、シンジにもヒマワリを育てるのを協力しろと言う事らしい。

少女から笑顔で渡されたヒマワリの種を断る事も出来ず、シンジは受け取ったヒマワリの種をポケットに入れた。

「約束だからね」

「……うん」

少女の言葉にシンジはうなずいた。

それからしばらくシンジが少女と遊んでいると、父親のゲンドウがシンジを探して呼ぶ声が聞こえて来た。

「あつ、お父さんが呼んでるから僕は帰らなきゃ、バイバイ！」

シンジは慌てて少女に手を振って父の元へと戻って行った。

そして、シンジは来年の夏にも父親のゲンドウに頼んで松代市のヒマワリ畑に連れて行ってもらった。

少女に会うためだとは恥ずかしくてゲンドウに言えなかった。

シンジはヒマワリ畑の中を必死に探しまわったが、少女の姿を見つける事は出来なかった。

その時になって、シンジは少女の名前すら聞いていなかった事を後悔した。

唯一の手掛かりは松代市のヒマワリ畑のみ。

そんなわずかな偶然にすがって、シンジはその来年も再来年もヒマワリ畑を訪れたが少女の姿は見つからなかった。

シンジは、ヒマワリ畑で少女と再会する事は諦めた。

しかし、シンジは少女から貰ったヒマワリの種を植えて育てるのは止めなかった。

それは自分と少女を結ぶ小さな絆。

ベランダのプランターに植えられたヒマワリを見る事で、シンジは少女の存在を心の中で感じられる気がしたのだ。

シンジが昔の思い出話をしている間、アスカは真剣にシンジの話に耳を傾けていた。

「アスカはそのヒマワリ畑の女の子と似ているんだ。だから、この前アスカに会った時、その子とアスカのイメージを重ねてしまって……」

シンジはそう言ってアスカに謝ったが、アスカは黙って目を閉じた。アスカを怒らせるか失望させてしまったと思ったシンジは、自分の事を情けないと笑うかのような声でアスカに話し掛ける。

「僕って未練たらしいよね。いつかヒマワリを育てるのを止めて、その女の子の事も忘れようとは思っただけど」

「……忘れちゃダメよ、絶対」

涙声でアスカが言うと、シンジは慌ててアスカにさらに謝る。

「ごめん、僕って自分勝手すぎるよね」

「ううん、これは嬉し涙よ」

「えっ？」

泣き笑いのような表情になったアスカを見て、シンジは驚いた。

「アタシ感激したわ…… たった1日遊んだだけだったのに、アタシの事を覚えていてくれたなんて」

「じゃあ、アスカが麦わら帽子をかぶってヒマワリ畑に居た女の子？」

シンジが震える声でアスカに尋ねると、アスカは満面の笑みを浮かべてうなずいた。

すると、シンジの心の中にも激しいものが湧きあがった。

何年も恋焦がれていた相手に、会う事が出来たのだ。

「アスカあーっ！」

「シンジいーっ！」

シンジがアスカに向かって飛びかかると、アスカはしっかりとシンジの体を受け止めた。

そして、お互いの存在を幻では無いと確かめるかのように背中に手をまわして固く抱き合う。

さらに嬉しさが増して来たアスカとシンジは、歓喜の声を上げながら手を繋いだままダンスを踊り始めた。

「シンジ、お隣にご迷惑になるから静かにしなさい」

そんなシンジの部屋の物音を聞きつけてか、ユイがシンジの部屋のドアを開けて注意した。

しかし、手を繋いでいるアスカとシンジの姿を見て目を丸くして固まってしまふ。

不意をつかれたアスカとシンジも同じ反応だった。

「あつ、お邪魔しています」

「ご、ごめんなさい母さん」

顔を真っ赤にしたアスカとシンジが慌てて手を離れた。

ユイはそんな2人を見て穏やかな笑みを浮かべる。

「おめでとつ」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとう」

ユイが祝いの言葉を述べると、アスカとシンジはお礼を言った。

「ア、アタシ、シンジに宿題を教えてもらおうと思って、それで…」

「別にいつ訪ねて来ても構わないのよ。でも、次は玄関から入って来てね」

アスカがシンジの部屋に居る言い訳をしようとするが、ユイはまったく意に介さない様子だった。

「は、はい……」

アスカは恥ずかしそうに消え入るような声で返事をした。

「そうだ、これからシンジが寝坊するようだったら、起こしに来てもらおうかしら？」

ユイの言葉に今度はシンジが恥ずかしがる番だった。

シンジの部屋からユイが立ち去ると、アスカとシンジはホッとしたように息をもらす。

「母さんが怒って無くて良かったね」

「アタシが勝手にシンジの部屋に来ちゃって迷惑をかけてしまったと思ったわ」

「そんな、迷惑じゃ無かったよ。だって、アスカがあんな麦わら帽子の女の子だってわかったから、信じられないくらい嬉しいよ」

「まだ疑っているの？　じゃあ、アタシのアルバムを見てみる？」

「いや、そう言うわけじゃないけど。でも、アスカのアルバムなら見てみたいな」

アスカはからかうような表情を浮かべながらシンジに尋ねる。

「もし、麦わら帽子の子とアタシが別の子だったら、シンジはどちらを選んでた？」

「そんな、意地悪な質問をしないでよ」

シンジが辛そうに顔を歪めると、アスカは慌てて謝る。

「ごめんね、でも麦わら帽子の子を心の中で大切にしてくれるシン

ジの気持ちは嬉しかったから」

アスカはそう言うと、シンジのほおに軽くキスをして部屋を出て行った。

シンジはほおに手を当ててぼう然としていた。

そこへドタドタと激しい足音を響かせたアスカが戻って来た。

玄関から帰ろうとしたのだが、サンダルはベランダに置いたままだったのだ。

「うつ、さっきのはね、あの……その……」

アスカは顔を赤くしてうなりながらシンジに言い訳をした。

こう言う時は何も言わない方が良いと思ったシンジは、黙って笑顔でアスカにサンダルを返した。

アスカはシンジからサンダルを受け取ると、ユイとシンジに見送られて玄関から帰って行った。

「かわいい子ね。シンジが何年も一途に想ってしまうのも分かるわ」
「ええっ、母さんは知ってたの!？」

シンジが尋ねると、ユイはアスカの両親とは以前からの知り合いだと話した。

碓家の隣の部屋も元々は惣流家の物だったが、遠方の地に転勤することになっていたので、他の家族に貸していたのだと言う。

ユイの話を聞いたシンジはため息を吐いて恨めしそうな顔でユイを見上げる。

「それならもつと早く僕に教えてくれたら良かったのに」

「だって、シンジは恥ずかしがって松代のヒマワリ畑に行く理由も、どうしてヒマワリを育てているのかハッキリと言わなかったじゃない

い」

ユイに図星を突かれて、シンジは黙ってうつむいた。

「それに、まだ惣流さん達が日本に戻って来るまで何年もあったのよ……」

ユイの言葉を聞いて、シンジは気が付いた。

アスカの方からシンジに告白してくれたからシンジも勇気を出してアスカに麦わら帽子の女の子の事を話す事ができたのかもしれない。また、お互いの素性を知っても遠く離れた場所にいるのでは、疎遠になって関係が自然に消滅してしまっていた可能性もある。

「だけどね、シンジがアスカちゃんの事が好きだって分かったら、母さんも応援するつもりだったのよ。まさか、引越した日に告白するとは思わなかったわね」

そう言ったユイはシンジを見て楽しそうに笑った。

「でも、僕とアスカで釣り合いがとれるかな」

「もうそんな心配をしてるの？」

「だって学校でもアスカが明るくなっちゃったら、みんなにもてちやうよ」

シンジの言葉を聞いたユイは愉快そうに笑いながら、「冗談めかしてシンジに言う。

「他の人にどう思われるなんて関係無いの。お母さんとお父さんを見てみなさい」

「何気にひどいぞ、ユイ」

リビングでユイとシンジの会話を聞いていたゲンドウが悲しそうにつぶやいた。

そして次の日、寝坊したシンジはユイでは無くアスカに起こされる事になった。

「ふふ、シンジってば可愛い寝顔をしてるじゃない」

「恥ずかしいなあ……」

シンジはアスカに出会えた興奮が治まらず、なかなか寝付けなかったのだ。

アスカと話しながら朝の準備を終えたシンジは、アスカと連れ立ってコンフォート17を出て登校する。

通学路を歩くアスカとシンジの姿を目撃したクラスメイト達は、信じられないと言った様子で目を丸くした。

アスカとシンジが教室に入ると、トウジとケンスケは大きな驚きの声を上げ、ヒカリは息を飲んだ。

レイは読んでいた本を机から落としてしまう程だった。

「おい、何があつたんや！」

「僕達にも解るように説明してくれないか」

「私も聞きたいわ」

トウジとケンスケとヒカリの求めに応じ、シンジはアスカとの事を説明し始めた。

アスカの家族がシンジの家の隣に引っ越して来た事を話すと、トウジ達は息を飲んだ。

そして、シンジがヒマワリ畑の女の子の事を話し始めると、レイは耳を押さえた。

その先は聞きたくない嫌な予感がしたのだ。

「凄い、惣流さんがヒマワリ畑の女の子だったなんて！」

しかし、ヒカリが発した感激の声はレイの耳に届いてしまった。

シンジがレイを含む他の女の子に興味を示さなかった理由。

相手がヒマワリの花だったら良かったのに。

レイは心の奥底で、ヒマワリ畑の少女はシンジの妄想であってほしいと願っていた。

実在するとしても、2度と出会ってもらいたくなかった。せめて、シンジが諦めてしまうまでは。

「ひまわり畑の女の子は、本当に居たのね……」

レイは現実を自分で受け止めようとするかのように、小さな声でそうつぶやいた。

シンジが説明を終えると、アスカは昨日冷たい態度を取ってしまった事をヒカリに謝った。

ヒカリはニッコリと微笑むと、すぐにアスカを許すのだった。

「そうだアタシ、綾波さんにも謝らないと」

アスカはそう言って、少し離れた席に座っていたレイの元へ近づいた。

レイもいつもはシンジ達の話の輪に混じるのだが、今は立ち上がれないほどのシヨックを受けていたのだ。

「ごめんね、綾波さん」

アスカの謝罪の言葉には昨日の態度を謝る他にも意味が込められている事はシンジには解らなかった。

「良いのよ」

レイは短くアスカにそう答えて、精一杯の作った笑顔を返した。そのレイの姿を見たシンジはホッと息を吐き出した。

しかし、ヒカリはそのレイの笑顔に隠された悲しい気持ちを知っていた。

ヒカリはレイがずっとシンジの事が好きだったと気が付いていた。

「おやまあ、一体どうなっているの!？」

担任教師のミサトは、教室に入るなりすっかり明るい表情に変わってしまったているアスカを見て悲鳴に似た声を上げた。

シンジとアスカはミサトに事情を説明する事になってしまった。

2人がミサトと話している間に、ヒカリはそっとレイに近づいて声を掛ける。

「綾波さん、碇君の事……」

「碇君は友達よ」

レイはヒカリにキツパリとそう答えた。

しかし、ヒカリはシンジがレイの事を「綾波さん」から「綾波」と呼ばせるのにレイが努力していた事を知っている。

「綾波さんがもう少し碇君に素直に好きって言っていれば、関係が変わっていたかもしれないのに」

ヒカリは言いすぎたと気が付いて思わず口を手で押さえた。
レイは悲しそうな顔をして首を横に振る。

「無理よ、碇君の心の中には惣流さんがずっと前から居たんだもの」
完全敗北を宣言したレイに、ヒカリはそれ以上慰めの言葉を思い付かず、レイの席を離れようとした。
そんなヒカリをレイは腕をつかんで引き止め、ヒカリの体をぐつと側に引き寄せる。

「洞木さんも、回りくどい事をしないで、鈴原君に好きだと言った方が良いわ」
「……そうね」

レイの言葉を聞いて、ヒカリはトウジに告白する決意を固めるのだった。

そしてしばらく経った秋の休日。
シンジとアスカ、トウジとヒカリ、レイの5人はピアノコンクールの会場へと来ていた。
アスカとヒカリもデートなのでそれなりにおめかしをしていたが、レイは白いドレスを着ていた。
なぜならコンクール出場者の1人であるレイの彼氏がそのドレスを着たレイの姿を気に入っていたからだ。

「渚君、良い演奏が出来ると良いね」
「ええ」

シンジの言葉にレイはうなずいた。

「渚君なら優勝も狙えるんじゃないかしら」

「緊張して来たわ」

「レイが緊張しちゃって、どうするのよ」

ヒカリの言葉にレイが体を固くすると、アスカがあきれた顔でため息を吐き出した。

司会者から渚カヲルの名前が呼ばれ、シンジ達とは違った中学校の制服を着た少年がステージに姿を現して客席に向けて一礼する。ステージ上のカヲルと視線が合ったレイは顔をポツと赤くした。カヲルの演奏を聴いた後、出場者であるカヲルが出て来るのを待っていると言っレイと別れてシンジ達は一足先に外へと出た。

「レイってば、すっかり渚にくびったけね」

「いいなあ、惣流さんも綾波さんも、とっても感動的な出会い方をして」

「何や、幼馴染の自分らはつまらん言っとなのか」

アスカの言葉にヒカリが目を輝かせてそう言っくと、トウジは不機嫌そうにツツコミを入れた。

「あ、別に、私と鈴原の出会い方に不満があるわけじゃないのよ」

ヒカリが慌てて言い訳をすると、アスカはあきれたように話し掛ける。

「ヒカリってば、いつまで鈴原を名字で呼んでるのよ。アタシやレイの事も名前で呼び捨てにしてくれないし」

「ごめんなさい、アスカ……さん」

「だからさあ」

すっかり友達として馴染んだアスカとヒカリの話を聞いて、シンジは心が安らぐのを感じた。

シンジはそんなアスカにそつと声を掛ける。

「アスカ、友達が出来て良かったね」

「うん、もう転校することはないし、たくさん作るつもりよ」

そうシンジに答えたアスカの笑顔は、とても輝いて見えたのだった。

夏休みのある日の夜の事。

俺達SOS団の団員達は我らがSOS団団長涼宮ハルヒに呼びつけられ北高校の校門に集められていた。

SOS団とはハルヒが作った宇宙人、未来人、超能力者を探し出して一緒に遊ぶと言うのが目的である部活だ。

宇宙から飛来したヒューマノイドインタフェイスである長門。

未来からやって来た朝比奈さん。

特殊な状況で超能力を使える古泉。

お望みのメンバーが集まったのに当のハルヒ本人は気がついじゃない。

そして最近のSOS団はシーズンごとの行事をしめやかに行う団へと変化しつつある。

俺はハルヒから電話の呼び出しを受けてすぐに家から飛び出したのだが、すでにSOS団の他のメンバーは到着していた。

「遅い！」

ハルヒはいつものように俺に人差し指を突き立てて来やがった。

「今度はキョンのおごりだからね！」

やれやれ、次回は競争に参加する権利も無しかよ。

んで、ハルヒは俺達をわざわざ呼び出して何をするつもりだ？

いや、所持品に懐中電灯が含まれている時点で見当はついているがな。

面倒な事にならない事を祈るだけだ。

「それでは、みんな集まった所で始めるわよ！」

「始めるって何をだ？」

「肝試しよ！」

「ぴえええっ！」

俺の質問に答えたハルヒの言葉を聞いて朝比奈さんが悲鳴を上げた。朝比奈さんはこう言う話が最大の苦手なのだ。

未来でも幽霊の正体は解明されていないようだ。

「なんとこの学校にはね、七不思議がある事が判明したの！」

ハルヒは古い冊子を抱えていた。

表紙には文芸部と書かれている。

どうやら昔の文芸部が書いた雑誌のようだ。

俺はハルヒに聞こえないような小さな声で長門に尋ねる。

「おい、ハルヒにあの雑誌を渡したのはお前か？」

「そう」

「どうしてそんな厄介な事をしたんだよ」

おかげで俺の平穏な夏休みが奪われちゃったじゃないか。

「涼宮ハルヒが望んだ事」

長門は表情一つ変えずつぶやいた。

これはとりつく島も無いな。

すると俺を慰めるように古泉が近づいて声を掛けて来る。

「まあ、我々は涼宮さんの精神安定剤なんですから」

「そんな事言って、ハルヒが幽霊や超常現象を目撃などしてみろ、

世界の安定が崩れてしまっただろう」

「そうならないように、頑張りましょう」

世界の命運を左右する事をそんなに軽々しく言うな。

「そこ、何をこそこそと話しているのよ！ 私語は慎みなさい！」

俺と長門と古泉が顔を突き合わせて話していると、ハルヒが怒鳴った。

ハルヒが決めた肝試しのルールはこうだ。

何とハルヒは昼間のうちに七不思議に関わる場所をチェックポイントとして将棋の駒を置いていたらしい。

いきなり駒が失くなった将棋部の連中には俺が後で謝っておこう。チェックポイントに着いた証明として、置かれた将棋の駒を持ち帰る。

さて、チーム分けのくじ引きだ。

もし、朝比奈さんと一緒の組になるのなら全力で守って差し上げなければなるまい。

長門か古泉と同じ組なら、裏方でハルヒを超常現象から興味をそらす役目に集中し易い。

しかし、くじの結果は俺にとって最悪のものだった。

ハルヒと同じ組。

さらに2人きりかよ！

うわっ、ハルヒが滅茶苦茶不機嫌な顔をしてやがる！

長門、古泉、これはどういう事なんだよ。

お前らの仕業か？

俺は2人をにらみつけたが、長門は無反応だし、古泉はいつも通りの爽やかな笑顔を浮かべながら首を振ってやがる。

「では、僕達の組が先に出発ですね」

そう言つて古泉、長門、朝比奈さんの組は校舎へと姿を消した。俺達は15分経つてから校舎へと入る段取りになっている。

自然と校門でハルヒと2人きりになる。

すると、ハルヒは今までのハイテンションとは打って変わった神妙な顔になって黙り込んだ。

俺はハルヒのこんな表情を1度だけ見た事がある。

それは七夕が近づいた部室での事だった。

あの時ハルヒは思い出し憂鬱だと言っていたが、肝試しを前にそんな事があるのか？

「時間だ、そろそろ行くぞハルヒ」

俺がこつちを見ようとしないハルヒの背中に声を掛けると、ハルヒは飛び上がって驚いた。

「そ、そう？ 遅れずに付いて来るのよ！」

ハルヒは上ずった声でそう言うと、ズカズカと中へと校舎の中へと入って行ってしまった。

何をそんなに緊張しているんだ、ハルヒらしくも無い。

俺達が最初に目指すべき場所は、音楽室だ。

どこの学校でも語り継がれる定番の勝手に鳴るピアノってやつだ。

どうせ、誰かの聞き間違いかなんかだろう。

しかし、廊下を歩いていた俺は驚いた。

ピアノを弾く音がかすかに聞こえて来る。

「ねえ、何か音が聞こえない？」

ハルヒが超常現象を信じてしまえばそれが現実の物となってしまう。

「いやいや、気のせいだろう」

俺は全力で否定したい気分になり、激しく首を横に振った。だが音楽室に近づくにつれて音は鮮明になって行く。

ハルヒは目を輝かせて俺に話し掛ける。

「ほら、やっぱり居たんだわ！ 悲劇の天才少女ピアニストの霊が！」

「まだ居ると決まったわけじゃないだろう」

ハルヒは反論する俺の言葉を無視して俺の手を引っ張り、音楽室へと猛ダッシュを始めた。

「待てっ、ハルヒっ！」

俺の制止する叫び声も空しく、ハルヒは音楽室のドアを開けてしまった。

すると音楽室の蓋の閉じたピアノの上に、CDプレイヤーが乗っていた。

スピーカーからは録音されたピアノの演奏音が聞こえて来る。

「どうやら、部活をやっていた連中のイタズラみたいだな」

俺は超常現象で無くて心底ホッとしてため息を吐いた。思わず体の力が抜けて俺は膝を折った。

「何よ、このくだらないオチは！」

ハルヒは怒りの全てをぶつけるかのようにそのCDプレイヤーをつ

かんで振り回した。

おいおい、壊すなよ、それは高すぎて俺には弁償できないからな。しばらく暴れ回った後、ハルヒはCDプレイヤーを勢い良く床に叩きつけた。

強い衝撃を受けたが、幸い壊れてはいないようだ。

「こうなったら、次行くわよ！」

ハルヒは俺に人差し指を突き付けてそう宣言した。全く、前向きなやつだな。

だが、俺はハルヒのこの性格に逆に救われた事に気が付いた。ハルヒがこのイタズラに対して本気で怒ってしまえば閉鎖空間が発生し、古泉達の『機関』は大変な事になるに違いない。

しかし、古泉達から連絡が無いのは今の所ハルヒは限界に来て居ないって事か。

俺はハルヒの機嫌を損ねないように急いでハルヒについて行った。

次の七不思議は、夜に光を放つプールだそうだ。

ハルヒの考えによれば、地球を侵略しに来たエイリアンがプールの水槽に卵を産み、それが夜に発光して好奇心を持った人間をおびきだすのだと言う。

じゃあ昼間はどうなっているんだ？ などとツツコミ満載の内容だが、俺の話なんぞ聞いちゃいねえ。

「ほら、今プールが光ったわ！」

俺もハルヒに続いて校舎の窓からプールをのぞき込んだ。信じたくないが俺にもプールの水面が光ったように見えた。やべえ、今度こそ本物のエイリアンか？

「早く行くわよ、ぐずぐずしていると逃げられちゃう！」

「嫌だ、俺はエイリアンに食われたくない！」

目を輝かせて俺の手を引くハルヒに俺は抵抗したが、ハルヒの力は思いの外強かった。

「もしかして、友好的なエイリアンかもしれないじゃない」

友好的なエイリアンがこっそりと夜の学校で卵を産んだりするか。

「きつとシャイなのよ」

俺はハルヒとバカな会話を繰り返しながらついにプールサイドまで来てしまった。

プールは静かで誰の気配も無い。

しかし、本当にエイリアンの卵なんかがあったらプールに近づくのはやはり危険だ。

長門、古泉、朝比奈さん、どこかで見ているならハルヒの体を取り押さえるのを手伝ってくれ！

プールサイドでハルヒと押し問答をしていた俺の目に、懐中電灯の明かりが飛びこんで来る。

「やばい見回りだ、隠れる！」

俺はハルヒを手近な物陰へと連れ込んで身を伏せて隠れた。

懐中電灯を片手に歩いて来るのは我がクラスの担任、岡部教諭だった。

岡部教諭は真面目な性格なのか、プールの水面まで照らして誰か居ないか調べていらっしやる。

早く立ち去ってくれないか俺は必死に祈っていた。

夜の学校にハルヒと2人きりで居る所など見られたら誤解されて親

の所にまで連絡が行きそうだと。

「なるほど、解ったわ！」

岡部教諭が立ち去った後、ハルヒは嬉しそうな顔になって俺の前で声を上げた。

「何が解ったんだ」

「光るプールの謎よ！　きっと見回りの教師が懐中電灯でプールの水面を照らしているのを見て、誰かがプールが光っていると勘違いしたのよ！」

「あーそうだな、さすがはハルヒだ」

じゃあさつき校舎の窓から目撃したプールの光は何だったんだ、岡部がいくら真面目と言っても短期間に2度もプールに見回りに来るとは思えん。

それに地球を侵略しに来たエイリアン説はどうなったんだ？　ツツコミどころは満載だったが、ハルヒが勝手に納得して居るんだ、やぶを突いて蛇を出す事も無い。

「次は、涙を流す銅像の話だったな」

俺はハルヒの気が変わらないうちに、次の七不思議に向かった。これもどうせ誰かのイタズラかなんだろう。

そう思っていたのだが、俺は銅像を見てとても驚いた。

なんと、銅像が青い色の涙を流しているように見えたからだ。しかし、ハルヒは俺に得意げに説明を始める。

「何よキョン、こんな事で驚いているの？」

「だって、ウワサの通り銅像が涙を流しているじゃないか」

「これはね、酸性雨が銅像を溶かしたのよ」

「酸性雨だと？」

「そう、それが銅と化学反応を起こして青くなるわけ、化学の授業で習ったでしょう？」

「いや、さっぱり覚えていないが」

俺がそう答えると、ハルヒはあきれたようにため息をつく。

「授業中に居眠りなんかしているからよ」

お前だって俺の後ろの席で寝ているじゃないか。

「あたしは解っているから良いのよ。それより、SOS団から落第者を出すわけにはいかないんだから、しっかりしなさいよね！」

「解った、さあ次のチェックポイントに行こうぜ！」

俺は話題を反らすためにハルヒの腕を引っ張って銅像を後にした。

その後俺とハルヒは残りの七不思議の場所を回ったが、どれもイタズラや勘違いだと解った。

探索を終えて校門に戻ると、長門と朝比奈さん、古泉の3人が俺達を待っていた。

「どうでした涼宮さん、七不思議の方は？」

「どれもこれも、ちっともたいした事じゃ無かったわ」

「そうですか、でも肝試しができてよかったじゃないですか」

「まあ、そうね」

俺は古泉の言葉に満足したように笑うハルヒに驚いた。

七不思議が全部空振りだったんだぞ、悔しくは無いのか？

「それじゃ今日はこれで解散するけど、明日の市内探検では今日見つけられなかった分を取り返すからね！」

「おい、ハルヒ……」

「あつ、キヨンは明日はおごり決定だから！」

俺が口を挟む間も無く笑顔のハルヒは姿を消してしまった。

「では、僕達も帰りましょうか」

古泉の言葉に長門と朝比奈さんもうなずき、ぼう然と立っている俺から離れて歩き出した。

「おい古泉、なんだこの終わり方は？　どうしてハルヒはああも簡単に七不思議を諦めて帰って行っただ？」

俺は古泉に問い詰めたい事がたくさんあった。

15分先に出発した古泉達でないと出来ない事が色々あったからだ。

「全ては、涼宮さんが望んだ通りに事が運んだのですよ」

「どういう事だ、お前らは何かやったのか？」

「別に、何もしていませんよ。お疲れさまでした」

「キヨンくん、また明日」

それ以上俺の質問には答えず、手を振って去って行く古泉と朝比奈さん、そしていつの間にか姿が消えている長門。

心の中はモヤモヤとした思いでいっぱいだ。

あー、俺の閉鎖空間を誰か消してはくれないのかな。

結局、この夜の真実は伏せられたままだった。

長かった使徒と人類の戦いもついに最終局面。

使徒の精神攻撃を受け、伏せていた状態から復活を遂げたアスカの乗る式号機は、エヴァ量産機相手に善戦をしていた。

しかし、直前の戦略自衛隊との戦いでアンビリカルケーブルを切断された式号機の内部電源は無情にも切れてしまった。

アスカにピンチが訪れる。

だが、アスカの窮地を救ったのは遅れてやってきたシンジの初号機だった。

式号機を取り囲んでいたエヴァ量産機は初号機によって倒されて行った。

そして、初号機は圧倒的な強さを見せてエヴァ量産機に勝利した。

ここにゼーレの野望は完全に潰えたのだ。

作戦の失敗を知った戦略自衛隊もネルフから撤退し、日本政府もネルフへの侵攻命令を撤回した。

信頼を失ったキール議長率いるゼーレ執行部はゼーレのスポンサーから見放されたのだ。

ゼーレがネルフからMAGIを奪う事すら叶わなかった事を知ると、日本政府はネルフを味方に引き入れる事を考えたのだった。

これによりネルフの危機も去り、生き残ったネルフの職員達は歓声を上げた。

発令所に居た冬月達も安心してため息をついた。

死んでしまったネルフの職員達の事を考えると素直に喜べないのは確かであったが。

戦いを終えた初号機と式号機はそのまま戦場に立ち尽くしていた。

ネルフの発令所から戦いの終わりを告げる通信が入るとエントリープラグに居たシンジとアスカは少し安心したが、まだ警戒を緩めるわけにはいかなかった。

量産機がまた復活してしまうかもしれないし、戦略自衛隊がまた自分を襲って来るかもしれないと思うと油断は出来ない。

本当に安全になったと確信するまで初号機は弐号機を守るように立ち続けていた。

エントリープラグから出たシンジとアスカは車に乗せられ、並んで後部座席へと座った。

緊張の糸が切れた2人にどつと疲れが押し寄せる。

そして、シンジはアスカがそつと自分の手を握って来た事に驚いた。シンジは目を丸くして隣に座るアスカの方に顔を向けると、アスカは満ち足りたような穏やかな笑顔でシンジを見つめ返した。すると、シンジも微笑んでアスカの手をしっかりと握り返した。

シンジはアスカに謝りたい事はたくさんあったが、アスカの表情を見てシンジは自分は許されたのかもしれないと思った。

アスカもシンジに対して感謝したい事がたくさんあったが、シンジの表情を見て自分の思いは伝わったのだと思った。

もう2人の間に言葉は不要だった。

アスカとシンジは互いの手の感触の温もりを感じながら、ゆっくりと目を閉じて眠りに着いた……。

車で政府関係の建物に案内されたアスカとシンジは、そこで冬月から話を聞かされた。

これから病院で精密検査を受けた後、アスカとシンジはエヴァンゲリオンパイロットの任務から解放され自由の身となると。話を聞いたアスカとシンジはとても喜んだ。

これからはエヴァに縛られる事の無い平穏な生活を送れるのだ。

それは、使徒との戦いに疲れた2人にとって願いだった。

第3新東京市を襲った使徒の戦禍により、今まで暮らしていたコンフォート17での生活が困難になったアスカとシンジは、第2新東京市のマンションの部屋で新しい生活を始める事になった。

アスカは別に一緒に構わないと言っていたのだが、厳しい保護者である冬月と伊吹マヤの方針によって、アスカとシンジの住居は別々とされた。

夏休みが終わった後、アスカとシンジは第2新東京市の中学校に転入する段取りになっている。

アスカはこれから新しく始まる平凡な中学生としての生活に胸をときめかせていた。

シンジに素直に気持ちを伝えられたのだから、これからは”少し”シンジに優しくしてあげよう。

もちろん、自分の優位性は譲るつもりはないけれど。

アスカはすっかり普通の少女、恋に夢見る乙女となっていた。

アスカが自分の部屋の時計を見ると、時間は夕方。

そうだ、今日はシンジと一緒に夕食を作ってみようと言ってみよう。自分が料理を始めると言ったらシンジは驚くけど、喜んでくれると思う。

そして、2人で買い物に行って、包丁を初めて握る自分の手をシンジが持つて教えてくれたり……。

アスカは自分とシンジがおそろいのエプロンを付けている所まで妄想を膨らませていた。

エヴァンゲリオンのパイロットだった時は、そんな事は考えても見なかったのに。

しかし、アスカはこんな平和ボケしている自分も悪くは無いなと思っていた。

そんな妄想を抱えながらアスカはシンジの部屋へたどり着いた。

アスカがシンジの部屋のインターホンを押しても返事が無い。

おかしいと思ったアスカがシンジの部屋のドアノブに手を掛けると、

ドアには鍵が掛かっていなかった。

シンジが鍵を掛けないで外出するなんて珍しい事だ。
きっと近所に行っているのだらうと、アスカはシンジの部屋の中で待つ事にした。

部屋の中で自分が待つていれば、シンジは驚くに違いない。

アスカはその時のシンジの驚いた顔を想像して笑った。

しかし、テーブルの上に置かれたシンジの書き置きを見ると、アスカは顔を青くした。

僕はトウジを殺して生き延びたんだ。

だから、僕らは幸せになれない、いや、幸せになってはいけ
ないんだ。

さようなら、アスカ。

「どうして！？ やつとアタシはシンジと普通の生活が出来
ると思つたのに！」

アスカは半狂乱になってシンジの書き置きを丸めた。

「アタシを置いてどこに行っちゃつたのよ……」

アスカの目から滝のような涙が流れた。

そして、アスカは自分の携帯電話を取り出すと、ネルフの関係者
よりも先にヒカリの家へと電話を掛けた。

シンジの失踪にはトウジが関係していると思つたからだ。

エヴァ参号機が使徒に乗っ取られ、トウジが命を落とした事件から

アスカもヒカリと連絡を取る事はしていなかった。

トウジの死によってアスカもヒカリと顔を合わせ辛かったのだ。しかし今のアスカにはそのような事は関係無かった。

それほどシンジを取り戻そうと必死だったのだ。

「はい、洞木です」

「ヒカリ？」

「アスカ？」

家の電話に掛かって来た相手がアスカだと知ったヒカリは、電話を切って逃げてしまいたい衝動に駆られた。

しかし、次に聞こえて来たアスカの叫びがヒカリを思い止まらせた。

「鈴原が、シンジを連れて行っちゃったのよ！　お願いヒカリ、鈴原にシンジを返してって頼んでよ！」

「えっ、それってどういう意味なの？　落ち着いて、アスカ！」

アスカの支離滅裂な言葉、涙声、そして何よりもトウジの名前が出て来た事にヒカリは驚いた。

そして、アスカからシンジの書き置きの内容を聞いたヒカリはアスカに謝る。

「ごめんなさいアスカ、私がつと早く勇気を出して会っていれば碇君もアスカも苦しませずに済んだのに……」

「それってどういう事よ！？　教えてヒカリ！」

電話の向こうのアスカはかなり興奮してしまっているようだ。

ヒカリはアスカに落ち着くように説得した後、保護者であるマヤ立ち会いの元、アスカの部屋で会って話す約束をした。

「それでヒカリ、シンジとアタシに伝えるべきだった事って何？」

アスカの部屋を訪れたヒカリは、久しぶりの再会を喜ぶ間もなく、暗い顔をしたアスカに質問をされた。

落ち着いてはいるが、それだけアスカはシンジの失踪にショックを受けているのだとヒカリは感じた。

「伊吹さん、これをアスカに見せて構わないですよね？」

「ええ」

マヤに確認を取ってから、ヒカリは数通の手紙をアスカに見せた。

「これは……鈴原の遺書なのよ」

「えっ……」

ヒカリの言葉を聞いたアスカは伏せていた顔を上げて驚いた。

そして食い入るようにトウジの書いた手紙を読む。

マヤとヒカリはそんなアスカの姿を読み終わるまでじっと見守っていた。

「まさか、鈴原がこんな事を思っていたなんて……」

トウジの手紙を一気に読み終えたアスカは深いため息をついた。

「ごめんなさい、私がつと早くに鈴原からの手紙を碇君に見せていればこんな事にはならなかったのに。勇気が無かった私が全て悪いのよ！」

ヒカリはアスカに向かって土下座をして謝った。

しかし、アスカはそんなヒカリの体を持ち上げると抱きしめて、耳

元で優しく囁く。

「もう謝らないで、アタシはヒカ리를責めてなんかいないわ。だってヒカリはアタシの親友だから」

「ご、ごめんなさいアスカ」

「言つべき言葉が違つてしょ？」

「ありがとう……」

2人の少女が抱き合う姿を、マヤはまぶしそうに見つめていた。

「でも、鈴原の手紙の内容をどうやってシンジに伝えればいいの……？」

アスカは困った顔でそうつぶやいた。

シンジは自分の意思で姿を消したのだ。だからと言って、指名手配をすると言つのは乱暴な手段のように思えた。

「そうだ、私に良い考えがあるわ！」

何かを思い付いたのか、マヤはそう言つて指を鳴らした。

マヤのアイディアは、テレビやラジオ、新聞やインターネットなどのマスメディアを通じてトウジの遺書を公開する方法だった。

シンジがどんな場所に身を隠しているのかはわからない。

しかし、宿泊施設などに居ればきっとシンジの目に触れるはず。

アスカとヒカリもマヤのアイディアに賛成し、マスコミもマヤの要請に協力した。

そして、トウジの書いた遺書はTVのアナウンサーやラジオのパースナリティによって朗読されたのだった。

新聞の紙面にも遺書の全文が載せられた。

何を書いたらいいんだろう、俺はいきなりネルフの人に遺書を書くように勧められて驚いている。

話している時は関西弁だけど、書く時は標準語の方がいいと言われた。

まあ、くだらない前置きは後にして、俺が遺書を書く事になったのは、エヴァンゲリオンのパイロットに選ばれたからだ。

碇や惣流達は拒否したみたいだけど、俺は死んでから他の人に俺がどんな気持だったんだろうとかいろいろ憶測されるのは嫌だ。

それに、遺書を書いたのはまだ碇や委員長……いや、ヒカリに伝えたりない事があるからだ。

直接言うのは凄く恥ずかしいから、こうして手紙にしてしか伝えられないけどな。

碇、もし俺が使徒と戦って命を落とす事があっても、自分を責める事は止める。

自分の幸福を捨てれば、俺への償いになるなんて勘違いするな。

俺は碇の不幸な面なんて見たってちつとも嬉しくない。

それよりも、俺の分まで一生懸命生きて夢を追い続ける。

そして、惣流と幸せにな。

隠さなくてもいい、俺から見ればお前と惣流がお互い気になってるのは解ってる。

ヒカリ、あの日の帰り道に俺達はお互い素直になろうって約束したよな。

俺はいつからヒカリを委員長と呼ぶようになったんだろうな。

小さい頃は名前で呼び合っていたのにな。

ヒカリにちよっかいを出してたのは、やっぱりヒカリの事が気になっっていたんだ、許してくれ。

今度学校に登校した時、昼飯はパンじゃ無くてヒカリの弁当が食べ

られるのが楽しみだ。

それと、俺が居なくなってもずっと湿っぽい顔してんな。

俺はヒカリが笑っている顔が好きなんだからな。

碇だけでなくヒカリにも言うけどな、好きな相手が不幸な面をしてても俺はぜんぜん嬉しくない。

たまに俺の事を思い出してくれるだけでいいんだ。

この放送の効果があつたのか、シンジは翌日の夕方、アスカが待っているシンジの部屋へ姿を現した。

インターホンのカメラで、シンジの姿を見たアスカは嬉しさに飛び上がってドアを開けてシンジを迎え入れる。

「……ただいま」

「おかえり！」

照れ臭そうに顔を赤くして立っているシンジの胸に笑顔のアスカが飛び込む。

シンジとアスカは夕陽の差す玄関で固く抱き合った……。

トウジの手紙の内容が公共の電波や新聞などを使って発表された事は、シンジ以外の人々にも影響を与えたのだった。

戦略自衛隊の侵攻の際に生き残ったネルフの職員。

そのネルフの職員を殺めてしまった戦略自衛隊の隊員。

そして、セカンドインパクトの惨劇を体験した多くの人々。

彼らの中にはシンジのように、そして加持のように、自分に不幸を強いて人生を送っていた者も多数居たのだ。

放送を聞いた彼らは再び希望を持つ事になり、その事はまた美談としてメディアを通じて報じられた。

「僕は勘違いをして、アスカも不幸に巻き込んでしまう所だったんだね、本当にごめん」

シンジがアスカに謝ると、アスカは首を横に振って否定した。

「シンジ、それを言うならアタシも同じ立場よ、だってアタシがエヴァに乗って戦えていれば、ファーストを助ける事が出来たのかもしれないしさ……」

「でも、アスカは使徒の攻撃を受けて病気になっていたから仕方が無いじゃないか！」

「それは違うわ、アタシがあなってしまったのはくだらない意地で撤退を渋ったせい。アタシがもっと強い心を持っていれば、あの使徒にも適切に対処する事が出来たのよ」

「そんな事を言ったら切りが無いじゃないか」

「そう、だから鈴原も言ってる通り、塞ぎこんでしまうのはもう止めましょうよ」

アスカはそう言って精一杯の笑顔を作ってシンジに笑いかけた。

「そうだね、悲しくても笑顔になろう」

シンジもアスカに笑顔を返して見つめるのだった。

そしてお盆の時期になったアスカとシンジは、ミサトが葬られた墓地へに墓参りに行く事にした。

戦略自衛隊の侵攻により多くのネルフの職員が亡くなったので、1人1人の遺体を区別する事は難しかった。

だから墓石は形式的な物であるが、アスカとシンジはそこにミサトの魂が眠っていると考えた。

アスカとシンジは花束をそれぞれ1つずつ持っていた。

1つはミサトの分、もう1つは加持の分だった。

加持はきつとミサトの近くへと帰っている、そう信じたかったのだ。

「僕はトウジの言葉を聞く事が出来て良かったけど、加持さんはずっと悩んでいたんだね」

シンジは悲しそうな目をして、最後に会った時の加持の言葉を思い出した。

「謝ろうと思っても、相手が居ないって言うのは辛い事よね」

「うん、許してもらえているのか判らないのは不安だよ」

アスカがつぶやいた言葉に、シンジもうなずいた。

再びアスカの側に戻った時、シンジは黙っていた加持との最後の会話の事をアスカに話した。

シンジは今のアスカなら受け止められると思って加持の子供の頃の辛い体験を明かしたのだ。

「本当、加持さんもミサトも大馬鹿よ！ 幸せにならないのが償いだなんて。アタシはそんな馬鹿な大人になんか……なりたくないんだから」

アスカはそう言うと、ミサトの墓石に水を乱暴に掛けた。

それがアスカなりの供養なのだろう。

そしてアスカとシンジは墓に向かって手を合わせてしばらくの間黙

とうをした。

「また来年会いに来ます、ミサトさん、加持さん」
「じゃあね」

シンジとアスカは生きているミサトと加持に話し掛けるように笑顔であいさつをして墓地を立ち去って行った。

そして新学期が始まってアスカとシンジは新しい中学校のクラスで元気に自己紹介をする。

その姿は過去の罪に悩むエヴァンゲリオンパイロットの顔では無い。それは完全にどこにでもいる普通の中学生の少年少女の笑顔だった。

2011年 夏休み記念ギャグLAS短編 テンガロンハット！

ここはアメリカ西部の小さな街。

ゴールドラッシュに湧く開拓者達が集まって作った集落だ。

この街の町長は碇ゲンドウ。

彼には碇シンジと言う息子が居た。

町長の椅子に座ったゲンドウは息子のシンジの事を案じていた。

シンジが小さい頃に妻を失くしたゲンドウは、彼なりにシンジの事を大切に育てた。

シンジは優しい少年に育ったが、たくましさに欠ける部分があった。特に銃の腕前に関しては悩みどころであった。

シンジは缶などは正確に撃ち抜く事は出来るが、鳥などの動物相手では物怖じしてしまうのだった。

「碇、入るぞ」

扉を開けて司令室……いや、町長室に入ってきたのは冬月だった。

「街の様子はどうか？」

「ああ、すっかり使徒どもに怯えている。また今日も2つの家族がこの街を離れるそうだ」

冬月はゲンドウに尋ねられて深くため息をついた。

”使徒”とは神の使いを名乗る武装集団で、ゲンドウが町長を務めるこの街にも上納金を要求して来た。

ゲンドウが断ると、彼らは街で略奪を始めたのだった。

要するに使徒とは名ばかりのゴロツキの集団だったが、それでも街の者は逆らう事が出来なかった。

「しかし、問題無い。伝説のガンマンと言われる惣流氏を保安官として雇うのだから」

「本当に大丈夫なのだろうな」

冬月は不安そうにゲンドウに尋ねるのだった。

街で仕事をしていたシンジは、今まで街で見かけた事の無い美しい少女に声を掛けられる。

「ねえ、そのアンタ、アタシはこの街に来たばかりなんだ、案内してよ」

「えっ、でも僕は父さんに頼まれた仕事の最中だから」

「アンタね、こんな麗しいレディが声を掛けているのよ！ 仕事よりエスコートを優先すべきでしょう」

「苦しい……」

少女に胸倉をつかまれたシンジは苦しそうにもがいた。

シンジは少女の迫力に圧され、街を案内する事になってしまった。

少女は自分の名前を惣流アスカと名乗った。

「へえ、君の父さんは凄いガンマンなんだ」

「ええ、だからこの街の保安官と呼ばれたのよ」

アスカは自慢げに胸を張ってそう答えた。

「凄いなあ、僕は父さんの役に立つ事なんて雑用しか出来ないよ」

シンジは暗い顔をしてつぶやく。

アスカはシンジが町長の息子だと知ると馬鹿にしたように笑う。

「アンタみたいなさえないのが町長の息子なの？ ちゃんちゃらお

かしいわ」

「う、うるさい！ 射撃の練習は欠かさずしているよ！」

「じゃあ、あそこの木に止まって居る鳥を撃ってみなさいよ」

しかし、シンジはアスカの前で鳥に弾を命中させる事は出来なかった。

元々、鳥を撃つ事は苦手である。

さらに、こんな可愛い子の前では緊張してしまっていたのだ。

「アハハハ、おかしい！」

アスカはシンジの下手くそな射撃を見てお腹を抱えて笑った。

シンジは恥ずかしそうに顔を赤くしてうつむいた。

そうしていると、街の方が騒がしい事に気が付いた。

アスカとシンジは街の通りへと駆け付けた。

すると、そこでは使徒と新しい保安官であるアスカの父親が向き合っていた。

「アタシのパパは凄いんだから、あんなやつならんてすぐやつつけちゃうわ！」

アスカの父親の腕は確かに伝説級だった。

しかし、相手の使徒も伝説級の腕を持つガンマン、ラミ・エルだった事が最大の不幸だった。

銃声が鳴り響き、倒れ伏したのはアスカの父親の方だった。

「パパっ！」

アスカがたまらず飛び出して父親の体にすがりつく。

すると、使徒がアスカの体を持ち上げて自分が乗って来た馬へと載

せる。

「この娘は神への捧げ物として貰って行くぞ」

使徒は神への捧げ物と言っているが、やつらのアジトに連れていかれたら、ひどい目に会わされるに違いないとシンジは思った。

「助けて、シンジ！」

使徒とアスカを載せた馬はドンドンと小さくなって行った。
シンジは去って行く使徒に向かって銃を構える。

「目標をセンターに入れて、スイッチ！」

何とシンジの撃った銃弾はアスカを傷つけることなく、一発で馬と使徒の動きを止めた。

肩を撃たれてうめき声をあげる使徒を見ていた街の人々が取り押さえる。

「シンジ、助けてくれてありがとう……」

アスカはシンジに抱きついてキスをした。

見守っていた街の人々にも祝福のムードが漂う。

しかし、拘束された使徒ラミ・エルは不敵な笑みを浮かべる。

「俺が捕まったら、俺の兄弟達が黙っちゃいないぜ。それに全員が伝説級だ」

ラミ・エルの言葉を聞いた街の人々は恐れをなして散って行く。
シンジとアスカは拘束したラミ・エルを引きつれて町長であるゲン

ドウの所へ向かう。

話を聞いた冬月は血相を変えてゲンドウに話し掛ける。

「何、それは本当かね！ 碇、こうなったら襲撃を受ける前に街を捨てるべきだ」

「お前達はそうしろ。私はこの街に残る」

「父さん、僕も残るよ！」

「何を言っている！」

「町長さん、シンジは凄い腕前なのよ。だってあの使徒を一発で倒したんだから！」

「何だと？」

アスカの言葉に、ゲンドウは驚いた顔になった。

シンジは顔を赤くして言い訳をする。

「それは、アスカを助けようと思って必死だったから」

ゲンドウ達は街が騒がしい事に気が付いた。

逃げる前にもう使徒たちがやって来てしまったのだ。

「シンジ、私はユイが愛したこの街を守る。お前は自分の愛する女を守り抜け」

「うん、分かったよ」

シンジはゲンドウにうなずいて、アスカの手を取った。

そして裏口から逃げたシンジとアスカは、使徒たちがゲンドウに迫るのを見ていた。

使徒たちが銃を一斉に構える。

シンジとアスカは思わずハチの巣になるゲンドウの姿を想像した。しかし、ゲンドウは右手を前に差し出すと、ATフィールドを張っ

て銃弾を跳ね返した。
驚いたシンジは思わず叫ぶ。

「それってズルイよ、父さん！」

シンジが気が付いた次の瞬間、シンジは自分が部屋のベッドで寝ていた事に気が付いた。

あの西部劇のような世界は夢だったのだ。

「まったく、シンジがテンガロンハットなんかお土産に買って来から変な夢を見たじゃない」

朝に顔を合わせたアスカはシンジにそう文句を言った。

「いったいどんな夢を見たの？」

「何か西部劇のような、アンタがやたら格好良かった夢……って、何言わせるのよ」

「アスカが勝手に言ったんじゃないか」

「ふん、現実のアンタがあんなにやれるはずないわよね」

アスカは赤くなったり不機嫌そうになったり忙しく表情を変えていた。

しかし、シンジはアスカの事よりも気になる事があったのだった。

「司令室まで来て何の用だ、シンジ？」

「あの、父さんに聞きたい事があるんだけど、もしかして父さんってエヴァみたいにA Tフィールドを張る事が出来たりする？ こう、右手を前に突き出して」

シンジの言葉を聞いたゲンドウは座っていた椅子から落ち、側に立

っていた冬月はしりもちをついて倒れ込んだ。

「な、何をバカな事を言ってる！」

「そ、そうだよね」

司令室をシンジが立ち去った後、冬月は大きくため息をついてつぶやく。

「碇、俺の寿命が縮んだぞ」

高校2年の夏休み、俺達は人混みであふれる海水浴場へ来ていた。去年と同じように古泉の知り合いとされる多丸兄弟の別荘に行くものだと思っていた。

しかし、つい口を滑って出ってしまった俺の一言によって状況は変わってしまった。

俺はハルヒの前で「豪華な別荘で過ごす夏合宿も気持ちが良いが、人混みであふれる海水浴場に居た方が日本の夏の醍醐味だいごみを味わえるかもしれない」とつぶやいてしまったのだ。

ハルヒは気の無い様子で「ふーん」と言っただけだったが、どうやら影響を与えてしまったらしい。

示し合せたようなタイミングで古泉が多丸兄弟が別荘を売り払ってしまったと話し、仕方が無いから電車で海水浴場に行く事になってしまった。

もちろん、家から服の下に水着を着て来る命令も忘れちゃいなかった。

大きな心配は妹とシャミセンを連れて来た事だった。

ハルヒはバッグに入れておけばバレないと言ったが、満員電車じゃシャミセンが押し潰されてしまう可能性だってある。

すると古泉が策を打ってきた。

機関の人間を使って、電車の1両を占領するから問題が無いと言う事だ。

おいおい、問題ありすぎだろう！

俺は何の罪もないのに迷惑を被る一般人のみなさんに、心の中で謝った。

そんな機関の手助けもあり、俺達は運良くまとまって電車の座席に座れる事が出来たのだ。

俺はそんな大ごとにならないように長門に情報操作を頼んだのだが、

物質データを改変するとバグが出やすいので、他の人々の脳内情報を改変するそうだ。

ようするに機関の人間によって車両から排除された事実もさっぱり忘れてしまう事だ。

やばい、この2人が組んだらハルヒ以上に恐いかもしれんと俺は身震いした。

そして海水浴場につくと、ハルヒは去年の夏に市民プールへ行った時のように嬉しそうな表情になる。

「やっぱり、夏と言えば海の家ね！」

まあ、市民プールに海の家は無かったからな。

妹の面倒は朝比奈さんが見ると言ってくれたが、2人で迷子になってしまう事は容易に予測できた。

しかし、この海水浴場も機関の人間が陰ながら数百人態勢で警備に当たって居てくれると言う。

それは安心できるのだが、海水浴場の混雑を増している事に申し訳ないと思う。

「あなたが気に病む事ではありません。世界の崩壊を防ぎ、70億人の命を救うためなのですから」

「あー、わかった、勝手にしてくれ」

古泉の話のスケールの大きさについて行けなくなった俺は開き直る事にした。

「さあ、今日は肌がこんがり焼けるほど遊びつくすわよ！」

この晴れ渡った天気はやはりお前の望みだったのか。

まあ、小麦色に焼けた肌のハルヒを見るのも悪い事じゃないか。

でも、長門や朝比奈さんはやっぱり白い肌の方が似合うよな。

俺がそんな事を考えながら長門や朝比奈さんを見ると、俺の顔にビーチボールが直撃した。

「ぐえっ！」

驚いた俺はたまらずしりもちをついて倒れ込んだ。

「キョン、何をボーっとしているのよ、早く新川さん達と合流するわよ！」

日帰りの海水浴ならともかく、今回は合宿と言う事なので、泊まりだった。

高校生だけでは親も渋ったから、新川さんに保護者役になってもらったのだ。

「皆様、お変わりなさそうですね」

「新川さん、今日はお世話になります！」

俺達に声を掛けたのはアロハシャツを羽織り、下は海水パンツ一枚の新川さんだった。

スーツ姿だけでなくこんな姿も板についている新川さんだった。

ハルヒは元気に新川さんに向かってあいさつをする。

「悪いですね、保護者役を引き受けてもらって」

古泉がそう言うと、新川さんは首を軽く振る。

「いえ、雇い主の多丸様から休暇を頂きまして、この海水浴場に来る予定でしたので」

「やっぱり、夏休みと言えば海水浴場よね！」
「そうでございますな」

新川さんは自分達が確保したスペースに俺達を案内した。

そこに居た機関の数人の人間の中に、俺は森さんの姿を発見した。
朝比奈さんよりさらにスタイルの良い森さんの水着姿に、俺は驚いた。

去年別荘で会ったメイド服姿の時もスタイルが良いとは思っていたがこれほどまでは思わなかったのだ。

「皆様、お久しぶりです」

腕で胸を寄せて頭を下げてあいさつをする森さんの姿に、俺は興奮して目が釘付けになってしまった。

そんな俺の後頭部にハルヒのローキックが命中し、俺は砂浜に頭からダイブする事になった。

「うわぁキョン君、大丈夫ですかぁ!？」

「あんなバカ、放って置いて遊びましょう!」

熱をもった砂に顔を押しつけられた俺は、意識がもうろうとなった。

「これはいけませんね」

古泉がそう言っただけで俺の顔に水筒の水を掛けた。

危ない状態は免れたが、俺は起き上がって遊ぶ気力が無くなった。
仰向けに日陰に寝かされた俺のおでこに冷たいタオルがそっと置かれた。

いったい誰だろうと目を開くと、そこには天使のように穏やかに微笑む森さんがいらっしやるじゃないですか。

やばい、森さんとの距離が近すぎてまた高揚とした気分になってしまった。

しかし、森さんはそんな失礼な俺に対しても優しげな態度を崩さない。

本当に大人びた女性だ。

すると森さんは屈んで寝ている俺の耳元に顔を近づけて来た。うわあ、それはヤバいですって！

「実はあなたにお尋ねしたい事があるのですが」
「何ですか？」

俺が続きを聞こうとしたその時、ハルヒの大声が飛びこんで来る。

「こらーっ、いつまで寝ているのよ！ 早く起きなさい！」

「わかった、じゃあ俺も思いつきり遊ぶぞ！」

俺が勢いよく立ち上がってハルヒに近寄ると、ハルヒは物凄く鋭い目つきで俺をにらみつけた。

うわっ、これはメチャクチャ怒ってるぞ！

「遊ぶですって！？ 雑用係が何を言ってるのよ！」

腕組みをしたハルヒはそう言うと、俺に大量の買い物押しつけてきやがった。

とても1人では買えない量だ。

「それなら僕も買い物について行きますよ」

古泉が俺との同行を申し出るとハルヒは認めないと首を横に振った。そして、俺がサボらないように連行すると言って俺の手を握って歩

き出した。

「あんだ、さつき森さんと何を話していたの？」

「何か、森さんが俺に聞きたい事があるって話していた」

「隠すためにならないわよ！」

「本当にそれだけだって」

俺がそう答えると、ハルヒは追求と握った手の力を緩めた。

そして俺は海の家を前にして、多大な出費となるであろう買い物を覚悟していた。

一番近くの店に入った俺とハルヒは店員のおじさんに声を掛けられる。

「おやおや、初々しいカップルさんだね。おまけしておくよ」

俺はハルヒから手を離そうとしたが、不思議な事にハルヒの方が離さなかった。

店員のおじさんは焼きトウモロコシをさらに2つもおまけしてくれたのだった。

「……しばらくの間カップルの振りをするだけなんだからね」

「分かってるさ」

店を出たハルヒと俺は小さな声でそうささやき合った。

他の海の家で食べ物を買って行くうちに、俺達は両手に抱えなければ持てなくなり、繋いでいた手を離さなければいけなくなった。

俺はほっと安心したような、それで居て残念なような気分になった。

「別に、あたしはガツカリなんかしてないからね！」

俺の視線を感じたハルヒはそんな言い訳をした。

顔が赤くなっているのは日焼けのせいだけじゃないだろうな？

そう思うと俺はハルヒが可愛いやつだと思えて来た。

俺とハルヒはたくさん食べ物を抱えてみんなの所へと戻ると、驚きをもって歓迎された。

あれから俺達はいろんな海の家でカップルとして祝福されておまけしてもらったのだった。

他にもカップルは居るだろうに、また買わせようって商売なのか？この時俺は知らなかったが、俺達の入った海の家のうち数軒は機関の手が回っていたそうだ。

そして軽食を取った後に俺達は波打ち際で水遊びをしたのだが、俺が女性陣の水着姿に目移りする度にハルヒから手痛い攻撃を受けていた。

顔にボールをぶつけられたり、水を掛けられたり、露骨にそんな事をしたら周りのやつらにも解っちまうぞ？

でも、森さんの方も確かに様子が変だ。

俺に視線を向けているのを感じるのだが、森さんの方もハルヒの視線に気が付くと俺から離れてしまう。

さて、俺達は海水浴に来たわけだが、ハルヒが言うにはこれはSOS団の合宿である。

合宿と言うからには俺達はホテルに泊まる予定になっているわけだった。

今回は多丸氏の別荘に泊まるわけではないので、新川さん達に混ぜてもらった形になった。

「ハルヒ、日も傾きかけて来たし、そろそろ海から上がらないか？」

「えーっ、もうちょっと遊びたいわよ」

「そろそろ行かないとホテルの夕食に間に合わなくなりますぞ」

新川さんがそう言うと、ハルヒはあっさりと引き上げた。

それから俺達はまた電車とバスを乗り継いで新川さん達と目的のホテルへと着いた。

ここはハルヒが小学生の頃にじいさんに連れて来てもらったホテルだそうだ。

「さすがね、あたしが来た時と何にも変わってない！」

褒めているのかバカにしているのか相手の取り方によっては判断の別れる言葉であるが、ハルヒは嬉しそうだった。

また、ホテル側も長い歴史を持っている事を誇りにしているようにも見える。

新川さんや森さんにとっても思い出深いホテルらしい。

ゲームコーナーにはインベーダーゲームとか、昔の筐体が並んでいたからな。

しかし、後になって知った事だが、俺達が泊まりに行った後にホテルは大幅リニューアルしたらしい。

新しい客を呼び込むには必要な事かもしれないが、ハルヒは寂しがっていたな。

俺達は夕食を兼ねたディナーショーの時間にギリギリ間に合った。そして、ショーが終わった後にホテルの主催でビンゴ大会が始まった。

「情報操作は無しだぜ、長門」

「分かった」

俺は他の宿泊客の楽しみを奪ってしまわないように念を押した。

しかし、ハルヒのビンゴは完成しなかったのだが妹のビンゴは見事に完成した。

「やったあ！」

「よっしゃ妹ちゃん、行つて来なさい！」

妹のやつはステージ上から俺達に向かつて手を振つて来るから恥ずかしかったな。

「みんな、夜は海底温泉へ行くわよ！」

このホテルには水着で入れる水族館と温泉を合わせた浴場があるそうだ。

ハルヒが以前行つた時は海底温泉は工事中だったようで、念願が叶つたハルヒは妹よりも騒いでいた。

俺はハルヒの無邪気な笑顔は嫌いじゃないぜ。

そして、海底温泉を堪能した俺達は男湯と女湯に別れているふうの大浴場へと入った。

「焼けてしまつて体中がヒリヒリとしますね」

古泉の肌はすっかりと赤くはれ上がっていた。

俺の肌も同じような物だ。

明日になれば肌は黒くなっているんだろうな。

風呂からあがつた俺達は定番コースであるゲームコーナーへ行つた。昔ながらのエア・ホッケーなどを楽しむと、どつと疲れが出て来た。部屋に戻つた俺達は、部屋の様子を気にすることなく、同室になつた新川さんや機関の組織の人間の隣ですぐ寝てしまった。

2泊3日の夏合宿だったが、俺達は余すことなく夏の海の遊びを楽しんだ。

嵐によつてクローズド・サークルになつた去年の合宿とはえらい違いだ。

それだけ鬱憤^{うつぶん}が溜まっていたんだろうな。

だが、2日目になってから森さんは俺に意味ありげな視線を向ける

事は無くなった。

俺は思い切ってハルヒが視界から消えたタイミングで森さんに声を掛けてみる。

「あの、俺に聞きたい事って何だったんですか？」

「いえ、もうその必要は無くなりましたから」

森さんは嬉しそうな笑顔を浮かべてそう答えた。

「ふーん、何やら楽しそうに話しているじゃない」

振り返ると、不機嫌そうな顔のハルヒが立っていた。

やばい、そーいやハルヒは野球大会の時もこんな感じだった！

「私は涼宮さんから彼氏を盗ったり致しませんので、ご心配なく」
「なっ！」

森さんにそう言われるとは思わなかったのだらう、ハルヒの顔が噴火したように赤くなった。

ハルヒは全身の力が抜けたようにガツクリと崩れ落ちた。

「おいハルヒ大丈夫か、しっかりしろ！」

「これは体の芯から焼けてしまったかもしれないね」

「とんちじゃないんだぞ、古泉！」

俺は気を失って寝かされたハルヒの側についている事になった。

ハルヒは目を覚ますと、日焼けする時間が少なくなったと俺に文句を言った。

「ハルヒ、もう十分焼けたじゃないか」

するとハルヒは胸に手を当てて「そうね」とつぶやいて大人しく座り込んでしまった。

俺はそんなハルヒの隣に座って、静かに海が夕焼けに染まり始めるまで一緒に眺めていたのさ。

その日は俺も胸焼けがひどかったしな。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

涼宮ハルヒの憂鬱SS

ハルキョソNer・サブタイトル『新妻ハルヒの陰謀』

- - - - -
- - - - -
- - - - -

夫婦ハルキョソ設定です。特にネタはありません。

俺が仕事を終えて家に帰ると、リビングにハルヒの姿が無い。
すると、テーブルには俺とハルヒの食事の用意の他にメモ帳が置か
れていた。

『冷たくしなさい！』

上の方に一行だけハルヒの字で書かれているだけで後は白紙。
なるほど。

俺は寝室に隠れて様子をうかがっているであろうハルヒを気にせず
に飯を食べ始める。

すると、いらだった顔でハルヒが寝室から出て来て怒鳴る。

「ちょっと、何を平然とした顔でご飯を食べ始めているのよ！」

「冷たくしろって書いたのはお前だろう？」

「ちよっと、そう言う意味じゃ無くて……」

俺はハルヒのおでこをデコピンではじいた。

「勝手に俺のボールペンをすり替えた罰だ」

「あ、ばれてた？」

「気が付かなかつたらこすって手帳が真っ黒になる所だったぞ」

俺は昨日、会社の同僚から摩擦熱で文字が消せるボールペンを貰いハルヒに見せていたのだ。

そして俺はハルヒが猫のように目を光らせていた事を見逃さなかった。

あれは何か企んでいる表情だった。

俺は高校の時からずっとハルヒの顔を見ているからな、間違いない。俺はハルヒの書いたメモを冷凍庫に入れて、ハルヒと食事をしながら待つ事にした。

取り出されたメモには、ハルヒの俺に対する愛のメッセージが浮かび上がっていた。

「お前の考えている事なんてすっかりお見通しさ」

「何よ、言うようになったじゃない」

じゃあ俺からのサプライズはこれだな。

俺はハルヒがとがらせた口に自分の唇をいつきに近づけた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

英雄伝説 空の軌跡SS

ヨシユエスVer. サブタイトル『ハートも冷やしたい』

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「ヨシユア、見て見て！」

エステルは嬉しそうにそう言って、ヨシユアの前にペンを突き付けた。

「どうしたのエステル、そんなに興奮して？」

「オリビエさんに貰ったの、こするだけで文字が消える魔法のペンだって！」

「へえ」

多分オリビエの仕事道具だろうな、とヨシユアは思った。

「これで、書き間違いをしても紙を無駄にしないで済むよね！」

「その前に、書き間違いを減らす努力をしようよ」

「そうだね」

ヨシユアの言葉に、エステルは舌を出して謝った。

それからしばらく経ったある日の事、ブレイサー手帳を開いたエステルは真っ白になったページを見て悲鳴を上げる。

「きゃああ！ 書いた文字が全部消えちゃってる！」

「暑い所に居たからね。なるほど、摩擦熱で文字が消える仕組みだったのか」

「ヨシユア、感心していないで何とかしてよー」

「大丈夫、冷やせば元の文字が出て来ると思うよ」

多分その特徴がオリビエの仕事に役立っているのだろうとヨシユア

は考えた。

「冷やすって、”ダイヤモンドダスト”のアーツを詠唱するとか？」

「それは過激すぎるよ。涼しいヒンヤリとした場所に行けばいいと思うよ。そうだ、鍾乳洞へ行ってみない？」

「なるほど、それはグッドアイデアね！」

それからエステルとヨシユアの2人はツアイスの街の近くにある鍾乳洞へ行き、付近を散歩する事にした。
冷えた空気が心地良い。

「仕事以外で来ると不思議な感覚だね」

「……これって、なんかデートみたいよね？」

エステルがつぶやくと、2人の間に微妙な空気が流れた。

魔獣達のすみかである鍾乳洞だったが、不思議と姿は見えなかった。
静かな鍾乳洞に響くのは2人の足音だけ。

「もうそろそろ大丈夫だと思うけど、手帳を開いて確かめてみない？」

「まだ手帳は冷えていないわよ」

エステルはヨシユアの言葉に首を横に振って手帳を取り出すのを拒否した。

（……手帳を取り出すのはあたしの熱くなったハートが冷えてからよ！）

エステルは心の中でそうつぶやくのだった。

- - - - -
- - - - -
新世紀エヴァンゲリオンSS
LASVer・サブタイトル『不器用な告白』
(ラブラブアスカシンジ)

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「ミサトどうしたのよ、そんなに頭を抱えて？」

ミサトの執務室を訪れたアスカは、困った顔をして頭を抱えてしまっているミサトを見て声を掛けた。

「手帳に書いたスケジュールや報告用のレポートがね、消えてしまったのよ」

そう言っただけでミサトはアスカに真っ白になった手帳のページを見せた。

「どうしてこんな事になったの？」

「それがね、リツコに擦ると消えるボールペンって言うのを貰ったんだけどさ」

ミサトはアスカの目の前でメモ帳の切れ端にボールペンで文字を書くとき、文字を擦った。

すると、文字は綺麗に消えて無くなった。

「ふーん、面白い仕組みじゃない」

「摩擦の熱で消えるらしいわ。でも耐熱装備の実験棟から戻って手

帳を開けたらこの有り様よ」

ミサトの答えを聞いたアスカはポンと手を叩く。

「それなら、冷やせば文字が出て来るんじゃない？」

「ナイスアイデア、アスカ！」

ミサトは指を鳴らして、手帳をビニールに包んでビール用の冷蔵庫の冷凍庫の中に入れた。

そしてしばらく待つて取り出すと、見事に手帳に書かれた文字は復活したのだった。

「やったわアスカ、ありがとう！」

ミサトはアスカを抱き締めて大喜びした。

「苦しいってば」

「あ、ごめんごめん」

ミサトは軽く謝ってアスカの体を解放した。

ボールペンに興味を持ったアスカは、ボールペンを手にとってミサトに尋ねる。

「ねえ、このボールペン、貸してくれない？」

「いいわ、どうせならそのボールペンはあげるわよ。仕事の邪魔になりそうだし」

「へへっ、何に使おうかしら」

ボールペンを入手したアスカは嬉しそうにつぶやいた。家に戻ったアスカはボールペンの使い道を考えていた。

「驚かせる相手と言えば……シンジよね」

そうつぶやいてアスカはどうしてシンジが相手なのだろうと考えた。ミサトの家でシンジと同居するようになってから、何かと言えばシンジの事が思い浮かぶ。

どうして最近はシンジがこんなにも気になるんだろう、とアスカは思った。

あんなに好きだった加持さんよりも、と。

アスカは、シンジの居ない生活を考えてみる。

そうすると、アスカは世界が色を失ったような感覚になった。

「アタシ、シンジの事が好きになってしまったのかもしれないわ…

…」

胸に手を当てたアスカはそうつぶやいた。

そして、勇気を出してシンジに手紙を書き始めた。

顔を合わせると照れ臭くて言えないシンジへのたくさんの「ありがとう」の感謝の言葉。

しかし、最後に「シンジが好き」と書いてしまったアスカはやはり照れ臭くなってしまった。

部屋を出て台所に行くと、レンジの中に手紙を入れて加熱する。

「アスカ、何をしているの？」

背後からシンジに声を掛けられたアスカは驚いて跳び上がった。何と間の悪い事にミサトも一緒に家に帰って来たのだ。

「ダメじゃない、レンジにこんな物入れてイタズラしちゃあ」

そしてアスカの手紙はニヤケ顔のミサトに取り上げられてしまった。

「あらあら、こんなに熱くなっちゃって。これは冷やさないかね！」
「やめてっ、ミサト！」

シンジはアスカとミサトのやり取りの意味が分からずボーっとしている。

「あ、アタシ、ちょっと外の空気を吸ってくる！」
「アスカ？」

顔を真っ赤にしたアスカは慌てて葛城家を飛び出した。
そして、しばらくした後。

家に帰り辛くて公園のベンチに座っていたアスカの前に、迎えに来たシンジが訪れたのだった。

SOS団恒例行事となった市内不思議探索を終えた次の日の月曜日、俺は寝不足でスッキリしない頭を抱えながら登校した。

まったく昨日のハルヒはいつもより輪をかけて張り切っていた。

市内を隅々まで調べ回るとハルヒは宣言し、俺達は学校を中心とした市内全体を歩かされた。

休憩無しで歩かされた俺や朝比奈さんはグロッキー寸前だった。

いつも涼しい顔をしている古泉でさえ辛そうで無理に笑顔を作っている感じだったぜ。

お前の体力についていけるのは地球外生命体の長門ぐらいなもんだ。さらに俺が宿題が残っていると愚痴ると、夜まで俺の家に押し掛けて来やがった！

ハルヒは俺のためだと抜かして遅い時間まで俺に勉強を教えた。

お袋が心配して俺にハルヒを家まで送らせたから、さらに寝る時間は遅くなっちまった。

しかし、俺の後ろの席に座るハルヒは疲れ果てた俺よりも元気が無いように見える。

「どうした、思い出し憂鬱がぶり返したのか？」

こいつは七夕の時期になると今年も去年に続いて憂鬱そうになったからな。

夏休みも近づいてまたテンションも戻って来たと思ったんだが……

塞ぎ込んでいるハルヒほど見ていて悲しくなる物はない……いや、不気味だからな。

「違う、そんなんじゃないわよ」

「じゃあ、どうしたんだ？」

「別に……」

ハルヒは顔を伏せたまま俺の方を見ようもしない。

触らぬ神に祟り無し、まあ放課後にはケロッとしているだろう。

俺はそう考えてホームルームが始まるのを待った。

担任の岡部教諭が入って来て、俺を、いや俺の後ろにいるハルヒの方を辛そうな表情で見つめた。

なるほど、岡部教諭にたつぷり絞られてもしたか。

だがその程度でハルヒがこれほど凹んだりするのか？

そんな俺の疑問は教壇に立った岡部教諭の言葉でぶっ飛んだ。

「えー、涼宮の事だが、親の都合で今学期を持って韓国の学校に転校することになった」

「何だって!？」

俺以外のクラスメイト達からも驚きの声が上がった。

ホームルーム中だというのに、あっという間にハルヒの周りに集まる。

入学当初は問題児として避けられていた涼宮ハルヒだが、折り返し地点に入ろうとするまで続いた学校生活を通じて理解者も増えたのだ。

今ハルヒに声を掛けている阪中さんもその一人だ。

「涼宮さん、いつ頃から転校するってわかってたの？」

「話を聞いたのは2週間ぐらい前かしらね」

なんてこった、アレは七夕の思い出し憂鬱じゃなかったのかよ。

ハルヒの観察かけては古泉に負けないぐらいになったと思っていた俺はショックを受けた。

「どうして転校することを黙っていたの？」

「みんなあたしに気を遣うでしょ？ 湿っぽくなるのが、嫌だったのよ」

「でも話してくれた方が、お別れの準備ができたと思うのよね」

ハルヒが答えると、阪中さんはとても悲しそうな顔でつぶやいていた。

今学期までここに居るといっても今日が終業式。

送別会なんて出来っこない。

いやそれ以前にハルヒが居なくなってしまう事を受け入れられない自分が居る。

気が気でなくなった俺はハルヒに話し掛けることができないままに終業式に出席した。

「キョン、先に部室に行つて。あたしも後で行くから」

「ああ」

ハルヒが転校してしまうと言うウワサはあつという間に学校中に広まり、岡部教諭のホームルームの最中から教室には多数の生徒が押し掛けていた。

まるでアイドル並みの人気ぶりだ。

ハルヒを敵視しているはずのコンピ研の部長氏や生徒会長まで来てやがる。

授業が終わるとドツと乗り込んできてハルヒを取り囲む。

あれじゃあ抜け出すのに苦労するだろう。

以前のハルヒだったら怒って追い散らすところなんだろうが、ハルヒの方も話をするようになったのだ。

俺は全速力でSOS団の部室へと向かった。

そこにはきつとハルヒ以外のメンバーが揃っているはずだ。

何しろSOS団発足以来の緊急事態だからな。

俺が部室のドアを開けると、長門、古泉、朝比奈さんの3人が待っていた。

だが部室の空気は重苦しい、まるでお通夜のようなだ。

「キョン君、涼宮さんが転校するって本当ですか？」

「ええ、岡部先生から聞いた話なんで冗談じゃないと思いますよ」

目に涙を溜めた朝比奈さんに対して、俺はきっぱりと答えた。

「そんな、あんまりです」

朝比奈さんのような美少女に抱きつかれるのは普段なら嬉しいことなのだが、今はそうも言ってられない。

心当たりのある俺はこっちをじっと見つめている長門を見つめ返して尋ねる。

「長門、これはあの“長門”の仕業じゃないのか」

二度ある事は三度あるって言葉が俺の頭の中をよぎった。
しかし長門は表情一つ変えずに俺の言葉を否定する。

「違う。“彼女”の目的はあなたの二度目の遡行そこうにより果たされたはず」

「となるとこの転校は涼宮さんの願望によるものとなりますね」

「何だと!？」

俺は古泉の発言に思わず叫んでしまった。

ハルヒはここでの生活に退屈したから転校するなんて言い出したのか？

いや、それは無い。

俺達SOS団が力を合わせてハルヒに楽しい生活を送らせてやろうと努力して来たのに、今さら否定されてたまるか！俺は怒気を含んで古泉に向かって叫ぶ。

「古泉、そんな事はある得ない、あつてたまるか！」

「それでは、涼宮さんの転校は運命のイタズラって事になりますね」「くそつ、どうにかならないのかよ……」

古泉の言葉に俺は悔しげにつぶやいたが、誰も答えはしなかった。重苦しい沈黙が部室を支配する。

そして部室にハルヒがやって来てしまった。

いつもとは違い、静かに落ち着いた様子でドアを開けて自分の席に座る。

「みんな、聞いているとは思うけど、あたしは転校することになったから。SOS団も解散するわよ」

淡々と話すハルヒの言葉を聞いて、部室の空気が凍りついたような思いがした。

「ど、どういう事ですか？ SOS団が無くなっちゃうなんて」

「だって、団長のあたしが居なくなるんですもの、当然でしょ？」

朝比奈さんの質問に冷静に答えるハルヒの姿を見て、俺は無性に腹が立って来た。

抑えていた感情を爆発させて、俺はハルヒに向かって叫ぶ。

「ふざけんな、俺は解散なんか認めないぞ！」

「良いのよ無理しないで。あんたはあたしに引きずり込まれてSOS団に入っただんでしょ？」

「違う、今となつてはお前が居て、長門や朝比奈さん、そして古泉が居るこの部室が俺にとっては必要なんだよ！」

「キヨン君……」

朝比奈さんは嬉しさと驚きが入り混じった顔で俺を見つめていた。

「だから、いつか戻つて来いよ。俺達はSOS団を続けてお前を待ってる」

俺が諭すように声を掛けると、ハルヒは目から涙を流し始める。

「あたしも、転校先の学校で、あんたが驚くような面白い物を、見つけて、やる、わよ……」

ハルヒは耐え切れなくなったのか、部室を駆けて出て行ってしまった。

思えばハルヒの喜怒哀楽のうち、笑顔や怒った顔や楽しそうな顔は見たことはあるが、嬉し泣きは初めて見たかもしれん。映画の撮影の時は怒り泣きだったか。

「僕達が言いたかった事をすべてあなたが言ってくれて助かりました」

「涼宮さん、とっても喜んでいましたね」

古泉と朝比奈さんに賞賛されて恥ずかしい気持ちになった。

「^{かばん}鞆」

長門に指摘されて団長席に目をやると、ハルヒの鞆が残されていた。仕方無い、ハルヒの家は解ってるんだ、届けてやるか。

俺はハルヒの家に向かう道中、ハルヒとの学校生活を思い返していた。

SOS団設立を思いついた時、文芸部室を乗っ取った時、コンピ研からパソコンを強奪した時、野球大会の時……。

俺の脳裏に浮かぶのは無邪気なハルヒの笑顔だった。

どんな厄介なトラブルに巻き込まれた後も、あいつの笑顔を見るとなぜか許せてしまう。

これから先、ハルヒの笑顔を見ることができなくなると思うと、俺は胸が痛んだ。

俺がハルヒの家のインターフォンを鳴らすと、驚いた様子でハルヒが出てきた。

インターフォンに付いていたカメラで俺の姿を見たようだな。

「ハルヒ、鞆を忘れて行っただぞ」

「あ、ありがとう」

俺がハルヒに鞆を渡した後、俺達は玄関先で無言で見つめ合った。

「さよなら、キョン」

「待てっ、ハルヒ！」

悲しげな顔をして家の中に戻ろうとするハルヒを、俺はドアを強引に開けて呼び止めた。

「どうしても、転校しなければならないのか？」

「親の都合だもの、仕方無いじゃない」

「例えばだな、お前だけがここの家に残るとか……」

「高校生の一人暮らしだなんて、ラノベやマンガじゃあるまいし、簡単に許してもらえと思うてるの？」

「じゃあ俺の家にでも来るか？」

「アニメの見過ぎね、あんた、常識つてものをわきまえなさい」
「お前に常識を諭されるとはな……」

俺は自分の馬鹿さ加減にもあきれてため息をついた。

そして俺はそれ以上何も言うことができず、ハルヒと別れた。

帰り道、ハルヒがいつ向こうに行ってしまうのか聞くのを忘れてしまった事に気が付いた。

だが、引き返して聞く気にもならないし、俺からハルヒのケータイに電話する気にもならない。

俺の胸は憂鬱な気分であふれかたっていた。

部屋に戻っても、俺は気分が晴れずにベッドで横になっていた。

妹が部屋に入ってきて来て話し掛けても完全無視だ。

「キョンくん、電話が鳴ってるよー？」

俺が机の上に放置したケータイに誰かから掛かってきたようだが、俺は誰とも話す気にはなれなかった。

すると、妹が勝手に俺のケータイを取って応答する。

「もしもし、あつ、ハルにゃん？」

「ハルヒからだと!？」

俺は妹からケータイをもぎ取ってハルヒに答えた。

すると、ハルヒはいつもの調子で俺を怒鳴りつける。

「ちょっとキョン！ 団長のあたしの電話に出ようとしなないなんていい度胸じゃないの！」

「すまん、こうして出てんだから許せ」

ハルヒから話を聞いた俺は驚いてケータイを落としそうになった。

何とハルヒの転校は取りやめになったというのだ。

ハルヒの父親が勤める会社は、韓国支社を立ち上げようと準備していたのだが、状況の変化により計画は中止されることになったらしい。

その状況とは様々な社会情勢が関係しているらしいが俺にとってはどうでもいい事だ。

「まったく、恥ずかしいっいたらありやしないわ。どの面下げて新学期に登校すればいいのよ」

「お前、そんな事を気にするタマだったか？ 堂々としてればいい、素直に話せば誰も怒りはしないさ」

「あんたに言われるなんて落ちたものね」

ケータイから聞こえてくるハルヒの声は嬉しさに満ちていた。

俺もそうだったに違いない。

そしてその夜、俺は古泉からの電話であの変わり者のメッパである公園へと呼び出された。

夏休みの無限ループの時も集まったあの場所だ。

案の定、古泉、長門、朝比奈さんが俺を待っていた。

「どうも」

「俺に何の話があるって言うんだ？ どうせハルヒ絡みだと思うが」

「察していただいて話が早くて助かります」

「涼宮ハルヒが力の発現を行った」

「それは、ハルヒが転校を帳消しにしたって事か？」

俺が尋ねると、長門は無言でうなずいた。

「でもハルヒは世界を崩壊させる力を持っているんだろう。そのくらい簡単にできそうな事だが」

「それが、前にもお話したと思いますが、涼宮さんの力は以前に比べて弱まっているのです」

「だから涼宮さんが、とても強く願わないと力が発生しないようになっっているんです」

「と言う事は、ハルヒは何としてでも転校したくないと思っただけか」

「そしてそれはあなたのせい」

「俺が!?!」

長門の言葉に俺は驚いた。

俺は何の力も持たない一般人だ。

世界を変える力なんて持ち合わせていない。

「あなたは、部室の僕達の前でSOS団を続けると宣言しましたね？　そして涼宮さんが戻って来るのを待っているとも」

「ああ」

「きっと涼宮さんは、キョン君がもしかしてSOS団に居るのを嫌がっているんじゃないかって、不安になったんだと思います」

「まさか、あいつは自分のためなら他人の気持ちなんて無視するよくなやつですよ」

俺は朝比奈さんの言葉を聞いてあきれてそう答えた。

あいつが自分に迷いを感じるようなことなんて、断じてないはずだ。

「だからハルヒは転校騒ぎなんか起こしたっていうのなら、本当に迷惑なやつですね」

俺は岡部教諭の困った顔を思い浮かべて同情してつぶやいた。

「でも涼宮さんの意思に関係ない偶然と言う可能性もありますけど」

ね」

「確かな事は涼宮さんが転校したくないって思ったことです」

「あなたは鞆を届けに涼宮さんの家へ行った時に、彼女に告白でもしたのではないですか？」

「ほ、本当なの、キョン君？」

古泉の言葉を聞いて朝比奈さんが顔を赤くして俺のことを見つめた。

「あのな、俺はそこまでは言っていない。まあ、引き留めはしたけどな」

「これで確信しましたよ」

「何をだ？」

「僕は世界は涼宮さんを中心に動いているのだと思いました。でも涼宮さんを動かしていたのはあなただったんですね」

ああ、確かにハルヒがSOS団なるものを作ったのは過去にハルヒと出会った俺が原因かもしれないけどな。

だからって俺が朝倉涼子やあの佐々木団に狙われるって言うのか、バカバカしい。

「話はそれだけか、俺は帰るぞ」

古泉の話の聞いていて不快感を覚えた俺は古泉の返事を待たずに公園を後にした。

宇宙人、未来人、異世界人なんて関係ねえ、俺は充実した高校生活を送りたいだけだ。

ハルヒやSOS団のメンバーと一緒にな。

この作品は私の作品『第十八使徒・涼宮ハルヒの憂鬱、惣流アスカの溜息』の没となった過去のネタを涼宮ハルヒの憂鬱の短編（クロス無し）として書き直した物です。

クロスオーバー無しです（新世紀エヴァンゲリオンのキャラクタは出て来ません）。

後半部分の内容は思い切り変えてあるので書き直しより新作に近いかもれません。

<北高校 部活棟 SOS団（元文芸部）部室>

本来、休日でも居るはずの無い学校のSOS団の部室に、ハルヒをはじめとするSOS団のメンバーは集まっていた。

団長席に座るハルヒの腕章はいつもの”団長”ではなく”超先生”に変わっている。

そして、ハルヒの手にはペンが握られていた。

「休日も部屋に籠って原稿を書くとは、まるでプロみたいだな」

「外は雨なんだし、ちょうど良いじゃない」

ため息交じりのキョンの皮肉に、ハルヒは平然とそう答えた。

今日は文化の日、キョンはのんびりと休日を過ごしたいと思っていたのだが、こうしてアシスタントとして雑用に明け暮れている。

「ハルヒの思い付きで漫画を書く事になったが、長門はそれでかまわないのか？」

「問題無い」

キヨンの質問に有希はそう答えた。

「キヨンもしつこいわねそんなに漫画を描きたくないの？」

「長門さんは楽しそうに描いてますよ」

ハルヒの言葉に古泉も調子付いた。

「だがなあ、俺はハルヒのアシスタントばかりで何も描けていないんだぞ」

キヨンは1ページも描けていない自分の原稿を見てため息をついた。ハルヒが編集長になってSOS団で漫画雑誌を書く事になった経緯は、コンピ研の部長が自分の描いたWeb漫画を自慢し始めた事だった。

自分の才能が恐ろしいなどと言っている部長に対して、ハルヒは自分達の方が面白い漫画を描けると言い放った。

「これはチャンスよ、小説より漫画の方が幅広い層の読者に読んでもらえると思わない？」

「お前は小説を読まない年齢層までターゲットにするつもりなのか？」

「あたしはSOS団の名をもっと世界に知らしめたいのよ！」

漫画を描くと言ってもハルヒ達は全くの素人。

そこで講師役を引き受けたのは、謎の万能メイド、森さんだった。機関が短期間で森さんに漫画のノウハウを仕込んだのか、それとも森さんの言う通り学生時代に同人誌を描いていたのかキヨンには解らなかった。

「森さんって清楚なメイドって感じだけど、昔ハードな漫画を描いていた反動だったりして？」

「さあ、それはどうでしょう」

「頼むハルヒ、俺の中の森さんのイメージを壊さないでくれ」

以前に小説で書いた時と同じように、くじでそれぞれが書く漫画の内容を決める事になった。

くじをキヨンは悲鳴をあげる。

「恋愛少女漫画だとっ!？」

「わ、私は熱血格闘漫画ですか!？」

「SFホラー……」

「僕は社会風刺漫画です」

「引き直しは認めないからね!」

「それで、お前はどんな漫画を書くつもりなんだ？」

キヨンに質問されて、ハルヒは椅子の上に立って堂々と答える。

「あたしはちよつと非日常的な学園ストーリー漫画よ!」

ハルヒはSOS団の活動目的である、宇宙人、未来人、異世界人などを探して楽しく遊ぶ事を説明する事を目的とした漫画を書く事を宣言した。

さらに、読む側も楽しめるようなフィクションを加えてエンターテインメント性を高めるとの事だった。

「おい、まさか宇宙人や未来人、異世界人などが登場するんじゃないだろうな」

「フィクションだから、ありえない事ではないわ」

嫌な予感がしたキヨンは、古泉にそつと耳打ちする。

「おい古泉、今のうちに止めないとヤバイんじゃないか？」

「ですが涼宮さんに漫画を書く事を諦めさせれば閉鎖空間が発生してしまいます」

「じゃあどうすればいいんだ？」

「今はこのまま成り行きを見守るしかないでしょう」

キヨンは世界の命運と、自分の原稿と言う二重苦を抱えてしまい疲れた顔でため息を吐き出した。

世界に何事も起こらなくても恋愛少女漫画を描かなければならない。白紙のまま描こうとしないキヨンに対して、ハルヒはアシスタントの仕事を押しつけた。

ハルヒの原稿が進んで行くうちに、キヨンはますます顔色が悪くなつて行く。

宇宙人・長門ユキ、未来人・朝比奈ミクル、超能力者・古泉イツキとキャストが固まると、キヨンは古泉に声を掛ける。

「雲行きが怪しくなつて来たぞ、今のうちに手を打った方が良くないか？」

「この程度なら、映画の撮影の時と同じ対処療法で足りですよ」

古泉は涼しい顔でキヨンに答えたが、嫌な予感がしたのかキヨンはハルヒに食つてかかる。

「おいハルヒ、手近な人間をモデルにするのは手抜きじゃないのか？」

「あつ、キヨンは平行世界からトリップして来た異世界人に決まったから！」

笑顔で言い放つハルヒに、キヨンは何も言い返せずにため息をつくだけだった。

<北高校 1年5組 教室>

次の日、学校に登校したキヨンは戸惑っていた。
クラスの席順が以前と違っていたのだ。

「おはよう」

「よう」

平然と朝のあいさつをしてくる国木田と谷口に対してキヨンは何かあいさつを返したが、自分の席が分からない。

「なあ、俺の席ってどこだ？」

「キヨン、お前何を言ってるんだよ」

キヨンと谷口が話していると、ハルヒが教室に入ってきた。

ハルヒはキヨンと谷口の様子がおかしい事に気が付くと不思議そうに尋ねる。

「何をキツネにつままれたような顔をしているのよ？」

「キヨンが自分の席を忘れちゃったんだとさ。笑えない冗談だろう？」

「谷口、俺は冗談で言ってるわけじゃなくてだな……」

「あはは、まるで記憶喪失にでもなったみたいだね」

国木田の言葉にハルヒが目を輝かせるのを見て、キヨンは青い顔になった。

「あんだ、本当に記憶喪失なの？」

「い、いや、別にそんな事は無いが」

「おいおい涼宮、記憶喪失だったら、俺達の事もすっかり忘れてるはずだろ」

谷口はもつともらしい事を言っただけでハルヒの考えを否定した。

ハルヒは反論しかけたが、担任の岡部教師が入って来てキヨンはハルヒに強引に手を引かれて自分の席へと着席した。

どうやらキヨンの席はハルヒの前のようだ。

授業中も休み時間もハルヒは真剣に何かについて考えているようだった。

紙に謎の図形を描いているその姿をキヨンは不気味そうに見つめていた。

「キヨン！　もしかしてあんだは平行世界から来たんじゃない？」

「何だと！？」

ハルヒに突然声を掛けられて、キヨンは驚きの声をあげる。

以前もハルヒが消失した平行世界に迷い込んだ経験のあるキヨンはすぐに思い当たった。

「その反応、図星みたいね」

しまったとキヨンが思った時にはすでに遅し、放課後になりSOS団の部室に連行されたキヨンはハルヒから紹介される。

「みんな聞いて、ついにキヨンが異世界人になったわよ！」

古泉が嬉しそうな顔でキヨンに近づいて握手をする。

「あなたが来てくれて助かりました、歓迎しますよ」

「よかった、規定事項通りに来てくれて」

「朝比奈さんは未来人って事をハルヒに言ってしまったって大丈夫なんですか？」

「ええ、涼宮さんにはなるべくシナリオ通りに行動してもらっています」

さらつと言い放つみくるにキヨンは悪寒を覚えながらも続けて質問する。

「じゃあ、俺はこれからずっとこちらの世界で暮らす事になるんですか？」

「それは答えられません。私に知らされる規定事項は時間の範囲が制限されているので、直近の出来事しか指示されないんです」

みくるはキヨンに泣きそうな顔で謝った。

「何をしよぼくれているのよキヨン！ 今日のはあんたの歓迎会をしてあげるんだから、楽しみなさい！」

ハルヒの提案で部室でキヨン歓迎パーティが始まり、キヨンは様々な芸を見せられる事になった。

「では、定番ですがスプーン曲げをお見せいたしましょう、……曲つがくれっ！」

イツキがそう叫ぶと、イツキの持っていたスプーンがグニヤリと曲

った。

「次は念力でスプーンを浮かせますよ……」

スプーンはイツキの手を離れて、フワフワと浮上した。

キヨンは目を丸くして、信じられないと言った表情でそれを見ていた。

そんなキヨンの反応を見て、ハルヒはニヤニヤしている。

「私は宇宙空間で収集した物をあなたに見せる」

ユキはそう言うと、キヨンの前にたくさんの石を積み上げた。

「河原に転がっているような石ころばかりに見えるぞ？」

「違う、これは月の石、それは金星の石、あれはM 8星雲の小惑星の石」

「この世界では実在するのか、ウ ترامンが!？」

「ええ、週に1回は日本に出現した怪獣とバトルを繰り返しているわ」

ハルヒは楽しそうにキヨンの言葉に答えた。

みくるが披露したのはキヨンが選んだカードを当てるマジックのよ
うなものだった。

「これは透視能力ですか？」

「違います」

「……もしかして、小規模な予知能力ですか？」

「やっぱり、わかつちやいました？ 私、数秒先ぐらいなら細かい
規定事項まで教えてもらえるんです」

「微妙に役立つのか分かりにくい能力ですね」

ミクルの出し物が終わった後、ハルヒは団長の椅子の上に立って上機嫌でキヨンに向かって宣言をする。

「どう、驚いた？ この世界のSOS団は凄いでしょー！」

「ああ、度肝を抜かれたよ」

キヨンの言葉にハルヒは満足したようにうなずいた。

そしてキヨンの歓迎会もお開きになり、SOS団の団員達は部室を出て行き、部室の中はハルヒとキヨンの2人きりになった。

「ハルヒ、もう十分楽しんだらう？ 早く俺を元の世界に返してくれ」

キヨンがそう言うと、ハルヒは慌てた顔になってキヨンの腕を取って引き止める仕草をする。

「ねえ、こつちの世界では面白い事があるんだしさ、もうちょっとゆっくりして行きなさいよ？ さっき言ったように謎の怪獣が暴れたりしているのよ！」

ハルヒはそう言って怪獣が映し出されている写真をキヨンに見せた。

「そうだ、明日辺りその怪獣みたいなのが出そうって、避難警報が出てるのよ！ だから明日一緒に見に行きましょうよ」

だがキヨンは嫌悪感をむき出しにした顔で言い返す。

「俺はそんなもの見たくない、お前が俺を呼び寄せたって言うのなら、今すぐ俺を前の世界へと戻せ！」

「嫌よ、せっかく異世界人と会えて楽しくなつて来たところなのに！」

「怪獣やウ　トラマンを地球に呼び寄せて、喜んでいるこちらの世界のお前には共感できん。人の迷惑を考えた事は無いのか、非常識すぎるぞ」

キヨンがそう言うつと、ハルヒはさらに不機嫌な顔になる。

「あんたは向こうの世界に居るあたしの方が良いつて言うの？」

「ああ、この世界に居る長門や古泉、朝比奈さん達は、面白い能力を持っているが俺の知っているやつらじゃない。俺は自分の世界に居るやつらと一緒に居たいんだ」

キヨンにそう言われたハルヒはショックを受けたのか、顔を伏せて体を震わせている。

「俺がこのままずっとこの世界に居たら、今までずっとお前の側に居た俺はどうなる？　高校に入学して、SSS団の団員としてお前と一緒に思い出を作つて来た俺じゃないんだぞ？」

ハルヒは下を向いたまま、小さい声で何かをつぶやいた。

「ん？　何を言つたんだハルヒ、聞こえなかったぞ」

「団長に偉そうに説教する雑用係なんて、クビよ！」

「クビか……じゃあ俺はこの世界から追い出されるって事だな」

そう言つたキヨンの輪郭がブレて薄くなつて行つた。

「そうよ、今まで居たキヨンの方がマシだったわ！」

「じゃあ、二度と俺を呼ぶ事は無いのか」

「あんだなんかもう呼ばないからね！」

ハルヒの叫びと共に、キヨンの姿は霧のようにかき消えて行った。

「さよなら、もう一人のキヨン……」

ハルヒは小さな声でキヨンに別れを告げる。

そのハルヒには涙が光っていた。

<北高校 部活棟 SOS団（元文芸部）部室>

次の日、学校に登校したキヨンはクラスの席順が元に戻っているのを見てホッとした。

「よかった、無事に戻れたみたいだな。あつちの世界のハルヒはこつちの世界の俺まで巻き込んで、大変だったぜ」

自分の席に座ろうとしたキヨンはハルヒが髪型をポニーテールにしている事に気が付いた。

そして、窓の方を向いてたそがれている。

「なんだ、また思い出し憂鬱か？」

「昨日の夜、変な夢を見ちゃったのよ」

ハルヒは振り返らずにキヨンにそう答えた。

「登校するといつもと違った雰囲気で、有希が宇宙人、みくるちゃん、未来人で、古泉が超能力者、果てにあんたは異世界人になって

んのよ」

「ほ、ほう、そりゃあ夢の中でも願いが叶って良かったじゃないか」
「ちつとも良くない！」

怒って机に拳を叩きつけたハルヒはキョンをにらみつけて人差し指を突き付ける。

「あたしが楽しくやっていたのに、あんたがあんな事を言うから……！」

「俺がどうしたって言うんだ？」

「と、とにかく、早くあんたの分も完成させなさい！」

キョンが不思議そうに尋ねると、ハルヒは顔を赤くして横を向いてしまった。

自分の原稿がさっぱり浮かんでいないキョンは、授業中もアイディアを必死に捻りだそうとしていた。

「多分、あなたが迷い込んでしまったのは涼宮さんの夢の世界なのでしょう」

「……やっぱり、ハルヒのやつが能力を使ったのか」

放課後、ハルヒが来る前の部室でキョンがイツキに事情を話すと、イツキはいつもの穏やかな笑顔を浮かべながらそう答えた。

「ですが、こちらの世界に居る涼宮さんが能力を発現したとも限りません。あなたが向こうの世界で会った涼宮さんに呼ばれたと言う推理も可能性の一つです」

「だが、ハルヒが人騒がせな存在なのは変わりないだろう」

「ええ、ですからあなたには何としてでも漫画を完成させて頂かないと困ります」

古泉は部室に置かれているハルヒの描きかけの漫画の原稿に視線を送った。

ハルヒの原稿はほとんど完成し、アシスタントの仕事は必要なさそうだ。

キヨンはウンザリした顔で頭をかきむしる。

「そんな事を言われてもな、俺は漫画なんて描けんぞ？」

「小説の時のようにご自分の体験を書けばよろしいではありませんか」

キヨンはイツキの提案に目をむいて反論した。

「馬鹿言つな、あんな体験が何回もあつてたまるか」

それまで部屋の隅で本を読んでいたユキが顔を上げてそう言った。

「それにしても、俺とハルヒの見た夢が一致しているって事は俺は平行世界に飛んだって事か？」

「実のところ、平行世界が存在するかどうかは確実ではありません」

「古泉、それはどういうことだ？」

「その世界は涼宮ハルヒの夢が作りだした精神世界だと言う事もあり得るから」

ユキの答えを聞いたキヨンは頭を抱える。

「何だかややこしい話になってきたな。じゃあハルヒが寝ぼけて世界を変えてしまうと云う可能性もあるのか？」

「その確率はゼロとは言えない」

キヨンはユキにそう言われて、疲れ果てたようにため息をついた。

「そんなに悲観する事はありません、今回も改変された世界を元の姿に戻せたようではありませんか」

「他人事のように言うな、世界を守るのはお前らの仕事だろう」

「でも、僕が出る幕は無かったようです。それとも、あなたは涼宮さんと今さら無関係になるのですか？」

「乗りかかった船だ、やってやるさ」

「素直じゃありませんね」

「うるさい」

世界の危機は救う事は出来たが、漫画が描けない事の方がキヨンにとってはピンチなのだった。

2011年 アスカ誕生日記念LAS短編 最高のプレゼント！

アタシは惣流・アスカ・ラングレー、エヴァンゲリオン式号機のパイロットだった。

過去形なのはすでに式号機がこの世に存在していないから。

戦略自衛隊とエヴァ量産機の侵攻によって戦場となった第三新東京市は廃墟に変わった。

使徒を倒すと言う表向きの目的を果たした特務機関ネルフは解体されて、ネルフの職員達は政府の組織へと移った。

……ゼーレの悪事に関わった人間と、あの戦いで命を落としたミサト達を除いて。

そして助かったアタシは破壊を免れたコンフォート17を買い取り、エヴァのパイロットの報酬としてもらった給料で暮らしている。

ネルフの無くなった第三新東京市は再建もされず見捨てられているから、アタシは時間を掛けて一番近い街の学校に通っている。

第三新東京市は廃棄地区に指定されて近くにお店もないから不便を強いられていた。

通学に時間が掛かるから友達も出来ず、クラスでアタシは孤立していた。

アタシがどうしてそんな生活が続けるのかと言うと、アタシはずっとアイツを待っているからだ。

この家の持ち主であるミサトは戦略自衛隊の襲撃で死んだと聞いている。

アタシもミサトが死んでしまったなんて信じたくはなかったけど、実際にネルフ本部に居て紅い世界から帰還したのはみんな戦略自衛隊の凶刃をギリギリ逃れて生き残ったわずかな人達だった。

発令所に居た副司令、マヤ、日向さんと青葉さん……アタシが特に知っているネルフの生き残りの人はそれだけ。

司令やリツコ、ファーストやミサトも帰って来なかった……そして

シンジも。

夕食を食べる時、空になったミサトとシンジの席を見るだけで悲しみがあふれてくる。

だけど、アタシが辛い思いを抱えながらこの場所で待っているのはシンジに対する贖罪の気持ちがあるからだ。

あの紅い空の広がる世界で体中に鋭い痛みを感じたアタシが叫び声を聞いて目を覚ますと、シンジは泣きながらアタシの体から流れる血を止めようとしていた。

だけど包帯もないのに人間の手で血を止められるわけが無い。

「アスカごめん、僕が助けに来るのが遅すぎたせいで……」

シンジのせいじゃない、エヴァ量産機は並みの強さじゃなかった。

アタシはシンジが助けに来てくれただけで嬉しかった、けれどアタシには声を出す力も残されて居なかった。

うつすらと目を開けられた事さえ奇跡だったのだろう。

「アスカ、アスカーっ！」

シンジの叫び声を聞きながら、アタシはゆっくりと目を閉じた。

でもアタシは死ななかった、ジオフロントの跡地に出来た大きな湖の側で気を失って倒れている所を発見されて保護された。

そして不思議な事に死にそうなほど重体だったアタシは健康体へと回復していた。

ミサトの死、そしてシンジの行方不明を聞かされたアタシは言葉にできないほどの悲しみに押しつぶされそうになって、逃げるように思い出の場所であるコンフォート17へと向かった。

しばらく前に家出してヒカリの家に転がり込んでからの久しぶりの帰宅。

自分がエースだと思つてのぼせあがっていたアタシのプライドは、シンジにシンクロ率を抜かされた事で砕けてしまった。

さらにミサトに優しくされるシンジを見て、アタシは細かい事にも疑いの目を向けるようになってしまっていた。

才能を開花して急成長したシンジだけがミサト達に評価されている、そしてシンジもアタシを見下していると思ひ込んでしまった。

アタシの方からシンジを遠ざける態度を取ってしまったんだから、アタシはシンジに嫌われて当然だと思つていた。

あの紅い空の広がる世界でアタシの名前を必死に叫んでいるのシンジの声を聞くまでは。

誰も居なくなつたミサトの家でアタシは楽しかった思い出の欠片を集めようと、いろいろな場所を調べ回る。

そしてシンジの部屋の中を調べた時、アタシは息が止まりそうになるほど驚いた。

シンジの机の上にある卓上カレンダーを見ると12月4日、つまりアタシの誕生日に印が付いていたのだ。

こんな冷たい性格のアタシでもシンジは受け止めてくれるのか、それともアタシの明るいい面に憧れていただけなのか……。

期待と不安が入り混じった気持ちに急かされてアタシがシンジの机をさらに調べると机の中から様々な通信販売の雑誌が出て来た。

アタシの過去の記憶の糸をいくらたどつてもおかしいと思う、ミサトと暮らしていた頃はシンジは女性誌に興味を示さなかったはず。

むしろ派手に買い物をするアタシを無駄遣いと非難していた程だったのに。

ならばシンジが雑誌を買い込んだのはアタシが家出をした後になる。雑誌を開くとデイベア、オルゴール、ティーカップなど様々な品物に印が付けられていた。

アタシにどんなプレゼントを贈ろうと思い悩むシンジの姿が思い浮かぶと同時に胸が熱くなる。

シンジはアタシに手を差し伸べようとしてくれていたんだ……！けれど嬉しさと同時に湧きあがって来る激しい自己嫌悪。

ずっと前に向き合えるチャンスはあったはずなのに、心を閉ざしてしまっていたアタシはシンジの気持ちに伝える事はしなかった。

あの時使徒との戦いに敗れてアタシは負けたくないと思っていたファーストに助けられたと言う屈辱感で胸がいっぱいだった。だからシンジに優しい言葉を掛けられても、アタシは全て好意的には受け取れなかった。

「良かったね、アスカ」

シンジはアタシの無事を純粹に喜んでそんな言葉を掛けたのだと思う。

けれどその時のアタシはシンジの声の明るく軽い響きが他人事で言っているように聞こえたのだ。

アタシは使徒の攻撃を受けた時、ミサトの退避命令に逆らった。連敗続きのアタシは弐号機のパイロットから降ろされたくない気持ちが強かった。

その反面アタシはワガママだと自覚しながらも、あの時のようにシンジが助けに来てくると淡い期待を抱いていた。

だけど、結局最後まで初号機は出撃しなかった。

シンジに理由を問い詰めたら、父さんの命令だから仕方無いと答えるのは目に見えてる。

でも、アタシは参号機が使徒化した事件の時、初号機で鈴原を殺してしまいそうになった事を知ったシンジは司令に反抗したのを知っている。

アタシは別に鈴原にヤキモチを焼いているわけじゃないけど、同じぐらいシンジは怒ってくれても良いんじゃないかと思った。さらにシンジはアタシにダメ押しとなる言葉を投げかける。

「アスカ、次があるんだから、その時に頑張れば良いじゃないか」
「何ですって!?!」

これでアタシの短かった堪忍袋の緒が切れてしまった。

「何よ、その上から目線の言い方は! シンクロ率でアタシに勝ったからって、天狗になってるのね?」

「別に僕はそんなつもりじゃ……」

「何が『頑張れ』よ! アタシはアンタより長くエヴァの訓練を受けてるのよ!」

「アスカ……」

シンジが反論しようものなら、アタシは3倍にして叩き返してやった。

今思えば、同い年のシンジに加持さんのような寛容さを求めたアタシの方に非があった。

アタシは自分の臆病さを隠すために差し伸べられた手を振り払ってしまったのよ。

シンジから逃げ出したアタシはヒカリの家へと転がり込んだ。

突然の訪問にもかかわらず、ヒカリは何も言わずに暖かく迎え入れ

てくれた。

そしてアタシが話したくなるまで、ヒカリは黙ってアタシの側で待っていてくれた。

もしヒカリがしつこくアタシに声を掛けてきたら、アタシは居た堪れない気持ちになっていたと思う。

そのヒカリの心づかいが嬉しかったアタシは、ヒカリに正直に今まで何があつたのかを洗いざらい話した。

ヒカリはアタシの勝手な言い分を否定する事無く聞いてくれた、そしてアタシにシンジやミサトと仲直りすべきだと急かして来る事もない。

アタシが家に帰りたくないと言うと、ヒカリはアタシに尋ねる。

「アス力は碇君や葛城さんの事が嫌いなの？」

「嫌い、嫌い、大嫌い！ 同じ部屋の空気を吸っているだけで気持ち悪くなってくるわ！」

「そっか、じゃあアス力の好きなだけここに居て良いよ」

ヒカリの言葉を聞いて、ここを追い出されたら他に行く所が無かつたアタシは心の底からホッとした。

だけど、アタシはヒカリにもウソをついていた。

アタシが一番嫌いなのはミサトでもシンジでも無く今のアタシ自身だったのよ。

シンジやファーストと顔を合わせるのが嫌だったアタシは学校にも行かずにヒカリの家に引きこもった。

ヒカリが学校に言っている間、アタシはヒカリに教えてもらったように掃除、洗濯などの家事をする。

アタシがミサトの家に居た頃はシンジに押し付けていた家事に今頃になって励むのは、家事をしている間は寂しさを忘れる事ができるから。

そして、ヒカリから感謝の言葉を聞くのも楽しみになった。

でも、そんな日も長続きしなかった。

新たな使徒が襲来して来たのだ。

招集命令を受けたアタシは応じないわけにはいかない、アタシはエヴァのパイロットだから日本に居られるんだもの。

だけど気の進まないアタシはかなり遅れてネルフ本部に到着したから、すでにシンジとレイは出撃準備を終えていた。

アタシは制服のまま急いで弐号機に乗り込む事になった。

初号機は碓司令の命令で凍結中だったから、零号機と弐号機で使徒を迎撃する事になった。

「アスカ、レイ、A Tフィールドを展開して使徒をパレットガンで攻撃、いいわね？」

「了解」

「アスカ、聞こえているの？」

「聞こえているわよ」

アタシはミサトに対してぶっきらぼうに返事をした。

エヴァが地上へと射出され、アタシはエヴァを移動させて近くの兵装ビルに用意されたパレットガンを取りに走ろうとした。

だけど弐号機は全く反応を示さなかった。

「弐号機、シンクロ率がほぼ0%です！」

マヤの報告を聞いてアタシはショックを受けた。

ミサトの判断により、弐号機はケージへと回収された。

地上ではファーストと使徒との戦いが始まった、そしてファーストがピンチになると司令はすぐに初号機の出撃を命じた事にアタシは

さらにショックを受けた。

司令にとって、ネルフにとって、ファーストの方がアタシより大切な存在なのか。

だけど、ファーストはその使徒との戦いで自爆した。

ファーストに激しい嫉妬を燃やしていたアタシはこの時はファーストの死を悲しむ気持ちなど全然持てなかった。

そしてそれは戦えるエヴァが減ってしまった事を意味する。

ミサトはアタシを立ち直らせようとして必死に起動実験を続けたけどアタシのシンクロ率は上がる事は無かった。

アタシには解っていた、アタシにエヴァに乗る事を拒否する気持ちが芽生えてしまったからだ。

表面に出していないその気持ちを式号機は敏感に感じ取っているのだろう。

やがて司令がやって来てアタシのシンクロテストの中止を宣言する。

「これ以上の実験は時間の無駄だ」

「しかし、アスカにもう一度チャンスを与えては頂けませんか？」

「シンクロ率ゼロのチルドレンなど使い物にならん、代わりを手配する」

司令の死刑宣告を聞いたアタシは、何かの糸が切れたような気がした。

そしてアタシの意識は闇に飲まれて行った……。

次にアタシが気が付いたのは、式号機のエントリープラグの中だった。

シンクロ率ゼロを宣告されていたアタシはどうせ動かせないだろうと思いながら式号機を操縦するレバーを握った。

やっぱり式号機は何の反応を示さなかった。

「どうせアタシは生きている価値の無いゼロのチルドレンなのよ……もう生きているなんて嫌、消えてしまいたい……」

そうつぶやいてアタシがレバーから手を離そうとした時、アタシの目の前に突然イメージが広がった。

それはアタシが小さい頃ママとピクニックに行った懐かしいヒマワリ畑。

あれから10年近く経った今までもアタシはたまに独りでヒマワリ畑の中に立っている夢を見る。

ずっとアタシは独りぼっちで、いつまで待ってもママは迎えに来てくれなかった。

でも、今回はいつもと違って待っているアタシの所にママがやって来てくれたのよ……！

アタシは現れたママの胸に飛び込んで泣きじゃくる、ママもそんなアタシを黙って優しく抱きしめてくれた。

この感覚は式号機とシンクロした時に感じる安心した気持ちに似ている……そうか、式号機がアタシを拒絶したんじゃない、アタシの方から式号機の心、ママの愛情を遠ざけていたのよ。

「ママ、ありがとう。アタシ、もう一度頑張ってみる！」

アタシがママから体を離してそう言うと、ママは何も言わずに微笑んでアタシをそっと送り出してくれた。

式号機とのシンクロ率が戻ったアタシは攻めて来た戦略自衛隊を軽く蹴散らし、アンビリカルケーブルを切断されても恐れる物は何も無かった。

だけど、敵はエヴァ量産機を9体も投入して来た。

シンジの初号機がアタシを助けに来た時は、すでにアタシの乗る式

号機は量産機の武器によって機体をズタズタにされていた。乗っていたアタシも無事では済まなかった。

鋭い痛みと共に体中から血が流れ出し、だんだんと体が冷たくなつて行くのをアタシは感じながら意識を薄れさせて行つた……。

そして再び意識が戻つたアタシはあの紅い世界でシンジの叫びを聞く事になる。

そんなシンジにアタシは自分の気持ちを何も伝える事が出来なかった……。

マヤはシンジが帰って来ないのは死んでしまったのではないかと言うけど、アタシはあの赤い世界でシンジが生きているのを見ている。重体だったアタシが生きているのだからシンジが死んでいるはずは無い。

アタシの方からシンジを探して連れ戻そうとも考えたけど、今のアタシにはシンジの気持ちも理解できる。

こちらからシンジを追い回す事は、シンジを余計に追い詰めてしまう事になる。

ヒカリもママもアタシに向かって無理に頑張れとは言わないでじっと見守ってくれた。

生きていればシンジはきつとこの場所へ帰って来ると考えたアタシは、ここでシンジを迎えるつもり。

ヒカリはアタシと同じ街で暮らせない事を寂しいと言っているけど、アタシの気が済むまで頑張れと応援してくれた。

アタシは暖かい思い出の詰まったコンフォート17のこの場所でシンジに自分の気持ちを伝えたいと思う。

けれど、アタシは独りでこの家に居ると寂しくてたまらなかった。シンジやミサトとの思い出はアタシの心を温めてくれるけど、冷めてしまった時に寒さが余計に身にしみる。

使徒との戦いを繰り広げた夏が終わり、秋がになってもシンジは姿を現さなかった。

気が付けばもう12月、秋が終わり冬が始まる季節だ。

11月までは暖かい日もあったけど、12月になると気温もぐんと下がる。

天気予報を見ると、夕方から雪が降り始めるみたいだ。

毎朝ベッドから出るのも気合が要るようになった。

そう言えば、アタシはいつも朝起きるのをグズってシンジを困らせていたっけ。

あれはシンジに対して素直になれないアタシのシンジへの甘えだった。

さらにアタシはわざと露出の多いネグリジェなどを着て下着を見てあわてるシンジをからかったりした。

だめだ、シンジとの楽しい思い出を思い返すと心が温くなるけど、またすぐに寂しさがぶり返す。

今日は休日だからこのまま起きずにベッドの毛布に包まっていようかと考えていると、アタシの元に小包が届いた。

驚いたアタシはあわててヒカリに電話をすると、ヒカリはその小包はアタシへの誕生日プレゼントなのだと告げた。

言われてカレンダーを見ると今日は12月4日、アタシの誕生日だった。

どうしてヒカリがアタシの誕生日を知っているのかと尋ねると、マヤがヒカリに教えたらしい。

マヤは仕事が忙しくてアタシに構ってあげられない代わりに、ヒカリにアタシを元気付けるように頼んだと言う。

小包を開けるとその中にはフリルのついた女の子向けの服と、真っ赤なりボンが入っていた。

そして箱にはヒカリからのメッセージカードもあった。

『15歳の誕生日おめでとう、アスカ。たまにはオシャレもしない

と、碇君に嫌われちゃうわよ?』

言われてみれば、アタシは新しく通い始めた学校の制服以外、洋服を買う事はしなかった。

近くにお店は無いし、生活必需品の事しか頭に無かった。

アタシはヒカリがプレゼントしてくれた洋服に着替えてみた。

そう言えば、アタシはラフな格好ばかりしていたから、フリルやリボンのついた白いブラウスを着るのは初めてかもしれない。

鏡に映った自分の姿を見ると、いつもと違った感じがする。

でも、こういう格好をした自分も悪くないかなと思って、ヒカリに感謝した。

シンジだったら、こんなアタシを見てどう思うだろうと考えてアタシはまた悲しくなった。

気が付くとアタシはシンジを半年近く待ち続けて居たのだ。

「シンジ……シンジに会いたいよ……」

自然とアタシの口からそんな言葉が出て来た。

明日にはシンジが帰って来て欲しいと思った事は何度もある。

今までずっと耐えて抑えて来た気持ちが涙となってあふれ出して来た。

インターフォンが鳴らされたけど、どうしても泣くのを止められず、応対する事はできなかった。

それでも相手はアタシが家に居る事を確信しているのか、インターフォンはしつこく鳴らされた。

アタシは腕で強引に顔をこすって涙を拭いて玄関のドアを開いた。するとアタシの目に飛び込んで来たのはプラグスーツを着たシンジの後ろ姿だった。

「シンジ、行かないで!」

アタシが呼び止めると、シンジは驚いた顔で振り返った。
それから、アタシを見て少し戸惑った表情になっているシンジに向
かってアタシは笑顔を作って告げる。

「……おかえり」

「……ただいま」

アタシの言葉を聞いたシンジは嬉しそうな笑顔になった。

それ以上アタシとシンジの間にさらなる言葉は必要なかった。

アタシを避けずにじっと真っ直ぐ見つめてくれるシンジの目を見れ
ば、アタシの気持ちがシンジに伝わった事が分かるから。

疑心暗鬼になってシンジを傷つけてしまった事をずっと謝りたいと
思っていたアタシの願いはかなったのだ。

そしてシンジは照れ臭そうな顔になってアタシに話す。

「アスカ、誕生日プレゼントだけ何が良いのか思い付かなかった
んだ」

「別にいいわよ、アタシはシンジが帰って来てくれただけで他に何
も要らない」

アタシはそう言ってシンジの胸に飛び込んだ。

外では予報の通り雪が降り始めたけど、アタシの心はとても温まっ
ていた……。

シンジとアスカは今日、子供達の七五三だと言う事で朝から大忙しだった。

アスカが鏡の前でポーズをとって悩んでいる横で、シンジは元気良く走りまわる男の子を追いかけている。

「こら海^{カイ}、じっとしてないと靴下が履けないじゃないか」

シンジがそう言ってもカイは動きまわるのを止めなかった。

「まったく七五三は子供が主役だって言うのに、アスカがおめかししてどうするのよ」

ミサトが苦笑しながらアスカに声を掛けた。

そのミサトの側では今年七歳になるミサトの娘、アカリが三歳になるアスカの娘、愛美^{エミ}の事をあやしていた。

自分の娘がちょうど七五三を迎えるのでカイとエミと一緒に近くの神社で記念写真を撮る事にしたのだ。

「だって一生に一度のイベントだし、恥ずかしい写真が残ったら嫌じゃない。やっぱリドレスじゃ無くて着物の方が良かったかな？」

ねえねえ、ドレスと着物、両方撮るって言うのはどう!？」

「ちよつと、あんたねえ……」

着物姿のミサトはあきれた顔でため息を吐いた。

ネクタイを締めてスーツを着たシンジは11月だと言うのに汗だくになって助けを求める。

「アスカもカイに靴下を履かせるのを手伝ってよ、ミサトさんでも良いからさ」

「あはは、カイ君は私の事をポンポンと叩くから苦手なのよ。その点、女の子は良いわよね扱いやすくて」

ミサトは笑顔でそう言っ てエミの頭を撫でた、シンジを助けようとする気は無いようだ。

「ミサトは歳を取りすぎてカイの面倒を見るのには荷が重すぎるわね。40代後半突入となると腰とか辛いんじゃない？」

「バカ言いなさい、私は元戦略自衛隊の士官よ、体力には自信があるわ。息子のユウキも今のアスカ達とそんなに変わらない歳の頃に産んで育ててるんだし」

ユウキとは今年10歳になるミサトの長男で、ミサトが30歳、アスカとシンジが15歳の時に生まれた元気で明るい男の子だ。

今日は友達とサッカーをする約束をしているので、妹のアカリの七五三に付き合うのは断ったそうだ。

シンジはやつとカイを捕まえて靴下を履かせ、準備万端と行きたい所だったが今度はトイレに行きたいと言い出した。

エミは三歳でまだおしめをしているのだが、カイは幼稚園に行くようになっておしめをとっていたのだ。

しかし、トイレに行くのが遅れてリビングのカーペットを濡らした事は何回もある。

「んもう、仕方無いわね！」

「ママ怖いー」

苛立ちを隠さないアスカの様子にエミが怯えた仕草をした。アスカはいそいそとカイを抱えてトイレと入って行った。

「アスカママは怒鳴ったりして怖いわよね、じゃあミサトおばさんの子になる？」

ミサトはそう言ってエミに微笑みかけるが、エミはぷいっと横を向く。

「バアバは嫌」

「振られちゃいましたね」

エミに即座に拒否された事と年寄り呼ばわりされてダブルショックで凹むミサトにシンジは慰めの声を掛けた。

カイがトイレから出た後、アスカ達は慌ただしく玄関で子供達に靴を履かせる。

「こらっ、カイ！ お座りしないと靴が履けないでしょう！？」

ここでもやんちゃ盛りのカイに座らせるだけで一苦労だ。

靴を履かせたと思ったら蹴り飛ばしてしまう事もあっててんてこ舞いだった。

神社まではシンジの運転する車で慎重に向かった、やっぱりミサトの運転は荒っぽく、酔ってしまう事があるからだ。

七五三の参拝をする神社に到着したシンジはカイの手を引いて社務所へと顔を出す。

予約の時間までしばらく待たされることになったシンジはカイが暴れて服を汚してしまわないようにお菓子でご機嫌をとっていた。

アスカは他の参拝客から娘のエミと共に褒められてまんざらでもない顔をしている。

自分を含めて自分の娘は可愛いと言われて当然だと思っのがアスカらしい。

そしてシンジ達の順番になり祝詞のりとを上げてもらうために本殿に入っ
たのだが、アスカは一礼するのを忘れてミサトに注意される。

「そんなことじゃ神様に嫌われちゃうわよ？」

「ご、ごめんなさい」

ミサトは冗談めかして言ったのだが、アスカは見ている方が恥ずか
しくなるほど真剣に謝った。

祝詞のりとの儀式が終わったシンジ達は帰りに神社のお参りをする。

アスカはためらいも無く5,000円札を取り出し、さい銭箱に入
れて鈴を鳴らして何度もお辞儀をした。

「アスカ、そんなにお祈りしなくたって神様は願いを聞き入れてく
れるよ」

「普段からそれぐらい神様に感謝していれば慌てる必要は無いのに
ね」

「だってさ、大切な事じゃない」

ミサトに言われて、アスカは少しむくれた表情でそう答えた。

「ほら、今度は記念写真を撮るんだからそんな顔をしていちゃ台無
しだよ」

「そうね」

シンジに言われてアスカはしかめっ面をするのをやめた。

予約をしていた『スタジオ リ』は神社の向かいにあった。

売り上げの30%が七五三シーズンと言われている評判の写真館。

入口に飾られた七五三写真を見てアスカは期待に満ちた表情になる。

「ここなら、カイやエミを可愛く撮ってくれそうね」

「アカリも居るのよ、忘れないでちょうだい」

自分の家の子供しか目に入っていないアスカに、ミサトは釘を刺した。

ミサトの長男ユウキが生まれた時は中学三年生、ミサトの長女アカリが生まれた時は高校三年生だったシンジとアスカは良く二人を可愛がった。

だからアカリはアスカに懐いていたのだが、エミが生まれてから自分の子を猫かわいがりするようになる温度差を感じてしまっているようだ。

その後エミとカイ、アカリの三人が姉妹のように並んで写真を撮影した。

元氣良く駆け回っていたカイもこの時は緊張してひきつった笑みを浮かべている。

写真を撮り終って緊張から解放されたカイはシンジにおねだりを始める。

「パパ、マリオー」

「分かってる、約束だからね」

シンジは七五三のお祝いに『スーパーマ オブラザーズ』をカイに買ってあげる約束をしていたのだ。

「はいはい、解ってるって。エミにも『リキュア』を買ってあげるから」

不安げに見つめるエミに向かってアスカはそう微笑んだ。

「しかし、最近キュア　ディとかジュエル　トとか色々増えて覚えきれないったらありやしない、そう思わない？」

「別に覚えられますけど」

「それってやっぱりミサトが年寄りって事じゃないの？」

共感を得ようとしたミサトはシンジとアスカに言われて思い切り凹んだ。

そんなミサトを娘のアカリが慰めている。

帰りにシンジ達は車でデパートに寄りおもちゃを買って帰宅した。

「やあシンジ君、ご苦労だったね」

シンジの家ではミサトの夫となった元ネルフのオペレータ、日向マコトが料理を完成させて待っていた。

日向はシンジ達が神社に行っている間にスーパーで材料を買って料理を作ってくれていたのだ。

使徒戦で加持リョウジが命を落として落ち込んだミサトを励ましていた日向が耐えきれずに自分の気持ちを打ち明けると、ミサトは日向のプロポーズを受け入れて夫婦となった。

アスカは加持の事をすぐに忘れてしまっていたのかとミサトに反対したが、今はミサトと和解している。

結婚してもミサトの家事能力はアレだったので、日向が料理などを率先して行っているのだった。

「うわあ、おいしそうね。日向さん、ありがとう。ほら、カイもエ

ミも日向さんにお礼を言うのよ」

「ありがとう……」

「ありがとうー」

エミは日向に笑顔を向けてお礼を言ったが、カイはそっぽを向いてブツブツとお礼を言った。

どうやら買ってもらって手に持っているマオの最新ソフトの方に

夢中になっているようだ。

「はは、どう致しまして」

日向はそんなカイの様子に苦笑しながらそう返した。
そして日向の作った料理で賑やかな食事が始まる。

「カイ、しっかりと落ち着いて食べなさい。食べないとマ　才はおもちゃ屋さんに返しちゃうわよ」

アスカがカイをあやししながら食べさせようとする。
エミとアカリは言われ無くても料理をたくさん食べていた。

「これで七五三のお祝いは無事に出来たね」

「うん、カイとエミにはずっと幸せで長生きしてもらいたいわ」

シンジとアスカはそう言っで見つめ合った。

七五三は子供の幸福と長寿を願う大切な行事。

自分達がしてもらった事の出来なかった分だけ、シンジとアスカは自分の息子と娘に七五三をしてあげられてとても嬉しかったのだ。

「記念写真が出来上がるのが楽しみね、きっとエミは可愛く写っているに違いないわ」

「アスカ、そんなに可愛い可愛いってエミちゃんを持ち上げると、将来自信過剰になっちゃうわよ」

「アカリちゃんみたいに？」

アスカとシンジもミサトの娘のアカリが小さい頃にはさんざん可愛いともてはやしたものだっただった。

七歳になった今でも将来モデルさんになると自信のほどをうかがわ

せている。

「それじゃあ、あんまり可愛いとほめるのも考えものなのかな……」
「何を言っているのよシンジ、エミは本当に可愛いんだから問題無いじゃない！」

どこまでも娘を溺愛^{できあい}するアス力なだった。

- - - - -
おまけ超短編

いつものようにアスカと連れ立って登校したシンジは自分の席に着くと机からピンクの便箋がはみ出しているのが見えた。

「何だこれ？」

「不幸の手紙かいな？」

「バ、バカじゃないの、不幸の手紙がそんなかわいい便箋に入っている訳が無いじゃないの！」

アスカは少し慌てた様子でトウジに指摘をした。
シンジが便箋を開けて中を開くと、『話したい事があるので、放課後に体育館裏へ来て下さい』と書かれた紙が入っていた。

「これってラブレターだよな？」

「ラ、ラブレターですって！？ ど、どこにシンジなんか好きになる物好きがいるのかしら？」

ケンスケの言葉を聞いて、アスカはそう叫んだ。
アスカの大声に教室中の視線が集まる。

「これを書いたのはアスカだね？」

「どうして、そ、そんな事言うのよ！」

「そんなに顔を真っ赤にしてたらバレバレやないか」

沸騰しているアスカに対してシンジは至って冷静に話し掛ける。

「どうせ僕をからかうつもりだっただろう」

「そ、そうよ、ア、アタシがシンジに恥ずかしくて告白できないからってラブレターなんて書いて、朝早くシンジの机に入れておくなんてするはずないじゃない」

もはやだだ漏れになっているアスカの態度を見て、シンジも顔を赤らめる。

「えっ、もしかしてアスカは本当に僕の事を……？」

「だ、だからシンジまでどうして赤くなるのよっ！」

「放課後じゃ無くて、今この場で告白してしまえよ、惣流」

ケンスケに言われてアスカはノックダウンして倒れてしまった。

「まったく、アスカってばウソがつけない性格だって自覚していないのかしら」

保健室にアスカを運ぶ事になってしまったヒカリはため息をついて
そうばやくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1133/>

(11/14 エヴァ更新)エヴァ、ハルヒ、空の軌跡短編集

2011年11月17日17時10分発行